
新旧世界革命記 魔砲少年サブカルネギま！～英雄の息子たち～

みゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新旧世界革命記 魔砲少年サブカルネギま！〜英雄の息子たち〜

【Nコード】

N5112Q

【作者名】

みゆう

【あらすじ】

超鈴音が訪れたのは並行世界。魔法世界崩壊を回避しようとする人物の存在に彼女は驚愕した。木乃香の双子の兄にして関西呪術協会改革派——東西の確執に終止符を打つための派閥の代表でありながらも彼は魔法世界で新興勢力を組織していた。彼の影響を受けたネギにも大きな変化があった。心強い従者と共に、父と母の意志を自ら受け継いだのだ。そして新たな目標を得た超も未来の情報と技術を元に動き出す。それらの影響はいくつもの組織に渡り、其々の思惑が交錯する二つの世界の勢力図は複雑さを増していく。二つの

世界の在り方そのものを変える革命が今、始まろうとしていた。＊
旧題「お狐様と天災魔砲少年」＊ハードな政治編とサブカルな日常
編の落差が酷いです＊原作キャラ崩壊、主にサブカルな方面へ調教
されます＊ネギま！の世界ですが、オリ主はオタクなため他作品の
技などの再現を試みます（主にリリカルなのは）＊この小説
の半分は刹那とネギへの愛でできています。＊現在「修学旅行編」
4／8000字程度で月3回更新ペースです。

第1話 狐との契約（前書き）

> i 2 3 4 1 4 — 2 5 2 5 <

本業絵師ですので今作が初投稿になります。オリ主ものですがアンチになる予定はありません。むしろネギとダブル主人公の予定です。

一部主要キャラが崩壊します。オタク化してしまう主人公が技などに関しては他作品のもの再現するため出てくる予定です。ネギは第17話から登場です。

第1話 狐との契約

しんと雪の降る山の中、3歳ほどに見える小さな男の子が一人彷徨っていた。

長袖パジャマに裸足で歩くその姿はどう考えても尋常ではない。足の皮は擦り剥け、小さな赤い斑点が雪の中に残っている。

しかし、男の子はただ歩いた。ここには死ぬと本能的に気付いているのだろう。

声もあげず、泣くこともなくただ歩いた。泣いたところで誰も助けに來ないことも、幼いながらもおそらくわかつているのだろう。

枯れ枝が足裏に刺さっても、耳や指先の感覚がなくなっても、ただ歩き続けて、男の子はやっと、石造りの鳥井を見つけた。奥には小さな社が見えた。

助かるかもしれない。そう思ったとき、男の子の張りつめ続けた糸が切れ、

意識は闇に落ちた…

彼が再び目を開けたときに見えたのは、白く無情な空ではなく、温かな光で照らされた板張りの天井だった。

凍てついた体を包み込む暖かさに安堵してしまったのか、いつの間にか男の子は布団で寝ていた。まだ意識はかすみがかつたようにはっきりしない。

男の子は布団に潜った。寒さに怯えることのない喜びを全身で感じていた。もう少しこのまま寝ようと思ったが、先ほどのことは夢だったのだろうか、そういえば全然痛みも感じないし、こっちの方が夢だろうか。

そう考えながらも、布団のなかで暖かさを噛みしめながら、やっぱり寝ようと布団の中でモゾモゾとしていた。状況把握よりもまだまだ小さな男の子にはこっちの方が大切なのだ。

「あつ、もう起きたんだあ！」

甲高い声が聞こえた。知らない女の人のもの。しかし性格なのか、疲れているからなのか、男の子は布団から出なかった。そしてすぐに安らかな寝息が布団の中で響いた。

「うゝ無視しないでよお！　もうこうなったら突撃いいいい！！！」

自分の呼びかけに全く反応しない彼にムスツとしたのか、彼女も布団の中に飛び込んだ。そしてじゃれつくようにして首元や脇腹に手をあててくすぐる。

[illegible]

思わぬ攻撃に耐えかねた男の子はすぐに布団から飛び出した。

「なんでこんなことするん？」

目に涙を浮かべながらも笑顔の男の子は訊ねる。

「それはお姉ちゃんの言うことを無視して寝ちゃうからだよ」

年上ながらも大人げなく男の子を叩き起した少女は、ピヨコッと布団から顔を出して、笑いながら答えた。

少女も布団から出て男の子の前に立つ。容姿から察するに少女は10歳ぐらいだろうか。人ならば。明らかに少女の容姿は普通ではなかった。

銀色と言ってもいいように輝く白髪は前髪は切りそろえられ、後

ろは腰まで届くまっすぐな髪であった。瞳は赤く。肌は透き通るように白い。服は薄い白い和服を1枚着ているだけであった。その姿はまるで雪女を想像させた。

しかし、男の子の驚いた顔には恐れの色は全くなく、その瞳はきらきらと輝き見入っているようだった。

「おねえちゃんきれいやなあ。まっしろやし、めえもまっかでかっこええわあ」

その言葉に逆に少女は驚かされた。まだ恐れを知らない純粋な子供で良かったと思った。

「ありがとう。きれいって言うてもらえたのは久しぶりだな。僕はいい子だね」

少ししゃがんで、少女はぎゅううつと男の子を小さな胸に抱きしめる。

男の子もぎゅっと腰に手をまわして抱きしめる。久しぶりの温もり、人の温もりを二人は感じていた。

「ねえおねえちゃん？」

「なあに？」

「おねえちゃんがぼくをたすけてくれたの？」

「そうだよ。いつも人が来ない神社に僕が倒れてるの見つけて吃驚しちゃった」

「おねえちゃん。ありがとう」

「どういたしまして。お礼をいえるなんて偉いね。いい子だ」

わしわしと頭を撫でた後、抱きしめた腕を解放し顔を向き合わせる。

「それで僕のお名前はなんていうの？まだ聞いてなかったよね」

「このえかずは（近衛和葉）」

覚えのあるその苗字に、何の因果かと少女は少し顔をしかめる。

「おねえちゃんは？」

当然の疑問を和葉は口にした。しかし、

「…おねえちゃん？」

ふっ、と一瞬口元が歪んだ後、

「ふっ、ふっ、ふっ。聞いたら驚いちやうよお！おめめが飛び出しちやうよお！お姉ちゃんはねえ、実はお狐様なのだああ！！！」

いきなり叫ぶ少女。両手は頭に当てて耳に見立てたようにしていた。

「おねえちゃんって、『どろんぱ』できるんやあ！すごおい！！」

和葉の言う『どろんぱ』とはおそらく変化のことを指すのだろう。驚くといっても恐れの方ではなく、無邪気な瞳には尊敬のまなざしが籠っていた。

もう少女に覚悟はできている。あとは和葉次第だ。

「お姉ちゃんはすごいから、葉っぱがなくてもできるんだよお！」

きらきらと期待した瞳は一瞬も見逃すまいとしていた。

「じゃあ、いくよお『どろんぱ』！！」

少し霞がかかり、足元から出てきたのは白い狐だった。毛並みは美しく、月の光に照らされて輝いていた。

「ほんまもんやあああ」

今度は和葉が狐の背中ををなでなでする。

「あのね」

美しい白狐の口から変わらない暖かい声がした。

「うん」

「私のこと怖くない？」

「ぜんぜん」

「そう。あのね。和葉はお家に帰りたい？それともお姉ちゃんと」

緒にここで暮らす方がいい？」

二つの選択肢を狐は提示する。また捨てられるかもしれない、いや二度と帰って来れないようにされるかもしれない家に帰るか、得体の知れない狐とここでひっそりと暮らすか。まだまだ小さい子供に選ばせるのは酷だ。しかし選ばせないわけにはいかなかった。

「かえりたい。でも……おねえちゃんといっしょがええ」

母親にすぎるように、和葉は狐を抱きしめた。

「ねえ和葉」

「なあに？」

「お願いがあるの」

「どんな？」

「……私に名前を頂戴。そうしたらずっと一緒にいれるから」

「そうなん？ おねえちゃん、なまえないん？」

「ずっつと昔はあったけど忘れちゃった」

「うん。ぼくがつけてええの？ せやったら、『ゆき』や」

和葉は即答した。

「ゆき？」

狐は聞き返す。

「おねえちゃんのなまえ『ゆき』がええとおもっ」

もう一度はつきりと答える。

「……『ゆき』かわいい名前ね。ありがとう和葉」

『ゆき』と名付けられた狐はいつの間にか少女の姿に戻り再び和葉を抱きしめていた。

雪みたいに私が白かったから付けたのだろう、安直だけど可愛い名前でもよかったと『ゆき』は思う。

「あんな。きょうはゆきがいっぱいやったから『ゆき』ってしたんやで」

なんとなく過ぎてしまう日々の中で、この大切な日を忘れてしまわないように。この雪の日を二人の絆として刻んだのだった。

ここに契約は成った。この日こそが和葉にとっての全ての始まり。世界に变革をもたらす力の一端を手に入れ……大切な“何か”を犠牲にして踏み出した最初の一步であった。

第1話 狐との契約（後書き）

今回は主人公とパートナーが名前を交わすという「契約」を結ぶ所までです。

捨てられて、孤独を知り、助けてもらった暖かさを知り、自分と異なる存在を受け入れる。この日のことが主人公のバックボーンとなつていきます。ご都合主義の出会いですが、色々と裏事情があり、修学旅行編で明かす予定です。

全然ネギま！らしくなかったですが、次章までお読みいただければ何をやりたかったかわかっていただけるかと思います。

今回のキャラについて

「和葉」は小さな詠春のような見た目になっていくものの、多分中身が「司書＋筋肉＋○○÷3」的なところになっていきます。

「ゆき」はFateのイリヤのようだと後の和葉は語ります。この作品の根本を占めるキャラ。

戦闘に関しては二人で一つというのを地で行く能力を考えてあります。

設定集その1 〽和葉+α〽 (前書き)

結局設定集を先に持つてきました。ネタばれあります。

設定集その1 〽和葉+α〽

設定集

■主人公（魔法少年）1号 （ネギ登場時）

名前：近衛和葉

年齢：14 性別：男

身長：165 体重53

容姿：小さな詠春 黒ぶちメガネ

二つ名：デスメガネ2号（麻帆良）・神様（男子校）

好きなもの

音楽（特に歌うこと）

元氣の出る写真集

刹那

木乃香

ゆき

ネギの教育

中二病

漫画やアニメ、ゲームの魔法の再現および魔改造
レイジングハート

嫌いなもの

糞狸（学園長）

頭の固い魔法使い

イケメン

パル（恋愛関係で暴走するから）

朝倉（恋愛関係で暴走するから）

性格

一般人として：

人当たりがよく、気が回るタイプ。独占欲が多少強い。オタク。麻帆良に来てから悪友により更に悪化。それからエロ神様。エロ本の入手（変化で堂々と購入）と販売により男子校では神扱いで慕われる。神の言葉は「ベツトと風呂以外では紳士たれ」なので、女の子に絡む輩はフルボッコ。後にデスメガネ2号という二つ名をもらう。

魔法使いとして：

最高位クラスの悟りを妄想によって早々に得てしまった残念な天才魔法使い。麻帆良に来てから更にオタク化し想像力というより妄想力の超強化。一般の魔法使いとは異なる（オタク的）視点を持つがため彼の研究は全く理解されない。中二設定を考えてはオリジナル魔法やアニメの魔法の再現の研究を行う日々。エヴァ曰く、アルのような変態性とラカンの超感覚を備えつつ、クルトのように動ける奴。

能力

？起源認識：「言の葉を一つに合わせるもの」

名前である「和葉」を起源としたもの。

小説家に合わせて「一葉」としたかったが短命なので今の名前になったことを父から聞いて考えた。

・木を世界から力を吸い上げる象徴とすると、葉はその力の行き渡った最も新しい命であるという認識

・言の葉を通して木と語らい、大地や世界と語らうという認識

・「和」と「一」という文字から「全は一であり一は全である」「ことを認識

これらの認識を総合することで、

「性質の違う力を感じ合わせる認識」と「世界へ語りかける認識」

を持つことができ、
力や精神、言の葉の使い方が根本的に変わった。

型月作品に影響され起源覚醒ならぬ起源認識を得た。妄想による強烈な自己暗示がその正体だが、その認識は力や世界の根源に関わるものと一致してしまっているため、妄想によって悟りを開いた魔法使いの境地である。

？言霊：言の葉を通してイメージができていれば即興の詩でも精霊に働きかけることができる。ただし使い慣れていないと効率と精度、完成度が極端に低くなる。起源認識により曲がりなりにも発動する。非常に対費用効果の悪いチート能力なのでオリジナル性が欲しい時、緊急時以外はあまり使わない。それから言葉を選ぶセンスがないという致命的な欠陥があるため、もっぱら2次元の魔法の再現に使用。

？式神使役

・ゆき

白狐の幽霊？体術および妖術の師匠。戦闘時は主人公に憑依し気を運用するため、主人公は魔力の運用に専念できる。

？妖術（狐）：本来は狐または狐憑きにしか使えないがゆき憑依時以外でも何故か使える。

a・憑依：自身の精神と魂を対象に憑依させる。

b・精神同調：精神に同調できる。軽い憑依のような状態。
繋がりが深い相手ほど強く早朝できる。

魂も同調することで魔力の運用や制御効率が跳ね上がる。
また同時に多数の相手とも同調できるが効率は落ちる。
魂や精神を介した念話のような使い方や管制もできる。

c・変化：会ったことのある相手に変化できる。
具現化した幻術の一種。声や匂いも一緒。

ある程度認識阻害をかけている状態だが、仕草・気配などは自分で
どうにかするしかない。

d・狐火：魔力または気のエネルギーを炎のようなエネルギー体に
直接変換する。

精霊を介さないため無駄と余計なアクションが少ない。

咸卦法の莫大な力を直接運用できる切り札。

？西洋魔術

魔法学校卒なので基礎レベルは習得。起源覚醒によりほぼ全ての系
統を操れるが風や大地が得意。

というより周りの環境にたくさんいる精霊を用いる。

？槍術：ゆき憑依時の普段の近接スタイルだが、主人公も体が覚え
ているためある程度が使える。

？咸卦法：ゆき憑依時のみ使用可能。

ゆきが気で主人公が魔力を担当し精神をシンクロさせることで使用
できる。

主人公が世界側に引つ張られてもゆきが自分側に引つ張るので制御
が効く。

？アニメなどを再現してしまったオリジナル魔法
スターライトブレイカー（SLB）

周囲の環境と同調することで手当たり次第に魔力を吸収し、気を混
ぜ込むことで咸卦法による収束砲撃を行う。瞬間的な火力重視の咸
卦法の応用系。小規模なら道具なしでもできるがレイハさんを自作

して使用。カートリッジには気を貯めておいてあり、運用できる魔力に対しての気の不足を解決できる。しかし原作と同様、和葉の容量的スペックは低いので能力による大量の魔力の吸収および気の力・トリッジによるブーストは体に過剰な負荷がかかる。

戦闘タイプ：

後衛（管制・支援）型。精密コントロールと効率化においては世界最高レベル。が、根本的な構成などを考えたら後は感覚で処理してしまうという、理論をわきまえた超感覚派の天才肌（音楽という絶対音感持ち）。個人の火力はそこまで高くないが、同調による底上げや効率化によって実質的に木乃香以上の力を運用できる。しかしネギや木乃香の膨大な魔力タンクと比べ、もとの容量的スペックが低いところを無理やり器に力を流し込んでゴム風船のように肥大させているので体への負荷が課題である。ペア（ゆき・ネギ・刹那・木乃香）での戦いにおいて真価を発揮する。

自身曰く自らが「世界最高の自律思考型魔導触媒」。尊敬する人物は、アニメで感動したレイジングハートらしい。決して白い管理局の悪魔の方ではない。実際に魔族などと同じく、触媒なしでもある程度魔力を運用できる。

戦闘時の思考：

実際は戦闘や交渉より工作することの方が得意。変化・憑依・精神同調はまさに工作向け。

「戦闘が起こらないようにするには？ 戦闘を治めるには？」を常に考える参謀タイプ。リーダーの器ではないと自分では認識。

その他原作と大幅に違う人物

・刹那

ヒロイン？主人公に俺のものの発言されてからゾッコン。主人公の式神という「扱い」でこのかの護衛の任を受けている。主人公に対してはワンコ。このかと仲がいい。このか・ゆき以外が主人公と仲良くすると稀にヤンデレ化（黒化）。

・木乃香

双子の妹。兄が大好きだがみんなで分け合えればいいらしい。

・ネギ

今作最大の被害者。主人公と同室なため、大人の階段を駆け上がっていくことになるが、原作のような犯罪行為は教育により抑えられます。後にあらぬ噂も流れ…

・千雨

オタク友達。

設定集その1 〽和葉+α〽 (後書き)

大筋は原作どおりの予定ですが、事件ごとに主人公なりの別解へ誘導していつてあげたいと思います。

1 / 3 1 1 9 : 0 0 狐火・SLB設定変更
2 / 2 4 : 0 0 言霊設定変更

第2話 帰還（前書き）

処女作で稚拙な文章にも拘らず、拝読いただきありがとうございます。

原作と異なる流れになるのは確定ですが、アンチやブレイクなどではなく、少しでも違う答えを見つけていくお話にしたいと思います。

第2話 帰還

その後二人はゆきがどこからか持ってきたおむすびを食べた。下山するには日が暮れかかっていたので、とりあえず一夜を明かし翌朝下山することになった。

二人は色々と話したが、なぜ和葉はあそこにいたのか、なぜゆきはここに住んでいるのか。自然とそういう話は二人ともしなかった。和葉は幼いながらも聞いてはいけないと察していただろうし、ゆきは和葉の置かれている状況を正確に把握しておきたかったが、この子周りの大人に会えば必ずわかると、狐であるこの身は情報戦において揺るぎない自信があった。

好きな食べ物の話の他には、妹の「このちゃん」や、従姉妹の「もとこねえちゃん」、「つるこねえちゃん」の話はよく出ていた。和葉の信頼する人のような。

「ゆきねえちゃんみたいにもくもへんしんできるようになるのかなあ？」

「できるよ。こんどやり方教えてあげるね？」

「やったあ！じゃあおんなのこになるう」

どうして女の子になりたいの？と聞く前に和葉は無邪気に口を開く。

「おおきくなってもおんなのこやったら、みこのおねえちゃんたちといっしょにおふろにはいつでもええんやろ？」

3歳にして立派な男の発想力。ゆきは一瞬教えることをためらっ

た。

しかしまだ3歳でもある。その辺りはきちんと教育していけば、きつと大丈夫だろう。その見通しが甘かったことを知るのはもう少し先のことであった。

夜が明けておむすびを食べた後二人は出発した。和葉は裸足だった上、目的地まで遠いので雪はおんぶして行くことにした。履物も用意できるが、あえて用意しなかった。服もそのままで行かせることで、この子の置かれた状況を糾弾してやりたいとゆきは思っていたのだ。

「ゆきねえちゃんさむいよお」

扉をあけるとまずそれを口にした。

「あつたかくな〜れ〜」

ゆきが軽く人差し指を振ると二人の体はほんのり白く輝いた。

「うわあ。あつたかあい」

「すごいでしょ？言霊っていうんだよ」

「ぼくにもおしえてえ」

そんなやりとりを交わした後、ゆきは和葉をおぶって人ではありえない速度で山の中を駆けていた。10歳ぐらいの女の子が3歳の

男の子を連れてきても威厳が足りなさそうだったので、ゆきは成人の姿に変化していた。和葉はどうもこちらの姿の方が気に入っているようだ。おそらく胸が大きいからだろう。精神にリンクしなくとも、変化したとたん胸元に飛び込んできたあたり確信犯だ。

「……この子は私が育てる」

色んな意味でゆきは一人誓っていた。

随分山の中を走ったが、昼ごろには目的地に着いていた。長い石造りの階段の入口でゆきは立ち止まった。

「結界は相変わらずか。まあ都合がいいわ」

やっぱり裸足だとかわいそうだと思ったゆきは、脇に生えている樹の葉っぱを2枚ちぎると、一瞬で雪駄に変化した。階段はゆっくりと和葉を降ろして、手をつなぎ二人は階段を上って行った。

「白狐殿はどうやってこの結界をくぐり抜けたのですかな」

よりによって第一声がそれだった。二人の目の前には齢50ほどの男が正面に立ちふさがっていた。

ゆきを狐と一目で看破できるあたり、それなりに高位の術者なのだろう。警戒するのは当然かもしれないが、1日以上疾走していた当主の息子が帰ってきたのにも関わらずこの態度はなんだというのだ。

まず和葉の方に声をかけるのが人というものではないのかと、人の身ではないゆきはムツとしていた。

両脇には多数の巫女服姿の侍女たちが並び、多くのものは喜んでような雰囲気であったが、警戒や困惑をしている者もいたが、明らかに不快な顔をした者も幾人が見られた。わざわざ幻術や精神同調を使うまでもない。

「口を慎め下賤。妾は白狐ではない。天狐じゃ。この姿を見てわからぬか？」

ゆきの頭から耳と尻尾が……4本生えていた。天狐。それは100年以上生きた狐。善狐の中でも特に上の霊格を有し、尾は4つ。神格化され、占いの力に優れていると一般には伝わっている。白狐も善狐の代表的な霊格だがあくまでも神の使いレベル。しかし天狐は神格化されているといっても過言ではない。

周りの様子が変わった。警戒心よりも畏怖の方が表情に表れていた。男は何も言えない。無礼な口を聞いたことに対する謝罪ですら怖れのあまりでなかった。

「近衛のことは平安の世からの縁じゃ。知り尽くしておるが故、破るのも容易いが、そもそも妾に結界自体が作用しておらぬ」

衝撃的な言葉だった。おそらくこの狐は近衛家に仕えていた元・

式神で結界の対象から外れているか、そうでないとしたら狐としての能力で結界を騙せるほど高い力を持っていることになる。それくらいのことはこの場にいた誰もが容易に想像できた。

「通せ。妾たちは当主に用がある」

耳と尻尾を元に戻した後そう言い放ち、奥へ進もうとすると、和葉と同じ歳ぐらいの女の子の手を引いた、長身で短い黒髪でメガネをかけた男がこちらへ近づいていた。

「かずくうつうん!!」

てててつ、と赤い着物を着た日本人形のような女の子は和葉に駆けよりダイビングする。

「こ、このちゃっ!うわあああ!」

「きゃああああ?」

女の子を受け止められなかった和葉は地面に叩きつけられた。

「かずくん、おかえりやんな。うちも、とおさまもめっちゃしんぱいしたえ?」

「うん、ただいま。このちゃん」

そう言って和葉は木乃香の頭をなで、えへへっ、と木乃香は嬉しそうに顔をする。こちらはもう大丈夫だろう。ゆきは二人を見て微笑んだ。さて……

「妾は近衛和葉が式、天狐『ゆき』。主のことについて汝に用がある」

関西呪術協会の長であり、近衛和葉と近衛木乃香の実の父でもある近衛詠春を、ゆきは千里眼ともうたわれる強い眼差しで見つめた。

まるで「妾に嘘は通じぬぞ」と言わんばかりに。

第2話 帰還（後書き）

・次は近衛家の事情の一部が出てきます。が修学旅行編、で明らかになっていき、根本的なところは魔法世界で発覚する予定ではありません。ゆきの正体はどこで明かすべきかは決めていません。

・和葉の断りなく、ゆきは式と自称していますが、特に呼び出された関係ではないので、名前を持って契約としているようです。気持ちの問題であり、傍で保護ための口実というところです。

・幼少期はできるだけほのさせたいと思いますが、早く本編突入したいです。

・思ったよりテンポが悪いので、流れとして、刹那との出会いから3人の進路を描いたら本編に突入したいと思います。

・今回も変態に目覚める片鱗をみせています主人公でした。早く成長させたいです。

第3話 詠春と狐（前書き）

つたない文章ですがよろしくお願いします。
評価・お気に入り登録感謝です。

第3話 詠春と狐

ゆきと近衛詠春の二人は、とある部屋で会談していた。和葉は木乃香と一緒に他の部屋で遊ばせている。

「で、何者かが和葉と木乃香を連れ去り、和葉は雪山に放置、木乃香は追撃部隊によって奪還した。そういうことでいいのじゃない？」

ゆきはこれまでの情報を整理して確認をとった。

「ええ、このような事態を呼んでしまったわが身が不甲斐ないものです。天狐様には和葉を助けていただきどれだけ感謝してもしきれないほどです」

正座で相對していたため、土下座の形で詠春は感謝の意を表す。

「うむ。汝の和葉に対する思いは伝わった。顔を上げて良い。それから妾のことは「ゆき」と呼ぶがいい。あの子がくれた名だ」

「では、ゆき様と」

「よい。して、木乃香をさらったのはあの子の莫大な力を悪用しようとか、旗印にして体制をかえようとかいう輩であろう？」

「犯人達は恥ずかしながら我が協会内の反体制の一派でして、誘拐後に要求を聞いたのではありませんがおそらくはゆき様の仰るとおりでしょう。ですが……」

「和葉が帰ってきたとき明らかに不味そうな顔をしている輩がおつ

たが、お主の口から聞かせてもらおうか。木乃香より力が低いから
とはいえ、現当主の長男。利用価値の有無の問題ではあるまい」

「あの子たちは双子というのはご存知でしょうが、男女の双子のうち
男子は忌み子として近衛家には伝わっております」

申し訳なさそうな顔から、しかめ面に変わる詠春。親として当然
の反応にある意味ゆきは安堵した。しかし双子の伝えなどゆきは知
らなかったゆきも顔をしかめた。

「大方占いの結果でも凶兆が出たと誰かがほざいたのであろう」

「ええ。真偽や可能性の大きさはともかくとして、妻が喪に復した
のを機に、あの子を排除すべきだと唱える一派も出てきてしまった
のです。我が子のことですから当然跳ね付けたのですが、まさかこ
のような強硬策に出るとは……」

「占いとはそもそも神からの助言であって、絶対の言葉ではない。
稲荷のおみくじが最も身近な例であろう？しかし、奴らの言う占い
とは、考えることを放棄した者が未来の可能性のごく一部を都合よ
く曲解したものにすぎん。人が扱う占いなぞ、いつの時代もただの
政治の道具。実に不快じゃ」

「天狐ゆき様の、そのありがたいお言葉をウチのもの達には是非聞か
せたいものです」

詠春は苦笑した。天狐は狐の中でも占いに優れた存在であるから
だ。

「して和葉を殺すこともなく山へ放置したのは、子供ゆえに手を下
すのをためらったか、報復を恐れたか、その占いとやらを本気で信
じて呪いが降りかかるのを恐れたか。そんな所は簡単に思いつくが、
どう考えてもこの件は汝らを失脚させようとしているようにしか思

えぬ」

一息ついて、ゆきは続ける。

「おそらく、狙いは追手を二手に分散させること。そしてワザと放置した和葉を助けることができれば、出て来ぬ犯人の誘拐した責よりも救助できなかった責が表立った問題になる。捕まったとしても直接手を下さなかった犯人も、結果として間に合わず見殺してしまつた協会を道連れに出きる」

ゆきの推論は止まらない。

「仮に木乃香だけが助かつた場合、長は木乃香を助けたのにもかかわらず、ワザと和葉を放置したのではないのか？とほざく輩が出る。最悪なら実は長の周りが手に掛けたのではないかなどとな。事の真偽はともかく我が子を見殺しにした長、という噂は失脚に十分であろう。しかも後継者第一候補である長男もおらず、妻も故人。となれば長女である木乃香に取りいれば体制を覆すのは容易い」

一気に可能性を列挙した後、ゆきは付け加える。

「まああくまで事情をよく知らぬものの推論に過ぎぬが、な。あとは利害関係や派閥を洗い出すがよい。黒幕は確実に中にある。弱体化や勢力拡大を狙つた外部からの工作にしろ内通者はいるはずじゃ」

詠春は何も返せなかった。ゆきが連ねる言葉の一つ一つに自分の力のなさを痛感した。ゆきが挙げた推測はどれも突飛なものではない。冷静に第3者的視点から考えればごく当たり前のものではあった。しかし、どちらかが助かつても助からなくても相手の策にはまってしまう可能性には二人の親である詠春には気付くことはできなかった

た。ただ漠然と、犯人たちは体制に不満があるのだということしか考えていなかった。自分は元々は一剣士であって、政治が得意だとはお世辞にも言えない。真面目すぎるとか、詰めが甘いとか紅き翼時代の頃からよく言われていたものだ。だが、それを言い訳にしたこのままの自分ではいけない。力のなさは罪だ。それを今、認識することができた。

変わらなければならない。組織も、私自身も。それが組織の長として、二人の父としての務めだ。口にはせずとも彼女の前で誓う詠春。そして改めて引き締まった顔でゆきを見て口を開こうとするが、

「いい目をするようになったではないか。さっきまでの情けない男はどこへ行ったかの」

和葉もこんな男前になるのじやろつかと笑いながら言う。

「言わぬともわかっておる。この天狐『ゆき』は和葉の式じゃ。ならばその役目無事に果たそうぞ。無論、和葉の傍にいる限り木乃香のことも任されよ。汝は汝がなさねばならぬことを果たすがよい。それがあの子たちのためであらう」

そう言つて右手を差し出す。そのどこまでも真っ直ぐな紅き瞳に詠春は応える。

「二人をよろしく願います。私はあの子たちが無事に過ごせるように尽力しましょう」

第3話 詠春と狐（後書き）

主人公でません…

せつちゃんもまだ出ませんが、次こそ…

ゆきは普段は周りになじむため標準語ですが、こういうときは古い話し方です。ちなみに賢いというより、冷静に頭が回るタイプです。

さて一度誘拐を経験した事が後の修学旅行にどう影響がでるのかは一応決めてありますが、流れ次第でどう変わるのか。うーん。

第4話 白の乙女（前書き）

大事な幼少編をすっ飛ばしてネギ君が来る直前です。
刹那との出会いはとどころで出していく方向に変更します。

第4話 白の乙女

2003年1月。とある休日の朝

麻帆良学園女子寮の一室にて、左側をサイドテールにした女の子は真剣に鏡を見つめている。

5分ほどじっと見つめ悩んだ後、やっぱりサイドテールは子供っぽいかなと、髪を降ろして左側だけシンプルな白の髪留めで留める。

「うん。やっぱりこっちの方がいい」

髪は整えた。次は顔色を確認する。目元の隈は一晩で解消しているようだ。実のところこの1週間ずっと緊張のあまり眠れなかったのだが、ハカセと超による特性の快眠薬のおかげで、昨日は十分に睡眠をとれたようだった。何かお礼をしなくてはと思う。

服は年始のバーゲンで友人たちに選んでもらったので、あまり心配はいらなかった。少なくとも一般的に見ておかしいということはない……はずだ。

下はワインレッドのミニスカートとタイツに少しだけ底の高い黒のブーツ。上は黒色のタートルネックセーターの上に輝くシルバーのハート型のネックレス。これはこの前のクリスマスプレゼントに送られてきたものだ。付けるべきかどうか迷ったが、今日付けずにいつ付けるのだと思い、付けることにした。

彼はこのネックレスを見て喜んでくれるだろうか？

あとは適当に白のピーコートを羽織れば大丈夫だろう。

もう一度彼女は鏡の中の顔を見つめる。

子供っぽくないだろうか？

中学生にもなって、大事な日に化粧の一つもしない女はダメなのだろうか？

今まで、色気づく必要がなかったため化粧道具などを一切持っていなかったが、今になって後悔していた。

そうして再び5分ほど鏡の前で悩み続ける。

「今日は一段と可愛いじゃないか刹那？　ん？　ついに男ができたか？」

声が後ろからするのと同時に、鏡に褐色の肌に黒い長髪の少女の顔が映った。

「たたたっ、龍宮！？」

鏡の前ですつと悩んでいた少女、桜咲刹那は後ろを振り返る。女子寮のルームメイトの龍宮真名が不敵そうな顔で笑っていた。

「鏡の前で奮闘する姿はなかなかおもしろかったが、急に動かなくなったのね。声をかけてみたくなった。で、それだけ可愛らしくして今日は男とデートなのかい？」

ふふふつと真名は笑う。これは弄りがいのある獲物を見つけたと

いう顔だ。生真面目な刹那は冗談も生真面目に返すので、弄るにはもってこいのタイプだ。真名にとっては刹那をからかって遊ぶのは密かな趣味の一つであった。しかし帰ってきた反応は意外なものであった。

「私は……その……。龍宮。龍宮から見て、その……今日の私はかつ、可愛いと思うか？」

「くっ！」

「……な、なんだ!？」

「ははははっ！ムキになつて否定する様を期待してたんだがそうきたか。ははっ、いや一本取られたよ。予想外だ参った。今日の刹那は女の私から見ても十分可愛い自信を持て。それで他に何か困っていることでもあるのかい？」

少し目に涙を浮かべながら笑う真名を刹那は久々に見た。クラスでも仕事でも、表面上ではない笑顔を見るのは珍しい光景だった。

笑われたことにムツとするよりも、自信を持てと言われたのは純粹に嬉しかった。おしゃれなどほとんどしない刹那にとって、大人っぽい真名に言われたのは大きい。

「それで化粧とかしたいんだが、今からでも買いに行くべきだろうか？私は全然持っていないんだ」

真剣な眼差しを受けて真名は参ったとばかりに手を上下に振る。

「刹那と私では肌の色が違うし、中学生なんだからある程度そのままの方がいいさ。控えめの色のグロスを貸してやるから今日はキスの一つでももらうといい」

そう言って真名は自分の机へグロスをとりに行った。

「キス」

冗談を真に受けて思考停止していた刹那だが、携帯のバイブレーションで我に返る。

着信画面には大事な人の名前。

「もしもし？」

『ああ刹那、もう起きてる？さっき空港に着いたけど、今からそっち向かうからまた後でな』

「うん。また後で」

5年ぶりに愛しい主に会えるのだ。

今ここで、精一杯の努力をしよう。

再び彼女は鏡に向かった。

第4話 白の乙女（後書き）

せっちゃん分が足りなくて暴走してしまいました。

反省はしている。だが後悔はしていない。

第5話 『とくべつ』な式神（前書き）

稚拙な文章を読んで下さる方が居て下さって嬉しい限りです。

また感想・お気に入り ありがとうございます。

展開が遅めですが、短文ながらも小出しに進めていきたいと思います。

第5話 『とくべつ』な式神

麻帆良学園の駅前。

予定よりも40分ほど早く、刹那は待ち合わせ場所に来ていた。そういえば木乃香と一緒に来ればよかったなと思いつつ、自分がどれだけ焦っていたのかを思い知る。

きつと部屋に声をかけず寮を出ていったことを怒られるであろうことも、今の刹那にとってはほんの些細なことにすぎなかった。

洋服店のショーウィンドーの隣の壁にもたれかかり、もうすぐ会える、愛しい主のことを思い浮かべる。

それは遠いけれども決して忘れられない10年前のこと。

鳥族の里において、忌み嫌われる白い羽を持つ少女。立派な妖怪でもなければ人でもない、半人半妖の存在。同類と呼べる者どころか、親という存在すら、物心ついたときには彼女の傍にはいなかった。

完全な孤立。耐えきれなかった幼い彼女は里を出た。助けを外部に求めるわけではなく、無自覚に死に場所を探して。

しかし彼女は幸運だった。山で修業をしていた和葉とゆきに出会うことができた。

白い髪に紅い瞳、背中には枝が突き刺さりボロボロになった白い翼。そんな彼女を見つけると、逃げることなくすぐに駆けより

「いたい、いたいの、とんでけ〜！」

と暖かい手を生まれて初めて差し伸べられた。

これまで優しくされたことのなかった幼き彼女には、ためらうことなく自分へ差し伸べられたその手のぬくもりに、覚えていない母親を思い出すような、そんな安らぎを感じるのであった。

その後、神鳴流の門下生として拾われた刹那は木乃香とも出会い、小さい姿になったゆきも含めて4人で稽古の合間によく一緒に遊ぶんだ。

木乃香が川で溺れ、それを助けようとした刹那も溺れたが、半分ゆきの力を借りたとはいえ和葉に助けてもらったという出来事もあった。

しかし、これをきっかけに現当主の子である和葉達と一緒に刹那を遊ばせているのは問題であるとの声が高まった。

以前の和葉と木乃香の誘拐事件のこともあり、長やゆきに対して表立った言動は取れないものの、刹那に向けられる、一部の大人た

ちの冷たい視線は幼い子供たちですら感じとることができるものであった。

そんなある日、刹那は和葉に相談した。

「ウチ、みんなとちごて、ちゃんとした『ようかい』やないから、『さ』におられんようになってもうたけど。ちゃんとした『にんげん』でもないから、かずくんといっしょにおったらあかんのかなあ……」

自らの境遇に泣くこともなく、諦めのこもった瞳を浮かべて、ただ淡々と刹那は語った。

「おとなのいうことはよくわからんけど、ぼくはせつちゃんといっしょがええ」

特に考える間もなく、和葉はそれを自然と口にしていった。

「ウチはんぶんは『ようかい』やねんで？ こわないん？」

「ゆきねえちゃんはずんぶん『ようかい』やけど、こわないで？」

笑いながら和葉は言う。怖いと思ったことなど一度もない。

「せやけど、ゆきねえさまはかずくんの『しきがみ』やから

『とくべつ』やもん。ウチとはぜんぜんちゃう」

妖怪でありながらも和葉の隣にいることの許されたゆきへの嫉妬。刹那が子供ながら常を感じていたことを言葉にただけだった。

しかし、その言葉が和葉から思わぬ一言を引き出してしまつ。二人の人生を変える一言を。

「せやつたら、ぼくはせつちゃんを『しきがみ』にしたる」
「……えっ?!」

あまりにも突飛な発言に刹那は理解が追いつかない。

「『にんげん』とか『ようかい』とか、おとなのいうことはどうでもええ」

和葉は力強くその言葉を続ける。決して同情ではない。無責任な戯言でもない。語るのは心からの決意。

「せつちゃんがいつしよにいたいんやつたら、ぼくがせつちゃんを『しきがみ』にしたる。ぼくがせつちゃんを『とくべつ』にしたるから、だれにももんくはいわせへん」

考えるよりも先に言葉に出した。心からの願い。

「……うん。ウチを『とくべつ』にしてください」
「ウチはかずくとずっといつしよがええ」

このときから刹那は『にんげん』でもなく、『ようかい』でもな
く
ただ一人の主の『とくべつ』になった。

第5話 『とくべつ』な式神（後書き）

フラグ乱立可能性のある本編の前に、強固なフラグを建設しておかなければと思い、構成を変えました。

プロポーズよりも凄いこと口走る4歳児の活躍でした。

さて、そろそろ主人公も帰ってくるはず・・・です。

設定集その2　くゆき+ α 　（前書き）

オリジナルキャラ「ゆき」の設定集+ α です。

設定集1では説明不足だった技についても補足しています。

設定集その2 くゆき+α

設定集その2

■主人公の相棒

名前：天狐「ゆき」・近衛ゆき（和葉や木乃香の親戚設定）

年齢：1000歳以上だが21歳という設定（ロリボディ10歳時は「こゆき」）

性別：女

身長：160（小雪132） 体重？

容姿：白いストレートの長髪 紅い瞳（コスプレで通している）
ツリ目っぽい イリヤスフィール似らしい（Fate）

好きなもの

和葉・刹那・木乃香・ネギ・千雨
教育や世話

コスプレ

いなりずし・きつねそば・うどん

子供

何かおもしろそうなこと

嫌いなもの

欲にまみれた人間

狸（特に学園長）

イタチ

性格など

基本的に楽しいこと好きで馴染みやすい性格。喋り方も威厳を見せるとき以外は馴染むために現代語を好む。面倒見がいいが人を振り

回すタイプ。善狐なので悪戯よりもみんなで楽しくがモットー。狐の性なのか流行には敏感で文化面において感化されやすく、和葉同様オタクに足をつ込みコスプレに目覚める。変化とは違った趣があるらしい。自身が高位の狐であるため、逆に人を騙すことに多少の嫌悪感・罪悪感を持つ。和葉に抱く感情は息子や弟に抱く愛情のようなものである。が、和葉と一心同体な存在なので他の女性陣にとって恋愛面におけるラスボス的存在かもしれない。

狐として：

肉体は昔に消滅し、魂だけの存在。とある場所に魂の本体は眠っているが、「ゆき」として活動するのは分霊体である。よって肉体がないため気は使えず、魔力も本来の数分の一だが、憑依や同調によってその人間のスペックを飛躍的に向上させる。また本来は学園結界により封じられるほど高位の霊格（むしろ神格）だが、幻術の応用で結界に存在を過小評価させることで対象から外れている。近衛家とは天狐になる前の白狐のころ、平安からの関わりがあつた模様で詳細不明。拾っただけの和葉の面倒を見ているのも同情や酔狂以外で何か理由があるのかもしれない。

能力

憑依・精神同調・狐火・変化・各種幻術など狐の技

咸卦法（和葉憑依時）

古武術（特に槍術）

陰陽術

言霊

西洋魔術（学校卒レベル）e t c …

単体では出力的な意味で弱いため、憑依するか思いつきり魔力供給されるのが基本。どちらかが他者と同調したり、憑依しているときはもう片方が肉体を扱う（ゆきは女性で陰の性質なため陰気（気）

を制御する方が効率がいい)。憑依や同調時は2人の高位術者と2つの魔導触媒が補足し合っている状態と同義のため、並列処理、効率性、展開速度では世界最高を誇る。ソウルイーターの「武器」と「武器職人」の関係が近い。ゆきは常に「武器」の側だが、和葉はゆきとの同調時は「武器職人」、他者との同調時は「武器」と両方になれる。精神同調もソウルイーターの“魂の共鳴”が最も近いイメージだと和葉・ゆき共に絶賛。戦闘面での課題は和葉の容量的なスペックや肉体の耐久度が若干低いのが枷となっている。

■主人公（魔砲少年）2号

名前：ネギ・スプリングフィールド

・主な変更点

英雄を目指す純粹無垢な少年だったが、その純粹さが仇をなし、和葉を慕うようになってからは色々と染められていく。良くも悪くも一般の魔法使いの考え方から離れ出すきっかけとなり、自らの道を模索するようになる。また和葉の講義（魔砲少女アニメ鑑賞）の影響で、とある技を開発する。

■ヒロイン

名前：桜咲刹那

・主な変更点

拾ったのは和葉とゆき。和葉の式神扱いなため、協会では排除でなくなっている。小学校の間は京都にいたが原作通り中学からは木乃香の護衛は和葉からの任を受ける。木乃香と既に仲が良い。和葉と精神同調により、とある大技が使えるようになる。和葉へ抱く想いは、和葉の狐ゆずりの能力やそれによって備わった精神構造上、本人に完全にバレバレであるが現状に甘んじている。一線を越える

には、自身の立場に加え、和葉や木乃香の関西呪術協会の後継者候補という立場、和葉が魔法世界で築いた立場、ゆきの存在、和葉の変態性など大きな問題が山積みである。

設定集その2　くゆき+α　（後書き）

和葉・ゆきの技能に関してはチートじみた面がありますが、大事な局面ではこの二人のコンビよりも、ネギ・刹那・木乃香などと組ませて活躍させる展開を考えています。特に修学旅行編ラストの展開は決めてあるのですが、いつ書けることやら。

閑話　く帰国直後の2人く（前書き）

再会の後にちよこつと2人の旅を付け加える予定でしたが、流れるにこつちが先かなあ…ということで短い閑話です。

要は無駄話なので読まなくても全く本編には支障がないですが、成長した和葉とゆきの関係が少しはわかるかな？というものです。

閑話　く帰国直後の2人く

空港前のバス乗り場。

白髪しかも赤い瞳のやたらと人目を引く美女、ゆきと、メガネをかけたごく普通の地味な少年、和葉が駅までのバスを待ちながら他愛のない会話をしていた。

「うゝ最悪だよ。関東のおそばがこんなにダメだは思わなかったあ。日本に帰ってからの楽しみだったのに」

ゆきが流暢な日本語で拗ねる。空港内の蕎麦屋が口に合わなかったことようだ。

本人たちは至って気にしていなかったが、バスを待つ他の客からは、ゆきの格好は好機の目で見られていた。が、一部の人間たちはもつと強い眼差しを向けていた。

「マジパネエっす。……ここまで完成度の高いアイリスフィールのコスプレはじめて見たっすよ！　しかも中身は天然もののロリブルマっす！！」

「いや、あれはイギリスの”Yuki”ちゃんに違いありません！　春山氏は知らないのですか？　先週のブログに日本に仕事で行くを書いてありましたが、実物はなんという2・5次元！！　まさかこんなところで会えるなんてデカルチャーですぞ！」

他にも少し後ろの方で、

「妹君の”Koyuki”ちゃんもどこかにいるのでしょうか……」

「1枚撮らせてもらえるのでしょうか？」

「隣の男は彼氏っすかねえ…」

などという会話が、見るからにオタクの男性2人の間で繰り広げられていたことを本人たちは知らない。

「まあ確かに濃いのは厳しいね。最初のうちは案外いけるかもって思ったけど、半分過ぎたあたりからやっぱり重かったなあ。文化の違い恐るべし！！」

……ん？ 国より先に西と東の違いで驚くのって帰国子女としてどうなんだ。という考えが和葉の中に、ふとよぎった。

「あれがキツネそばなんて私は許せない。アレはただの油揚げのお醤油づけだよ！ 早く西に戻って5年分食べないと気が済まないんだもん。そうだ。西に戻ったらついでに香川を回ろう。春休み全部使って！」

「おお、ゆき姉企画“キツネうどん巡り2週間の旅”パチパチパチって1人で勝手にやっとなれ！」

ゆきの素のトンデモ発言にすかさずノリ突っ込みを入れる和葉。

「実家を離れた影響だろうか。和葉はスッパリ切ってしまう京都人よりも大阪人の感性に近い。」

「だったら、このちゃんとせっちゃんを連れてくからいいんだもん！　せっかく美少女3人とドキドキ温泉宿で”ポロリ”もあつたかもしれないのに、残念！」

「ゴメンナサイ嘘です。行ってくて、行きます、行かせてください。お願いします！！」

少年にとっては、どのくらい2人の少女が「成長」しているのが非常に気がりであった。もちろん、「性的な」意味で。

少年はもうすぐ再会する2人の少女に想いを馳せる。

「楽しみだなあ」

”ポロリ”が？」

「Yes ポロリ…じゃなくて、木乃香と刹那に会えるのが」

「そうだね。2人にお洋服着させたりするの楽しみ」

そんなやり取りをしつつ、時を経て大幅に性格が変化した、白と黒の凸凹コンビは麻帆良学園へと向かった。

閑話　ゝ帰国直後の2人ゝ（後書き）

残念な成長具合の主人公と感化された姉の一部のやりとりです。

次こそ再会です。

第6話 関西呪術協会改革派（前書き）

背景の説明会臭いです。
珍しく長文です。

第6話 関西呪術協会改革派

電車の向かう先は麻帆良学園。

大学から幼稚園まで様々な教育機関が集まる世界でも有数の学園都市。その街は世界樹と呼ばれる樹を中心として広大な範囲で広がっている。しかし、その樹の実態は世界でも有数の霊樹である「神木・幡桃」、その調査のために作られた魔法使いの住む都市である。

「きつと麻帆良にいたら東のこととか、色々厄介事に巻き込まれるんだろうな」

和葉はため息をつく。自分は関西呪術協会の次期当主なのだ。敵対とは言わずとも険悪な中である関東魔法協会の本拠地でもある麻帆良学園都市。そこへ乗り込むことで厄介事が巡ってくるのは必然であった。あまり面識はないものの、様々な方面で悪名高い狸じじいが仕掛けてこないはずがなかった。

……しかしチャンスでもあると、和葉はそう考えていた。

本来であつたら和葉が小学校に上がる歳に、和葉とゆきは魔法世界に渡り、アリアドネーの魔法学院の一つに入学した。20年前の魔法世界での大戦で多数の術者が巻き込まれたことから、関西呪術協会で西洋魔術を習いたいなどということは前代未聞の裏切り行為と捉えられるのが普通であつた。しかし、

？6歳にして和葉が関西の長を継ぐ決意を表明すること。

？陰陽術の師として既にゆきという高位の術者が存在しており、他の者による指導の必要性が少ないこと。

？アリアドネーは魔法世界でも中立の立場であり、大戦に大きく関わった連合や帝国よりは批判的な感情が協会内でも小さいこと。

？関東魔法協会は連合の下部組織であり、関東および連合に対抗できる人脈づくりがアリアドネーでは望めること。

？関西呪術協会の魔法世界進出への足掛かりとして、西洋魔術中心の魔法世界には珍しい、東方呪術の導入や教導という学問からの進出が平和的な手段でありながらも、他の組織では介入できず、また勢力拡大において最も必要な要素の一つである人材を、広く学生や弟子という形で確保のできる長期的に見て堅実的な手段であること。

反対派を説得するこれだけの理由を和葉とゆき、そして現アリアドネー総長のセラス協力によって準備をすることができた。詠春も全面的に賛成というわけではなかったが息子が自分で選んだことは尊重したいと、長としての立場とは別であつたが、親として、一個人としては親身に相談に乗ってくれた。セラスを紹介したのも詠春だった。

和葉に関西呪術協会を継ぐ意思があるのなら、尚更手元に和葉を置いておくべきだという声も最初のうちは上がったが、その懸念もすぐに解消された。

年に一度の神鳴流も交えた西全体の総会において、和葉が次期当主としての決意表明を、史上最年少と言ってもよい6歳で行なったのだ。そして続いたのは噂になっていた和葉のアリアドネー留学の件だ。皆の顔が曇るなか、和葉は更に言葉を続ける。

「西には組織としての力が全然足りひん。僕は戦争を知らへんけど、結局ええように使われてもうたから巻き込まれたんや。『嫌や!』って言うとればこないなことにはならへんかったはずや。ちゃんと言いたいこと言えるように、昔と違って『嫌なことは嫌や』ってと言えるようにするためには、組織としての発言力が必要や。復讐のため武力やない。今みたいにチマチマ東の下っ端叩いて、それで見んなのためになったんか? 先代たちは褒めてくれるんか? なあ……ちやうやろ?」

たった6歳の子供による異例の決意表明に続いたのは、“西には力がない”という侮辱とも挑発ともとれる言葉。現在は長やゆきの強い保護があるものの、以前は忌み子と呼ばれていた子の言葉であり、癪に障るのは当然である。しかし、ゆきによる教育によって精神的に大きく成長した和葉の指摘はあまりにも正論であった。

しかもただ今の在り方を否定する穏健派とは異なり、「発言力の向上」という着眼点は、中立派や穏健派よりも、むしろ強硬派の者たちの心に響くものがあつた。関東とただ仲良くしようとしていた詠春とは決定的に違う意見。ゆきに言われたわけでもなく、色々な人間から話を聞いて自ら考えた、和葉なりの答えであつた。

「東とすぐに仲良うなるんは無理やってことはわかつとる。東のじいちゃんたちはようわからへんけど、少なくとも東の後ろにおるやつらは僕らを対等と見てとは思えへん。仲良うなるにしたらって、ちゃんと西を見てもらえるようにならなアカンと僕は思う」

これは穩健派への向けてのメッセージ。さらに和葉は自分の考えを語る。

「人が必要や。西は単純にまず人が少ない。せやから他の組織に与える影響も少ないんは当たり前や。でも西には東と違って連合みたいな後ろ盾もあらへんし、人材も日本の大体半分からしか集まらん」

「……だから僕は魔法の国のアリアドネーって国へ行って勉強しながら、連合の奴らに文句言えるぐらいの人脈を作る。力がないならまずは取り込めばええ」

力強く決意を語る。大人でさえ中々言えないことをきっぱりと言う。

「そんで新しく人を育てればええねん。アリアドネーは学問の国や。あつちで陰陽術を使つとれば絶対興味もって来るはずや。そしたら先生として術を教えに行ったり、弟子をとれば僕らの味方は確実に増える。上手くいったらいくつかの拠点をあつちの世界におけるかもしれへん。どやるか？ こっちのほうがおもしろいと思わへんか？」

予想以上に練られていた内容に誰も言葉を発せない。沈黙が続く。

「若様、お見事です」

皆が静まる中、意外にもはじめに口を開いたのは、ゆきが和葉を

拾って連れ帰ってきた日、2人の道を塞ぐように出迎えたあの男であつた。和葉の隣にいるゆきに目を合わせて笑っている。

「もちろん若様だけが考えたわけではないでしょうが、その歳にしてその言葉確かに私の胸に響きましたぞ。これは先が楽しみですな。是非私は一族を代表して若様の留学だけではなくその理想のための全てを支援しましょう。いやはや、ゆき殿の教育の賜物ですか」

「ウチが長から聞いた話やと、アリアドネーちゅー国やつたら余計な干渉も多分せーへんやろし、ウチらの氣に入らん東の後ろについとる連合とは独立しとる。しかもその国は学問の前ではあらゆる差別意識はないと聞いとります。犯罪者かて学ぶ人間を保護する変な国らしいどすなあ。大事な弟分が遠くに行くんは心配やけどウチは応援しますえ」

神鳴流若手の中で最強と名高い青山宗家の長女、鶴子が続いて賛成の意を示す。

その後、次々に賛成を唱えるものが出てき、反対を唱える声は上がらなくなった。そしてこの日、大戦の遺族を中心とした強硬派、詠春をはじめとする穏健派、神鳴流が後ろ盾になる中立派に続き、各派閥から引き抜く形で和葉を中心とした改革派と呼ばれる派閥ができた。

こうしてアリアドネーに渡ることが決まったが、魔法を知らず、後継者にもなることのない木乃香はせめて普通の女の子として暮ら

してほしいと詠春は考え、麻帆良に預けることになった。東の本拠地であることや、木乃香が和葉と別れたくないとぐずるなど、実はこちらの方が大変にもめたのであった。しかし、表立って宣言した和葉とは違って裏の方で段取りが決まっていたので、真の事情は謎であった。

こうして和葉はアリアドネーに渡り、6年生の魔法学院を3年で卒業すると言う偉業を成し遂げた。力の使い方を既に会得しており、精神的にもゆきによって教育されていたため当然と言えば当然であった。その後、和葉は嘱託講師としてゆきと共に陰陽術の基礎を教えつつも、研究員としての活動を行った。父のような英雄ではなく、学者としての道を選びながら、同時に西の次期当主としての下地を積み重ねていった。

そして和葉の専門は「魔力環境論」という魔力そのものを取り巻く要素についての学問である。その中でも「魔力と肉体、精神および魂の相互関係について」という最も根源的で、古くより研究されているものの、非常にマイナーな分野の研究であった。狐としての能力も相まって馴染みの深かったこの分野を和葉は選んだ。具体的な研究課題の例をあげると、「なぜ魔法が使えるのか?」「魔力を感じるとはどういうことか?」「魔力と気はなぜ反発するのか?」「魔力をどうやってたら精神力で扱えるようになるのか?」「その土地の力を行使するにはどういった契約が必要か?」などという、かなりどれも漠然としており、誰もが経験的や感覚的に処理してしまうことを解明しようという学問なのだ。

現実世界であつたらノーベル物理学賞に匹敵する魔力の基礎研究の論文を出しているものの、まず他の人間では理論の再現がほぼ不可能であり、常人の感覚では全く理解されないため、不遇な若き天才として研究者の間において、和葉は有名な存在になっていた。

研究のため、ゆきと2人で、魔法世界や現実世界の各地を卒業後5年回った。そして西の次期当主としてだけではない、自分の人生について考えるようになった。この世界のだれもが懂れる父や偉大なる魔法使いたちのこと、国を治める政治家や王族などを知り、本当に自分がどうしたいのかを模索する旅でもあった。

魔法世界では紛争に遭遇したり、戦災跡を訪れることが多々あった。戦いはこの世界において避けられないものであったが、きれいごとではなく殺さねば自分を含めた他の誰かが死ぬと痛感した時、実のところ臆病なだけかもしれないが、武力だけではダメだと思った。

和葉がサムライマスターの息子だと知れると、英雄や偉大な魔法使いにならないのかと聞かれるのは常であったがそんな気などサラサラなかった。偉大な魔法使いの中には、戦いに秀でたものだけではなく、戦災者の治癒に尽力した人物などもいた。しかし尊敬はするものの自分が目指すものではないと感じていた。

和葉の実用的な研究成果の1つに「魔力の効率的吸収による作物の安定的生長促進効果について」というものがあった。その土地に溢れる余剰の魔力を作物の生長に利用すると言う研究であった。これを和葉は旅の途中訪れた、戦災跡の村に魔法陣を施すなどした。

早い段階での自立を促し、飢餓から救える力。敵を倒すより、ただ怪我を直すより、ただ炊き出しをするよりも先を見据えた「立派な」行動であり、救われた人はそれこそ崇めた称えた。おかげで飢えることも、奴隷に身を落とすこともなかった。

しかし、それでもダメだった。豊富な作物を狙う飢えた野党に滅

ばされた村もあれば、作物の手に入る土地をめぐるの権力闘争や独占、不平等分配による貧富の拡大や貧困者の飢餓など、「結果だけ」を見れば何もしない方が良かったかもしれないなどと後悔することも1度や2度ではなかった。

きつとそれは治癒術師にとっての、せつかく助けた兵士が再び他の人間を殺すような感覚と似たものである。全てを救うことは無理でも、自分の手が救いではなかったらと考えるとやり切れなかった。

そして本来の研究に没頭するようになり、とても単純で馬鹿らしい、夢とも理想とも言えない漠然とした夢想到に気付いた。

自分はただ「皆が幸せになれるようにしたい」のだと。

それはあまりにも歪んで、独善的な考え方であることに気付いていたが、全く無理というわけではないと考えていた。実現の糸口は既に見つけていたのだ。

そのための研究材料が、資料がこれから向かう先にはある。そして置き去りにする形で長い間離れることとなった、木乃香や刹那と一緒に過ごすことができるのだ。置いて言ったことに恨みごと1つ言うどころか、いつまでも待っていていた大事な存在。2人のことを考えると、自然と和葉の心は躍っていた。

木乃香と刹那の2人には、学園の案内をしてもらうため駅前で待ち合わせていた。いつの間にか駅に到着していた和葉はゆきに左手

を引っ張られてホームに出る。

「こらく難しいこと考えてばおっつとしてたでしょ！ ほら女の子を待たせてるんだからサッサと行くよっ！」

ゆきはバン！と和葉の背中を叩いて走り出す。引きずったスーツケースがガラガラとうるさい。

「ああ。5年も待たせたんだ。もうこれ以上待たせらんないな！」
追いかけるように和葉も走り出し改札を抜ける。

そして視界に映るのはゆきの胸元に抱きつく木乃香の姿と……

「おかえりなさい。カズ君」

置き去りにした薄情な主をずっと待っていてくれた、『とくべつ』な少女が笑顔で迎える。

「おう！ただいま。刹那」

最高の笑顔で、彼もその想いに応えた。

第6話 関西呪術協会改革派（後書き）

ようやく再会です。って挨拶しかしてませんが。
次は会話中心です。

改行の仕方がどれがいいのかよくわかりません

第7話 再会（前書き）

いよいよ再会。会話パートです。

第7話 再会

「あの…お元気そうで何よりです」

半分目に涙を浮かべながら刹那は声をかける。

それを見て本当にすまなさそうに答える。

「ずっと置いてきぼりにしてゴメンな」

「いえ…とんでもないです。私には修行もありましたし、何よりこのちゃんのこともありましたので。それより…そのこちらにはどれくらいいらっしやる予定なのですか？」

「少なくとも見つもって2、3年は研究でいるかな。それから多分西と向こうを行ったり来たりするかもしれない。今後の身の振り方は今のうちじっくり考えるさ」

「そうですか」

一緒にいられる安堵と、また再び置いていかれてしまう不安を入り混ぜた顔を刹那は浮かべる。

「刹那が望むならこれからは傍にいてくれ。今は刹那の実力もついたんだし、今の俺もあつちで人脈や立場を得た。木乃香を任せられる人間も選べるだろうし、本人の選択するなら木乃香も連れて行くそれに…」

「美人の従者を放っておくのは勿体ない」

と笑いながら言うと、刹那の白い頬だけでなく顔全体が赤くなり、思惑の通り一つの旗が立った。反応が素直に出るのが萌えだなと評

価する和葉に向かつて

「かずく〜ん!!」

木乃香が右肩腹のあたりを目掛けてダイブして来た。しっかりと正面から和葉は受け止め強くハグをする。

「（胸も）大きくなったな。木乃香」

「まだ73やけどなあ。きつとそのうち大きくなるで」

「なん……だと!!?」

予想外の展開に和葉は驚く。心の声がバレていることもだが、自分からバストサイズを語りだす妹は、知らない間にどんな風に育ってしまったのかと。5年ぶりの再会をした兄弟の会話でないことは確かだ。声に出してなくとも和葉のせいであるのだが。

「…うそん!? このかちゃんエスパー?」

正直に感嘆するゆき。彼女は彼の残念な方向への成長ぶりを重々知っているが、双子とはいえ数年ぶりに再開する木乃香が見抜いたことに驚きを隠せない。

「あの…ゆき姉様」

「何?」

「お、大きい方がカズ君は好きなのでしょうか?」

「う〜ん。お姉ちゃんの本棚チェックによると、可愛ければ大きさはあまり関係ないみたいだよ。よかったね。でもサラシは女の子としてどうかなあ?」

「やはりダメでしょうか?」

「いや、実はそっちが希少度がポイント高いかも…」

「えっとポイント？何の話ですか？」

「で、いつまでそうしてんだ木乃香」

「ずっとや。離れとうない」

「……ん。そうか」

ぐずって胸元に顔を沈める木乃香の頭をなで、魔法世界に旅立った時もこんな感じだったなと思ひ出す。

「……なああつちでの勉強ってそんなに大事やったんか？　ウチやせつちゃんよりもだい」

「大事だよ。大事だから…ごめんな。さびしかったよな」

「いっぱいお詫びしてもらうんやから覚悟しときや？　それで、これから一杯ええ思ひ出一緒に作るな」

「じゃあまずはそのカフェでケーキでも食べようか。お互い積むる話もあるだろう」

ランチタイムにはまだ早い、駅近くのカフェにて4人はケーキと紅茶を飲んでいる。もちろん和葉のおごりだ。和葉はクリームの乗ったプレーンのシフォン、刹那はチーズ、木乃香はショコラ、ゆきはババロア入りのロールとバラバラだ。甘党の木乃香が色々つけばいいと言ったためである。

ゆきと木乃香はためらいなくケーキをつつき合うが、刹那はオタしている。もどかしく思った木乃香が無理やりアーンと刹那に食べさせる。それを見て和葉も悪ノリで食べさせる。直後に「俺の使ったフォークで悪かったな」と笑いながらに言い、木乃香が「あ

っー！！カズ君とせっちゃん関節キスやズルイー！！」などと言うので刹那をがボン！と音をたててオーバーヒートしたりと、5年ぶりの再会でも4人の関係は以前のままであった。

「木乃香の京都弁聞くとなんか落ち着くなあ」

和葉がふと漏らす。

「かずくんは何で言葉普通になつとるん？ 前会ったときはあんまり変わってへんかったんに」

木乃香は素朴な疑問をぶつける。

関西弁の帰国子女ってキャラが濃すぎるから却下、というのは冗談であり、

「まああつちでも（主にアニメや漫画の理解のために）日本語教えることが多くてさ。他の国の人に教えるのが関西弁だと困るから自然と共通語になつたって感じかな」

と、いかにも最もな理由を付けて語る和葉。木乃香と刹那は感心しているが、ゆきは省略された言葉が頭に浮かぶのでそんな2人を一瞬哀れな眼で見る。

「そつえば…なんかかずくん父様に段々似てきたんちゃう？」

それは褒め言葉として受け取っておいていいのかと考えながらも、「そういう2人とも大人っぽくなったじゃないか？　結構モテてるんじゃないの？」

と予先を変える。

「まあ、かずくんたら、照れるわあ！！」

「私にはお仕えするだけです。で問題ありません！！　そ、そういうカズ君こそどうなのですか？！」

「うーんないない。色々と（我ながら残念な方向に）変わっちゃったからねえ、ハハッ」

和葉は自嘲する。　実際、学校の生徒や旅で救った者から好意を寄せられることも、少ないとはいえあった。が、

「安心していいよ。お姉ちゃんが全力で和葉の貞操を守ってあげたから！」

フォークを持った手で自信満々にガッツポーズをするゆき。

「おかげであんときは本当に死ぬかと思ったけどな」

ため息をつく和葉。　かなり苦い顔をしていることからよっぽどの経験だったのだろう。

「そつえば和葉アレ渡してないよ！」

「あ。忘れてた。あんがと！」

「ホレっ木乃香。お土産」

小さな紙袋を和葉は手渡し、木乃香はいそいそと開ける。

「なんやろわぁ？ 何かエライ高そうな茶葉やなあ。流石イギリスや。あつ！ こっちはタロットやぁ！ なんかオーラみたいな本格的な感じがするわぁ。かずくん、ありがとな」

満面の笑みを見て良かったと思う2人。茶葉は和葉、タロットはゆきの見立てだ。

「刹那にはこれ。出かけるときに使っておくといい。あつ、強烈だから塗り過ぎ注意な」

和葉が渡したのは八角形の薄緑の液体の詰まった香水瓶。花の精の祈りを集め作られた、リジェネーション効果の込められた高濃度のポーシヨンだった。実際に香水としても人気の高い逸品であり、ゆきの一押しだった。

刹那にもこの瓶に癒しの効果が秘められていることが分かり、心づかいを理解すると主への感謝と純粋な好意の瞳を向ける。

「このような貴重なものをありがとうございます」

（それから後でとおきのがまだあるからまっときな）

和葉は念話を刹那に送る。

（……はい？）

それから日常生活の話題などで時間はあっという間に過ぎた。

「あっ！もうこんな時間や。アカンおじいちゃんに呼んでくるよう頼まれとるんやった」

木乃香が腕時計を見て慌てる。

「爺さんのいる場所は遠いのか？」

「ここから10分くらいですね」

「あっ、一応ウチらの女子中学内やから他の女の子に手え出したらアカンえ！」

女子中という響きに良からぬ妄想を始めようとした和葉だが、ふと嫌な予感が頭をよぎる。直感というより本能に近い部分でのサインのような気がした。

（なあゆき姉）

（うん？）

（なんか知んないけど、木乃香と同じクラスに入れられる気がするんだわ。変化でとか、男女共学のケースモデルとしてとかで訳わからん理由で）

（やっぱりそう思う？ 実はここに着いてからずっと妙な予感がしていたけど、天狐として私もそんな気がさつきから強くするんだよ

ね。……で、どっちにかける？ 私は和葉が女装して通うのに500円よ）

天狐として高い占い能力を有するゆきも言うので案外冗談では済まないかもしれない。念話であらかじめフラグを立てておき、折る準備を万全にしておく2人。もしものときはO H A N A S H Iして『頭を冷やして』もらおうと決めていた。

第7話 再会（後書き）

次は学園長との対峙、次で入りきらなかったらその次あたりでバトル回になりそうです。展開は考えてありますがちゃんと書けるか不安です。

まだペンダントやらグロスのフラグは回収してませんがまた後で。

第8話 狐VS狸（前書き）

前話で嫌な予感を口にした2人…いよいよ狐ズVS狸です

第8話 狐VS狸

休日のため特に止められることもなく女子中等部に案内される和葉たち4人は学園長室へ入る。

「おじいちゃん連れてきたえ」

「失礼します」

「……生きておったか」

「じいさん久しぶり」

「ふおっ、ふおっふおっ。和葉にゆき殿も元気そうで何よりじゃ」

「ホイ。一応『孫からとしての』お土産な」

紙袋を渡す。中から出てきたのは1冊の英語で書かれたハードカバーの本。

（あっちでもレアな元気の出る本だ。MMの裏モノだぜ。感謝しろよ爺さん）

（詠春と違って健全に育ってくれたのう。あとでじっくりと頂くい）

ゆきに聞かれないよう、こっそりと高レベルの念話を交わす二人。

ただしレアものといっても、熟女ですらなく老女ものであることを和葉は言わなかった。ちなみにこれは向こうでの悪友に選んでもらった逸品。中身を知らず開いてしまったときは3日間寝込んだりする。これを理解するにはあと少なくとも60年はかかるだろう。

「ふおっ！これは中々のものを。うむ、感謝するぞ」

「で、爺。本題に移るが諸手続きの方はどうなっておる？」

ゆきの雰囲気がいっものお姉ちゃんモードから天狐モードへと切り替わっている。

「おお。連絡しておいた通りゆき殿には女子寮の管理人を任せたい。仕事内容は現管理人があと1カ月はおるから引き継ぎを頼んだぞい」
「承知した」

あっさりとゆきが答えると

「ええ！お姉ちゃんウチらの寮なん！？」

木乃香が歓喜の声をあげた。

「今度ウチの部屋に遊びに来てな？」

「うん。行く行く！」

「よろしくお願いします」

「で、俺の方は？」

「その件じゃがの、じょ……」

「だが断る！」

断固とした否定。決まると中々清々しいセリフだと一瞬だけ感慨に浸る和葉。

残念そうな顔で髭を持てあそぶ狸は続ける。

「せめて最後まで聞いとくれんのかのう。和葉には女子中等部の方で」

「じいそれは死亡フラグだ！ Nice Boatな展開は全力で回避する！」

女子に囲まれてのハーレム生活には憧れるものの、フラグ乱立は勘弁だと、思わずオタク的発言を声に出してしまう。ゆきですら半分しかわからない妙な発言に、他の面々にはまったく理解できず啞然とする。

「ボートが良いとかわからんがのう、木乃香のクラスの副担任として……」

「なお悪いわ。免許偽造・年齢詐称じゃねえか」

「学園長それはいけません！」

「和葉をこれ以上ケダモノにするつもりはない却下じゃ」

3人は即答で拒絶するものの

「うーん。ウチはかずくと一緒に過ごせるんなら大歓迎やねんけどなあ」

木乃香だけのんびりとしている。

「俺は（表では）普通の学生生活を送りに来たんだ！ 犯罪者になりに来たんじゃないやねえ！！」

「保護者として女子だらけの中に放り出すのは絶対許可できぬ。元から共学なら許すが。それで刹那に聞いたところによれば葛葉の娘が男子校におるのじゃろう。そこに和葉は預ける。それで決まりじゃ」

と、更にまくし立てる2人に

「そうです。刀子さんのところであれば問題ありません！」

と刹那も加勢する。かなり目が真剣だ。…というよりも真剣を出してでも言うことを効かせると言わんばかりの気が右拳から溢れていた。

「そっか。ちょっと残念やけどしゃないなあ」

「むむむ、どうしてもダメかの？」

「くどい。帰るぞじじい！」

「返してもらっぞ？」

土産を返せと手を出す和葉に

「刀子君に連絡しておくわい」

和葉の予想の斜め上を行き、まさかのあの本で解決できた。アレの良さは文字通り死ぬほど全くわからん、どれだけエロいんだと呆れる和葉。

（まったく…で本業の話はいつだ？）

ゆきと和葉の予想よりも酷いことを企んでいた学園長にキレつつも、念話で確認をとる。

（ふむ。顔合わせなどをやりたいしの。23時半に世界樹広場に来ておくれ。刹那君と来れば場所はわかるう。それとゆき殿もじゃ）
（あいよ）

ぼうぼうに伸びた白眉の下からの目線が少しだけ強くなったのを3人は感じた。腐っても一応関東の長かと改めて意識する和葉。

「じゃ」

「失礼しました」

「ふざけた真似をすると詠春に伝えるからの」

「おじいちゃん、ほなな」

4人は学園長室を後にした。

「——さて、どう動くか楽しみじやの。西の次期当主にして本国の“深淵の探究者”よ」

老獺は髭を弄び思考を巡らす。

「で早速土産を開くかの。気が効く孫で最高じゃわい。詠春から離れて正解だったのう」

無詠昌で本に掛けられた認識阻害をイソイソと解くと、表紙も見ずにいきなり真ん中あたりのページを開く——が

次の瞬間には椅子から落ち、両目から血を流しながら、心臓発作

のように胸を抑え痙攣しておる学園長がいた。大戦から20年。東の長にダメージを、しかも絶命寸前までに追い詰めたのは和葉だけであったようだ。しかし本人も含め、西の誰もこの功績を知る者はいなかった。

ちなみに、その本の表紙には「MMセブンティー1月号　く熟れに熟れたヴィンテージもの？　ブドウ畑で甘いひととき」と書かれていた。

その後4人で昼食をとり、適当な理由を付けて木乃香に一度部屋に戻らせた。これで魔法関係者だけになった3人はこれからのことについて話をする。もちろん盗聴防止などの込められた強力な認識障害の結界内だ。

「で、ゆき姉。やっぱ西に今から戻るから。式に俺の部屋の荷物は任せるけど、何かあつたら頼む」

「了解」　じゃあ22時に呼び戻せばいい？」

ゆきが懷から取り出したのは仮契約カード。“アデアット”と唱えるとカードが白銀色のシンプルな指輪となり、和葉とゆきの右手の中指に装着される。

何も言わないが刹那は驚いていた。指輪の「アーティファクト」の方でなく、「仮契約カード」の方にだ。

契約方法にはいろいろあるものの、異性間であると“キス”によ

るものが一般的らしいことぐらい西洋魔術に疎い刹那でも知っている。少なくともゆきにその気がないとしても“万が一”の可能性を考えると気が気でなかった。顔を赤らめ口をパクパクさせながら2人の唇を交互にチラチラと視線を向けていた。

（はは〜ん？　せつなちゃんはかわいいなもう。和葉のファーストキスはまだ奪われてないよん）

（……！！！！）

悪戯っぽくウィンクを向けながら刹那だけに念話を送るゆき。安心して落ち着きを取り戻したものの、これはゆきに「行け」と後押しされているのかと邪推すると、更に赤くなり目も明らかに泳いでいる。

「うん、それでいい。行きは飛んでいくけど帰りはギリギリまで居たいしな」

と和葉。学園長室での雰囲気とは一転して凛々しい顔つきになっている。メガネのずれを直しながら、これからの行動について整理しているのだらう。

「和葉、せっかくだから刹那ちゃんも連れていったら？　木乃香ちゃんも私が見ておくから。これから寮にいくしね」

と提案しながらさらにもう1つ指輪を出して刹那の指にはめる。

（ゆき姉様。感謝します）

全身を震わすほど感謝する刹那。静かに決意を固め、目を閉じ荒くなる息と鼓動を落ち着かせる。

「指輪と俺の体もあるから理論的にはいけるはずだけど…いけっか？」

「言霊で誤魔化せば大丈夫だって」

「ま、そうだな。てか“交換”すればもっと簡単にいけるじゃん！」
「うん、そっちが楽だね」

2人にしかわからない会話をしている。おそらくアーティファクトのことだろう。

「じゃ時間もないし『来い！嵐華！！』」

和葉が札から呼び出したのは足から頭までの立て幅でも3m近くある黒鷲。翼を広げれば軽く横幅は10m以上になるであろう。

（主、和葉。ここは我が故郷日本のようですが、本日はどちらまで？）

低く響く声。どうやら雄の式神のようだ。

「京都まで頼む。俺とあとこの子を。前に話した式の刹那だ」

鷲は鋭い目を刹那に向ける。

（貴殿が刹那か。我が名は嵐華と申す。向こうの国で縁があり主和葉に仕えておる。しかし恥ずかしながらこの身、戦は不得手であるが故、こうして主の足を休めることしか叶わぬ。同じ式として我が主のことを頼む）

「ああ。確かに任されたぞ嵐華。この身この魂の全てをにかけて我が

主を守り通そう」

夕風の入った竹刀袋を強く握りしめ誓う。

(うむ)

「何か見てるこっちが恥ずかしいからやめてくれ。時間もないしさ
っさと行くぞ」

そう言って頭をかき、巨大な黒鷲の背中に飛び乗る和葉。

「ほら刹那も」

「はいっ！」

2人を乗せた鷲はゆきに見送られながら麻帆良を飛び立ち、風を
切り刻むという形容にふさわしいほどの速度で西を目指した。

第8話 狐VS狸（後書き）

バトル展開まで持っていくつもりが長くなりそうで投稿です。多分次の次？展開遅めです。ゴメンナサイ。

それであの場のやりとりだけのつもりが、酷い展開になってしまったバトル（笑）回です。恐るべしMMオーバーセブンティー。

次はシリアス回。

9年かけて変わった西を本格的に動かし始めます。和葉もまともです。

ゆきのアーティファクトも正体が見えて来ます。名前だけネタばれすると『絆の指輪』です。

それでは今後ともよろしくお願いします。

第9話 小狐丸（前書き）

後半部が地の文続きでシリアス過ぎたため、テイストの違う前半部分だけ投稿。もはや次回予告は嘘予告というか1回遅れが定番と化しており申し訳ないです。最後にチラッと次の話の部分を持ってきました。成長した和葉の政治的手腕が次こそ見れると思います。

第9話 小狐丸

黒い大鷲である和葉の式神、嵐華は、新幹線と比べても圧倒的ではないかと刹那が感じるぐらいの速さで富士山を越えたあたりを飛んでいく。嵐華の背の上に和葉は跨るのではなく普通にあぐらをかいており、刹那も斜めに足を崩して座っていた。飛行機以上に快適な空の旅のようだ。

「それにしてもすごい速さですね」

感嘆する刹那。しかし、自身の呪われた翼とは比べようもないスベック差と、それを誇りとできることに多少嫉妬心を感じていた。

「嵐華はどっちの世界合わせでも最速クラスの騎獣だしな。あつちの高速艇より早いから旅費もかからないし、きっちり最高レベルの認識障害も自分でかけてくれるからホント助かるよ」

笑顔で背中を撫でながら和葉は言う。

（光栄です。それしか能がない故、この一点だけは誰にも譲る気はありませんね）

「ついでにモフモフで気持ちいいしな」

どさっと、刹那の方を向いてうつ伏せになり羽の中に顔を埋める。

「確かにモフモフですね」

左手で感觸を確かめるように撫でる刹那。

「刹那もモフモフだろ？」

「いえっ、あれはそんな大層なものではありません」

「じゃ確かめつか？俺はアレ気持ちくって結構好きだぜ？」

うつ伏せのまま手を刹那の方に伸ばしてワキワキとさせてみる。

変態紳士オープンモードだが、肝心のストッパーゆきは不在である。

「ひゃあ！」

「カ、カズ君！オち、おちちゅいて！ウチここで脱ぐとか無理やつ
！！」

刹那の方がおちちゅいておらず、ペンダントを握る形で胸を手で
押さえている。

いつもの和葉だと「ここで以外なら？」と追い詰めて遊ぶのだが、
予想以上の刹那の慌てぶりに萌え死にそうになる。同時に今までこ
の可愛い従者を放っておいた自身に後悔した。

だからこそ、ここでの選択肢は間違えられない。今はゆきとの精
神のリンクを切っているが、指輪を使われたら完全にアウトだ。下
手をすればゆきからの O H A N A S H I が待っている。しか
し、フラグが立っているのならそれなりのイベントを起こさねば紳
士の名が廃ると、変態思考は研究時よりも迅速に回転していた。

そして数ある変態的選択肢を捨て、ゆきに対して比較的言い訳可
能な選択肢を選ぶ。再会してすぐなのだ。これぐらいでちょうどい
い……はずと言い聞かせる。

「じゃあ観念しな刹那？」

刹那の足元に西洋の魔法陣が浮かぶ。

「あ、あれ？動けへん……モ、モフモフするだけやったら、カズ君ならええよ」

刹那は観念して目をつぶる。しかしその魔法陣は拘束魔法ではない。ただ腰を抜かしているだけだった。

「……悪い刹那。モフモフはまた後だ♪」
(?!?)

柔らかい何かが刹那の唇に触れ……目を開けると魔法陣から光が溢れだし、2人の間にカードが浮かんでいた。それを和葉は掴み刹那に向ける。

「もちつとマシな状況でやろうと思ったけど、ハハッ我慢できんかった。ほれ“2人”の契約の証しだ」

そう言っただけ契約カードを刹那に渡す。受け取った刹那は呆然とするが、

「何で仮契約ならそう言うてくれへんかったん!? めっちゃ吃驚したやん。モフモフやと思ってたんに心構えしてた意味ないやんかあ!!!」

半分泣きそうな顔で訴える刹那。だが残りの半分は照れ笑いを浮かべていた。

「モフモフの方が良かった?」

本気で嫌がっているわけではないとわかっているので茶化して
みる。

「……“キス”の方で良かった」

あえて“仮契約”とは言わない刹那。

しかし和葉の脳内では『ヤバイヤバイヤバイ。またポイント6点だ。
神様、木乃香√とゆき姉√、刀子さん√放棄して刹那√一直線でい
いんですか!!? くぁwせdrftgyふじこおlp;@:「』
と、今度は和葉の方が混乱する側であった。

(…主)

嵐華が口を開く。完全に存在を忘れていた2人は取り乱す。

(このことをゆきには?)

「……『結果だけ』伝えてくれ」

(承知)

忠義深く、おそらくは口も堅そうな従者だ。『過程』については
きつと漏れない…はずと和葉は信じることにする。

「そ、そのゆき姉様は大丈夫でしょうか？」

出かける前の様子からして肯定と考えると刹那であったが、和葉
の動揺ぶりに少し不安になる。

「大丈夫だ、問題ない……多分。それより、アーティファクトを早
速確認しようぜ！ 刹那『アダット』って唱えてみな？」

気分を変えようとテンションをあげる。

「あ『アデアット』ですか？」

カードを持って唱えると、右手に一振りの刀が現れた。

「これが小狐丸か」

「えっ？　これが“あの伝説の”！？」

カードに書かれていたアーティファクト名から和葉は察していたものの、ラテン語を読めなかった刹那がその刀を見たときの興奮ぶりは物欲の少ない刹那らしくなかった。

「逸話は知ってるよな？　刹那」

「ええ、あ的一条天皇の宝刀、小狐丸だとすれば、何の縁でしょうね」

「ゆき姉絡みかもしれないな。能力とか知ってるかもしれないし帰ったら聞いてみつか」

「あの三条宗近の作だと思うと剣士として心が躍ります」

わくわくした表情をみせる刹那。それもそのはずだ日本の歴史上で最も有名な五振りの刀のうちの1つ『三日月宗近』を作り、源義経の2刀『今剣』『薄緑』としても有名すぎる刀を残した刀匠であり、その幻とされる作品が「小狐丸」なのだ。剣士として心躍るのは無理もない。

「刀なら小烏丸つても刹那ならありかなと思ったけどな」

「でも今の私はあなたの式です。狐と打ったこの刀、共に主に捧げましょう」

「ああ。よろしくな」

後で和葉がくれると言った「いいもの」とはこの契約のことだと信じ、舞い上がっている刹那だったが、それを察した和葉は、高レベルの認識阻害効果の付いた猫耳&しっぽセット（しかも自作）を後で渡すつもりだったとは言うに言えなくなっていた。

そして狐の弟子と翼の従者たちは京都の地へ辿りついた。

そして嵐華がまず向かった先は、関西呪術協会の本山ではなく、有限会社「サンライトハート」関西本部事務所。「人材の確保」と「人脈の形成」の次の狙いである「経済力」と「民衆からの支持」を集めるために作った、改革派の術師と本国での有志によって運営されているマジックアイテム販売会社であった。

発足から3年で本国の誰もが知るようになり、「小さき知恵者」リトルウイズとして和葉の存在を知らしめるきっかけとなったこの会社。新たなプランたちを率いて、西を、東を、本国を更に動かそうとする。そしてこれが「未来」へ新たな選択肢を与えることを——「彼女」でさえも今はまだ気付いていなかった。

第9話 小狐丸（後書き）

次の話はこれからの展開、全ての布石となる話なのでもう少し時間をかけて詰めたいと思います。

それから本作品の刹那は白いことに対しては多少のコンプレックスがあるものの、ハーフということに関しては割り切っており、今の関係を得るきっかけとなったもので、少なくとも和葉からのその方面の発言はむしろ誇りと感じている部分があるようです。

設定集その3 ーアーティファクトー（前書き）

10話ほどできているのですが場面の繋ぎが滅茶苦茶で難産です。
10日ほど空いているのでモチベ上げるため設定集先に投下です。
今日中に本編アップしたい…

設定集その3　～アーティファクト～

設定集その3　～アーティファクト～

ゆき

《アーティファクト名》 『絆の指輪』

白銀色のシンプルな指輪型のアーティファクト。裏側に刻まれた言葉が2種類あり、従者用と主用で異なる。従者用に関してはコピー品を生成できる。従者本人と、主と2つで1組である。

《能力》

・装着した2人は片方を『どんな距離』『どんな空間』からでも自らの傍に召喚できる。

詳しくは

？従者と主のどちらでも同じ力を行使できる。ただし従者同士の召喚は不可能。

？召喚範囲は召喚者の半径3m以内にほぼノンタイムで召喚。別に座標を詳しく指定しなくてもオートで設定される。

？文字通り、例えば世界の裏側でも、結界などがあって空間的に隔離されていても召喚が可能。ただし直接的な拘束魔法などによる捕縛時は除く。

？またお互いの座標を交換することも可能。

？コピーの指輪は他の従者が主に呼び出される場合の効果のみで、逆や入れ替わりは不可能。

本来はダンジョン探索での帰還用や、盾や身代わりとしての緊急護衛用として最優の逸品。

刹那

《アーティファクト名》 『小狐丸』

天下五剣『三日月宗近』をはじめ、源氏の『今剣』『薄緑』などの日本で最も有名な刀匠の1人である三条宗近の作と『うたわれている』伝説の刀。伝承には様々な説があるが、狐に相槌を打ってもらい制作した説が有力。他にも菅原道真の祟りで京都に多数の稲妻が降ったときに、白狐が現れて授けた刀という説など謎が多い。

《能力》

- ・ 気を込めることで雷を発生させる。
- ・ 子狐型の狐火を行使できる。

能力そのものよりも稲荷大明神の加護を受けた刀であるということが重要。神鳴流の破邪の技、特に雷（神鳴り）を用いるものと抜群の相性。狐火も刹那本人の霊格が高いことで種族は違えど相性が良いものとなっている。

設定集その3 ーアーティファクトー（後書き）

ゆきは『いつでも一緒』、刹那は伝承にあやかり『狐との共同』をイメージして設定しました。2つともかなり応用的な使い方があるのですが、それは戦闘編で…

第10話 サンライトハート（前書き）

これまでの話の3倍越えの長さだったので半分に切って投稿。地の文ばかりです。次回は和葉の演説でほとんどですが。話自体はできているので、上手いこと繋げたら早くUPします。

第10話 サンライトハート

第10話 サンライトハート

「「「若様お帰りなさいませ！」「」」

京都市街の隅にある3階建てのオフィスビル、有限会社「サンライトハート」。嵐華はその屋上に2人を降ろすと同時に消え去っていった。

屋上には100名ほどの人間が出迎えた。老若男女、上は90近くから下は小学校低学年と思しき者まで、スーツ姿の者もいれば巫女装束、学生服、袴姿など、容姿もバラバラであった。しばらく西に帰っていなかった刹那は改めて和葉の人望に感嘆する。

「ああ、ただいま！ 飯綱をよこすばかりで今まで留守を預けてすまなかった。社員以外の主なメンバーも集まっているんだろ？」
「ええ会議室の方も準備は整っております。改革派としてお願いします若様！」

「ああ。超ヘビー級のサプライズを用意しているから楽しみにしておけよ！！」

巫女装束のショートカットの女性に、意気揚々と笑顔で答える和葉。

その様子を見て、先ほどまでの胸の高鳴りとは違う、何か心苦しいものを感じた刹那。“今はまだ”その冷たい感情に気付くことも、それが表に出ることはなかった。

「和葉はん、刹那はんも。おかえりやす」 2人ともえらい仲良うなつたみたいで何よりやわ」

灰色のスーツ姿で人妻の色気を全開にした鶴子が2人に声をかける。その鶴子が軽く人さし指を口元に持って行ったのを見て、刹那は慌ててハンカチで和葉の口元を拭う。

「ん!!」

良く見なければわからないほどであつたが、先ほどの“跡”がうつすらと残つていたのを指摘されたのだ。やべえ…今ので確実に何人かにバレたな、と和葉は思ったが、話を逸らすため話題を切り替える。

「鶴子姉、で最近の会社の調子はどう？」

「“表”の方は、先月も前年度比で利益率が約27%増みたいどすえ。来月にも3店舗出店予定やし、4月初旬には京都駅にも出すえ」
「そつか、お義兄さんの会社とも上手く提携できたし、そっちは鶴子姉に任せて正解だつたよ」

「ふふっ」 表はウチにいくらでも任せとき。ウチの旦那様もおかげで昇進できた言うて感謝しとるんよ」

「で、本山よりこつちに先に収集かけたちゅうことは、またとんでもないこと考えとるんやろ？ 期待しとるえ“裏”の社長はん、いや次期当主はん？ こつからが腕の見せどころやで？」

鶴子はホクホクの笑顔を向けるが、凜とした表情にすぐ切り替える。応じるように精悍な空気を放つ和葉。

「ああ。社長としても、次期当主としても、あちらでの学者としても、プランが山ほどあるからね。西の改革だけじゃない。2つの世界の在り方そのものを^{ディーブ・ダイバー}変えてみせる——世界の真理に辿りついた者。この『深淵の探究者』の名にかけて」

有限会社「サンライトハート」

西の改革派としてまず唱えた「人材の確保」と「人脈の形成」。それらは魔法学校やその後の研究によって次第に基盤は確保されていた。そして次に狙ったのが「経済力」と「民衆からの支持」である。権力に抵抗したり権力を得るためには言わずもがな金がある。また経済面での有力者とながることでの新たな人脈を形成するのも目的であった。

そこで発足したのがサンライトハートだ。もとは陰陽術を学校で教えるために和葉とゆきが制作し、教導用などに販売していたのが始まりであった。他には、秘匿意識の薄い新世界出身者が旧世界に出向く際に、認識阻害や人払いの符は供給がほとんどなかったため大変重宝された。

また新世界の人間はほとんどが魔力を使えるものの、正規の魔法教育を受けた魔法使いと呼べる人間は少ない。したがって魔力を込めるだけでよいアイテムなどは元から需要が高かったのだ。

そしてそれに気付いた和葉は改革派の符術師たち呼びかけ、符をはじめとするマジックアイテム販売会社サンライトハートを立ち上げた。建前上は関西呪術協会の組織ではなく、和葉個人が運営しているということになっている魔法世界で主に活動する会社だ。発足から3年でこれまでの西の収入の4割を超える利益を生み出すようになった。

表でも風水アイテムやアクセサリ、雑貨ショップとして近畿圏でも出店し、百貨店のテナントなどとしてなどもそれなりに出せるほどに成長し、裏のマネーに頼らない財政基盤もできていた。ちなみに表での社長は、結婚して剣士引退後の鶴子が仕切っており、美人社長として時の人となっている。

これまで改革派でなかった人間にとっても金の魅力は大きく、西の中の勢力図も2割に満たなかった改革派は3割を占めるまでになった。ちなみに穏健派3割、強硬派1割、中立（保守）派が3割と睨み合いの勢力図であったが、人脈と財力面に関しては改革派が大きくリードすることになった。

そして和葉は「大衆のための術具を販売する」という方針を示し、主に民間人向けの護身用の護符や、安産や健康祈願のお守り、冒険者ギルド専売の転移符、魔法学校における教導用の基本的な各種の符、和葉が研究のついでに制作した農具をはじめとする発明品の販売などを主とし、攻撃性の高い符の販売や、軍などの機関への販売を禁止した。改革派以外の符術者たちの一部は元からそういう販路も持っていたが細々としたものであり、サンライトハートでは理念である「人々の生活を脅かすものは販売しない」ということを徹底した。この社名もそんな全てのひとが笑顔でいられるようにと、平和への願いを込めて名付けたものだ（もちろん某熱血アニメの槍の

名から来たりする)。

実際強盗や魔物からの被害件数や傷害レベルは目に見えて減少し、「犯罪や紛争の助長を避け、市民の安全を守り快適にする」という理念は確実に市民に受け入れられていた。また軍への販売の禁止は軍事力の強化を防ぐとともに、軍のように大口の顧客であるほど契約絡みでの経済的圧力をかけられたときの対応は難しい。リターンよりもリスクをあらかじめ避けておいたのだが、予想以上のペースで店舗が浸透して行ったため、単純な金銭目的としては軍と絡まなくても十分でな効果を挙げていた。

販売面で支えとなったのは魔法世界の住民たちである。旅の途中で回った際に出会った、戦災後の自立支援という形で救った人々からは、信仰とも言えるほどの絶大な信頼を受けていたこともあり、サンライトハートの販路拡大や商談担当として力を貸すものが多く現れた。同時に紛争などで職を失った人々の雇用なども積極的に行った。改革派の人間はほとんど製造側にとられるため、実に会社の8割の人間はそういった人々や研究などで関わった人々である。

和葉自身は救えなかった者が多く、後悔していると言っているが、紛争の調停や民間人の保護、戦災復興を通じた活動や、サンライトハートの社長として、先を見据えた政治的や経済的な手腕は、もはやサムライマスターの息子というネームバリューや偏見によらない正当な評価を得ていた。

名声が上がるにつれて本業である研究内容の方の評価もされるようになってきたものの、理解は全くされておらず、一方で副業のサンライトハートの社長としての知名度と貢献度は、年末に本国での有力な政治経済雑誌にて「今年最も新世界に貢献した10人」という特集の中に帝国のテオドラ第三皇女や連合のクルト総督などと並

び表彰されるほどであった。

和葉は度々インタビューで否定したものの、「偉大な魔法使い」の有力候補としての声もよく上がっており、「小さき知恵者^{リトルワイズ}」として知られるようになっていた。他に和葉が名乗った、『深淵の探究者^{ディープダ}』とは和葉の世界の本質に迫る研究を称賛しての言葉である。『小さい』は子供扱いされている気がするので、二つ名を言うならそっちにしてくれと、和葉は改革派にはそう呼ばせていた。

また和葉や会社の知名度から陰陽術にも興味を持つ人口が増えた。魔法学校で臨時に行っている改革派の有志による指導の基礎呪術コースは人気で受講者が殺到し、いよいよ教育機関の立ち上げが現実味を帯びてきた。特に和葉が考えていたのは孤児院を兼ねた教育機関であり、忠実な人材の確保と社会的貢献という周りからの支持と評価の両方を狙えると踏んでいた。基本的な術具の作成は少しずつ本国の弟子や職人に伝えていったため、今のところ供給が間に合っているものの、足りないのは教導側の人間である。人材の調整や勧誘も西に戻った理由の一つだったりする。

その辺りなど、向こう側での活動方針や、会社の展開、西のこれからこと、東との対応などについて、東の面々や西の長と顔を合わせる前に会議を招集したのだった。

先ほど屋上に集まっていた総勢100名が長い机を囲むように座っている。

「こらッ！小太郎ちゃんといいや！」

小太りの中年の男性に、小太郎と呼ばれた学ランに犬耳を出した10歳ぐらいの少年が明らかに部屋から出て行きたそうな態度に注意される。普段は一般人の社員もいるオフィスだが、特定のエリアから先は強力な人払いをかけているため、人外と一目でわかる恰好を少年は堂々と晒していた。

和葉が特に狙ったことではなかったのだが良い影響として、何名か改革派から本国へ交代制で定期的に派遣することで、これまで東の人間しか知らなかった術師たちの西洋魔術師や亜人への偏見は確実に薄まっていった。それは西においてもさらに影響し、半妖でありながら式として保護を受けた刹那の存在もあり、身寄りのない半妖の捨て子を保護するなどの今までは絶対にありえなかった動きが、和葉やゆきの言もなく改革派の中で起こっていた。小太郎もそうやって保護されたうちの一人だ。

実際は後に起こりうる有事に備えて、人間では持ちえない身体能力や特殊能力による戦力補充も兼ねての改革派の上層部の思惑もあったりする。しかし救われた当人たちにとっては、恩返しの場合を与えられるのだと、願ってもいない話であり、小太郎をはじめとする子供たちは修行に励んでいた。

「院長。この兄ちゃんがあのか『深淵の探究者』ってホンマなんか？別に雰囲気も気の感じも全然パツとせえへんのやけど」

少年は和葉に対して半信半疑の目を向ける。わざわざ休みの日に、唐突に召集がかけられたのだ。あまり会議などじつとするのが嫌いな少年は不機嫌さを露骨に表わす。自分より弱そうな人間がこのトップだということに不満なようだ。

少年の挑発気味な気の波長と殺気を察した和葉は、絶対的な力の差を見せつけるために、しかしあくまでも平和的に力行使する。

『おすわり！！』

「な？っ！！！」

某アニメにおいて犬の半妖に対して絶対の言霊。あきらかに投げやりな言霊にも関わらず、椅子に縛りつけられる圧倒的な強制力を感じた少年は、実力を思い知る。が「俺は犬やない狼や！」と目が訴えていた。和葉がイメージしなかったためアニメのように地面にめり込んだり、犬座りの姿勢を取られるよりマシだったことを少年は知らない。

和葉は長机を並べた会議室の一番前の席中央に和葉、右隣に表での社長である鶴子が、左隣に刹那が座っている。刹那は後ろで控えていると主張したものの、小太郎と同じく言霊で先ほど無理やり座らせられた。

「さて、はじめっか」

席から立ち上がると、集まった一同を見渡して、和葉は自らの思いと計画について語り始める。

第10話 サンライトハート（後書き）

いつも2〜3000文字程度の短文だったのが、8000文字越えて収集がなくなっております。できれば続きは今日中に上げたいです。

第11話 深淵の探究者と革命の胎動（前書き）

詰め込むだけ詰め込みました。おかげでつなぎの構成や描写が甘過ぎて酷いです。拙い文章ですがよろしく願います。ゆきに残念がられる和葉の言葉選びのセンスのなさは筆者譲りなようです。我が息子よ頑張れ。

第11話 深淵の探究者と革命の胎動

第11話 深淵の探究者と革命の胎動

緊急招集に集まってくれた改革派100名を前に和葉は語り始める。

「まずここにいるみんなに言いたいことがある。これまでの9年間に帰るもせず、好き勝手やらせてくれたこと、こんなガキの俺についてきてくれたこと、本当に感謝している」

そう言って頭を軽く下げる。

「それから今日はこれまで俺が見てきたこと、これから西をどうしたいのか、そのために改革派や会社をどう動かしていくのかについて話したいことがたくさんある」

「これまで俺があちらで学んだこととかについてだけど、みんなが俺のことを認めてくれたおかげで、ゆき姉から習った陰陽術や妖術以外に、西洋魔術もそれなりに修めることができた。それに冷静に外から西のことや周りの情勢も見ることができたのは大きな収穫だったと思う」

「学問の話はまた後で出てくるから置いて、俺があちらで何を見てきたかということだけ。……5年前からかな。父さんがどんなものを見てきたかを知りたいと思って研究のついでに紛争地域も軽い気持ちで最初は回ってみたんだ。20年前の戦争がどんなものだったのかも実感がなかったからね」

「本やテレビの中の話しか知らなかった俺は……いや、その一部の都合のいい部分しか見ないようにしてた俺は、戦争で困っている人たちを助けたら、すごく感謝されてカッコいいんじゃないのか？
っていう、最低な下心とか甘さとかあつたんだよな」

自嘲するその顔は後悔が滲んだ様な酷い顔色をしていた。

「まあたまたま上手くいって、漫画のヒーローみたいに都合のいいタイミングで介入できてハッピーENDみたいなことも確かにあったよ？」

「でもほとんどは地獄ってしか言いようがない世界だった」

せつかく強い言霊を扱えるのに言葉を選ぶセンスがないと、散々ゆきに言われている和葉には、語彙が少なくそれ以外の言葉が思いつかない。

「この目で死んで行くところを見て」

「この鼻で死体が腐る匂いも焼ける匂いも嗅いで」

「この耳でたくさんの悲鳴を嘆きを聞いて」

「それに、この”魂”でたくさんの最期を感じてきた」

自らの胸に左手をあてる。和葉の“事情”について、薄々気付いている刹那や鶴子をはじめとした数名の者たちは、発された言葉の意味の深さを察する。

たくさんの『おもい』を受け取った中から、ある亜人の1人の女の子のことを思い出す。

「すごく怖かった」

目の前で両親の上半身が消え、内臓の飛び出した下半身が転がってきた恐怖――

「すごく痛かったし」

『死ぬほど』に体中が焼かれた苦痛――

「すごく悲しかった」

その左隣で炭と化した幼い妹の無残な姿――

「すごく助けて欲しかったし」

『偉大なる魔法使い』が助けてくれるかもしれないという僅かな希望を一瞬だけ抱いたりもした――

「何より、すごく生きたかった」

死にたくない。声を発することができなくなっても、それだけを何度も心の中で何度も繰り返しそして息絶えた

そんな最期の叫びを、戦場を巡るたび、何度も何度も聞き続けた。ゆきが精神状態をコントロールしてくれなければ確実に飲み込まれ廃人と化していただろう日々。

「20年前はもつと悲劇が溢れかえっていて、親父や他の徴兵された人たちはもつとひどいものを見てきたんだってのは痛感したよ」

「——それに俺も人を散々殺してきた。犯した罪を数えるのも馬鹿らしいほどにたくさん殺してきた」

「敵味方を勝手に区別して敵を消したり、どちらかは助けられる他人の命に優先順位をつけることは当たり前をやってきた。そもそも俺はどこぞの狂った立派な英雄たちと違って、自分の命を“賭ける”ところまではできても、“捨てる”なんて選択肢は最初から選べない、ごく正常な思考の臆病者だしね」

「敵」を殺す分にはまだ罪の意識は少なくて済むけど、何の罪もない人々を見殺しにしたりするのは最低の気分だったよ。……いや、気分とかいう言葉で片づけてしまう時点で俺も感覚が鈍ったのかもな」

目の前の部下ではなく自らの中にいる”彼らに”語りかけるような、独白にも近い告白。

刹那は和葉の左手から血が流れているのを目にした。木乃香の護衛の他に麻帆良学園の警備やその他の依頼でそれなりの数の戦いをこなしてきた彼女にとっては、死の危険とは隣り合わせのことも多かった。しかし、本当の“死”というものを彼女は知らない。ましてや“戦争”や“虐殺”などとは無縁であった自分たちの世界と、彼の住んでいた世界との差を理解しようとすることすらおこがましいのではないのかと感じた。

小太郎をはじめ、普通の術者にとってもその言葉は理解できないものであり、だからこそ何か響くものがあつた。20年前に大戦に徴兵された者など戦争を理解している者は和葉に賛同する。

「実際の戦場に溢れているのは父さんたちみたいなのご都合主義の英雄譚や、戦友たちとの友情溢れる大戦記なんかじゃない。巻き込まれた当事者たち1人1人の小さな悲劇がその数万倍以上もあるってことを身を持って知ったよ。すごく当たり前だけど、戦争はいけないうってことも『死ぬほど』実感できた」

「そしてそんな戦争は『起こってしまったら』できることは、悲劇の数をせいぜい手の届く範囲において減らすところまでなんだ。英雄と呼ばれる人たちだってその範囲がただ他の人より広がっただけ

の話で、絶対に数え切れないほどの悲劇は回避できない」

「英雄なんてものが希望に見える世界は既に絶望に犯されたどうしようもない世界なんだよ」

「サンライトハートを立ち上げたのはね。どうかしたいと思ったんだ。戦争が少しでもなくなるように。戦争を止めたり、怪我を直しに回ったりするんじゃないかって、これからそんな悲劇を生みだす戦争自体が起こらないようにしたいと思っている」

「要するに——サンライトハートとしての一番の活動目的は“戦争の起こらない社会の流れを作ること”」

一番言いたいことを、何よりも改革派としてではなく、サンライトハートとして召集をかけた意味を、力強く和葉は告げる。黒ぶち眼鏡越しのその瞳には一点の迷いもない輝きが確かにあった。

「この計画の及ぶ範囲は裏の世界、しかも魔法世界の方においてだけだけど、こつちの世界のみんなも前みたいに徴兵されたりしないで済むだろう？ 間接的にでも。こちらの世界や表の方にも少なからず影響は出てくると思うしね。だから亡くなった先代たちに対する答えとしてこれを絶対に俺はやり遂げたい」

パチパチパチパチパチパチパチ……と和葉の演説に対して鳴りやまない拍手がわく。

「そういう答えなら大戦で戦死したウチの父上も喜んでくれるでしょう」

「なんちゅうスケールで考えとるんかのう、ウチの若は。強硬派の奴らに若の爪の垢を煎じて飲ませたいわい」

「魔法世界に留学したいと言ったときも、聡明やったが、天狐様の教育の賜物なんか、未来をしっかり考えとるっちゅう言えるんは俺らの若様だけなんちやうか？」

「おにいちゃんかつこええなあ……（ポツ？）」

「カズ君」

「長みたいに“英雄になる道を進む”のではなく、“英雄がいらない道を作る”か」

「なんかメツチャおもしろそうやん！ 兄ちゃんとか入ってホンマよかったわー！」

和葉の行おうとしている世界の变革。前回の大战に巻き込まれた被害者やその遺族として、誰にも恥じることのない答えに、会議室にいた誰もが感嘆し、思い思いに言葉を口にする。各派閥の中でも最も若い、若すぎるリーダーにも関わらず明確な指針と意思を見せたことに対する称賛する者、これから始まる大きな流れの中心に自分たちが関わっていくのだということに対する熱意と決意を語る者、和葉が西のことを忘れているのではないかと疑っていた己を恥じる者、どこまでも付いていくとの忠誠を誓う者、遺族のことを想いそのためにできることがあるとわかって涙する者など様々であった。

肯定的な言葉が次々と出てくるのを聞き、この部下たちが付いてきてくれてよかったと思う和葉。

「で実際どうやってなんかなあ？」

「さあ。でもこれから凄いことを言ってくれはるやる」

「そのために裏の世界でもっとも大きな力を握っているメガロメセンブリア、ヘラス、アリアドネーの3大勢力、どれも魔法世界の国だけど——それに次ぐ4番目の勢力を立ち上げる！」

勢力の拡大という手段の方向性に予想をつけていた者たちも当然だったが、それを遙かに上回る規模で行うという発言には誰しもが驚く。

「西ではなく、サンライトハートが主導して新勢力の立ち上げを考えている。主役は一般市民なんだ。軍みたいのを立ち上げるわけじゃない。物流や経済の流れ、世論の流れを味方につける」

「市民による政治の監視。これを今までの比にならないレベルまで引き上げていくつもりなんだ」

「要するに、商人ギルドや各種NGO、市民団体、宗教法人みたいなのがいっぱい集まったような、国家に対抗とまでとは言わなくても国家を揺さぶれる、世界規模の市民団体を作り上げる。たとえば日本の内閣でもみんなが政治に関心をもっている世の中になっついていて、何か変な法律作ろうとしたら経団連と医師会と農協・漁協、大手ゼネコンなんか全部協力して一気に圧力かけたら身動きとれ

ないだろう?」

「でも単純に今ある団体を統合していだけじゃ、利害関係ばかりが優先してどこよりも腐った組織になるのは目に見えている。それにその過程で確実にメガロあたりから潰されるしね。サンライトハートじゃなくて西の名前を出して動くのも確実に潰されるだろうね。前よりマシとはいえ穴だらけだし、俺が継承権の早期要求をしたとしても、立ちなおし自体はかなり時間が掛かる」

「だからあくまでも現時点ではサンライトハートの理念に賛同してくれた人たちを引き込む形をとる。すでに世界中に拠点も賛同者・協力者がいるから、世界全てが敵にならない限り、直接的に潰されることはまずないからね。地道で時間のかかる作業だけど、頼れるあては結構あるんだ。名前はここでは出せないけれど、俺の計画に理解を示してくれた人たちの中には各国の元老院議員や王族、父さんレベルの英雄と呼ばれる人たちや、ギルドマスターみたいな有力者から、市議会議員や村長・族長レベルまでそれなりにネットワークはできてきている。また後日資料を転送するよ」

「俺の個人的な人脈もあるけれど、とにかく数と細かい範囲でのカバー力はサンライトハートを運営してきた信頼やノウハウが確実に生きている。サンライトハートがこれからやることはより多くの理解者、賛同者を味方につけること。今までの店舗運営の延長線上でいい。実際あちらでの販売はこの前研修によこした環や暦みたいなあちらのメンバーが主だし、あちら側での色んな団体や有力者との接触は俺が主に今までしてきて、今現在は信頼できる子たちに任せられている。だからこちらのメンバーにやってもらいたいのは、まず表の会社の影響力を高めること。要するに普通に会社を運営してもうけまくってくれていい。それからあちらに派遣するメンバ

「はあちらの世界のことができるだけ知ってきてほしい。そしてサンライトハートに直接関わっていないメンバーもこの中にはいないけど、そういう考えを持って行動しているのをみんなにこれから自覚してほしいと思ったんだ」

「そういうことで頑張って会社を運営してくれってことで、サンライトハートに関する話題は以上だ」

ばん！と手を叩いて話を切る。

「じゃ次の話題な。端的に言うとな俺の研究を手伝ってくれる人員が欲しい。私的な頼みごとに聞こえるけれど、実際緊急度は一番だ」

「ここから話すことは言霊で絶対他言しないようにしてもらっし、具体的な内容は機密だけれど——あっちの世界では近いうちにもものすごい環境問題が起きそうなんだ。わかりやすく言うと10年後に地球の酸素が全部なくなるかもしれないとかいうレベルの大問題が起きている」

あまりにも話題が変わり過ぎて、かつ全く光景が思い浮かばない話についていけない面々を無視して話を続ける。

「今誰かにそのことを話したって規模がトンデモなさ過ぎて、全く信じてもらえないし、信じられたら大パニックになってしまう。本当のことをいうと20年前の大戦の本当の理由はその環境問題だって世界でもほんの一握りの人間たちは知ってるんだ。こちらの世界でも戦争が起きる理由は大抵、宗教か領土か資源をめぐってのものだろう?」

「ぶっちゃけていうなら、今のあちらの世界は資源が枯渇しているのにそれに気付いていない人間ばかりで、いつか20年前みたいな大戦どころか、表を巻き込んだ争いにまで発展するかもしれない。気付いている人間は仲間を殺してでも、自分たちだけ助かるうとか碌でもないこと考えてやがる。要するにさっきの戦争を起こさせないって計画の最大の障害なんだ」

先ほどまであれほど真面目に語っていた人間の言葉が今は痛過ぎる妄想のような、全く笑えない冗談を酔狂で口にして出したなどとは誰も思っていない。

「それにその分野において世界で一番先端を走っているのが俺だから、学者として何とかしたいし、そもそも俺以外の人間に根本的な解決が導けるとは思っていない。だから今俺は国や組織を越えて研究チームを立ち上げたんだ。俺と同じ分野の偉い学者はほぼ全員組み入れたし、他の分野からも最前線の人間たちを導入している。おかげで解決方法の案自体は数力月前に2つも導けた」

「あとはその実証と実用化をできるだけ早く行いたい。今回麻帆

良に向かっているのも世界中の霊地、その中でも世界樹の魔力の調査と麻帆良に眠る古の禁書の閲覧が目的だ。情報が足りないしな」

「それでこのプロジェクトにおけるスポンサーたちは危機感がわかってるだけに、羽振りが良くて運営資金何かには事欠かないんだけど、人材がまだ足りない。特に魂の概念や氣を理解している人間が足りない。この辺はどうしても東洋呪術の方が西洋魔術より優れている分野だから、術者の中でも、陽氣を扱える者、高位の召喚師、霊媒体質者、五行全般に優れた者などが特に欲しい。西洋魔術師には頼めない仕事だ。報酬ならいくらでも弾む」

「サンライトハートの社長である前に、西の次期当主である前に、俺は学者として、全てを賭けてでもこれから起きる悲劇を回避したい。——それと父さんもきつとこの問題については多分知っているから、穏健派にもこれから頼み込みに行く予定だ」

「まだあちらの世界や西洋魔術師にいい思いを本音では抱いていない人間も多いことは分かっている。こちらに残せるウチの派閥の戦力が減ることにもなるけど、だけど、どうか頼む！！！」

詳しくはわからなくとも、前の大戦どころか、表ごと変える可能性があるほどの戦争の火種を絶対にどうにかしなければならいこと。それを西洋魔術師にはできなくて、関西の術師の技術が必要とされていること。和葉と隣の刹那が未だに顔を上げずに頭を下げ続けていること。改革派といえど少なからず抱いていた西洋魔術師への嫌悪感や、あちらの世界での生活の不安感といった、自分のちっ

ばけな感情などよりも、この大義を優先する理由はいくらでもあった。

「召喚術においては私は西のだけれよりも自信があります。ぜひこの身粋なようにお使いください!!」

「世界を救った暁には研究所は関西の支部で決まりやな!やってみせたるでえ」

「俺らが世界を救えるなんかホンマ最高にカッコええやんか!歴史に俺らのことを刻もうやないかい!!」

「高千穂で大百足退治に出とるウチの息子も使ってやってください。あの子は咸卦法も少しは扱えますえ」

「こりゃわしもまた引退の時期が延びたかのう?」

「面を上げい和坊。この御門貞永、世界を救うその技を必ずや完成させようぞ!」

ここにただで18名の人間が名乗りを上げた。その全員を使うわけではないが、たった2時間ほどの緊急召集に間に合わなかつ

たメンバーや、遠征に出ているメンバーの推薦も多数あり、予定人数の3倍の人数は集まる見込みとなった。

「みんなありがとう。来月頭までにはメンバーを選定して派遣する手続きを完了させるよ」

「次の話に行こうか。ラストは改革派としての動き方と東への対応だな」

「西の改革派としては……正直悪い。さっきの件で俺の頭もウチの人員も一杯一杯だろう？ あんまり良い策はないかな。ただ先ほどの計画が上手くいったら、俺の発言力は今の世界のどの権力よりも強くなれる。だから研究の方を優先させてくれ。俺の継承タイミングとかは親父と話し合ってくる。それから俺が麻帆良に行くことでゆきと刹那の3人がかりで木乃香の護衛ができるから強硬派の言う『安全じゃないから取り返す』とかいうのは通じないし、力押しで来られても負けるつもりは毛頭ない。下手に俺たちに手を出したら強硬派を完全に肅清する機会になるし、聞いたところ一般人にも危害を加えそうなのがあったらしいからな、その辺の監視も含めて隙があればつけるから、木乃香の周りとはとりあえず大丈夫だ」

木乃香もそのうち確実に魔法の存在を知ることになるだろうことは分かっていたが、ただ娘の現在の平穏を望む詠春とは違い、せめ

てその時が来たときに降りかかる障害を和葉とゆきは取り除こうと
していた。

「だからこっちに残ったメンバーは強硬派が下手なことをしないか
監視を強めに頼む。特に実力者が研究で抜けてしまうから、実行部
隊はできるだけ手は出さずにプレッシャーをかけておいてくれ。ア
ホがちよっかい出すたびにおれの肩身もせまくなるしな」

その言葉を聞き、小太郎をはじめとした戦闘にしか能がない実行
部隊の面々は、やっと頭を使わなくていい仕事が来たとテンション
があがる。

「中立派は引き込みそうなメンバーは引き抜いて補強しよう。穏健
派に関してもこっちのみんなは今まで通り普通に接してくれていい
けれど、父さんが勝手に戦争責任をうやむやにしたまま下手に東と
仲良くされたら、責任を取らせることができなくて困る。だから東
の方に対して話し合いとは行かなくても、きちんとこちらの考えて
いることを伝えて、公式の場での謝罪がないと許さない程度のこと
は言うておく。あちらの態度次第では、メガロメセンブリア元老院
ごと一緒に賠償責任やら、国際弾劾裁判やらに持つてく『かもしれ
ない』し、それなりにあちらでは世論を動かせる程度の力は行使で
きるとでも脅したりでもしようかと思ってる。関係悪化はさせるつ
もりもないから駆け引きは難しいけれど、東に俺らを印象付けたり
するのは対外的に有利だし、強硬派のアホどもについて先に謝つと
けば、あちらも謝るとまでは行かなくても挑発的な言動も抑えられ
るだろう。愚策だけどうにかやるさ」

「まあ、おおざっぱにサンライトハートとしての指針、俺の研究補

助の人員の確保、他の派閥との対応、東からの謝罪の要求と牽制に
関してはこんな感じだ。ちよつと15分休憩してからまた細かいと
ころは詰めていこう！そんなじゃ一旦解散！！」

怒涛の勢いの演説を無理やり終わらせた和葉。こんなふうに話すの
は、やっぱり向いてないやと実感する。トイレに行こうと席を離れ
ようとすると、

「私共は若様の考えに全て賛同しております。しかし、あまりにも
若様は気負い過ぎだと感じておるのは私だけではないでございまし
よう」

屋上で声をかけた巫女姿の女性が和葉の身を案じる。

「和坊、お主はあくまでも西の次期当主。世界全てを若様1人で背
負う義務はないんじゃないよ」

「和葉はん。あんたは頭は人一倍回るし、気いも効く。けどなあ、
人間1人にできることは限られとる。せやからウチらをもつと頼り
い。ウチらにできることは全部放り投げてくれて構へん。今日ウチ
らに協力依頼に来てくれたんはホンマにみんな嬉しかったんよ。だ
けどもつと和葉はんにしかなんことを見極めて、もつと絞り込ん
でやってくれてええんやで？これだけのことやってきたなんてとて
も正気やないとみんな思うたはずや。ウチらはみんな、あんたが思
つてるよりずっと信頼しとるし心配しとる。和葉はん、あんたは1
人やないってことを心しとき？」

鶴子が皆の総意を言葉にする。

「和葉兄ちゃん、俺アホやから難しいのは苦手やねんけど、妨害とか荒事も起きるんやろ？　そんなときは俺らに安心して任せとき！　絶対うまくやったるわ！」

小太郎も胸を叩き笑顔で告げる。戦闘が本分という者はそれに同意して首を縦に振る。

「このちゃんとカズ君、2人のことは絶対私が守ります！　ですから信じる道を行って下さい。私はどこまでもこれからはお供します
！！」

夕凧と仮契約カードを手に取り再び誓いを立てる。式としての契約のときよりも、従者としての仮契約のときよりも、心から主を支えたいと願う彼女。彼の苦悩や理想をほんの一部垣間見ただけであっても、これから襲いかかる試練や苦難を共に分かち和らげてやりたいと思ったのだ。

そんな暑苦しいような、部下からの激励や称賛、誓いの言葉で休憩時間もずつと埋め尽くされていた。

そうして再び会議は再開し細かい打ち合わせに入った後、本山で詠春に会い話を付けてきた。軽い歓迎の宴が催された後、2人は東の面々が待つ麻帆良へと戻る。

第11話 深淵の探究者と革命の胎動（後書き）

> i 1 9 0 1 8 — 2 5 2 5 <

水彩適當のラフですがせっちゃん書いてみました。当方、本業絵師です。

で”みてみん”に登録したらなぜか一晩もたたずにランクインだとお！！？恐るべしせっちゃんネームバリユ！。

本来はブラシ塗り派なんです。でも時間ないなら小説をか（ry

第12話 世界樹前広場にて（前書き）

やたら長くなりました。後半はずっと和葉とゆきのターンです。
余計なことを言わせられないので、セリフを練るのがしんどい政治
編。日常編はすらすら出るのに。

第12話 世界樹前広場にて

第12話 世界樹前広場にて

午後23時。

世界樹前広場には関東魔法協会のメンバーの一部である、魔法先生および魔法生徒が集合していた。

現れたのは白衣姿の和葉1人。和葉はそのメンバー30数名を見渡した中に神鳴流剣士であり、西から東の西洋魔術士の元へと嫁いできた（しかし離婚した）葛葉刀子を見つけると軽く胸元で手を振ってみせ、刀子はそれに気付くと深々と頭を下げる。ちなみに刀子は詠春直属の穏健派である。

「あれが『深淵の探究者』か。うーん…」

若い細めの教員、瀬流彦は和葉の姿を見て口を開く。強い魔力を纏っているわけでも特別なオーラを発している風でもない彼が、英雄の息子にして、本国の天才科学者であるとは誰も思わないだろうと感じていた。

「そう言えば刹那君や噂の天狐様の姿が見えないね。彼一人かな？」

「そうですね」

肌の白い太めの教員、式集院は疑問を呈し、瀬流彦も頷く。

「あの式集院先生。その天狐とはどのような存在なのですか？ 東洋の魔物には詳しくないものでして」

褐色のシスター服を着た女性、シスター シャークティは自らの知識のなさになんとも恥じらいを見せながら質問する。

「シスター。魔物なんてとんでもないですよ！ 天狐というのは神社に仕えるような善良な狐の中でも最高位の霊格の存在で、神に近い存在、あるいは神として崇められるほどですって、あつ。その……シスターの信仰する神とはもちろん違います」

といって最後はしどろもどろになる式集院にシスターは笑顔で返す。

「いえ気にしないでください。そのお方が崇高な存在でありことは理解でき、とても勉強になりました。清き存在で在り続けたそのお方とは是非お話してみたいものですね。信仰する神は違えど、神に仕えるそのお方には学ぶべきものが多いかもしれません」

周りが和葉の噂をする中、和葉は学園長の方を向きなおすと、口を開く。

「学園長ならびに麻帆良の皆様。私、本日より麻帆良に参りました『魔力基礎理論開発研究所、所長の近衛和葉』と申します。世界樹の魔力についての調査と図書館島での禁書の文献調査をこれから行うこととなります。皆さまにはご協力を依頼することもあることか

と思いますので、どうぞよろしくお願い致します」

そう言つて頭を下げると、学園長の元に歩み寄り世界樹の調査を認める書状を渡す。学園長はその後見人の名前を見て予想外のメンバーに眉を上げる。アリアドネー総長セラスの名前は予想していたが、ヘラスのテオドラ第3皇女、そして何よりも

（メガロメセンブリア元老院議員オスティア総督のクルト・ゲートルか。和葉に付く目的は…… možやのう）

西を大戦に引き込んだ東の後ろ盾であるメガロメセンブリアを快く思っていないことは、もちろん学園長は知っている。故にこの人物と和葉の関係は腑に落ちないものがあつた。

「良く来たの和葉。こちらこそ世話になるじやろつて。確かに許可証は受け取ったぞい。それに先ほどは土産をわざわざすまぬのう」

「ほう。それはお気に召して何よりです。次回も機会があれば是非とも持参しましょう」

「いや、それは勘弁してくれ、して下さい。いやお願いじゃ！」

学園長が何かを思い出して壊れた。3段活用まで飛び出すのも無理はない。超熟女の裏モノ雑誌、MMオーバーセプンティー（。70歳×17歳）を読んで生き延びることができるのは超の付くド変態の中の一握りか、和葉のように精神攻撃に対して免疫の高い者、学園長やジャック・ラカンのようにゴキブリ並の生命力を持つ者だけである。和葉でさえ3日かかったのを半日で復活したのだ。まだ

完治したわけではない。しかし孫の好意であると信じているため、言葉を続ける。

「熟れたものが確かに好みじゃが渋すぎたの、次はちと30年ばかり新しいものを頼むぞい！」

（4〜50代ねえ。俺の守備範囲じゃねえな。またあいつに頼むか。ていうか守備範囲外で生き延びているたあすげえな爺さん。俺はその孫だけど）

和葉は注文の意味を理解する。周りからすれば酒の話あたりのことだと思われていることだろう。

「ええ。またの機会には是非」

ハハハと和葉は笑い、ふおふおつふおつと学園長も笑う。2人はめったに幼少期も会うことがなかったが、ただの祖父と孫という関係においては、波長が合う良き関係であれただろう。互いにそのことは理解していた。しかし、2人の関係はそれぞれ組織を代表する人物である。これからのやり取りは気を引き締めねばならない。学園長が先に口を開き、先ほどまでの疑問を口にする。

「して和葉。何故主は1人かのう？ ゆき殿と刹那君はどうしておる？」

「ああ。それなら」

そうわざとらしく思い出したように言うと、和葉の両隣に巫女装束のゆきと、ノースリーブの袴のような烏族の戦闘服を纏った刹那の姿が現れる。指を鳴らしたり、詠昌などのアクションもなしに、し

かも召喚陣の発生すらなくノンタイムで現れたゆきと刹那の姿に一同は驚く。

それは西に旅立つ前にゆきが渡した指輪型アーティファクト『絆の指輪』の能力であった。

その能力は指輪をはめた『主』と『従者』が自らの傍にもう片方の相手を召喚できるというものである。それも『どれだけの距離』、『どのような空間』を越えてほぼ一瞬で呼び出せるというものであり、転送系魔法において破格とも呼べる逸品である。またもう1つの効果としてチェスにおけるキングとルークを入れ替えるキャスリングと同じ効果、すなわち主と従者の座標を入れ替える効果さえも有している。

まさに『主従が共にいる・互いを守る』ことに特化した、最高クラスの転送系アーティファクトであった。刹那のはめているコピー品には主に呼び出される方の効果しかないものの、距離・空間・時間的な制約がないので十分に強力である。和葉のように複数の従者を抱えている者にとっての相性は語るまでもない。

その『絆の指輪』をわざわざ使ってみせ、高等技術とされる転移魔法をこれだけのレベルで使いこなしているように見せつけ、和葉は相手に技量差を思い込ませる。もちろんあまりにも一瞬のことなので、その現象がアーティファクトの効果であることには感づいた者は魔眼を持つ彼女以外誰もいない。

この一瞬の出来事だけで、イニシアチブを握られたと学園長の右隣に立っていたタカミチ・T・高畑は感じる。全くもって上手いやり方だ。特に高圧的でもなく、さりげないやり方で会合前に見せつける辺り、あの自称虚弱体質のクルト以上だ。関西呪術協会に留まら

ず、魔法世界全体に大きな影響を与える『小さな知恵者』は伊達ではないと、直接の面識がなく、風評でしか判断材料のなかった和葉に対する認識を高畑は数段引き上げる。しかし、次に和葉が発したのは意外な言葉であった。

「それから麻帆良の皆さまには、我々関西呪術協会の強硬派の者たちが多大なご迷惑をおかけしていると、刹那から報告は聞いております。関西呪術協会と申しまして一枚岩ではなく、現在4つの派閥に分かれております。我が父、現在の長は穏健派と呼ばれる東と友好を結ぼうとしている派閥のトップであり、私は改革派と呼ばれる体制の立て直しをまず主張する派閥を治めている者であります。ですので、現在式神などを用いて麻帆良に侵入しようとしています強硬派の意思と、長および私の意思は異なるものであることをまず誤解なきようお伝えしなければなりません」

刀子や刹那から以前話を聞いていた者たちは知っていたが、西全体の意思であると考えていた者たちも多かった。

「強硬派の人数自体は西の1割程度まで減り、派閥としての勢力はかなり衰えているのですが、逆に私怨の強い者やただ力を誇示したいだけの者が個人個人勝手に活動しているのが現状です。しかし、我々が強硬派の者たちを抑えきれず皆さまにご迷惑をおかけしているのも事実であります。ですので、改革派の代表として“未だ強硬派を抑えつけきれない不甲斐なさに関して”お詫び申し上げる次第であります」

そう言うと和葉は深々と……ではないが確かに頭を下げた。さりげなく力を誇示した後に、逆に下手に出て謝罪を述べるとは誰も予想していなかった。西との確執に関してはナイーブな問題であり、下

手にこちらから話題にしてしまうと感情的な者たちが失言をする可能性が高かった。そこを理解した上でのことなのかと高畑は勘繰る。

しかも西の代表として“迷惑をかけたこと”に関してではなく、あくまでも改革派として“まとめきれなかったことで迷惑につながった”と謝ったのだ。本来なら統率力という点において謝ることは、長という立場でもない和葉には必要性などない。和葉の派閥に対する印象を上げるためなのか、暗に支持を訴えているのかは判断がつかなかった。とにかく喰えない人物だ。真意が読めない。それも学園長以上に。そう高畑は認識レベルを最大まで引き上げる。

「確かに奴らに面倒は起こされておるが、少なくともそれは主に責任はあるまいて」

「いえ、実際こちらの組織が機能していないからでありまして、恥ずかしい次第です。しかし、私とゆきが麻帆良にいれば木乃香の周りも護衛の質は十分です。強硬派の妹を取り戻すという大義名分の一つは成り立たず、また私の周りで騒ぎを起こせば肅清が起こることぐらい流石に奴らも理解しております」

と的確に返答してきた学園長に対して和葉は返す。

「それで本題に移りたいのじゃが、ここに引き合わせたのは顔合わせの意味もあるがの、麻帆良は西の強硬派よりも、ここは霊地故、魔物や鬼の侵入に悩まされておる。して、毎晩シフト制で警戒や迎撃にあたっておるわけじゃ。しかし魔物自体は大した強さではないのじゃが中々人手不足での……」

「それで？」

「それで週に2、3日ほど警備のシフトに和葉とゆき殿も加わっ」

「「だが（じゃが）断る！！」」

和葉とゆきはシンクロして学園長の言葉を止める。よし、決まった！と2人はパスを繋いでいる思念波の中でハイタッチを交わす。

「むう。報酬は相場の1.5倍ほどじゃが足りぬか？ もう少し引き上げてもらいぞ？」

白く伸びた眉の下から右目を見開く学園長。

「お言葉ですが学園長。あの『サンライトハート』を運営している和葉さんに金額交渉は無意味ではないでしょうか」

背後に2体の仮面を付けた黒子の使い魔を従えた長い金髪の少女、高音・D・グッドマンが助言する。本国では億万長者ですからねえ、と左隣の小柄なツインテールの少女、佐倉 愛衣が小声で言い、あとでサインをもらっておこうと考える。

「そうじゃったのう。となると和葉は何が不満なのじゃ？」

「この状況全部だよ。狸じじい」

それまでの口調を崩す和葉。はじめは研究者として、次は西の改革派として、ここからは1人の魔法使いとして振舞うことに決めた。

「そもそもこれだけの世界樹の魔力がありながら、結界の強度が弱すぎるんじゃないのか？ あきらかにどの魔法都市や霊地よりも貧弱すぎるだろう。西の本山と比べたって土佐犬とチワワぐらいの差はあるぜ？ ないのと変わらねえよ」

学園長に対して猜疑の目を向け、否定の言葉を次々と突き出しつける。

「それにパツと見て解析してみたら、すっげえ無駄だらけの術式で拘束の呪いの類がかかってるよな？ それに世界樹の魔力とは別動力で、逆に高位の霊格にはかなりの弱体化が施されるみたいだけど、何それ？ わざわざ別動力使ってまで電子精霊使役しているくせに結界の強度あげようとか思っていないのか？ 一般人の安全よりも大事な、ヤバい秘密兵器でも隠してるってわけ？」

「妾は霊格を隠ぺいできる故、そのような小細工はあまり意味はないがのう」

ゆきはさらりと爆弾発言をして狐の耳と4本の尾を表す。別に何気なく自らの格の違いを知らしめるために言った言葉であった。

しかし、封印結界を誤魔化せるという事実の危険性の大きさに一同は驚きを隠せない。「『彼女』に知られては大変なことになる」と。

不自然なほどの同様の大きさに、和葉とゆきは疑問を感じる。神と崇められるレベルの者を、ただの人間ごときが封じれるという認識そのものが驕りであると和葉は考えている。そのため『ゆきには効かない』という事実が、その辺の認識の差によって驚かれているのか、封印したいよほどの何かがあって『効かない事例がある』という事実が不味いのが判別がつかなかった。ただこれは今後の交渉カードに使えるそうである、という認識を和葉とゆきの2人は持つことができた。あえてそこは言及せず次へ進める。

「まあいいや。んで、その貧弱な結界に群がってくるザコの相手に忙しいから警備に手を貸せだつて？ 馬鹿馬鹿しい。西とか東とかの話を持ち出すまでもない。警備の人間を不要な危険に晒したいの？ いざという時切り捨てやすいように？ まともな傭兵ならそれぐらいは疑うぜ。そんな胡散臭過ぎる雇い主は信頼できないね」

「西の人間としてではなく、傭兵的視点で忠告しておくけど、あんたらこの仕事引いた方がいいよ？ 一般人に被害が出て責任取らされるなり、東が乗っ取られるなり、誰かが死ぬなり、そのうち面倒事がおこるのは自明だぜ？」

周りの魔法教師や魔法生徒へ向かって警告する。かなり挑発的な発言内容であったが、もしも結界のことが事実なら和葉の言うことは

間違いなく正しい

「いやになつたら俺に声をかけてくれよ。それだけまともな判断ができる人材なら、西の俺の派閥は両手を上げて歓迎するし、本国ならどこの国の魔法騎士団にでも推薦状は書いてやれるよ？ 裏の世界そのものが嫌になつたら、表での仕事も用意できる。いつでもいいからね」

トドメに勧誘の一言を放つ。東の戦力を削れば上々、引き込めれば東の内情に詳しい人物が加わり、しかも戦力も補強できる。ここで即断してこちら側に動くほど軽い人物を入れるつもりは和葉には毛頭ない。しかし、今後の可能性として示しておくことは今後有益なはずだと和葉は考える。

「それに妙な思考誘導が結界に付与されておるようじゃの。妾や和葉の資質は感応性に特化しておるから決して誤魔化せぬぞ」

ゆきが再び爆弾発言をする。とても聞き逃していいことではない。それはどうということだと、多くの者たちが動揺を隠せない。ただし、学園長を始め何人かの人間の顔には、動揺と言っても疑念ではなく焦りの感情が見え隠れしていた。和葉とゆきはそれを見逃さない。頭の中に描く東の勢力図をまず2つに大別し、後者を要警戒リストに加える。

「今日1日麻帆良を回ったが、普通なら警察沙汰のケンカ騒ぎなどに巻き込まれたのは片手の指では足りぬよ。おまけに錬度が低いとはいえ気に目覚め、しかもそれを軽々と使ってしまうような思考の

者もおれば、見ておる側もTVの格闘技以上の戦いを日常風景として捉えておつたりと、とても通常の思考回路が備わつておると思えぬのう？ それに魔法は秘匿できておるとはいえ、明らかにオーバーテクノロジーのロボットに対して違和感を持ちえなかつたりと、その他の非日常的事象に関する認識があまりにも希薄じゃ」

「まさかまさかとは思いますが、この学園都市を超能力者やら、気の達人やら、魔法少女やスーパーロボットの溢れかえる素敵なフアンタジーワールドでも作ろうとしておられるのですか、お爺様？ それは素敵ですねえ」

「むう……」

気持ち悪いほどの丁寧口調で挑発的に語る。その先にのことを口にしてしまいそうだったがそれは止めた。祖父が自らの意思で行っているのか、いいように使われているのかわからない現段階では、チラつく黒幕の影のことは迂闊に口にはできない。

しかし黒幕であろう存在と、その目的の可能性のいくつか推察すると、流石の和葉にも我慢の限界があつた。嫌悪感ぐらいはぶつけても構わないだろうと、さらに感情のまま怒りと嘲笑を露わにして言葉にする。

「はつきり言つて胸糞悪過ぎんだよ。この結界の中にいるとハッピートリガーかバトルマニアにでも目覚めちまいそうだ！！ シンナ―漬けより可愛そうな頭に洗脳するための学園都市なんて最高だよな。先生方？」

気持ち悪い、と吐き捨てる和葉。

感情が優先し、何を言うこのガキ！と、侮辱されて憤慨し周りに抑えつけられている者ももちろんいた。しかし何割かの人間は猜疑の目を学園長に向ける。特に教師としての職を誇りに思っている者、本国育ちで正義の概念を植えつけられた者たちが主である。

「沈黙もまた答えだぜ？　爺さん？」

「『俺』は却下させてもらう。もちろんゆきと刹那もだ。そもそも刹那には木乃香の護衛を命じていたのに、シフトを強制させていたんだろう？　俺の刹那を許可なしに」

学園長と元は西の人間である刀子以外には、『俺の刹那』という発言の意味がよくわからず困惑する。一方で、

（キャキャー？　あの2人ってそういう関係だったんですね！）

（はしたないですよ愛衣。不健全です）

恋愛的な意味で捉える者もいた。当たらずとも遠からずではあるが。

「（俺のって…）カズ君（ポツ？）」

当の刹那は頬を赤く染め俯くが、

「まったく（ここで『ポツ？』は要らねえっての）。お前も報告ぐらいしておけ」

「でも断つたらカズ君の立場が悪くなるかもしれ…」

「言い訳すんなー!!」

刹那に軽くデコピンをしてお仕置きをする。

「ゴメンナサイ!」

「で、とにかく断らせてもらう。二言はない。結界を『まともなもの』に造り変える仕事なら、本国の研究者としていくらかでも手を貸すけどな？」

学園長に対して突っぱねるように手をひらひらと振った。何も言い返さない学園長。

狐対狸 2 回戦 結果は再び狐の圧勝で2勝0敗に終わった。

「それじゃ用はもうないだろ？　こっちは長旅で疲れてるんだ。帰るよ爺さん？」

そう言つて背を向ける和葉。軽く会釈した刹那と最後に全員に鋭い視線を送つたゆきの2人も続く。

麻帆良の面々はまるで狐に包まれたかのように何も言葉を発することができず、静まりかえっていた。

「待つてくれないかい？」

静寂を切り裂いたのは高畑。3人は振り返る。

「せっかく詠春さんの息子に会えたんだ。是非ここで一つ手合わせでも願えないかい？」

「いえ。それはまたの機会に。ここでもし私が倒れたら強硬派が調子づきそ…」

「紅き翼の高畑と言ったか？ お主がもし和葉に負かされたら、それこそ強硬派が調子に乗るでう？ それはこちらとしても困るわけじゃ」

「ゆき姉え！！？」

和葉が適当に言い訳をしていると、ゆきが口を挟む。確かにその通りなのだ。東の最高レベルの実力者と戦うこと自体が、西にとってはプラスにならない。

にも関わらずそれを口にするということは、明らかに東にとっては挑発以外の何物でもない。ゆきがわざと口にしたことは和葉にはわかっていて。だから余計に真意が読めない。

（単に力試しさせたいのか？ 勝って圧倒的に優位に立つか、負けて相手になめられるかって問題じゃないことぐらい、ゆき姉がわからないはずはないけれど。ぶっちゃけ高畑さんには単独じゃ“ギリギリ”まで使わないと勝てないだろうしな…。）

自らの戦力差を冷静に分析する。和葉も紅き翼の高畑を倒せるレベルまで到達してはいるものの、それには今まで負って来たりスクよりも高いものが必要となる。特に麻帆良のような霊地ではゆきのサポートなしではやりたくないのが本音であった。しかし単独で無理ならと案を出す。

「はあ……いいですよ。でしたら3対3のチーム戦はどうですか？
せつかなら天狐の実力も把握しておきたいでしょう？」

そう言つて2人の式の方に手を置く。周りは和葉の正気を疑つた。高畑単独でさえ世界最高レベルの実力者だ。3対1ならともかく3対3にする必要はない。

「いいねえ面白そうだ。で僕は他の2人を指名していいのかな？」

予想以上だと高畑は笑顔で答える。

「特に指名があるならいいですけど、その黒人のおじさんと黒子を連れたお嬢さんあたりがとつてもやりたそうにしていますよ？
どうですお二人さん？」

と和葉は指名する。ガンドルフィーニと高音が前に出てきた。

「〴〵指名とあつては断れないな」

「『深淵の探究者』、後悔しなくて？」

「いや別に殺し合いをするわけじゃないから構わないですよ？」

和葉が3対3を選んだ理由。それは足手まといを付けさせること。

この場の中では上の実力者のようだが、高畑とは次元が違う。まだ勝利条件は設定していないが、先に2人が倒ればという条件なら易いし、2人を排除できれば、またはしなくても3対1に持ち込めば良い。それならこちらの領分である。またあちらに足手まといをつけたことで、高畑が負けても言い訳は立つはずだ。こちらは戦力的に言い訳できないので勝つしかないが。

「では判定は気絶か降参した場合、わしが危険と判断した場合とする。3人とも負けた時点でチームの勝敗を決する。よいな？」

学園長が場を仕切る。両陣営とも首を縦に振る。

「それじゃ全力全壊つてのを、ちいとばかり見せようかね？」

和葉は飴玉大の赤い宝玉を手にする。

「刹那ちゃん。小狐丸デビュー戦だよ？ 頑張ろうね！」

ゆきの方もいつの間にかお姉ちゃんモードに何故か切り替わっているようであった。そしてその手には白い翼に五芒星の刻まれた赤いステッキが握られていた。

『アデアット！！』

そう刹那は唱えいつもの夕風ではなくごく普通の長さの白鞘の剣、

小狐丸を強く握りしめた。和葉と刹那の予想通り、やはり小狐丸のことを知っていたゆきから、扱い方などの詳細は既に聞いている。

私は政治という場においては全く役に立てない。

だから絶対に戦いの場では力になってみせる。

この絆の刀に^{カタチ}誓って

第12話 世界樹前広場にて（後書き）

長いので大分疲れました。

次こそ、次こそ、ずっと書きたかった初の戦闘編。ようやくサブカルネギま！ちよつとだけ始まります。

第13話 同調（前書き）

前半戦です

第13話 同調

第13話 同調

両陣営が対峙するように並ぶとゆきは羽の生えたステッキを掲げて詠唱する。

「コンパクトフルオープン！鏡界回廊最大展開！魔法少女プリズマ イリヤ、推参！」

そう唱えると、あの愉快型魔術礼装が輝きゆきの姿が変わる。ピンクのノースリーブにひらひらのスカート、オレンジのリボンに白いマントと羽の髪飾り。まさしくあの魔法少女『プリズマ イリヤ』その人が、3次元に現れたかのようにであった。しかも、バストは大幅増量である。ちなみに再び尾と耳は隠した。

> i 1 9 1 7 6 — 2 5 2 5 <

キラッ つとポーズをとるのを見て、いやそれキャラ違うからと突っ込んだのは和葉だけではなかった。どうやら理解のある人間も数人いるらしい。

「じゃあ俺も。レイジングハート。セットアップ！」

和葉は紅い宝玉を空へ投げると桜色の輝きが包み込み、和葉は白い魔王……のではなく、エリオのバリアジャケット長ズボンVer.

を装着する。眼鏡もはずしており、先ほどの白衣の研究者姿ではなかったオーラを見せる。

それを見て数人の人間は驚愕した。アレはやばすぎる……と。

この場において最年少である、褐色の肌のシスター、ココネは、それまでのやり取りでは無関心を装っていたもう一人のシスター、春日に向かって話しかける。

「ミソラ…あれってレイジングハート？」

「え、やっぱりココネもそう思う？ てか思いっきし、あの兄さん言うてたよね」

まだ幼いココネと一緒に魔砲少女アニメを見ていた春日は冷や汗をかく。

「あなたたちはあの装備を知っているのですか？ ココネ、美空？」

シスターシャークティは2人に問う。

「あの兄さんはヤバいっす。レイジングハート。しかもエクセリオンとか冗談抜きでマジヤバいっす！ 今すぐここから離脱しましよシスターシャークティ！」

気が動転している春日は早口で言葉を連ねる。若干ではなく、明ら

かにその顔は涙目だ。

「アレ……アニメのアイテム……本物だったら………学区ごと消し飛ば、かも」

ココネも同意して春日の腰に震えるように抱きつく。

「はあ……アニメのアイテムですか。でもそれはお話の中のことでしょう?」

「いやあ、シスター。僕も娘とそのアニメを見ているんですけどね……正直土下座してでも模擬戦を止めて欲しいですよ。いや本当に」

式重院も2人に同意する。2人同様顔色がかなり悪いことから、シスターシャークティーも、少しだけ警戒度を上げる。そして普段は2人には向けない笑顔で優しく語りかける。

「式重院先生も仰るのですしたら防御を少し上げておきましょう。ココネ。万が一のことがあっても、主が我らをきつと守って下さっていますから大丈夫ですよ」

その言葉にココネと春日は両手を組んで、今までにない位熱心に神に祈った。

そのようなやりとりが行われている中、隣でもう1人焦っている男がいた。瀬流彦だ。その視線の先にはゆきの姿。

（なんで、プリズマ イリヤがいるの！？しかも似合い過ぎ…って顔に出したら不味いか。危ない、危ない。いやゝそれにしても幼女じゃないのが嬉しいような、残念なような微妙な気分だね。そういえば狐耳のルヴィアVer.の方が、似合いそうな気がするけどなあ…胸もあるし）

零れそうになる笑みを左手で抑える。そう彼は隠れオタクだった。実は一般人の彼女にもそれが昨年バレ、寂しいクリスマスを迎えたのだ。だからこそ、このような場で堂々とあの衣装をまとう2人に親近感と憧れの感情を抱いた。特に可憐にドレスを着こなすゆきとは、今度ぜひ個人的に語り合いたいと思った。

話題となっている和葉陣営は念話で作戦を練る。もちろん念話は聞きとられないように対策は完璧だ。

（俺は高畑さんの相手をする。ゆき姉は金髪、刹那は黒い方を頼む。刹那、俺とゆき姉が管制するからそれに従ってくれ。方針は高畑以外をサッサと倒す。1人じゃそう持たない。だけど、できるだけ“気”の消費は抑えてくれ）

（しかし、あの黒人の先生、ガンドルフィーニ先生はこの中でも腕の立つ方です。奥義抜きでは厳しいかと…）

（大丈夫？ 大丈夫？ 私がバックアップするから。あの娘じゃ私の相手をするには、まだまだだしね。

（はい。よろしく願いします）

（任せといて！　じゃあ、早いところ用意しようか和葉？）

（おう！）

和葉とゆきは息を合わせ、互いに魂・肉体・精神のリンクを繋げる

シンクロ
同調！！！！

これが狐として、狐に育てられた者としての2人の能力の、基本にして最大のうち1つ。五感や六感だけに留まらず、精神の深層部分からリンクさせ、魂の表層までも繋ぐことで魔力のパスをより強固なものとする技法。

そしてさらに2人は語りかける。

（刹那、肩の力を抜いて俺のを受け入れろよ？）

（大丈夫だよ？　はじめてでも痛くしないように、お姉ちゃんが手伝ってあげるからね）

（なっ、な、にやいを言い出すんですかあああ！！）

ワザと卑猥にも取りかねない言葉を聞いた刹那は取り乱す。が次の瞬間、理解する。

シンクロ
同調！！！！

刹那に対して2人はさらに『同調』した。

2人が傍にいるような、全てを預けてしまいたいような暖かい感覚に刹那は包まれる和葉が見ているもの、ゆきが感じている風の匂い、そう言ったものまでもが、直接映像が浮かぶわけでも、鼻に感じるわけでもないが、刹那の全てをとおして『理解』できた。

故に、なぜ和葉はチーム戦を選んだのかも理解する。思考、空間把握、技のタイミング、それが完璧に理解し合え、統率されたチームそれは間違いなく理想のチーム像である。

（予想以上って感じだな。小狐丸は）

（うん。そりゃあ、私はお稲荷様の直属だからね。ご加護拔群だよ？）

そう、普通ならゆきよりも、主である和葉とより深く共有するのが道理であるが、ゆきの技量よりも大きな要因として、刹那のアーティファクト『小狐丸』の存在があった。詳しいことは聞いていないが、この刀には狐火の使役と雷を纏う能力の他に、稲荷大明神に縁のある品であることがゆきから明かされた。また直接的に関わりはなくとも、ゆきは京に住まっていた天狐というだけのことはあつて、かなり稲荷大明神に近い存在であるらしい。故に、ゆきと小狐丸には縁があり、仮契約カードのようにそれを通して、刹那とのリンクをより強固にすることができていた。

（これならいける気がします！ 勝利を我が主に捧げましょう！）

（ハハッ頼もしいじゃん。なら行くぜ！）

（了解しました）

（オッケー）

その様子を傍から見ていた学園長が声をかける。

「和葉。そちらも準備はよいかの？」

「いいぜ爺さん」

「僕たちも大丈夫です」

と高畑。

和葉と高畑。

ゆきと高音。

刹那とガンドルフィーニ。

それぞれが相手を確かめるように対峙する。

「では……はじめっ！」

その瞬間青い炎に周りは包まれた。和葉とゆきによる目くらましだ。炎が薄れたころ、和葉と高畑。ゆきと高音。刹那とガンドルフィー二。それぞれの組に分かれて戦闘が始まっていた。

「やるじゃないか和葉君！まさかこの拳が一撃もまともに入らないなんてね。個人戦を断ったあたりから、戦闘は得意じゃないかのよう」に思っていたけど、評価を改めるよ」

「そりやどうも。居合拳っていうんでしたっけ。あなたの噂ぐらいは知っていたもので。それなりに対策はできますよ。用は無音、無気配の拳圧でしょ？　ならあなたの拳の方を注視しておけば軌道は読めます。それに“いいの”をもらってないだけですって。痛いもの」のって、ったく」

和葉は空中を舞い、できるだけ交わすのに徹する。単独では分がない今は時間を稼ぎつつ、準備を進める。

「それに巧妙に隠しているけど風の精霊を纏っているね。センサーというわけか。感応性に特化しているって言ってたけど、なるほどこれは世界最高クラスなわけだ」

「体がついて来れば言うことないんですけどね」

と自嘲する。わかっていても体が付いてこなければ仕方ない。まだバレていないようであったが、幻術によって自らの像を半身程度ずらしたところに和葉は巧妙に投影していた。高畑ほどの腕ならば完全な幻術は手ごたえでバレル可能性が高い。その上策敵され、本体の気配をこの時点で掴まれたら後で奇襲をかけづらい。よって今は違和感を覚えさせながらも、居合拳をクリーンヒットにならないようにして受け続けていた。

こちらはお互いまだ様子見の段階であった。

『鬼さんこちら。手のなる方へ』

パン、パン、パンとゆきは手を叩くと赤鬼と青鬼たちが現れて来た。3mを超える巨軀に金棒を携えるその姿は、まさしく典型的な鬼そのもの。そして黒子のような仮面の使い魔たちに向かって進み、次々とひねり潰していく。

符もなく10体ほどの鬼を呼び出したゆきを見て、高音はただの陰陽術師ではないことに気がつき、気を引き締めようとする…が集中できない要因があった。

「何なのですかあなた？ その格好は！！」
ケントウム・ランケアエ・ウンブラエ
『百の影槍』

「知らないの？」魔法少女プリズマ イリヤ”だよ！”といってもコ

スプレだけでイリヤちゃんの技は使えないけどね。カレイドステッキもまだ中身からっぽだし」

そう言いながらゆきはカレイドステッキに狐火を纏わせて槍のように振るい、高音の背後の巨大な黒衣仮面の使い魔『ノクトウルナ・ニグレイディニス黒衣の夜想曲』を相手にする。高音は影の槍を無数に向けるがすべて槍によって弾かれていた。

「コスプレ！！？って馬鹿にしているのですか貴方は」

「別にただの趣味で、好きだからこの恰好をしているだけで他意はないよ。といってもあなたじゃ私の足元にもまだ及ばないけどね」

「なあ、何を！！って使い魔たちが！！！」

鬼によって周りの使い魔たちは全て潰されていた。それに驚くも、ウンブラエ『影よ』と再び使い魔を11体呼び出す。再び鬼との戦闘が始まる中、

『来たれ深淵なる闇よ。影を飲み込む牙となれ』

ゆきが言霊を発する。決まった呪文というわけでもなく即興のものだ。五行を用いた呪術戦の基本は相克。相手の属性に対して有利な属性で戦う。火には水といったように。しかし影はそれに当てはまらない。ならば影という存在概念に対する属性を別に用意すればいいということで、闇属性の呪術をその場で編み出す。影は光の全くないところでは存在できないからだ。

その相性抜群な暗黒の牙が地面から大顎のように影の槍全てを飲み込んだ。かろうじて高音と背後の使い魔は逃れるも、いつの間にか

ゆきは距離を10m以上あけ詠唱していた。

『リ・リック・ト・リック・リ・ア・ライズ 風の精霊199人
縛鎖となりて 敵を捕まえる 魔法の射手 戒めの風矢 アエール・カブトゥーラエ 199矢
！！』

カレイドステッキから風の矢が放たれる

「くっ、西洋魔法！！？ ですが、この程度」

しかし矢は高音を避けるようにして通り過ぎていく、

「——どこを狙って？ まさか」

高音の目の前には杖を背負った和葉の姿が何故かあった。ゆきが指輪で呼び出し、瞬動で迫ったのだ。その左手には魔力の塊を携え、しっかりと右拳を構える。

「それ、物理攻撃以外には弱そうですね
撃必倒！！」

『デイベインバスター！！！！』

そう叫び魔力の塊を右拳で打ちつけ、腹部に叩きつける。和葉の得意な精神波に変換して、精神負荷を一時的に与え魔力酔いに近い状態を起こす。それを一瞬に急激に調節して高音の意識を刈り取った。類稀なるコントロールがないと廃人コースの技であるが、和葉は使いこなし、疑似的な非殺傷設定を造り出していた。和葉は彼女を受け止め、地面に下ろす。服が脱げかけるといふ事態が起きたので、

幻術をかけておいた。あくまでも紳士的に信条だ。

また、刹那とガンドルフィーニの戦いも均衡していたが、それは奥義が使わないからであって、動きでは押していた。和葉も高畑の攻撃を避けつつ、刹那の周りも察知し、ゆきと共に管制していたからだ。自然と刹那も次の動きの自然解を理解でき、無駄や隙の全くない動きを行っていた。ガンドルフィーニのナイフ繰り出す際の肩の動きや呼吸、拳銃の引き金を引く指の動きまでわかれば怖いものなどない。

そして決め手がない状態のときにゆきの放った魔法の矢がガンドルフィーニへ向かってきて、そのいくつかが彼を捉えた。そして残りの矢は触媒、基点として魔法陣を描き、大魔法が展開される。

『

駆け抜けよ 一陣の嵐 春の嵐！！』

ウェーリス・テンベスター・フロレンス

ゆきは地と花属性の広範囲昏倒呪文を魔法陣による補助で短縮詠唱で放った。魔法の矢による魔方阵展開本来は和葉の技法であったが、ゆきも扱うことができた。しかし、風の矢で描いた魔法陣で地と花の属性を役したので実を言うと威力は落ちている。普段和葉は風の矢から『雷の暴風』を出すため、ゆきもつい風を出してしまい、攻撃性の低い『春の嵐』に切り替えたのだ。威力の弱体化の落ちたそれに、ガンドルフィーニはレジストし、薄れる意識を呼び戻そうとする。

しかし、直後眼前に刹那が現れ、御免、と峰打ちでしっかりと意識

を闇に沈めた。

——
これであとは高畑1人。

和葉は刹那に語りかける。

——
こっから出番だぜ？ 任せたぞ刹那。

そう。刹那になら高畑に対抗する手段がある。下準備は万全だ。

第13話 同調（後書き）

ちょっと出かけるので前半分投稿します。

こっから刹那のターン。3人の本領発揮です。あともちろんSLB出します。がラストの展開はテンプレ的にはなりません。

瀬流彦キヤラ崩壊してます。でも後悔はないです。

魔方阵のくだりは修正しました。ゆきではなく、作者のうつかりです。風と花属性だと思ってたので言い訳してみました。本来雷の暴風のつもりだったためってのもあります。

第14話 全力全壊の果てに（前書き）

かなり長くなりました。

第14話 全力全壊の果てに

第14話 全力全壊の果てに

（じゃあ、ゆき姉頼む）

（OK 刹那ちゃんいくよ！——
憑依^{ヨミツク}——）

ゆきが刹那の後ろから首に腕を回すように抱きつくと、ゆきの体は刹那に吸い込まれるように同化する。

（これは？）

（“狐憑き”状態って言えば、何となくはわかる？）

刹那はゆきが自分の中にいるというよくわからない感覚、しかし違和感の類ではなく、遠き記憶の中の母の腕に抱かれているような、そんな感覚に包まれていた。安心感とかでは言い表せないほどの“一体感”それが一番ふさわしい言葉であった。

（ゆき姉には力のコントロールに集中してもらおう。で俺は後衛で、さつきよりも精度を上げて管制と援護射撃をする）

（ということは、私が直接高畑先生と戦うのですね？）

（ああ頼む。出し惜しみはなしだ）

（はい。この翼にかけてわが主に勝利を——！）

そして刹那は白い翼を背中から広げると、いくつかの羽はまるで六花のように空を舞った。その優雅な姿に誰もが一瞬、時を忘れて見とれていた。

「刹那君、それが本来の君の姿か。うん。覚悟を決めたいいい眼だ。それじゃあいくよ!!」

そう言つて高畑は瞬動で距離を15mほどから7mまで一気に詰めると、居合い拳を水平に――――刹那の“顔面”“鳩尾”“顎”“右手首”“左足”を狙つて5連続で放つ。しかし刹那は全てを見透かしているように華麗にかわすと、背後の階段が拳圧でクレーターのように沈み込んだ。和葉からの行動予測に従いカウンターを用意をしていた刹那は、低空3mを一羽ばたきでさらに剣の間合いへ詰め、高畑の頭上へと斬りかかる。

『『斬岩剣!!』』

垂直に振り下ろされた攻撃はスーツの左肩を引き裂き、僅かながらに傷を負わせ出血させていた。しかしすれ違い様に、刹那も右ストリートを左脇腹に受けた。さすがに一筋縄ではいかない相手だ。

(スミマセン、浅かったようです)

(和葉! 居合拳以外の動きもちゃんと頼んだよ!)

(刹那、こっちこそ悪い。できるだけ集中するからそれに身と感性を委ねろ!お前の最高のポテンシャルを引き出してやる!!ゆき姉

も防御の出力アップを頼んだ！！）

（うん。こっちも一人で制御に集中しなくちゃいけないから、管制は任せたよ？）

和葉はより集中して、高畑の攻撃の気配の察知に集中して刹那の動きを管制し、ゆきも刹那の気の練り方をより効率的に、よりの確なタイミングで行い、サポートを一層強化する。

今までは2人ともそれぞれ戦いながら動きを管制してくれていたが、今は和葉が相手を、ゆきが自らに集中してサポートしてくれている。自らのもつとも恩を感じている2人に信頼され、後押しされているという事実は、刹那を感動させ、奮い立たせるに十分であった。小狐丸を握る手に力が入る。

再び間合いが20歩ほどに開き刹那と高畑は対峙する。高畑は左肩の出血を右手で抑えながら刹那の方へ一歩ずつ歩み寄りながらも、100mほど刹那の後ろの上空からそれを見下ろしていた和葉へと視線を向ける。

「くつ、まさか一撃入られるとはね。しかも完全に居合拳も見切られているみたいだ。和葉君が“逃げ回っている間”に、癖でもばれたかな。」

相手を賞賛しながらも、若干の皮肉を込めて、和葉が一度も自分と拳を交わさなかったことに対して口にする。

「まあそうですね。ただ俺じゃ交わせないから適当に受けていただ

けです。刹那の機動力なら今のあなたの居合拳は届きませんよ」

和葉も特に気にした風もなく軽く言葉を返す。あれから攻撃を受け続けている間に、実は光の精霊による拳と目線の光学モニター術式も仕込んで、解析が完了していることは告げない。少なくとも今までと同じ軌道や、似たようなタイミングなら、癖だらけの業である居合拳は完全に読みきることができると。むしろ普通の体術のほうが、経験的な差で問題があった。しかし高畑はこちらの懸念に気づかず、こちらに都合のよい解釈をする。

「——— だったら、拳のスピードを上げれば当たるということだよ」

楽観的に受け取った彼は自信満々に返すと、両手を広げて、氣と魔力をそれぞれ練り、手を胸の前で合わせながら唱える。

『右手に氣 左手に魔力

——— 咸卦法！！』

周りの面々は“それ”を使わるまでに追い込んだ和葉たちの力量に驚く。しかし和葉はともかく、高畑の実力を十分に理解しているはずの刹那でさえも、その顔に焦りの色は見せず、むしろどこか武者奮いをしているように見えることに疑問を浮かべる。そして和葉の口から出る衝撃の事実。

「だけど“それ”はあなたの専売特許じゃないですよ。」

和葉の皮肉下な口調に、高畑は若干苛立ちの色を見せる。

「何だつて？」

そして刹那の口から、ゆきの詠唱と重なり、強い言霊が発される。

『我、主が陽気を纏い、我が陰気と和合せん———— 咸卦法
！！』

刹那が体に纏う気を核に、和葉から送られる魔力が螺旋状の渦となり合成されていく。その力の奔流は高畑のものと比較しても決して引けをとらないほどの圧力を放っていた。

この場にいる誰もが、そしてその技を誰よりも知る高畑は、そのあまりの光景に全く言葉を発せない。まさか自分以外にこれを使える者が、しかも自分より数段劣る刹那が同じ土俵に立っていることにショックを隠せなかった。

「高畑さん、何を驚いているんですか？ まさか咸卦法を扱えるには自分だけとか思ってた？ 笑わせないでくださいよ。どうせここの連中、俺のこと表面しか調べてないんでしょ」

予想以上に高畑が狐に包まれたような呆けた顔をしているので、和葉は可笑しくて仕方ないと、アツパー気味になっているようであった。そして和葉は嘲けるように事実を告げる。

「俺の研究で対外的に2番目に評価されているのは、“気と魔力の相違点”についての研究です。理論的には咸卦法の導出も行ったんですよ？ 咸卦法の権威が全くそれを使えないわけではないじゃないですか」

理論的には証明されても実現は困難ということには変わらない。だが和葉とゆきには裏技があった。

ゆきによる気の制御と、和葉による魔力の制御を同調シンクロにより適切に調整し合成させる。まず気と魔力を分担することにより難易度は低下する。力の合成も同調によって、和葉が“世界”に引き込まれないよう、ゆきが確固たる“自己”として存在することで力と精神のバランスもとりつつ、合成できるという、和葉とゆきの同調能力があるからこそ使える裏技であった。

咸卦法自体は和葉単独でも制御が若干安定しないものの、一応は使え、ゆきが憑依していれば問題なく扱える。しかし今回は、ゆき曰く“もやしっ子”の和葉より、気の総量が大きい刹那にゆきが憑依することで出力増加を図ることを選択した。さらに、刹那は直接的にこの技法に関わらないため、体を動かすことに集中できるという利点があった。だからこそ、刹那なら高畑に対抗できると和葉が考えた。

「こちらにはあなたに勝っても、負けても、面倒ごとしか待っていないから勝負なんかしたくなかったのに、それをわざわざ受けたんですから——少し八つ当たりさせてもらいますよ？」

そう和葉が言い終えるや否や、刹那は小狐丸へと力を込め振りぬく。

『『走れ！！子狐！！！！』』

言葉を発すると同時に狐型を象った、青白い狐火11体をタイルの上を走らせ、高畑に向ける。4体が先ほどまでより速度を上げた居合拳に撃ちぬかれるも、子狐の火は煙幕へと姿を変え、目くらましと化した。

『斬空閃！！』

そして負傷した左肩を再び狙うように、背後から刹那は斬りかかる。さらに残りの狐火が同時にあらゆる方向から襲い掛かり、遠当ての技から流れるように接敵した刹那も追い討ちを加える。

「神鳴流奥義 『百花繚乱！！』」

「ちい！！」

桜花のように舞う白刃の渦を必死でガードしながら、高畑は拳で狐火を撃ち落す。刹那は居合拳の使えない間合いを保ち、剣戟を休むことなく打ち付けた。

『ヴァイブ・ド・ライブ・ダイブ・ア・ライブ』

その様子を上空から見ていた和葉は西洋魔法の始動キーを開始する。和葉は研究の過程で世界の真理の一端を、この歳、人の身にして理解している。そのため始動キーはおろか魔法触媒なしでも問題なく魔法を使えた。この始動キーは、異端を隠すための飾りでしかなかったが、得た真理を端的に表した言葉を詰め込んであった。

—— 世界に“共振し” “流れに乗り” “深層へ潜り”
それでも“自己の存在を確立する” ——

そして詠唱を続ける。

『ものみな焼き尽くす浄北の炎 破壊の王にして再生の徴よ
我が手に宿りて敵を喰らえ “収束” 紅き焰へ フラグランティ
ア・ルビカンス』

放ったのは中級攻撃魔法。一発に込められた魔力もそこまで他の術士のもとは変わらない。変わりに、本来ならば直径2mほどの焰をわずか7mmほどまで圧縮し、一発の貫通力と隠密性を高める。

そして2人をモニターしていた和葉は、剣戟と拳戟の全ての間を精確に狙いを定め

—— 高畑の注意や意識を縫って、高速で射出した焔が左大腿部の中心を音もなく打ち抜いた。

不意について放たれたのはレーザーのような一撃。高畑にとって幸運なのか、手加減されていたのか、焔を圧縮したそれは負傷部分の血管を焼き切っていたため、出血は全くなかった。傷も直径1cmほどで今までの戦場で負ってきた怪我と比べれば大したものではないが、筋繊維は何本も千切れ、確実に機動力は奪われた。左肩はある程度回復したものの、足が満足に動かせなくなっては、それを治癒する時間的余裕さえも作れない。

隠密製の高い、全くの不意をついた一撃。動きを全て読んだ上で、的確に足を打ちぬき降参させようとしている。和葉はいつでも狙撃できるのだという意図を、この攻撃から高畑は理解した。3対1とはいえ、自分が先ほど嘲笑され、実際手を抜かれている事実に奥歯をかみ締めた。

しかし高畑にもプライドはある。何の小細工もない全力の瞬動で刹那に負傷した左肩を鳩尾にタックルを仕掛け、20mほど吹き飛ばす。

「ぐはあっ」

公園の階段に背中を打ち付け、刹那は吐血する。

（大丈夫！！？）

（ええ。ゆき姉様が出力を上げていてくれて助かりました。やはり、居合拳以外の体術の方が問題のようです）

しかし高畑は、読まれていると理解しているはずの居合拳の間合いで空中に足場をつくり、両手を合わせ、今までにないほどの力を練りこむ。まずい、と回避行動をとろうとした瞬間

『アクセルシューター！！』

和葉は杖の先や自身の周囲から小粒の桜色の光の玉を無数に生成し、それを高畑へ向かって撃つ。その数や少なく見積もっても500から1000。そしてそれらが2人の間を遮るように弾幕を張り、また全方向から射撃を加える。弾幕で高畑の姿は全く確認できないが、刹那もその中に飛び込んで、白刃を打ち付ける。

管理局の白い魔王に倣った和葉の放つ桜色の玉は、決して刹那に当たることなく、高畑だけを狙って降り注ぐ。高畑が攻撃しようとするればその直前に、刹那が攻撃しようとするれば、高畑の視界を塞ぐように動く。魔法の矢と威力は変わらなくとも、厄介極まりない射撃であった。

「くそっ！これじゃ限がない。だが僕の動きを読んでいるのは――
――和葉だ」

桜色の爆撃に耐えられなくなった高畑は、転移符を取り出し額に当てるとその場から消え去った。

そして和葉の背後に現れ、最大出力の攻撃を加える。

『豪殺・居合拳！！！！』

しかしその拳圧は虚しく宙に轟くだけであり、和葉の姿はここにはなかった。

「何、だと？！！」

茫然自失とする高畑に、虚空から声が響く。

「誰を相手にしていると思っていらっしゃるんですか？ 狐とその弟子ですよ。幻術使われるのは想定するべきですよ」

そう。この瞬間のために、あえて序盤は幻術は完全に見せきらずに温存していたのだ。そしてここからはあの名場面を演出しようではないかと、和葉は指を鳴らす。すると高畑の手に桜色の紐状の魔力が高畑の体に20本ほど絡み、簀巻き状態氏にして完全に拘束する。劇場版のように左手を残すようなマネなどしない。

そして全速力で飛翔してくる刹那は、高畑の下へたどり着くと気力を引き絞り、小狐丸の能力によって増幅された雷光の塊を打ち付ける。

「神鳴流奥義 『雷光剣』！！」

さらにその背後から憑依を解除したゆきの姿が現れ言霊を発する。

『重なる想いよ！ 縛りつけ給え！！』

カレイドステッキから『重い』の重力波と『想い』の精神波、二重拘束の魔力球を放出し、黒い直径3mほどの球体に高畑は包まれた。黒いといっても透過性がある球体からは、未だ桜色の拘束を解除できていない高畑が視認できた。

「それじゃあ行くぜ！！ これが俺の全力全壊！！！」

高畑の正面、学園から500mほど離れた山の上に、和葉は桜色の直径10m以上の魔方阵を生成し、その上に立っていた。莫大な魔力反応に一同は気づき、その顔色は青ざめる。特に知っている者達は。今までのバスターモードからフルドライブのエクセリオンモードへと、レイジングハートは姿を変えていた。さらに白い両翼も杖から生えている。本当に全力全壊のつもりらしい。

「ギャー！！逃げるよココネ！！ 高畑先生には悪いけど余波でも私らの命がないよ『アデアット』！！」

春日はアーティファクトの靴を装備し、ココネを肩車した。

「……シスター……お元気で」

ココネがボソツとシャークティーにそう告げるとシュパアアアアという効果音とともに二人の姿は消え去った。

「ちょっと待ちなさい美空！ココネ！そんなにアレは大変なものなですか！？」

シスターシャークティの静止も虚しかったが、それが周囲の不安を拡大させた。

「あれって非殺傷設定だよ。きつとそう信じていいよね」

そう自らに呟く瀬流彦の声を聞いた式集院は相槌を打つ。

「そう信じたいですけどね。ってあれ？瀬流彦君は“リリカルなのは”を知ってるのかい？」

「げっ！！」

そんな人々の不安を横に和葉は魔力を収束していく。四方にミッドチルダ式の魔方阵が細部にアレンジを加えながらも再現されていく。そしてレイジングハートの周りには幾重もの環状の魔方阵が生成され、杖先の魔力球は直径2mほどになっていた。それから放たれる魔法は一つしか考えられない。

『スターライトブレイカー』

魔力を周囲からかき集め、収束させて叩きつける大砲撃。白い悪魔、管理局の白い魔王の名を知らしめたその技を和葉は再現する。しかしこちらの世界ではリンカーコアの魔力を扱うリリカルなのはの世界とは異なり、周囲の魔力を扱うのが普通である。故に和葉は大胆なアレンジを施して殲滅の光を収束させる。

和葉はそもそも他の魔法使いとは力の使い方が根本的に異なる。世界から触媒という扉を通して力を引っ張ってくるのが通常に対し、和葉は世界に同調するように意識を潜り込ませ、自身の力そのものとして魔力を扱う。2つ名の「深淵の探求者^{デュープ・ダイバー}」の名もここに由来している。

よって基本的に触媒もいらず、最大出力なら理論的にはサウザンドマスターや木乃香にも負けない。ただ致命的な欠点も存在し、あまりに世界に潜り込むと、「世界に自己の意識がかき消される」という自滅的な要素も抱えていた。だからあまりにも高火力な技は、基本的にゆきの憑依や同調によるサポートなしでは扱いづらい。ゆきが自己の存在を魂や精神ごと引っ張ってくれるからだ。

それらを鑑みて、もともとのSLBの再現は諦めた。そして代わりに編み出したのが、持続時間や出力の安定を放棄し、火力のみに特化した一時的な咸卦法。それが和葉オリジナルのスターライトブレイカーであった。

同じ威力を出すのなら、魔力を無駄に使うより、より効率的火力を出せる咸卦法を選んだ。しかも一時的にでよく、制御も足を止めて

集中して行うのであるからまさにうってつけであった。

キーとなるのは杖に施されたカートリッジシステム。通常カートリッジと呼ばれる弾に魔力を溜め込むことで自身の普段以上の力をブーイストとして扱うが、それに和葉は“気”を溜め込んだ。魔力は回りにいくらでもあるため、限界を迎えやすいのは自身の体力、気の方だ。特に和葉は後衛、しかも指揮官タイプなため、マシな方とはいえ、戦士系よりも気の出力は劣る。それをカバーするためだけにレイジングハートを作成したのだ。

「カートリッジリロード!!」

そう叫ぶと3発の弾が装てんされ、薬莢が地面に落ちていく。先ほどの魔力球が5秒もたたないうちに直径2mから5mまで巨大化する。

カートリッジ3発分。これが和葉の単独で扱える全力全壊。広域殲滅魔法の合わせがけ以上の力を1点に収束し

「近衛和葉！」

狙い撃つ!!」

『スターライトーオオオオオオ』

』

しかし次の終わりを告げる言葉が発されることなく、一瞬白い光が和葉の周りに起きたかと思うと、桜色の魔力球と魔方陣は跡形もなく消え去り

一同が目にしたのは、垂直に地面に向かって墜ちていく和葉の影だった。

「何だ！！？」 『嵐華！』 駄目か。 ————— 刹那！！」

符に力を込めても現れないことに戸惑いながらも、冷静に指輪に力を込め、刹那を呼び出す。すると翼の騎士は瞬時に現れ、お姫様抱っこのように和葉を抱える。

「大丈夫ですか！！？」

「ああダメージとかはない。ってすっげえ格好悪いなこれ。普通こ

れ男女逆じゃん」

抱えられた自らの姿に呆れる。

「いいえ、私はあなたの騎士ですからいいですよ」

と従者も笑う。ゆきも指輪で傍に転送し、和葉の額に自らの額を合わせる。

「うん。よし。私が今、世界樹とのリンクを切ったら多分もう大丈夫だよ」

「ありがと。それにしたってなあ」

「和葉君。勝負はお預けだ。それより聞きたいことがあるけれどもいかな?」

ようやく拘束を解いた高畑が現れた。その顔には疲労と汗が滲んでいる。力を取り戻した和葉は刹那の腕から出て自ら飛翔し、面倒くさそうに答える。

「『結界』でしょ? こっちが聞きたいくらいですよ。本当に」

それを時計塔の上から眺めていた1組の影があつた。黒のネグリジエ姿の、それに似つかわしくない、見た目10歳ぐらいの金髪の少女と、メイド服を着た緑の長髪のロボットの姿。学園に封じられた吸血鬼エヴァンジェリンと、その従者である茶々丸。

「みたか茶々丸。あの朴念仁の顔、あの情けなさといったら抱腹ものだな。ハハハッ！」

「ばつちり記録していますマスター。それにしても、桜咲さんがあの姿を晒すとは驚きでした。それにあの天狐、霊格だけで言えばマスターと同等かそれ以上と思われますが、この結界から逃れる術式、非常に興味深いですね」

「ああ。もちろんそれもだが、衛春の息子のほうが興味深い。人の身でありながら、私たちの霊格に達するか」

彼女がこれだけの興味を引かれた人間はサウザンドマスター以来だ。この身を封じる結界よりも純粹に彼の存在に惹かれている自分に気がつく。自然と上機嫌に右の口角は吊り上がり、今は尖っていない上の犬歯に舌を滑らせ思考にふける主を見て、従者は声をかける。

「どうしますマスター？ 接触を試みますか？」

「いや、まだだ。あいつの目的もわからないと切れるカードがない。交渉ごとにかんしてはこの腑抜けどもよりずっとできる奴だ。交渉して引き込むにしろ、私のものとするにしろ情報がある。茶々丸。」

できる限りの情報を調べつくせ。特に、あいつの周りの人間関係を重点的にな」

「イエス、マスター」

そしてもう一組、工学部特製迷彩ジャケットに身を包んだ二人の科学者。サイエンティスト麻帆良学園2年A組が誇る天才少女、葉加瀬と超だ。

「すごいですね。あのまま戦っていたら確実に桜咲さんたちの勝ちでしたよね」

軍用特製ゴーグルを外しながらハカセは、いいエンターテイメントを見れたというような笑みを浮かべる。

「うむ。戦闘能力といい政治手腕といい、素晴らしいの一言ネ」

超もジャケットのフードを外し、彼を賞賛する。その超に、携帯タブレットを操作しながらハカセは報告する。

「彼が運営する魔法世界のサンライトハートも、表における超包子以上の経済力とネットワークを持っていますからね。表にも進出してきていますが、かなりの規模にも関わらず上場してないあたり、買収も難しいですし、やはり彼はなかなか侮れないですよ」

「しかし、私のいた時代には“近衛和葉”という存在の記録はどこにもなかったハズね。学園長の孫は一人っ子だたハズヨ」

「イレギュラーの存在ということですか」

「あるいは全ての歴史から消された存在かも知れないネ」

未来から過去を改変するために来た超。彼女はこの時代に起きたことをほとんどすべて知っている。特にあの少年に関わる人物に関しては。しかし、キーパーソンである木乃香や刹那の周りがあまりにも違う。元老院や完全なる世界の動きも『知識』通りではないことが現在の調査で判明している。あらゆる組織にわたる人脈と、世界最高の頭脳を持ち合わせ、既に彼は全ての真相を知り、動き始めている。ならば、この世界は超の居た世界とは異なるものなのか、彼が存在ごと“なかった”ことにされていたかの2つに1つだ。そしてどちらにしてもそれは、この世界における彼の存在価値の証明でもある。

「ということとは」

「うむ。彼が私にとって運命の人な気がするヨ。この気持ち、まさしく愛ネ」

「愛なんて私たち科学者は悪魔に売り飛ばしたんじゃないですか？」

「だったら超包子を売り飛ばしてても買い戻すまでヨ。彼とは近いうちに接触を図るネ。きと『私たちの救世主』になり得る存在ヨ。例え、今までの計画全てを放棄することになたとしても」

「その知識も、気高い心も、彼の全てを——殺してでも奪い取るヨ」

未来を知る少女は恍惚に満ちた笑みを宵闇に浮かべていた。

第14話 全力全壊の果てに（後書き）

本来の主人公の単独での実力は前衛なら刹那未満の魔法世界編の明日菜以下、後衛なら高畑く英雄クラスってところです。しかし、本気を出したら廃人確定という爆弾つき。

刹那も2人のサポートなし、片方のみでは高畑とは絶対無理な力量差があります。

ゆきも能力は師弟故に主人公と似ていますが、実力は未知数です。体術はゆきがずっと上。ゆきは言霊の即興が上手くて、主人公はアニメ系の再現が上手いって感じです。

超、まさかのヤンデレフラグ？

次回はテイストを戻して日常編、葛葉養豚場よりお送りいたします。クラスメイトは我が主人公を凌駕する大変な変態紳士です。他作品とも若干クロスします。

第15話 親友（前書き）

私の周りは無事でした。

地震があつた後なので、ギャグ回は次に回し、ちょいシリアス回を作成。

今回でもう1人の主人公の運命が決まることになります。

第15話 親友

第15話 親友

結果として模擬戦は中止された。

高畑は左肩と左足をシスターシャークティに治療してもらいながら、和葉は無理に気をブーストした反動によるふらつきのため、刹那に肩を貸してもらい支えられながら1mほどの間隔で向き合った。和葉のバリアジャケットと杖はそのままだが、ゆきは巫女装束に戻っていた。

「体は大丈夫かい？キツそうじゃないか」

「恥ずかしい話ですが貧血です。研究が本業なので父みたいに戦うのは苦手なんですよ。高畑さんは、それくらいの傷におは慣れてるって感じですか？」

砲撃前のテンションとは真逆の疲弊した表情を見せる和葉。

「悲しい話、戦場ばかり渡っているからね。これくらいは何ともないよ。…さっきのは久々に死を覚悟したけどね」

同じく高畑も、生きた心地がしなかったと言わんばかりの顔をしている。そんな高畑に酷い弁解の一言が突きつけられる。

「以前ラカンさんはノーガードで立ってたんで、同じ紅き翼の高畑

さんなら大丈夫かな…… っ て思いまして」

「はっ？ イヤイヤイヤ！！ あのラカンさんと比べられても困るよ！！！！ っ てあの人とも和葉君は知り合いだったんだね」

「クルト先輩から紹介して頂きましてね。今や研究のスポンサーですよ」

「クルト先輩！！？ っ てそれはまた今度聞かせてもらっよ。それよりも、さっきの結界の話なんだけど」

シスターシャークティからの視線により、話が脱線していることに気付いた高畑は話を戻す。ああ、といった感じで和葉は空いている右手で頭を掻きながら、

「さっきはこの世界樹に魂ごと存在を一部繋げてたんですけど、そのせいで俺が“人間じゃない強い魂を持った奴” っ て判定を喰らったらいいですね」

「“繋げる” っ て意味がよくわからないけど、霊格を引き上げてしまったから学園結界が発動して墜落した、ということかい？」

「多分そうだと思います。一瞬だけ俺が高位精霊に同化したみたい に扱われた感じです。…… だよな爺さん、ゆき姉？」

「うむ。この学園結界は魂、霊格に直接反応するからのう」

「でもさっきの和葉はいつもの危うい感じと比べたら、1人でも安定していた方だけだね」

ゆきは納得がいかないと眉を歪ませる。和葉も同様のことを感じていたように

「だよなあ。まあそれはいいんだけど」

「爺さん。これだと研究が進まなくなるんだよな。つてことで、この結界は少なくとも“封印”に関してはいじらせてもらうから。ちゃんと話してもらったら、その“神様か何か”は封印したままで術式の仕様を変更で済ませるから大丈夫？」

そして最後に「認識阻害に関してはちよつとずつ改善させるから」と付け加え、一束の書類を右の掌に発生させた光の中から取り出す。

「ここの世界樹の全権に関する委任状もあるから、研究を阻害する事項に関してはあなた方に拒否権はありません、OK？」

和葉はニヤリとほほ笑む。学園長のあいた口は塞がらない。

これで全ての決着は一応付いた形となった。

3人はその場から去り、和葉は式神に荷開けをさせたアパートへ、和葉を送り届けたゆきと刹那は女子寮へと帰宅した。

翌日、日曜日は和葉の制服合わせやアパートの整理を木乃香、刹那、ゆきの4人で行った。和葉の部屋は学生の一人暮らしにはそぐ

わない3LDK。キッチン、リビングに寝室、世界各地の研究所からの報告書や書物だらけの研究用の書斎、まほネットと双壁をなすまでに肥大化してしまったサンライトハート社長としての業務のための部屋が必要だったため、家族用のアパートが必要だったのだ。

急にそれだけの物件を用意できるのは教職員用の宿舎しかないということとそこに間借りすることになっていた。もちろん魔法先生も数名そのアパートにいるため監視の意味もあるのだろう。

しかし、それにも関わらずその夜に思いがけぬ訪問者が来た。

「えう、マミさん……！？　嘘だろ……！？　こんな魔法少女ありかよ」

かわいいリリカルな魔砲少女ものよりも、もつとほのぼの系百合百合アニメを期待していた和葉にとってそれは衝撃的な光景だった。第3話にして少女の頭が喰いちぎられているのだ。タイムリーにアニメを見れる感動を越えた絶望。あまりにも笑えない。そしてごく普通の少女たちへ迫る魔女の手。そんな緊迫している中、

ピンポーン、と玄関のベルが鳴らされた。

「だあぁっ！　今からいいところだったのに誰だよ」

和葉はTVをミュートすると、廊下に出る。そしてどこまでもフラットな声でインターホンをとった。

『もしもし、こんな夜中に訪ねてくる死にたがりさんはどこのks野郎ですか？』

『僕だけど、随分と機嫌が悪いね。せつかく僕も旧世界に居たから訪ねてきたのに』

『どつから情報手に入れて来てんだストーカー。俺はヘテロだ。男に興味はない』

『ストーカーとは随分だね。ただのファンだよ』

『気持ち悪い。それから変態仮面は来てないよな？』

『いや僕だけだ』

『そうか、よかった。なら上がれよ』

そう言つて和葉は玄関の扉を魔法で開ける。

深夜の訪問者は白髪の10歳ぐらいの白人の少年。名をフェイト・アーウェルリンクスと言った。

リビングの3人掛けのソファに座らせ、和葉は湯気の立った急須と湯のみをお盆に載せ持ってくる。お盆をテーブルに置くとフェイトの右隣に座る。

「でフェイト、わざわざ敵地のド真ん中に来るなんて頭イカレてるんじゃない？ しかもこの結界くぐってバレてないとかレベルがおかしいだろ。チート野郎」

「君だって似たようなものだろ？ 昨日は散々やったそうじゃないか」

「何で知ってたんだよ。マジで怖ええからお前」

「企業秘密だ」

「こっちはわかってるってか。でそっちの方はどうなんだ？ あっこれ貰うぜ」

そう言々とフェイトが持ってきたケーキ箱の中から、小さな焼きプリンを取り出しフェイトと自分の前に置く。2人は蓋をあけながら会話を続ける。

「焰と栞は元気にしてるよ」

「そうか。こっちも環、暦、調は元気にしてるみたいだ。——
——でフェイト、そろそろどっちかとヤツたのか？ 結構成長しただろ？」

「相変わらず下衆だね。僕ら人形に恋愛感情や性欲など不要だ。そ

れに君こそまだ不毛な片思いを続けているのかい？」

フェイトは慣れているのか、ヤレヤレと言った感じであくまでも事務的に返した後、僅かにからかっている様子を見せながら和葉に質問をする。

「仮契約した時から諦めはとくについているはずなんだけどな。新しい恋が見つかりそうになる度、そう簡単には割り切れないって思う。で、何で敵の大幹部とこんな恥ずかしい話をしてんだよ。マジで気持ち悪い。ほれ飲め」

日本茶を急須からフェイトの湯のみに注ぎ、自身のにも注ぐと口に流し込む。

「全く同感だね。話を戻そう。それで、これからの研究は上手く進みそうかい？」

「ちょっとここの結界が邪魔だから面倒だけど、上手く進むと思う。ここの人員も少し借りれそうな感じだしな。あとはここの禁書に期待してところかな。そっちは？」

「元老院に下部組織が2つ潰された。どっちも気に食わない死の商人たちだから、ちょうど良いシッポ切りだったよ。デユナミスは怒ってたけど」

プツと吹く和葉。変態仮面ザマああwwwと言いながら、湯のみが揺れて軽く茶が指にかかる。

「そりゃ良かった。てか、そんな邪魔な下部組織つけとくぐらいならさっさとウチに来いよ。フェイト。お前は戦争は嫌いなんだろ？」

「その点に関して言えば、僕は前の“人形たち”とは違うけど、それでもあの“お方”の人形だからね。僕は僕の役割を果たすだけさ」

「そっか。気が変わったらいつでも来ていいからな。あの変態仮面以外は」

「残念だけどそれはないね。ただ焰と栞はもしかしたら預けることになるかもしれない」

「ああ可愛い子は大歓迎だ」

「そのときは頼むよ。僕も君の研究が“間に合う”ことを願っている」

「全力は尽くす。ただ、“間に合わなかった”ときは頼むな」

「言われなくてもやり通すさ。それから和葉。聞いたかい？ あのサウザンドマスターの息子が麻帆良に来月来るらしいね」

「俺も先週知ったよ。メガロから俺まで目を付けられそうで嫌な予感しかないんだが」

「実際かなりの問題児らしいね。彼も一応は天才と呼ばれているけど、君とは違ってもてはやされているだけの部分が大きいみたいだ。同じ英雄の息子としてどう思う？」

「このまま行くとメガロの駒コースが一番可能性高いだろう。俺はともかく、父の遺志とか乗せられて、お前の計画を確実に止めに来るな」

「やはり、ここで消しておくかい？」

「悪人以外は殺らない偽悪者のくせに何言ってるんだよ。せめて誘拐して悪の魔王にでも調教した方が面白いと思うけど」

「それは面白そうだけど、その前にデユナミスが確実に殺すだろうね」

「俺のときみたいにフェイトが助けてやれば？」

「冗談は止してくれ。あのときは僕だって命がけだったんだから、もう二度と御免だ」

「へいへい、その節は感謝してますよ」

和葉は手振りながら適当に答え、プリンのシロップをカップから直接飲み干す。

「だから君には——」

「監視、それが再教育までやれってか？」

左手の甲で口の周りを拭う和葉と、同じく食べ終わった口元をハンカチで拭くフェイト。

「わかってるじゃないか。ついでに得意の人心掌握術で君の助手にでもしたらどうだい？ 彼は父親と違って座学の方において天才と

よばれているらしいからね」

「それはいいかもな。サウザンドマスターの息子ならやっぱ魔力とか大きいんだろ？ 俺にはできないことを検証させるには持つて来いな人材ってか。もう少しこっちも元老院の動きを探ってから検討してみる。あとウチの学園長がどっちよりなのかを見極めないといけないしな」

「そうか。君の判断に任せるよ。僕は関与しない。じゃあそろそろお暇するよ。お茶ごちそうになったね。偶には緑茶もよかった。天狐にもよろしく」

「こっちこそプリンありがとな。結構美味かった。ゆき姉にも明日渡しておくから」

水を媒体にしてゲートを開くフェイト。その体に水が纏わりつき徐々に転送されていく。

「また会うときはいい報告を待っているよ『ディープ・ダイバー深淵の探究者』」

「そっちも勝手にくたばるなよ——
フェイト親友」

第15話 親友（後書き）

* 今回の地震について *

活動報告に募金先の例をまとめてみました。一度目を通して頂けたら嬉しいです。

* 話について *

人脈がものすごい主人公。彼の最大の強みであります。しかし戦闘面では消耗が激しく、最強ランクには届かない様子。

フェイト早々に出してしまった。詳しくは後の話で描いていくでしょうが、今のところは、お互いの計画の正当性と重要性に関して認めながらも、それぞれ別の道を行くような関係のようです。

ネギが他のアンチ系SSのようになることを予想した2人によって、彼の運命がここで原作とは大きく離れて行きます。次々回あたりから原作開始予定です。

第16話 転校生と復讐劇（前書き）

この章もラストです。

下ネタ成分大目ですが、これでも6割ぐらいカットしました。一応下ネタにも意義があったりします。

そういえば「にじファン」で新ランキングができたようで、この作品の名前があつたのにはびっくりしました。お気に入り登録数もこの2日ぐらいで急に伸びていたので納得です。

いつも、ご愛読および評価などありがとうございます。

第16話 転校生と復讐劇

第16話 転校生と復讐劇

月曜日。麻帆良学園男子中等部2年C組。和葉が転校するクラスだ。

担任は神鳴流剣士、葛葉刀子。和葉が京都にいたところは詠春直属の部下であったため、何度か面識があった。情報によると、8年前に西洋魔術師と結婚し、関東に来るが離婚。半年前は一般人の彼氏と上手くいっていたらしいが先月別れたようだ。所属は麻帆良に来たところから一応東に身を置いているが、元穏健派ということもあり実質的には両方に所属しているようなもので、詠春や和葉にとっては西と東を繋ぐ貴重な人材である。

ホームルームが始まる8時15分に降ろし立てのブレザー服に身を包んだ和葉は刀子に連れられて教室へと向かう。

「若様。学校では近衛君とお呼びしますが、何かあったら私を頼って下さいね」

「じゃあ俺も刀子さんから、刀子先生って呼ばないとね。まだ麻帆良では信頼できそうなの大人は刀子先生ぐらいだから、表でも裏でも頼りにさせてもらいます」

そう微笑むと刀子も頬を緩める。教室のドアの前に付くと取っ手

に手をかけ

「良いですか？ 私が促しますのでその後教室に入って、自己紹介をお願いします。元気が良すぎるクラスですから色々注意して下さいね」

刀子がドアを開け教壇に上がると、すぐに生徒たちは席に着く。

「はい皆さん、おはようございます。ホームルームを始める前に御知らせがあります。今日はこのクラスに転校生が来ました。入ってきて下さい」

和葉は刀子の隣に来て黒板に自らの名前を書くときずけた感じで自己紹介をする。

「名前は近衛和葉って言います。出身は京都ですが、先日までイギリスの学校に通っていました。趣味は日本の漫画とアニメ鑑賞です。みんなよろしく！」

「質問いいですか？」

短髪でブレザーのボタンをはずした活発そうな少年は、目を輝かせながら真剣な表情で手を上げた。

「はい、梅原君どうぞ」

「近衛って苗字ってことは女子中等部の木乃香さんって人と親戚だったりしますか？」

「双子の兄って言ったら驚く？　ちなみに木乃香に手を出したら親父が真剣持って殺しに来るから頑張ってね」

「親父って“ヤ”の付く家業の人？」などと周囲はざわめき、梅原少年は肩を落とす。どうやら木乃香に気があったらしい。他の少年も質問する。

「好みのタイプは？」

「ナイスバディでクールビューティーな大人のお姉さん！　まさに刀子先生はド真ん中ストレートでっす！！」

「うおおおお！　コイツ言いきったああ！！」と歓声が上が
る。

男子校において、刀子のような美人教師の存在は、唯一と言っ
てもいいほどの華だった。このクラスの半分どころか学校の半分は刀
子への好意を抱いており、半年前彼氏と別れた時など裏で祝賀会が
行われた程である。

皆の第一印象は帰国子女のオープンオタクというイメージしか抱
けなかったのが、何のためらいもなく宣言する和葉に、尊敬と憧れ
の眼差しが向けられた。しかも初日にして下の名前で呼んでいる。

「も、もう大人をからかわないで下さい。ずっと年下の男の子にそ
んなお世辞言われたって、べ、別に嬉しくなんてないんですからっ
！！」

刀子がメガネのずれを直しながら口元が緩むのを隠し、その頬と

耳全体が赤くなるのを見て

「「すげええええ、あの葛葉先生をデレさせたああああ！！！」

」

「は、はい皆さん静かにして下さい！ 近衛君席はあそこですから着席して下さい！」

目を手もとのノートから離さず、指だけを向けて正面最後尾の席を示し、和葉はその席へ向かう。隣は一見おとなしそうな地味過ぎて特徴のない少年。

「橘純一って言うんだ。よろしく近衛」

「おう。さっそく教科書とか借りることになるけど、よろしくな橘！」

その一日は本当なら嬉しくもない男ばかりに囲まれての生活であった。しかし、女子がいないからこそ下ネタを中心に話題は弾み、評価は鰻登り、全く自重せず話せるクラスの雰囲気はとても居心地がよかった。

「イギリスって初体験早いらしいけれど本当？」

「奪われそうになったことは何度があるけど、俺はお前らと同じ」

童帝”だ」

誤魔化すことなく自信たっぷり、「大丈夫。一緒に大人になるうぜ」などと言う。

「イギリスのお宝本って持ってきてるか？」

「いや悪い。引越しの時邪魔だからダチに譲ったわ。でも昨日コンビニで買い漁ったけど、顔立ちとかやっぱ日本のがいいぜ。アングルとかも洗練されてるしな」

「マジで！？ 堂々と買ったのか？」

「おう。熟女系とか以外はほぼ全て。コンビニ3件買い漁ったぞ」

全て事実である。和葉は学園長の姿に変化して、ありとあらゆる工口本を堂々と買い漁っていた。中学生が堂々と買うだけなら認識阻害や普通の大人に変化すればいいはずだった。

そう、これは学園長に向けてのささやかな復讐。教育者としての立場を貶める嫌がらせを兼ねていた。仮に学園長の姿をした偽物がいるとバレてたとして、ゆきを除けば、誰もそんなくだらないことを和葉がするとは疑いはしないだろう。それを計算込みの策略である。まだ大きな噂にはなっていないが、いずれ本人の耳にも届く。また何か学園長が圧力をかけてきたら買い漁りに行ってやろうと決意する。今では一晩の奇行も、何度も発見されるようになれば、やがて噂は大きくなり、付けいる隙もできるだろうと考えていた。ただし問題点はある。学園長が普段からそのような買い漁り行動をしていた場合だ。そのときは諦めるつもりであった。

「マジで!？」

「是非1冊、いや3冊ほど貸してくれ」

「今月号の“超絶極楽素人美少女図鑑”はもちろん買ったよな!!」

コンビニ経路での入手だけでも尊敬であつたが、ほぼ全冊購入という、あまりにもぶっ飛んだ武勇伝に全員が目を輝かせ、何とかおこぼれをもらおうとする。そして神の一言。

「アレ良かったぜ。なかなかいい趣味してるな。そうだ、俺1人暮らしたから今度みんなで観賞会しようぜ。そんなときいくらでも貸してやるよ」

突然の提案に一瞬場の空気が静まる。が、

「神がここにいたああああ!!!!」

「兄貴iiiiiiii。どこまでも付いていくぜ」

「神よ!」

「さすが近衛!おれたちにできない事を平然とやってのけるッ。そこにシビれる! あこがれるウ!」

「俺に元気を分けてくれえええ！」と叫ぶ梅原少年の横で、「僕のお宝コレクションとか、本当にかすんじゃうよ……。」と非愛のこもった声で言う橘少年。その擦れる声を聞き逃さなかった和葉は尋ねる。

「橘のお宝ってどんなんだ？ 交換しようぜ！」

「本当かい！ じゃあ後で図書館から取ってくるよ。かわりに僕に一番先に貸してくれ！」

「はあっ！！？ 学校にエロ本置いてるのかよ！ その発想と度胸はなかった。やるじゃねえか」

「学校にお宝本を保管してるのなんて僕だけだろうな…僕だけの空間。そこにまた新しいコレクションが入るのか。ちょっと気分いいかも」

ふふふ、とかなり気持ち悪いニヤケ顔を浮かべ笑う橘。完全に悦に入っている。

「で、どういう系なんだ？ できれば年上のお姉さん系があれば頼む」

「じゃあ。『近所のお姉さんと駄犬な僕の調教日記』を貸してあげるよ」

「……お前Mなのか？ しかも犬って」

「近衛に僕の崇高な趣味をとにかく言われる筋合いはない！」

そんなやり取りが続いたのであった。この一日だけで和葉に対する周りからの評価は、「オープンオタク」から「オープンエロ」、そしてここで「エロ神様」へと最高地位になった。帰国子女だと目を付けられ、いじめられそうなものだがその心配は全くないようであった。それを懸念していた刀子は次の日からクラスになじみ過ぎた和葉の姿、むしろ崇められていることに首を傾げつつも、若様は流石だと勘違いし、その真実に気付くのはもう少し後の話になる。

その晩は、研究に協力してくれる明石、瀬流彦、式集院と交流のため、ゆきと刹那を交えて式集院お勧めの居酒屋で食事をした。3人とも和葉に対して警戒心は薄いようで、むしろ好感を持っているようであった。この歳にして組織の幹部として立派に振る舞ったことや、彼らも疑問に思っていた結界の認識障害を糾弾したこと、団体戦とはいえ高畑を圧倒するだけの實力を持ちながらも、むやみな模擬戦による力の誇示を避けようとしていた点などを評価していた和葉もそんな3人をまともな思考のできるいい大人だと判断していた。

瀬流彦と式集院はリリカルなのはを知っていたようで、知識がないためついていけない明石と刹那を蚊帳の外にして、アクセルシューターやスターライトブレイカーをどうやって再現したかについて語り合った。

瀬流彦はゆきに気があったようで、すんなりと携帯番号とメールアドレスの入手には成功したが、「私には旦那様も子供や孫もいつ

ばいいるから。デートはお断りするね」と衝撃的な事実を聞かされた。推定1000歳を超えるのだ。孫どころか子孫の数さえ本人にも分かりはしない。

彼女に逃げられようやく新しい恋を見つけたと思った矢先に、彼に寒い冬が再び訪れた。はじめは心のうちでその光景を笑っていた和葉も、いきなり焼酎のボトルをストレートのまま飲み出す姿を見て不憫になり、「まだいい方ですよ。傷も浅くて。俺なんて何度死のうかと思いましたし……」と傷を舐めあっていた。そんなつぶやきを聞き逃さなかった刹那は終始、気が気でなかった。

他にこの場で得られた有益な情報として、結界の対象は吸血鬼の真祖「闇の福音」であること、現在高畑が担任しているクラスにネギが赴任するらしいことを聞いた。初耳な刹那は、

「このちゃ……、お嬢様がそんな人物と接触すれば魔法を知るかもしれない。私は反対です！」

「いずれ教えるつもりですが、せめて西と東のしがらみがマシになつてからじゃないと、俺も木乃香に魔法はバラしたくないですね」

「ウチの娘も2-Aだけど、このまま普通の子として育ててほしいから、反対だ」

和葉と明石も同意する。それを聞いていた式集院が、

「でも学園長は頑固だしな……。それに教職の仕事も問題だけど、彼は10歳の子だ。生活面もフォローしてあげられる保護者が必要だけど、誰に面倒を見させるんだらう？」

「いや、俺が面倒見ようと思っているんですけどね」

「へっ？」

「少し協力お願いしてもいいですか？」

一歩その頃、アルコールのキャパシティを大幅に超えてしまった瀬流彦は、振られたばかりのゆきにトイレで介抱されるという、天国と地獄のよくわからない間を行き来していた。

第16話 転校生と復讐劇（後書き）

活動報告のほうに募金先についてまとめてみたので、よろしかったらご一読ください。

この話には他作品の技などが出てきますが、クロスさせるのはアマガミの主人公にして真の変態紳士、橋純一と悪友の梅原正吉だけになるかと思っています。妹の美也は出るかもしれませんが。

次から新章で原作開始。ネギが日本に來ます。

この作品の始まり自体が、原作をもつとよい方法で問題解決できたらいいなというのがあったので、ネギ・フェイトを変えられる人間として和葉というキャラを作りました。魔法世界編ではかなり重い展開を用意しているので、それに耐えられるぐらいネギを精神面で成長させてあげたいと思っています。

次章より、魔砲少年サブカルネギま！ 始まります！！

それから当方、物書きは全く初めての経験なので、展開は考えられても文にできないのがもどかしいです。できれば感想などを頂けたら、改善していけると思います。あとマガジン派なため手元に原作がなく、設定の矛盾やキャラの言い回しなどがおかしかったらご指摘いただけたらと思います。

第17話 ネギ・スプリングフィールド育成計画（前書き）

＊お知らせ＊

各自治体の対策本部への口座ができました。活動報告に載せてます。

新章です。魔改造ネギ登場です。

ちよつと？残念な面もあるけど、いい子になるよう作者は育てるつもりなのでよろしく願います。

第17話 ネギ・スプリングフィールド育成計画

第17話 ネギ・スプリングフィールド育成計画

とある平日の放課後。研究補助に協力してもらっている明石、式集院、瀬流彦の3人、そして担任の刀子と、紅き翼で縁の深い高畑を連れて、和葉は学園長室に乗り込んだ。

そのメンバーを一見した学園長は、麻帆良における和葉の後ろ盾であることを理解する。わずか1週間もたたない間に彼らを引き込んだ孫の手腕に、眉に隠れて見えない目を細め警戒心を上げる。

人数こそわずかだが、この学園でもそれなり実力があり、かつ冷静に判断できる人間たちを確実に選んだことが伺える。先日の模擬戦での和葉の態度は、敵対はしていなくとも不信感を見せていたため、和葉に嫌悪感を示す魔法先生も多かった。しかし、それらを高畑をはじめとしたこのメンバーなら、ある程度は抑えるだけの発言力は有している。

ゆきや刹那ではなく麻帆良の人間を連れてきたことから、用件はこちらへの交渉事。しかも和葉一人では力が足りないことを理解している上での行動から、学園長の方が優位性がある事柄であろう。

しかし、闇の福音に関する弱体化の封印結界に関しては、和葉、明石、式集院により術式をすでに変更されており、対象が闇の福音のみに作用するものになったと報告を受けている。術式の効率が増した分、余った電力で電子精霊による外敵の探知機能および強度の改善が図られ、警備も随分と楽になったとの評判だ。まさかその報酬を請求するつもりではあるまいし、結界の強化を止めたわけでも

ないため、管理体制を糾弾するつもりでもないだろう。図書館島の活動や研究も放任している。ならば何の要求かと学園長は考えを巡らせていると、

「爺さん、噂で聞いたんだけど、来月サウザンドマスターの息子がこっちに修行に来るんだよね？」

「ふむ知っておったか。そうじゃよ。教育実習生として木乃香のクラスの担任を3月一杯まで任せるつもりじゃわい」

「しかし学園長、それはあなたの独断ですよね」

と高畑。長年の付き合いとは言え、彼も学園長を心から信頼しているわけではない。

「しかしメルディアナ学園では卒業後の修行の指示は絶対じゃ。彼は日本で教師をせねばならん」

「でもよ爺さん。その修行は絶対厳守とはいえ、10歳に教師をやらせるとか普通おかしいし、少なくとも教育者としては全く信頼できないわな。俺は木乃香の担任にはさせたくない」

「しかしお主は同じくらいの歳でアリアドネーで教鞭を奮っておったろう？　なら彼でも問題はなかるう」

机にかかるまでの顎ひげを弄びながら、そっけなく返す。

「問題大あります学園長。それはあくまでも、低年齢から働くのが

常識な新世界の話です。しかしここは日本です。法律的にまずあり得ません」

バン！ と刀子が和葉の後ろから学園長に詰め寄り机をたたいて糾弾する。

「学園長、一般の先生たちへの説明もあやふやでしたし、現場は混乱しています」

女子中等部2・Dを受け持っている瀬流彦も意見する。学年主任であり、最も良識的な教師である新田の様子をその目で見ているのだから、高畑と同じくいろいろと苦労をしていた。

「それにいくら魔法使いとしては優秀でも、一人の親として私の娘を預けようとは思いません」

一人娘の優奈も2・Aに所属しているのだ。明石は妻を亡くしてから家族と呼べるものは彼女しかおらず、そのためであつたら何でもするであろう。その明石の訴えを無視すればPTA沙汰にされる可能性もなきにしもあらずだと学園長にも理解できる。

「というわけで提案だ。爺さん。これから一週間早めに彼には日本に来てもらう。それでこの魔法先生たちに日本式のエデュケーションについてみっちり叩き込む。ダイオラマ球の中ではつちりだ。それは俺が手持ちの実験用のを貸す。これはあくまで、木乃香の兄としての提案、妥協ラインだ。組織絡みの他意はない」

わざわざ木乃香と闇の福音が在籍する2・Aを担当させるあたり、学園長の後ろに漂うメガロセンブリアの陰謀の匂いに気づく和葉は吐き気を催す。しかしそれでも真摯に向き合い訴える。

「この案なら教育者としては大学の教育実習生程度までにはなれるでしょう。それなら安心して娘を預けられます。学園長、どうかお願いします！！」

明石も懇談して頭を深く下げる。

「ふむよかろう。確かにわしも強引じゃとはわかっておったが仕方なくのう。組織の長というものは利権がらみばかりで厄介なのじゃよ。和葉、明石君。その提案は妥当じゃとわしも思う。それでは高畑君、彼への指導教員の募集とシフトの作成を任せるぞい」

「了解しました。僕のクラスを任せるのですから、しっかりやつて見せますよ」

学園長は安堵した。むしろ拍子抜けしていた。組織のパワーバランスの乱れや、西を刺激するからネギの麻帆良への赴任を阻止するものかと予想していたためだ。こちらとしても、ネギを優秀な研修生にすることに問題はあらずはなく、これでネギの良い評判が本国に届けば良いことづくめだった。

「それから、そのネギ君のホームステイ先って決まってるのか？」

和葉が別の話を切り出す。ごく普通の質問であつたが、一番痛い質問のうちのひとつだった。

学園長の心の中では既にネギの処遇は決まっていたが、ここで「決まっている」とは口にできない。まさか木乃香とそのルームメイ

ト住む女子寮の部屋に住ませるなどと、和葉と高畑の前でどの口が
言えようか。本当なら当日に用意し忘れたと言って押し込むつもり
であったが、ここで聞かれては返す言葉もなかった。女子寮の管理
人室もゆきに任せただけだったので無理だ。言い訳ができないし、
本音も言えない。

「……それが、まだ決まっておらんのだよ」

「おつ！　なら良かった。実はネギ君を俺が預かろうと申し出に來
たんだ。俺のせいで本来ネギ君が入るかもしれないが、教職員宿舎
に間借りしてるから気が悪いし、部屋数も十分足りてる。まさか一
般人と生活させるわけも行かないし丁度いいと思わない？」

「和葉よ、何を考えておる？」

「いや、こっちの件も別に陰謀じゃないよ。個人的な好意の申し入
れ。誰のところに預けたらいいかなと、相談したんだけど。俺が一
番適任でしたって話。そんだけ」

「ええ、色々考えたのですが僕は和葉君に預けるのがベストだと
判断します。二人とも飛び級で卒業したり、英雄の息子であったり、
色々と境遇も近いですから身近な相談役として適任だと思います」

「それに歳も近いですから兄のような遊び相手にもなれるでしょう」

「若様も中学2年生ですから、生徒の立場からの相談にも乗れると
思います」

高畑、瀬流彦、刀子が後押しをする。

「しかし、食生活のフォローはどうするのじゃ？ 男子寮ならともかく和葉は一人暮らしじゃ。まさかコンビ二弁当やレトルトばかりでは困るぞい」

「何を言うのですか学園長！ レトルトどころか最高の食生活ですよ。近衛君の手料理を先日頂いたのですが、腕はこの私が保証します！ 正統派な関西風の薄味でありつつもしっかりと風味を生かした味わい。しかも栄養バランスも考えられた献立。成長期の少年を預けるにふさわしい食生活を保証してくれているはずですよ！！」

夜の警備の差し入れにもらった弁当の味を思い出しながら語る。かなりの美食家として知られている式集院が、よだれを噉りながら熱弁を奮うのだから疑う余地はない。少なくとも木乃香と同レベルかそれ以上の腕はあると見込んでいいことが、学園長にも容易に想像がついた。

「実家でいい物食わせてもらってきたから舌は肥えてるし、ゆき姉に和食なら京都1000年の技をきっちり習ったからそこの店よりいいの食わせてやる！ イギリスもちよつとの間は居たから、故郷の味も少しは再現できる」

「うむ。式集院君がそこまで言うのじゃから食の問題は解決できそうじゃな。なるほどもっともじゃわい。では早速向こうに……」

手紙を出そう、と言いかけたところで

「ゴメン。メルディアナの校長に手紙と、ネギ君には日本行のチケットを先走って送っちゃったんだけどね。もう今日ぐらいには届いていると思うよ」

いかにも悪気のなさそうに和葉は言い、他の面々を連れて去っていった。

——先手を打たれていた。はじめから和葉たちは事後承諾を求めるために訪れたのだ。ならば先ほどの言葉は、メガロメセンブリアの思惑に気づいていることを暗に示すことで、釘を刺しているのだと、学園長一人がその意味を理解した。

周りの思惑を打ち破り生きてきた和葉と違って、ネギ少年は明らかに元老院の都合のいい駒として育てられている。和葉はただ力として欲するのではなく、ネギがメガロメセンブリアに染め上げられる前に、保護するつもりなのだろう。

学園長は一人の大人として、和葉にネギを預けることに対して期待と安堵を覚えつつも、組織として和葉が真の意味で敵対したとき、新たな脅威を増やしてしまうことも恐れていた。

かつて和葉の処遇に関して送られた元老院からの指示は、「近衛和葉に余計な干渉を行うべからず。ただし監視と逐一報告せよ」ただそれだけ。細やかに与えられたネギ少年との扱いのあまりの違い。

おそらく元老院も恐れている。干渉するだけ相手に隙を与えてしまふことを。そして同時に何かを和葉に期待しているように感じられた。元老院が和葉をどう思おうが、和葉自身は紅き翼の筋でつながりのあるクルト・ゲートル以外を間違いなく敵対視している。真意が読めない。しかし読めないのならばあえて乗ってやろうと思う。

ネギは和葉に実質的に獲られる形になってしまったが、ネギを「英雄」になるための教師としての修行の名目上、和葉の提案は問題ない。多少事実を歪めて自薦ではなく、麻帆良の教員たちによる強い推薦によって仕方なく和葉に預けることになったと、報告を書くとともに、新たな策略を巡らせるのであった。

そしてイギリス

話題の英雄の息子、少年ネギスプリングフィールドの下に、近衛和葉という人物から赴任予定の麻帆良学園から予定より9日早い日本行きの航空チケットと手紙が送られてきた。教壇に立つ前に1週間ほど事前に研修などを行うためらしい。日本語は専門教科の英語に限らず一般教養も大卒程度の知識はあるが、日本の教育はイギリスとは違うためそれを補うのだそうだ。

そしてメルディアナ学園の校長に詳しい事情を聞いたところ、その手紙を送った人物は今のネギと同じくらい歳にして、尊敬する父と同じマギステルマギの最有力候補となり、自ら辞退したと噂されるほどの人物らしかった。まさに自らの追い求める道を進んでいる先輩なのだ。ネギはその人の下で送る生活を楽しみにしていた。

それから手紙とは別に送られてきた荷物が一箱「魔法少女リリカルなのは」というアニメシリーズのDVD全巻と、携帯型DVDプレイヤーだった。「これを見て日本の文化を学ぶといい。生徒や同年代の友人の間で流行っているものを知っておいた方がいい」との書置きがあったので、生徒たちの気持ちに近づくためだと寝る間も

惜しんで文化の勉強に励んだ。

一言で言うと最高だった。アニメとしての内容はもちろんのこと、自分と同じくらいの年齢の少女たちが命がけて戦う姿、敵を圧倒する力。それらが自らの憧れであり、父であるサウザンドマスターの姿に重なった。はまらないわけがなかった。あまりにも熱中しすぎて全話3周も見てしまうほどに。そしてネギは、このDVDを送ってくれた人物に感謝し、期待を一層膨らませた。

―― 2月8日土曜日。

彼は初めての飛行機の中から日本の街を見下ろしていた。ウェールズの田舎町で育ち、ロンドンにも少し行ったことがあるくらいのネギにとって、遙か下の大地に無数に並ぶ日本のビル群は新鮮だった。おそらくこの景色のどこかにあの街があるはずだと、ネギは窓越しに東京を見つめる。

「…………秋葉原ってあの辺かなあ？」

第17話 ネギ・スプリングフィールド育成計画（後書き）

ネギはこうして和葉のもとで育てられます。がその結果、ネギの最初のセリフがあまりにもひどいです。でも書いたものは仕方ない。

ネギは”なのは”たちの「力」に魅入られてしまったようです。危ないですね。このへんは後でフォローさせますのでご安心を。

主人公のように「萌え」や「百合」にはまだ興味はない様子。しかしこれはこれで調教第一段階は完了です。

第18話 狂い始めた運命（前書き）

ネギかわいいよネギ。

ネギえ………だけど。

第18話 狂い始めた運命

第18話 狂い始めた運命

ネギ・少年の迎えに和葉・刹那・ゆきは朝早くから向かう。木乃香も迎えに行く予定だったが、同室の生徒と一緒に何かの“特訓”をするらしく来れないとのことだった。護衛が離れるわけにもいかないで、ゆきの眷属の式神、飯縄という白狐たちに木乃香を任せる。彼ら・彼女らは使いに出したり変化して型紙を用いた身代わりの式代わりに働いてくれたりと、和葉も良く世話になっていた。

空港に着くと目的の赤毛の少年はすぐに見つかった。幼いのに立派にスーツを着こなしているのに感心したが、背中にはリュックサックとバンテージで巻いてある身の丈以上もある大きな杖を背負っているのを見て、チツッと舌打ちする和葉。しかし笑顔は絶やさず彼に向って手を振る。

「よゝここだ。ネギ君！」

声に気づいて、改札口を抜けトタトタと走り寄ってくる少年。杖が引つ掛かり焦る姿がどこか小動物のようで愛くるしく、思わず3人の頬も緩む。

「あ、あの」

「無事にたどり着いて何よりだ」

緊張のあまり言葉に詰まるネギ。和葉はそれを解すかのように、その赤毛頭を揉みくちやにしながら言葉をかける。

「ようこそ日本へ、Mr.ネギ・スプリングフィールド。俺が手紙を出した近衛和葉だ。一応こっちにおける君の保護者みたいなものだ。よろしくな」

「は、はい！」

ただでさえ幼く高い声がさらに上擦ってしまふ。

「ふふつ、そんなに緊張しなくていいよネギ君。私は和葉の親戚で従者の近衛ゆきだよ。よろしくね」

「同じく従者の桜咲刹那です。麻帆良学園女子中等部ネギ先生の担当する2年A組に所属しています。勉強は教わる身ですが、学校で分らないことがあれば頼ってくださいね」

「リラックス リラックス」と肩をポンポンと叩くゆきに、自分の目線までかがみながらも、礼儀正しく挨拶をする刹那。初対面の自分に対してここまで気を使ってくれる3人にネギは感動を覚える。やっぱりこの国はいい人たちばかりだと。そしてキリッと背筋を伸ばして一度深呼吸をした後、自己紹介をする。

「え、えっと、こちらこそよろしくお願いします。イギリスのメルディアナ魔法学校から来ました。ネギ・スプリングフィールドです。短い間ですがお世話になります」

「おう、立派にご挨拶できました。『上出来、上出来！100満点』と言いたところだけど、今のはマイナス100点です。どうして

「わかるかなネギ君？」

「ええっ！ いきなりマイナスですか！？」

「ほら5、4、3、2、1、はいどうぞ答えは？」

「ぼ、僕の方がお世話にお世話になるのに挨拶が遅かったから……ですか？」

「うーん、それは俺が君が喋り出そうとするのを遮っちゃったからね。君が行ったことをもう一度思い出してご覧？」

「えっと、『イギリスのメルディアナ魔法学校から来ました。ネギ・スプリングフィールドです。短い間ですがお世話になります』って感じだったはずですけど、もしかして僕、日本語を間違ってますごく失礼なことを言ってしまったか？」

「ブー！ さらにマイナス100点」

鼻頭に人差し指を押しつけられながら、「えーマイナス200点ですかぁ。そんなぁ」と嘆くネギ。

「じゃあ刹那ちゃん答えは？」

そのやり取りを見ていたゆきが話題を振る。

「いきなり私ですか！？ ネギ先生の挨拶は、ベストとは言えないかもしれませんが、礼儀正しく特に問題はなかつ……痛っ！！」

「刹那？」

目線は笑ったまま和葉は左手でチョップを振り落とす。その手には魔力もかなり込められており、常に肉体強化をしている刹那でも痛みを感じるレベルだった。そんなに不味いこと言ったのかと真剣に考え直す。そしてようやく質問の意図に気付くと、わずか涙で目を潤ませながら情けない声を出す。

「あ。ま、まほ……ではなくて、そのメルディアナの学校のことを口にするのは不味いかと思います」

「はい正解！ 頼むぜ刹那」

「申し訳ございません」

「メルディアナ……ああ、そうか」

「わかったかなネギ君。ここは今まで君が生活してきた世界とは違う。君が勉強してきたことや、お父さんのこと、背中に背負っているソレのことは知らない一般人が住む世界だ。だから、それらのことは絶対に人前では口に出してはいけない。いいね？」

コクコク、と頷くのを確認してから言葉を進める。

「君がソレを背負っているのを見てから俺が周りに人が君の『迂闊な言動』に気づかないようにしているけど、これがなかったら君の修行はここで終わりだったのかも知れないよ？ 今までの勉強も大事だったけど、こちらの世の中で暮らしていく術を学んでいくのも大事な修行だ。君が10歳ってのは理解したうえで厳しいことを言うけど、一般人に、いや他人に迷惑をかけない。これが世の中の常識だ。特に君は短い間とはいえ教師として人の上に立ち指導する立

場になる」

修行のこと、教師のこと、色々としヨックを受けるであろうことを考え、ネギに言葉の意味を再確認する時間をとってから再び話す。

「だからそれを君に少しでも早く教え始めるため君を予定より早く呼んだんだ。人ごみに出て買い物をするのも、みんなでご飯を食べるのも、子供らしく遊ぶのも、これからの生活の全てが勉強だ。いっぱい教えられるよう俺も努力するから、一緒に頑張ろうなネギ君？」

「はい。僕は少し思い違いをしていたのかもしれませんが。立派なお父さんみたいな人を目指す前に、立派な先生になってみせます！どうかご指導よろしくお願いします」

差し出された右手をしっかりと両手で握りしめ、純粋な瞳で見つめるネギ。上目づかいよりも、お姉さんたちから少し蔑まれた目線で上から見下ろされるのが好きだと、クラスで堂々と公言する和葉は、自らの性癖の新たな一面を確認して下唇をかみしめる。萌え萌えキュン？　とかやってほしいと切実に願ってしまう自分がいた。

「やつべえ。すっげえかわいいな。何この生き物。俺、シヨタ萌えだけはないつもりだったけど、これには萌えポイント1点進展せざるを得ない」

そう言って強く胸元に寄せるかのようにハグする和葉と、アワワ、となるネギ。

「萌えポイント？」

「ネギ君。和葉はたまに変なこと言うから気にしないでいいよ。それにしてもネギ君って昔の和葉を見てるみたい。和葉は一体どこで間違ったのやら。今度はお姉ちゃん、まっすぐな子に育てるからね」

「ひでえ言われようだな俺」

「ゆき姉様それはあんまりでは……」

そんな声も気にせずに、ネギを和葉から引き離し、よしよし、と撫でる。俺のネギを返せよ、などと小声でブツクサ言いながらもテンションを戻して話題を切り替える。

「というわけでネギ君。これからのスケジュールだけど、昨日までに届いた君の荷物はもう開けて住めるようにしてあるから今日は自由行動ということで、まずは日本の観光をしよう。明日から関係者に顔合わせしたりして、明後日から7日間はきつちりと、日本の教育方法について現役の先生に教えてもらったり、授業の予習や模擬授業をやってもらう。ちなみに模擬授業は俺と刹那が生徒な」

「カズ君！ それってどういう」

「あれれ？ この前の中間テストの成績、木乃香ちゃんから聞いたけどまた下がったんだって？ 私は古典と英語ぐらいしかできないけど、和葉や木乃香ちゃんにもっと頼ってれば結果が違ったんじゃないのかな？ ……かな？」

「刹那？」

「刹那ちゃん？」

「はい」

二人の威圧感に押されて、ただ返事をする。学年では下から数えたほうがいい成績ということを知った二人は大層立腹なようだった。頭の出来が違うのです、と反論したかったが、後でどんなお仕置きが待っているのか怖かったので刹那は口をつぐむ。

「じゃあ気分変えてまずはどこへ行こうか。俺らが適当に連れまわしてもいいけど、せっかく日本に来たんだしネギ君。どこか行きたいところとか、食べたいものはあるかい？ 寿司でも天ぷらでもなんでもいいぜ？」

「あの、僕。日本にしかないハート型とかネコさん模様のオムライズが食べてみたいです」

とても純粋な声から出てきたのは、どこか違う世界の大人たちが口にしようなメニューの名前。3人は絶句してしまう。日本の何をこの少年は学んだのだろうと。

「日本にしかないオムライスってケチャップで絵を描くやつ？」

「もしかしてメイドさんがいっぱいいるところなの？」

和葉とゆきは確認をとる。

「は、はい多分それです！」

自信満々に答えるネギを見て和葉とゆきは目を合わせる。

「和葉？ この前ネギ君に何か変なものを送ったりしなかった？」

「ゆき姉？なのはシリーズDVD全巻を送っただけで、俺ちゃんと考えて送ったよ？ 題材からしてとっつきやすいだろうし、日本の文化の理解は深めておいた方がいいかと思っただけなんだけど。それに後で教育的考えがあつて……」

「言い訳しない！ お姉ちゃんは和葉みたいに残念な子に育てるつもりはありません！」

「ゆき姉ひでえ。自分もコスプレのままで出歩いたりするくせに俺だけかよ」

「ネギ先生？ 一体メイド喫茶なんてどこで知ったのですか」

「あの、近衛先輩が送ってくれた日本のアニメの好きなキュラクターについてインターネットで調べていたら、“秋葉原”って街にたくさんグッズがあるって」

「秋葉原を既に知ってたか。俺でさえ知ったのは11だというのに恐ろしい。てか俺っていつの間にか先輩なんだ」

「はい。近衛先輩は小さい時からすごく立派な、ま……じゃなくて立派な人として活躍しているから、『お父さんを目指すならまずは先輩みたいにならなさい』って、おじいちゃんが言っていました」

「うーん、俺は君のお父さんとは違うタイプの人間だけど、先輩ら

しく面倒は見てやるよ。話を戻そうか。確認するけどネギ君は秋葉原のメイドカフェでオムライスを食べて、リリカルなのはのグッズを買いに行きたいんだね？」

「はい！」

「何を買いに行きたいの？」

「フエイトちゃんっていう大好きなキャラクターがいて、その子の抱き枕がほしいんです。僕、寝ぼけてすぐに人に抱きつく癖があるみたいなんですけど、ネカネお姉ちゃんはいないし、抱き枕ならお姉ちゃんがいなくても大丈夫かなって」

抱き枕というフレーズに一瞬ひるむ和葉。これは教育の方向性が間違っていたというより、適性を見誤っていたのだろつかと本気で心配する。オタクであることに誇りは持っているが、ここまで純粋な子供が毒されていく姿を見るのは流石にいたたまれない。

（ゆき姉、刹那、こらパスだ。多分R - 18のようなグッズが並んでいる店にしか、抱き枕は普通置いてない。偶然にも健全な枕を見つけたんだろうが、そんな店10歳児は連れて行けない）

（もちろんわかってると思うけどR - 18って13歳もダメなんだよ？）

（どうしてそのようなことに詳しいのか色々お聞かせ願いたいのですが、返答次第では……斬ります）

（アレ、刹那？　なんか鶴子姉が被って見えるのは俺だけ？　抜くなよ、ここで抜くなよ！）

「ネギ君、抱き枕も知り合いの会社がすごくいいの作ってるからそれを送ってあげるね。和葉、“こっち側の”サンライトハートは安眠抱き枕って確か扱ってたよね」

「ああ。取り寄せとく。そうだ、オムライスと言えば上野にすごくおいしい店があるんだった」

「この前のところですか？ あそこはデミグラスが上品でよかったですね」

「ええ！ いつの間に二人、私を置いて行くななんてズルイ！！」

「ゆき姉のオフ会の日だよ。ついでに日本の動物園とか商店街とか案内してやるから、秋葉原にはまた今度一緒に行こうな！ イベントとかある時は限定もののグッズとかあるし、その日にいこう！」

「うわあゝ動物園ですか。僕イギリスでも行ったことないから、すごくワクワクします！」

飛び跳ねながらはしゃぐ姿を見て3人は安堵する。飛び級するほどの天才といってもその陰には類まれなる努力の積み重ねがあったのだろう。きつと勉強ばかりで子供らしく遊ぶことは少なかったのかもしれない。いくら英雄の息子とは言え、戦場育ちというわけではない。一般人としての生活、普通の子供としての生活をこの子は少しでも知るべきなのだ。

はしゃぐネギと、じゃれついているゆきの姿を見守りつつも和葉はポケットに携帯を突っ込んだまま、光精霊による画面情報のモニターを行いながら、インターネットで“クラス全員の右手がお世話

「 becoming a shop ” のサイトから、ネギのためにさっそく抱き枕を購入した。

その日の晩には金に物を言わせた “ 超 ” のつく速達により、小学校時代の制服姿のフェイト・Ｔ・ハラオウンの、パンチらどころかヘソチラもない “ 極めて健全な ” 抱き枕がネギにプレゼントされたのは男二人だけの秘密である

その日は老舗の洋食店でオムライスを食べ、動物園を見て回った。パンダも元気に起きて愛くるしい仕草で竹を食んだり遊んだりしている姿を見ることができ、ネギは大満足の様子であった。他の面々も楽しめたようで、和葉は刹那に動物キャップをアレコレとかぶせて弄んだり、ゆきはゆきで、どこかへ去ってしまい、コスプレサイトのネタとして、着ぐるみを大量に購入し郵送していた。

ペンギンのマスコットを追いかけて消えたゆきをおいて3人はベランチに腰掛けクレープに舌鼓を打つ。お互いにイチゴ味とブルーベリー味を交換する姿や、和葉の口元のクリームを刹那がふき取るの様子を見て、ネギは何気ない質問をする。

「 あ の、さつきからずっと気になっていたんですけど、近衛先輩と桜咲さんって恋人同士なんですか？ 」

「 恋人なんですか？ 」

一瞬の動揺も見せずに和葉はさらっと刹那に矛先を向ける。遊ば

れていることをわかりつつも、憤慨することもできず、しどろもどろの口調になってしまう。

「その、恋人というかなんというか、いえ私が好意を抱いているのは認めますが、そのもつと複雑でなんというか。その」

「もつと大人な深い関係かな？　まだお子様には早いよ」

勝手に笑いながら締めくくり両脇の二人の頭をなでる和葉。「うん、まだ僕にはわかりません」と返すネギに「ゆっくり大人になれ」と言いながら、しばらくの間和葉は放心状態になっている刹那を弄んでいた。

ネギ来日初日。本当に平和な一日が流れていた。

しかしその平穏はすぐに崩れ去ることになる。

「朝倉、聞いて聞いて！ビックニュースよ。超ビックニュース！！
噂の木乃香のお兄さんと桜咲さんがデキてるんだってさ！ 目眩
がしそうになるほどのラブ臭を感知したから間違いないわ！ しか
もなんか外国のシヨタを隣に引き連れて遊んでるし、なんかすごい
複雑な大人の関係っぽいよ！ いやゝ今日は動物園に獣耳の題材を
探しに来たつもりだったけど、管理人さんのコスプレも見れたし、
ネタも仕入れたし大満足。あの謎の外国人少年とお兄さんのハグ姿
とかもう次の新作は決定よ！ 構図は完ぺきだわ！ またあとで詳
しく報告するから、そっちはそっちでよろしく！！」

第18話 狂い始めた運命（後書き）

和葉も予想外のオタク化の進んだネギ君でした。

和葉：なのは

ネギ：フェイト ファン

でも和葉の戦闘スタイルは基本的にキャラ＋ティアナです。

そして一般人初のクラスメイトはパル登場。早速つかまりました。
そんなネギ&和葉の運命は誰にもわかりません。書くなよ？ パル
頼むから書くなよ？

第19話 家族（前書き）

活動報告にもありますが、旧題「お狐様と天災魔砲少年」から「新
旧世界革命記 魔砲少年サブカルネギま！〜英雄の息子たち〜」へ
タイトルがかわりました。今後ともよろしくお願いします。

今回は長め、というかキャラを出し過ぎて描ききれてません。作者
の練習で感じます。

それから今回に限りコーヒーマシンのブラックをお手元に置いて読まれる
ことをお勧めします。

超展開万歳！ いつの間にかこうなってたのです。

第19話 家族

第19話 家族

日曜日。ゆきは何か用事があるということで、ネギを連れて和葉と刹那は学園長室に挨拶へ向かった。部屋にいたのは高畑、明石、瀬流彦、刀子、ガンドルフィーニ、弐集院といった面々。ネギの教育担当である。

軽い自己紹介の後、ネギが高畑が出張で不在のことが多い2-Aの代理教師として任命された。教員免許に関する追求などは和葉は行わず、代わりに徹底した教育プログラムを学園長とネギに対して提示する。

日中はゆきによる一般社会への適応のための魔法隠匿などの授業と軽い体力づくりのための運動を行い、夜は明石と瀬流彦が主となって、外界との時間差が3倍速の和葉のダイオラマ球を用いて中で9時間分を授業方法についての講座。および刹那と和葉に対する模擬授業にあてるとというのが明日からのスケジュールだ。

「って感じで、爺さんどう？ おまけで昨日は少し魔法障壁を改造しておいたけど、魔法の才能というより、理解力が高くて飲み込みが早いから下手な大学生よりずっといい実習生になれると思うよ」

「うむ和葉に任せて正解だったわい。このスケジュールは完璧じゃのう。あとはネギ君、お主の頑張り次第じゃ。しっかりと励むように」

「はい！ 必ず皆さんみたいな立派な先生になってみせます！！
僕頑張りますからよろしくお願いします！」

ネギは深々とお辞儀をする。本当にいい子じゃないか、ここにいた誰もがそう思い、英雄の息子だからということ抜きにしても、教育実習生、約1カ月の代理教師として立派に職務を果たせるように指導しようと思心の中でそれぞれが誓った。

学園長室から去り、女子中等部の玄関から少し出たあたりで和葉の携帯がポケット越しに鳴り響く。着信音は流石オープンオタク、まどか マギカのOP「コネクト」をためらいもなく設定していた。しかし何事にも意図を持たせるのが和葉。一般人なら普通の曲と思うであろうこの曲を、聞いたときに反応するかどうかで同士か否かを見分けるているらしい。刹那はもちろん後者、ネギも“まだ”後者である。

「はい、もしもし？」

「もしもし、かずくん？　ウチやねんけど、もう用事は終わったん？」

「おー木乃香。さつき爺さんから開放されたところだけど、どうした？　昼飯でも一緒に行くか？」

『せやねん、一緒に食べよ。それから、せつちゃんと噂のネギ君は一緒にいるん?』

「2人ともここにいるぞ、今女子中等部の正門出たところ」

『よかったわ、そのまま二人も連れてきてな。今から場所言つな。大学の学生会館6号館の2階の大会議室や』

「大学の学生会館6号館の2階の大会議室? とりあえずわかった。すぐに向かえばいいのか?」

『うん。急がんでええけど、ちゃんと連れてきてな。ほなまた』

「じゃあ後で」

そう言つて携帯を切ると、二人に向つて声をかける。

「刹那、ネギ君、今から昼飯に行こうか。木乃香、俺の双子の妹だけど何か用意してくれてるってさ」

「何かつて何ですか?」

「まあネギ君。楽しみにしときなつて」

そう言いつつ頭をポンポンと叩く和葉、手が届きやすい身長のため既に頭を弄るのが癖になっているようだ。

太陽が一番高く昇るころ、目的の大会議室にたどり着く。飲食店でもないところに呼び出し、ネギがいることを確認した木乃香の言動から、和葉は今回の趣旨を理解していた。よってネギにその扉を開けさせる。

「「「麻帆良へようこそ！　ネギ先生！！」」」

迎えるのは30名近い女子生徒、ネギが受け持つことになる2 - Aの生徒たちだ。

パン、パン、パン、とクラッカーの音が鳴り響く。クラッカーの中身の紐や紙吹雪は宙を舞い。和葉、刹那、ネギの頭に雪のように降りかかった。

そのなんでもない光景を見て和葉はネギを内心褒める。ネギは音に驚きながらも、コンマ秒のレベルで直ぐに風の魔法障壁を解除していたのだ。ネギは対物の障壁は風属性しか扱えないため、下手をすれば紙吹雪が不自然な方向に舞うなどして不信感を抱かれる。かといってネギは立場的にいつ存在を狙われてもおかしくない身である。そこで和葉は障壁のオンオフの切り替えを徹底的に昨夜仕込んだ。障壁の境界面に何かが届いたとき、危険性のないものをすぐに

判断して解除するといった具合だ。感応能力は和葉の得意分野であつたし、新しく魔法を覚えるわけではなく術式を少し加えるだけであつたので、ネギの才能もあり見事に実用の域に達していた。

「うわあああすごい!!」

眼鏡に絡んだ紐を取りながら周りを見渡すネギ。年上の女子生徒たちの人数もだが、会議室の白い長机の上に並べられた料理の数々に、壁に取りつけられた色とりどりの折り紙のリングや花の飾り。このようなパーティとは無縁だったネギには初めての光景でただただ見惚れるばかりだった。そしてこの集まりのようやく主旨を理解する。

目をやった先には「ネギ先生 日本へようこそ?」と書かれた横断幕が壁に飾り付けられていた。

「僕のためにこんな式を?」

「そうですね。ネギ先生。私たちが2・A生徒全員ですわ。木乃香さんから1週間早く来日することを伺ったので、ぜひ早く馴染んでもらおうとの皆の総意でこの会を開かせていただきました。それから私、委員長の水田あやかと申しますわ。公私ともによろしくお願ひしますね」

はあはあ、とだんだん息を荒げる水田を見て、ツインテールの少女が間に割って入る。

「いいんちよ。あんた息遣いが気持ち悪いわよ。シヨタコンは離れなさい！」

「な、何を言うのですか！ アスナさん。あなたこそオジコンではありませんか！」

「オ、オジですって！ あんたのその口直してやるわ！」

そう言つて雪広の口をに手をつ突っ込んで広げる神楽坂に対して雪広もやり返す。

「アシユナさんこしよ、その趣味と根性をたたき直して差し上げましゅわ〜！」

乱闘寸前になる二人をさておいて、双子の鳴滝姉妹が呆然とするネギの両腕を引っ張り連れていく。

「さっ、せんせーどうぞどうぞ！ ぼくは鳴滝風香だよ」

「私は鳴滝史伽よろしく！ ほらっ 主役は真ん中！」

それからは周囲を生徒たちで囲まれ質問攻めだった。

「何歳？」

「どこから来たの？」

「年上のお姉さんは好き？」

「もう精通はしたの？」

「柿崎何言ってるんの馬鹿！　こんなの無視していいからね」

「日本語どうやって勉強したの？」

「とにかく肉まんを食べるアル！」

「ええっと10歳で、イギリスから来ました。それからウェールズにネカネお姉ちゃんが……」

その様子をほほえましく思いながらも、和葉は肉まんを頬張りながら、ずっと抱いていた疑問を口に出す。

「なんで俺が呼ばれたんだ？　確かにネギ君とは一緒の部屋で面倒

を見てやっているけど、別に俺はお呼びでない気が……すっげえアウェー」

「でもいつものパーティだったら女子寮か教室で行うのですが、わざわざ会議室を貸し切ったのは、まだ小さなネギ先生というよりもカズ君を気遣っているような気がします」

「いやゝ覚悟した方がいいよ。和葉、刹那ちゃん」

「ゆき姉いたの!？」

スツと背後から声をかけられたことに対して驚く和葉。やはりこの人にだけは敵わないと感じる。

「ゆき姉様、覚悟とはどういったことでしょうか？」

刹那が疑問を呈した直後、ネギの方に集まっていたハズの視線が、何故かこちら側に集まっていることに気づく。

「じゃあ次はお兄さんの番だね。取材は私、新聞部の朝倉和美が仕切らせていただくよん♪」

テーブルコーダーとメモ帳を携えたパイナップル頭のキツネ目少女、朝倉和美が切り出す。

「で、ラブラブなそのお二人さん。ハジメテの感想をお聞かせい

ただけますか？」

空気が固まった。

二人の顔は強張るのと対照的に、他のメンバーの目つきは真剣になったり、ニヤケたりと様々な反応であった。

「は？」

「な、何をそんな破廉恥なことを！！」

「でも私、二人は『大人の関係だ』って確かにこの耳で聞いたんだけどな」

触覚のようなものを生やした少女、早乙女ハルナがニヤケ顔で言う。

「で、やったの？ やってないの？」

「で実際のところどうなの？」

「どこまで行つたの？ Aはもちろんやったよね？ B、まさかCまで経験済み？」

質問はその後も怒涛の勢いで押し寄せて来た。

一人二人に知られたのなら、どうとでも誤魔化せるが、これだけの人数に迫られると幾ら和葉でも手が負えない。刹那の頭はオーバ―ヒートして意識がどこかへ行っている。ゆき姉の助けは借りれないし、明日から学校に行ったら敵だらけだったという事態も十分にあり得る。並列処理で様々なパターンをシュミレートしても、社会的に死亡フラグしかたっていない。このままうやむやにしておけば、あちら側から包丁を持って“彼女ら”に刺されないと限らない。そしてあらゆる条件を検討した結果、大きく深呼吸する。

「覚悟決めつか。こうなりや覚悟と勢いだけだ。刹那！！」

「はい!？」

いきなりかけられた言葉で思考が現実に戻り、和葉と向き合う刹那。周りも良く聞き取ろうと沈黙する。

「もう今更恋人になってくれなんて言えないけど」

「結婚しよう刹那」

「えっ？」

[illegible]

あまりにも突飛な展開に刹那を始め誰も思考が追いつかない。必死で誤魔化すか、観念して好きだと認めるかの2択だと考えていた。周りもただ叫ぶだけである。

「今すぐにつて訳にはいかないけど、もう少し大人になったら俺の嫁さんになってくれ」

先ほどまで潤っていたはずの喉や口は渴き、手のひらどころか体中から緊張で汗が流れ出そうな気分だった。

断られるとは思っていなくとも、それでも怖い。自分の心情を明確に口にすることが怖い。

しかし伝えることが怖いのではない。伝えられないことが怖いのだ。

皆の前で伝えきれない程度の覚悟や気持ちだと思われるたことはない。

何だかんだ言いながら、自分でもこのままの関係を続けるのは卑怯だと思っていた。

あのときは確かに成行きだったかもしれない。単なる刹那の勘違

いだったのかもしれない。

好きと言われたから好きになるという、どうしようもなくダメなパターンなのかもしれない。

でもそれでもいい。もう決めた。今、決めた。

気持ちなんてものは常に揺らぐし、自分でもしっかり把握できるほどシンプルなものじゃない。

だから、今ここで口にすることでそれを明確な形にする。するのだ。

言葉を選ぶセンスがなからうが、二人の絆は“あのとき”が始まりで、“その言葉”こそが全てだ。

和葉は言葉を振り絞る。

「これからずっと俺の『とくべつ』でいて欲しい」

「……カズ君は後悔せえへんの？」

嬉しいよりも、どこか物哀しそうな雰囲気漂わせつつ、しかし落ち着いた表情で見上げる刹那。

「するもんか。死にたいほど恥ずかしいけど、ここにいる全員の前で誓う」

「俺が刹那を『とくべつ』にしてやる。だから俺も刹那の『とくべつ』にしてくれ」

本当の気持ち。誰よりも和葉は必要とされたい人間なのだ。

絶対に裏切ることのない信頼と、無償の愛をどこまでも捧げてくれる人に、自らも同じ誓いを立てることで、自分の価値を肯定し続けてくれる人と共にいたいと思う。

「うん。ええよ」

彼女にとっても答えは全てははじめから出ている。望まれるのなら

そうあるうと全力で努力するし、事実そうしてきた。

和葉の望みは“対等な”関係。

今までの“主従”関係は和葉に、どこか不安を与えていたのかもしれない。盲目的に従う今までの関係が、刹那を都合よく誘導しているかもしれないと悩ませ続けたのかもしれない。

だから、こう答える。

いくら嬉しくても涙など決して見せない。

それが当然で、その関係が当然であるように。

刹那はいつも通りの笑顔で答える。

「ウチは……私は貴方の『とくべつ』になります。そして貴方を私の『とくべつ』にしてあげます。だから私は貴方の隣を歩かせて下さいとは言いません。貴方の望みだからではなく私の意思で、これからずっと貴方の隣を歩いていきます。それがこれからの新しい……私たちの『とくべつ』な関係です」

そして二人の言葉の距離は近づき、その影は重なった。

「おめでとう桜咲さん！」

「ヒューヒューお熱いねえ？」

「おめでとー！ー！」

「結婚おめでとう！ー！」

「キャーはずかしー」

「もうこれ結婚式にしちゃおう！」

「そーしよー！ー！」

「「「おー！ー！」」」

「桜咲しゃん。私感動したよ」

「やばいよ。これ、涙出そう」

「二人ともお幸せに」

「いいな。私もこんな素敵な彼が欲しい」

「美砂！ あんたはもういるでしょ！」

正式なカップルの誕生を祝う言葉で会場が溢れかえる。

その後の周囲の反応は実に様々だった。

「ううつ。ウチのかずくん取られてもうた。でもせっちゃんやつたら許したる。応援するえ」

笑顔でポロポロと涙を流す木乃香と、木乃香の同室の少女、神楽坂明日菜は刹那の右手を手を両手で掴みながら声をかける。

「お兄さん！ 私勇気をもらいました。ありがとうございます！
刹那さん、私も今度頑張るからね！」

「刹那の旦那ってことは刹那よりも強いアルか？」

「どう見ても拙者の目では一般人にしか見えぬでゴザルが、それも力量の表れかもしれぬな」

「なら、どっちが強いかな勝負アル」

「今日は空気を讀むでゴザルよ。古」

「『とくべつ』にしてやる、かあ。こんなのドラマぐらいでしか聞いたことなかったけど實際聞くとすごいかったいいね」

「うん、一生に一度は言われてみたいよね」

明石教授の娘、明石祐奈は羨ましそうに刹那を見つめる。佐々木まき絵はネギの方を凝視しながら答え、指を咥えた口元はよだれが垂れている。

「まあ、来週の予定が何もない私たちには縁のない話だけだね」

肩をすぼめるも大して落ち込む様子を見せない大河内アキラ。

「アキラそんなこと言わんといて。悲しくなるわ」

対照的に去年振られた和泉亜子は鬱モードのループに思考が切り替わり、だらしなく壁に寄り掛かる。そんな彼女の肩を持ち励ますように、明石は拳を突き上げ声をあげる。

「だったらこのかのお兄さんに男子中等部と合コンをセッティングしてもらおう！」

「いいね。それ。彼氏の前に、彼氏候補を探すのか」

「美砂は彼氏いるじゃん！　また言わせんな！」

「あらやだあ。円、嫉妬してる？」

「私はネギ君でいいけどね」

運動部4人組にチアリーダー組が加わり、自らの恋を模索するのであつた。

「なんだあの腑抜けた顔は。全く。幸せそうな顔をしていては近づけないではないか」

正統派ゴスロリ服を着飾ったエヴァンジェリンとメイド服の茶々丸は会場の隅にいた。エヴァンジェリンはフライドチキンに被りつきながら、憂さを晴らす。その光景を珍しいと新たな独立フォルダに映像を茶々丸は記録する。

「マスター嫉妬ですか？」

「断じて違う！」

「なんか超展開すぎて付いて行けないネ。接触する機会を見失なっ

たヨ」

「超さん。それギャグですか？ まあ今日は無理ですねえ」

肉まんを差し入れたところまでは良かったものの、その後の話につなぐことができず不満げな超とそれをなだめる八力セ。

エヴァンジェリン組と超組も、まさかの展開に接触を諦めた様子であった。

「ダ、ダメよー！ カズ×ネギ以外私は認めない。いや妥協してリバも可！ー！」

「黙るですよハルナ」

結婚おめでとうムードにも関わらず、とんでもないことを言う早乙女。黒酢メロンミルクという名の怪しいパックジュースを口にしながら、綾瀬夕映がそれに突っ込みを入れていた。

「いや、描くわ。何と言われようと描くわ。絶対にこれは売れる！
おお、イメージが降りて来てたあああ！ー！」

「黙れよ腐女子。にしてもまさかあの桜咲に男ができるとはなあ…。
…。末永く爆発しやがれ。う、羨ましくなんてないんだからな」

そのやり取りを見ていた長谷川千雨がボソツと呟く。

「ちうたんも可愛いんだから、その気になれば彼氏ぐらい簡単に作れるでしょ？」

そう言いながら千雨の伊達眼鏡を外したゆきはそれをかけて見せる。

「か、管理人さん。なんでその名前を知ってるんですか！！？」

眼鏡を取り返そうと手を伸ばすも軽いステップで避けられてしま
う。

「もうゝわかってるくせに。今度秋葉原か池袋にお洋服買いに行かない？　ちうたんに色々教えてほしいな」

おめでとうムードが一応終息した後、今度はより厄介な案件抱えて早乙女が和葉に迫ってきた。目の輝きがおかしい、怖い、というより気持ち悪いレベルだ。

「で、ネギ君とはどういう関係なの？　抱き合ってたよね？　確かに動物園で抱き合ってたよね？　はあはあって変な息しながら欲情してたよね？」

「何を言ってるですか」

「……黙れよ腐女子」

しかし和葉は先ほどの告白でいつものノリを取り戻し、軽くそれをあしらう。

「じゃあ今からネギは家の息子だ。なあ母さんや。3人で家族になるうか」

「息子ですか？」

「でも養子って年齢とか色々と問題があるんじゃない？」

「まずは気持ちの問題ですわよ」

周りが色々と疑問を呈するが、ネギはきちんと自分の気持ちを伝える。

「ごめんなさい。どこにいるかはわからないけど、僕の本当のお父さんもお母さんも一人だけしかいない大切な人だからお断りします」

そう言って頭を下げるも、再び目線を合わせて瞳を潤ませながら話す。

「でも先輩たちはただ優しいだけじゃなくて、ちゃんと怒ってくれたり、諭してくれたり、一緒に遊んでくれたり、まだ二日目ですけど本当の家族だったらいいなって思いました」

「だから、だから、その……これから『お兄ちゃん』『お姉ちゃん』
って呼んでもいいですか？」

わずかに涙を流しながらの上目づかい、はにかみながらモゾモゾ
と胸の前で指を弄る仕草、その全てが和葉の「萌えポイント」を的
確に突いてきた。体が勝手に動いてネギを胸元に抱き抱える。

「ネギ君。もう一度呼んでくれないか？」

「お兄ちゃん。その、少し苦しいんだけど」

「ネギー！ お兄ちゃんは今もうお前を離さないからな……！」

「ギター！ これよこれ！ これを待ってたのよー……！」

「止めるですハルナ！ ほら、のどかも止めて下さい！」

「パル、駄目だよそんなのここで書きちゃ……！」

必死の抑止もむなしく筆は順調に進んでいく、二人の死亡フラグ
がここに一つ確実に立った。

「はああああ。何たる眼福、天使の声でしょう！ これでこの世
に私思い残すことはありませんわ」

「いいんちよ！ 保健委員はどこ、って亜子ちゃん！！？」

「きゃー！！ 亜子すっかりしてええええ！！！」

雪広は鼻血を拭きながら失神したうえ地面に後頭部をぶつけて強打。頼りの保健委員、和泉亜子は血が苦手なため、その光景見て同じく失神していた。

その後も色々あり、18時ごろまで会は続いた。

その晩、ネギがしっかりと寝付いたことを確認した後、刹那はコアの入ったマグカップをテーブルに置くとソファ——和葉の隣に腰掛ける。

「今日は大変でしたね」

「全くだ。死ぬほど恥ずかしい思いをさせられたよ。ぜったいこれからずっとネタにされるぜ」

「でも嬉しいですよ。この日のことは絶対忘れません』とくべつにします」

「そうだな。これで人目を気にせずこうできるんだし」

和葉は正面から首に腕を回し、力強くハグをする。しかしその触れ合った体から伝わる微かな震えは、恋人同士の抱擁ではなく、まるで母親を見つけてすがりつく迷子の子供のようだと刹那は感じた。

「それに覚悟ができたよ」

「……話して下さい。大切な話があるんですよね」

そう言つて、いつも撫でられてばかりの刹那が逆に、和葉の首に回した右手をあてて軽く撫でる。

「ああ。全部話すよ。これから俺がやろうとすること。木乃香やネギ君が置かれている状況。俺の能力のこと。ゆき姉のこと。隠し事はもうしない」

「……そんなことをずっと独りで？」

「独りじゃないさ。俺とフェイトは早くからそれを知っていて、その上で解決策を考えられるだけの頭があっただけの話だ。実際はみんなに動いてもらったからこそ、ここまで来れた」

完全に冷めてしまったココアの残り一口を飲み干すとテーブルに置いて

「刹那のおかげでお木乃香の心配もしなくて済んだしな」

と、ヘアピンを下した髪を撫でながら言う。

「俺が今、頭の中で描いているこれからの物語は、サウザンドマスタミみたいな一人のヒーローの活躍を謳う英雄譚じゃない」

「世界中の一人一人を巻き込んだ、“繋がり”ではじめる物語――
――革命記だ」

「一緒に背負ってもらうぞ、刹那」

「ええ。それが妻の務めですから」

「さらつと恥ずかしいこと言つようになつたな。色々想像しちゃまつたじゃないか」

第19話 家族（後書き）

とりあえず一言。

主人公モゲロ。

ただ問い詰める回だったつもりが、告白しやがったよこいつ。
作者の意図を離れて突っ走ってます。

まあ自らハーレム✓放棄は偉い。

だからこそ女難も色々待ち受けているのですが、死なない程度に
頑張ってくれ。

刹那との関係性に変化を持たせつつ、色々と面倒なことを仕込んで
おいたのが今回です。ただの告白回の割には色々ターニングポイン
トになるかと思えます。

ネギ君はすくすくと成長していますが、元老院から守れてもハルナ
から守れなさそうなフラグびんびんです。（社会的に）生き残って
くれ！和葉、ネギ！

第20話 研修開始（前書き）

半分に区切って更新。短め。
忙しくて他の作品読んでないや……。

第20話 研修開始

第20話 研修開始

明くる月曜日。ネギの早期訓練の1週間の開始の日である。早朝5時半から和葉、刹那、ネギの3人の一日は始まった。ゆきは朝の新聞整理や掃除、郵便物の仕分けなど管理人業務のため不在だ。

和葉が個人で所有するダイオラマ球は3つ。そのうちの時間の流れが現実世界と同じ一倍率のダイオラマ球の中。簡素な板造りの二階建ての家と、その前にある雑草が生えているだけの、庭と呼ぶのもおこがましい約15m四方の空き地。外で結界を張るのも面倒だという理由により、ここで朝の稽古を3人は行っていた。

和葉は基本的に後衛である上、刹那やゆきといった優秀な前衛を抱えているが、体術ができるに越したことがないため、気と魔力の使用を禁じた純粋な体術の訓練を刹那と行っていた。これは和葉の師であるゆきの指導方針である。和葉は気の総量が少なかったり、せっかくの感応能力も体が付いて来ず生かしきれなかったりという問題を少しでも解消するためだ。

和葉は樫の木でできた身の丈ほどの杖、対する刹那は木刀を打ちつけ合う。和葉はゼイゼイと息を切らしながらも、迫りくる刹那の剣劇をひたすらさばき続ける。しかし常に和葉は防戦一方。気と魔力はお互い封じた状態であり、単純な筋力では男性である和葉の方が上にもかかわらず技量差で押されていた。その上、手加減はしても刹那の攻撃に寸止めなどない。一撃、一撃が決まるたび和葉の体に痣や血が描く細い筋が増えていく。

満身創痍ながらも組み合った状態を維持していた和葉は遠心力を利用して振り切ろうと右手を押し出し、左手を引こうとする。しかし刹那はそのまま木刀を杖の上を滑らせて右手の指を木刀の腹で弾く。人差し指に走る激痛に和葉が思わず手元が緩めた一瞬を狙い、容赦なく刹那は鳩尾に蹴りを入れる。さらに上から木刀を叩きつけて和葉の杖を地面に落した。型どおりの稽古はおるか、実践を想定した型にはまっていない攻防においても刹那にやられっぱなしであった。木刀を下して刹那は進言する。

「絶対に獲物は手から離してはなりません。無手では魔法に頼らざるを得ない今の貴方では格好的ですよ」

「いや、わかってるんだけどね。痛みで思わず」

「そのために寸止めてないのでしょう！　痛みで集中できないなど、戦いの場では言い訳になりません！！」

主、いや夫の情けない言葉に激昂する刹那。和葉はその声に委縮する。

「うう。確かに言いだしたの俺だけだよ」

「とにかく、意識がある限り私は打ち込み続けますからね」

全くどこの騎士王さんだと思いつつも、和葉は目元に入りそうな額の血を手で拭う。

「刹那ってずっとMだと思ってたけど、稽古の時だけはDSだよな」

「こ、子供の前でそういうことは言わないでください！　真面目に」

行きますよ！」

何を想像したのか耳まで紅潮した刹那は、殺気を丸出しにしながら正眼の構えを取る。

「へいへい。じゃあ真面目に……」

杖を拾うために屈む動作の直前にピシッと足元の小石を刹那の顔面に向けて蹴り飛ばす。ピシッと刹那は木刀で横に弾くが、その隙に杖を拾いながら足元を薙ぐように奇襲を仕掛ける。バックステップだけで刹那はかわすと、グツ、と一步踏み込み大上段から木刀を叩き下ろす。和葉はそれを右へ払いながら、腰を落とした状態を維持して、左肩をそのまま刹那の胸元目掛けてタックルを決める。

こうして二人は再び稽古を始めた。

その二人の様子をネギは傍らで縄跳びをしながら観戦していた。せっかくの貴重な朝の時間を無駄に過ごすのはもったいないということで、ロープを切っただけの即席の縄とびで、基礎体力の向上を行わせたのだ。体を鍛えていたという報告は受けていなかったが見たところとくに息切れもせず、30分近く跳び続けている。普通の大人でも10分間飛び続けるのは容易ではない。無意識に呼んでいる風の精霊の補助があるとはいえ、運度オンチというわけではなさそうというのが和葉と刹那の見解であった。

和葉は回復呪文で自らの情けない体を癒しながら、家から取り出した特製の軟膏を刹那に塗ってもらう。傷は1分もしないうちに痕も残さず癒えていった。その後簡素な家の中で和葉と刹那がそれぞれの部屋で作ってきたおにぎりとおかずを3人で食べる。

ダイオラマ球を出ると刹那は一度シャワーと着替えのため寮に戻り、木乃香、明日菜、和葉の4人で登校する。一人途中下車の和葉は弁当を刹那から受け取り教室に向かった。

その先が地獄とも知らずに。

和葉が不穏な空気を漂わせている教室の扉を開けた瞬間、周りをクラスメイト全員に囲まれ、しっかりと両方の扉にも鍵がかけられる。

そして涙ながらに梅原少年が詰め寄ると、それに乗じて他の面々も口々に怨みごとを叫ぶ。

「近衛。聞いたぞ。桜咲さんとできたんだってな。俺は木乃香さんと一緒にキャツキャウフフしているのを遠目で視姦するだけでも幸せだったというのに。畜生」

「おい！ 近衛どういことだ！！」

「な、何のことだ？」

「ふざけるなこの裏切り者。リア充爆発しろ」

「どうだった？ どうだった？ やっぱすごかった？」

「俺は見たぞ近衛！ サイドテールの彼女から受け取ったそれは愛妻弁当か。くそっバレンタインデーなんて無くなっちまえ」

「死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ねええええええええ。」

「そうしてくれるんだ！ この×せつがジャスティスだろ！！ 妹の幸せを奪うなんて俺は認めん！」

ところどころ聞き捨てならない言葉が含まれていたが、知らぬ存ぜぬといった顔で聞き流す和葉。その態度に逆上して剣道着を装備した4人組が襲いかかる

「我々剣道部のアイドルの唇を奪うとは許せん。切り捨て御免。ごぱあああ！！！」

「めえええええええん、ぎゃひん!!」

「うをおおおお、ぱがぁぁぁぁ!」

「去ねえ! げぐううふ!」

和葉は弁当の入ったきんちゃく袋を両手で懷に抱き抱え、足技だけで4人を沈めるが悪ノリする輩もついでに始末する。

「この×せつもいいけど、むしろ3人で。いや僕も入れて4人で。じえべぎいい!」

「その弁当は俺が頂いたぁぁぁぁ、あべらば!」

「もう間接キスでいいからお前の唇を……へぶう!」

貞操と弁当の危機は免れ、10人ほど教室で伸びている状態になると空気も一度静まった。そこでようやく和葉はまともに口を開く。

「いやぁね。みんなが知っている通り、俺は幼馴染と結ばれてラブ生活満喫で幸せいっぱいなわけよ」

「どうして近衛だけ……。畜生。俺たちにも幸せを分けてくれよ神様」

「おや、俺のこと呼んだかい？」

「お前じゃねよ」

そしておもむろに和葉はパンダのストラップのついた携帯を取り出し顔の近くでヒラヒラさせる。何も刹那とお揃いであることを自慢したいわけではない。

「ふふふ。この携帯には麻帆中女子部、しかもあの美少女軍団で名高い2 - Aのメアドが10人分ほど入っています」

「へ？」

「しかもチア部の子から明後日の放課後合コンしようというお誘いを受けていたんだけど、アレ？ 何人呼んで欲しいって言ってたっけ？ ここには特に親しい友人もないし、並中の奴らでも……」

わざとらしく窓の方に視線を向けながら話す和葉。梅原少年と橘少年は後ろからその肩をがっしと掴む。

「持つべきものは友人だよな。近衛？」

「よくやった親友！」

「俺は十分幸せだからな。今度はお前ら兄弟に恵んでやろうじゃないか。明後日は全員とか無理だけど、また大きいの開いてもらうからな。でもがつつきすぎて引かれないようにしろよ」

「やっぱり神はお前だああ！」

「神様あああ！」

「いやっほおおぅっ！ 合・コ・ン！ 合・コ・ン！」

橘少年の魂の叫びは廊下中に鳴り響いていた。

男子校らしいやり取りも刀子が来るまでに無事收拾しいつもどおりのに学校生活が始まった。しかし和葉もただ学校に行って馬鹿話に華を咲かせているわけではない。研究を進めるためにゆきの眷属である諜報用の白狐たちを式神として図書館島に放っている。彼らと同調 シンクロ することで大量の蔵書の中から和葉が欲しいものを探しあて、彼らが読むことで和葉も内容を理解する。そうして得た新たな知見で、授業を受けつつも常に頭の片隅では理論の構築にあたっているのだ。中学生としてでもなく、ネギの保護者としてでもなく、魔法世界の研究者としての活動が第一という姿勢は決

して崩さなかった。

和葉たちや他の教師陣が学校に行っている間は、ゆきがネギに対する指導を行うことになっている。早朝に用いたのと同じ1倍速のダイオラマ球において、走りこみなどの軽い運動と、一般世界に適応するための常識や心構え、魔法バレを予防するための訓練にあたった。実はこのメニューの組み立てまでには様々な問答が教育担当の間で行われていた。

ネギの一週間の事前訓練および研修の組み立て時、サウザンドマスターの息子である彼の境遇を考慮すると、「授業法や模擬授業以外の時間は戦闘訓練を行うべき」との声が高畑やガンドルフィー二などから上がった。しかし彼の莫大な魔力は無意識に風の精霊を引きつけたり、暴走させるなどの報告がメルディアナから寄せられていたため、出力の安定化や精密制御に重点をおいてネギの魔法バレを予防し社会に適応させるべきと、逆に和葉は訴える。戦いにやけにこだわる高畑やガンドルフィー二も、和葉が「父譲りの莫大な魔力があつて、それを使いこなせるようになれば確実に父以上になれる」と言つと彼らもすぐに納得した。

先日、和葉が障壁のオンオフを瞬時に切り替える方式に変更させたのは、認識に作用する術に疎く、出力の微調整が苦手なネギに合わせた応急措置である。根本的な部分の修正は自身の師であり、気や魔力の流れの微調整が和葉以上に得意なゆきに任せることで決定した。面倒見がよく子ども好きなゆきのことだ。しっかりやつてくれるだろうと和葉は期待していた。念話でゆきから逐一報告を受けている限り、ネギの魔力の微調整はまだまだ難しいが、秘匿意識の改善や一般常識に関しては素直な性格が幸いして著しく成長して

いるようであつた。

そして放課後。3倍速のダイオラマ球、主にアイテム生成の工房として扱っているレンガ造りの一室を貸し与え、式集院から教員としての心構えや指導についての注意点などをネギは食事休憩1時間を挟んで現実で3時間分を受ける予定になっている。本来ならば和葉もその様子を見ながら研究を隣で行うつもりであつたが、刹那から呼び出しがあつたためそこへ向かつた。

刹那と向かう先は郊外の森にあるログハウス。

和葉が実質的に自由を握っている相手の住处。

「ようやく動いたか『闇の福音』」

第20話 研修開始（後書き）

前回の超展開により動けなかった彼女がようやく動き出します。

ネギ君成長計画は多分順調なはずです。

第21話 悪い魔法使いたち（前書き）

2話連続投稿。

第21話 悪い魔法使いたち

第21話 悪い魔法使いたち

呼び出されたログハウスの中。

学生服姿から黒の正統派ゴシックロータというべきヒラヒラのドレスを着替えたエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルとその従者でありガイノイドのメイド服姿の茶々丸の二人と、テーブル越しに和葉と刹那は対峙していた。

「昨日はろくに話せなかったが、お前と会えて嬉しいよ。深淵の探^{デー}究者^{ブ・ダイバー}」

「こちらこそ光栄です。闇^{ダーク・エヴァンジェル}の福音」

不敵な笑みを浮かべるエヴァンジェリンと、ぺこりとその広報で礼をする茶々丸。和葉も作り笑顔で応え、刹那も無言の会釈で応える。緊迫した雰囲気エヴァンジェリンは切り出す。

「単刀直入に言うぞ。近衛。私を縛る学園結界を解除しろ。お前が術式を最近書き換えたことぐらい調べは付いている」

「登校地獄の方は構わないのですか？」

「まずは力の方だけでいい」

「そうですか。それで対価は？」

「何だ？ 結界を解除する報酬か。貴様、狐たちを使って図書館島で色々禁書を漁っているそうじゃないか。よからう、私が600年の生で集めた禁書なら貸してもいいぞ」

「ああ。それは魅力的ですが、それだけじゃ釣り合いません。私が欲しい内容のものとは限らないわけです」

「なら魔道具か？ 私に必要ないものであれば持つていけ。自由の対価だと思えば安い。それに私は人形使いだから。人形の他にもそれなりに道具や薬品の材料は各種そろっているぞ」

「それも魅力的ですが、私の会社でも道具は作っていますから大抵のものは調達できます」

「何？ 貴様、ならば何を求める？ それにその口調は止める。これまでのお前の行動を観察してきたが、好意的に言うならば私はお前のことを認めている。対等の口の聞き方でいい」

左の口角を釣り上げ、エヴァンジェリンは足を組みかえ、右足を上にする。その際、黒のきわどい下着がチラッと見えたが、動じないフリをする和葉。

そして許されたように口調を変えながら、得意の揺さ振りをかけ

始める。

「だったら、口調は直すし言わせてもらうけど。まず、とことん君は交渉事は苦手らしいね。人見知りのお嬢さん？」

「貴様はとことん人を舐めるのが好きらしいな」

「交渉事において人に何かを依頼するときはそれなりの対価が必要だ。そしてそれは要求に釣り合うものかそれ以上の価値を示すものでないとならない。これが常識だ」

眉間に皺を寄せる彼女に恐れもせず、常識を諭すように語る。そして口を開くのは奥の従者。

「そうですね。しかしマスターの持つ品々は今では幾ら積んでも手に入らない貴重なものばかりです。マスターの解放とその学園に対する容認だけならあなたの実力があれば容易いと思われれます。僭越ながら十分すぎる報酬だと思われるのですが」

「メイドさんもわかってそうで、わかってないみたいだね。今の貴方が俺にしている要求は『学園結界の解除』と『その事実を学園に認めさせること』とと思っているみたいだけどそれは違う」

「どういうことでしょう」

「何を言っている。それ以上は私は望まん。茶々丸はその後のケアについても要求しているがお前の力なぞ別に借りん。解除さえすれば、お前は下手な権力を使わずとも、自分のミスの言い訳だけ考えておけば後は私がどうにでもする」

さつきまで色々と指摘され、苛立ちながらも少し気まずそうにしていたエヴァンジェリンは強気で言い張る。何かを見落としていることに和葉が目を付けているのだろうけれども、彼女にはそれがわからない。もどかしい思いが込み上げる。

「だから違うつて。俺が学園結界の封印術式の部分に関して全てを握っているって認識は間違っではないけど」

はあ。とため息をつく。和葉は説教じみたことを話し出す。

「貴方の『自由』を束縛しているわけじゃない。むしろ『保護』しているんだってどうして気づかない？ 力を封じること危険性の認識を下げているからこそ、今まで平穩に10年以上やってこれたのでしょうか？」

「ええ。学園長から魔法先生や魔法生徒に対して、『闇の福音』には絶対手を出すな」と厳命されていました」

刹那も和葉の意見を肯定する。

「そ、それは私の報復を恐れていたただけだろう」

「それもあるかもしれないが、どんなに少なくとも5人ぐらいは今の力の封じられたあなたを倒せるだけの面子は揃っている。例えばどんな罠や道具を使ったとしても俺や刹那には敵わないだろう？」

「はい。93.7%の確率で今のマスターでは刹那さんにも勝てないと思われます」

「ちゃ、茶々丸！」

「爺さんだつて自称正義が大好きな本国の馬鹿どもの手から貴方を遠ざけるのは容易じゃなかったはずだ。何か事件が起これば、爺さんの失脚や組織の乗っ取りが起こるのは自明なのにも関わらず、ここで力を封じられた貴方が襲われて死にかけたなどという話は聞かない。確かに他の組織に対する抑止力として、世界中が恐れる『闇の福音』を抱えたいという裏が見え隠れしているけどな。でもそんなことに気づかないなんて、爺さんも全く報われないな。もっと恩着せがましくしてれば良かったのに」

「あの爺が私を保護していただと？　いいように学園の警備を押つけていただけではないか！！」

「爺さんの意図はこの際どうでもいいや。とにかく今の貴方は既に俺の庇護下にある。何かあったら真っ先に俺に責任が来るわけだ。今だってリスクを抱え込みまくってんだ。貴方がどこまで俺のことを調べているかはわからないが、今の俺は勢力争いにおいて綱渡りをしている。あちこちから有能な人間を集めてくることはできてるけど、それゆえに当然目をつけられる。自由に俺が動けるのは危険性よりも泳がせた方が都合のいい働きをすると判断されているからだ。そこで貴方を抱え込んだ時点で天秤は傾くし、開放なんてすれば世界中から敵対だ。俺を支持してくれている人たちも、いつ離れていくかわからない」

「エヴァンジェリンさん。私たちは貴方に同情はしますが、立場上協力はできません」

「くそつ。手詰まりか。権力もろとも私の力で薙ぎ払うという選択肢は取らないのだろう？」

「当然だ」

「それだけのリスクに対して私が差し出せるものと言ったら……」

「あとはマスターの体ぐらいですね」

「黙れボケロボ！」

「俺には刹那がいるし、ペドじゃないし」などと思いながらも口には出さない和葉。

しばし頬杖をついて考えたエヴァンジェリンは結論を出す。

「もういい。この話はなしだ。私たちは自分で何とかする」

そう言いきったところで、和葉はカードを切り出す。何としても彼女の力は欲しい。ただ、それに付随する厄介事は欲しくない。できるだけ都合のいい状況を作り出すための言葉をボソッと吐き出す。

「最大限に譲歩してだ。俺の部下になるなら全力で守ってやらんではない」

「私が、この『闇の福音』と呼ばれ恐れられた私が、たかが10数年生きただけのガキの駒になれと!？」

テーブルに両手を叩きつけながら怒声を上げる。テーブルの上に、

微かに残った紅茶が飛び跳ねた。

「そうだ。それくらいじゃないと他の部下を危険に晒してまで守ってやる理由がない」

「私は誇り高き悪の魔法使いだ。貴様ら光の道を歩む者とは共に行けぬし、誰かの下に付くなどありえん」

「そうか。なら交渉は決裂だ。俺は帰るぜ」

視線を玄関に向け腰を上げようとしたところで茶々丸が引きとめる。

「待つて下さい。近衛さんの研究とは一体何なのですか？」

「ようやくそれを聞いてくれるか。直接聞くのは微妙だけど君は合格だ。さっきは色々言ったけど、一番欲しいモノを交換できればお互いに良い関係を築けるしね。Win-Winと言っただろ？」

急変する態度に警戒心を上げたエヴァンジェリンは声をかける。

「お前は何を望んでいる？」

「——世界の半分を奪い取る。と言ったらどうする？」

平然と言い放つ。突然の言葉に啞然とする主従。

「は、どこの魔王のセリフだ？ 英雄の息子が世界の半分を奪うだとか？ そしてそれを対価にお前に協力しろと？」

「そのまさかさ。英雄の息子が悪の魔法使たちと既に組んでいて、世界の半分を乗っ取る計画を算段しているとしたらどうする？ しかも前世最強の英雄の息子も既に手の内にあるとしたら？」

声のトーンは高く、陽気ながらも表情はどこまでも真剣な雰囲気
を醸し出している。それに気付いたエヴァンジェリンは乗り気に傾
きながらも、聞いてはいけないことを聞いてしまう。

「その眼は本気なのか？ それにこのことを私が漏らしたらどうす
るつもりだ？」

「その前にこの場で消すよ」

ガラスのように透過通った感情のない声。

「望む答えは『はい』か『Yes』だ。それ以外なら頭を弄って記
憶を完全に消すか、残留思念も残らないようにして存在全てを『消

す
」

場の空気が凍りつく。600年の長き生涯でも数度しか味わったことのない、「死ぬ」ということを痛感させられる空気。「殺す」という意思表示の現れただけの威圧感とは別物だ。幾つもの悲惨な戦場を見てきたからなのか、幻術使いだからなのか、明確に相手に死をイメージさせるだけの視線をこの少年は放っている。

「ぶつちやけた話、貴方には消えてもらうのが組織的には一番ありがたいんだ。余計なトラブルは入ってこないし、賞金首を倒す分には爺さんたち以外誰も責めやしない。東の人間でもない俺には責められる理由がない。さらに箔も付いて俺に手出しする馬鹿も減る。要するに半分以上は貴方を『消す』つもりで来たんだ」

茶々丸が二人の間に両手を広げて立ち塞がり、そこへ刹那は割り込み夕風を構えて茶々丸の前に対峙する。刹那の目にも迷いは一切ない。「斬れ」と言われれば確実に襲いかかってくるであろう勢いだ。

「止めておけ茶々丸。お前では手も足も出まい。屈辱だが事実だ。どの道、私に選択肢はないというのか」

「研究が完成した暁にはおまけで世界の半分を分けてやる、とは言えないが、その12億分の1はくれてやる」

「この結界からも、登校地獄からも解放してやるし自由と身の安全は絶対保証する。この研究が完成すれば世界の勢力図は全部書き変わるし、俺の組織の力はメガロなんかよりも強くなれる」

「だから研究が完成するまで手伝ってもらう。今の貴方に払えるものがないならそれだけの働きを先に支払ってもらう。完全前払いだかどうか？」

「自由と安全の保証と引き換えの研究の支援か。チツ……いいだろう。契約成立だ」

迷わないわけではない。しかし、本気とわかっている分メリットも確かに大きい。デメリットと言えはいいように使われるという一点のみ。

「武力で押すかと思えば急に条件を甘くしたり何なんだお前は。世界を奪うなどと言われては話に乗らないわけがない。停滞していたこの生涯も退屈しなくて済みそうだ」

「狐の弟子だから心理戦は負けないって。世界を面白くさせるし、身内は絶対守る主義だから安心して」

「エヴァンジェリンさん。さっきは大変失礼しましたが、カズ君はお人好しすぎる位ですから信頼して下さい」

「本気の眼で殺すとか言ってたがな。本音を言ってくれる分、爺よりは信頼してやる。それにあの詠春の息子がこんな悪人だったとはな。全く世も末だ。これでは私がとんだ小物ではないか」

「ん？ エヴァちゃんはちっちゃくて可愛いと思うけど？」

「なう、うるさい！ うるさい！ うるさい！」

主人の慌てぶりを記録しながらも空気を読まず話しかける茶々丸。

「それで近衛さん。私たちは何から協力すればよいのでしょうか？」

「そうだな。まずさしあたっては君の軀を隅々まで調べさせてもらおうかな？ 色々と興味深い」

「わ、私の体でしょうか！？」

予想外の要求に回路がヒートアップする茶々丸。

「カズ君。女の子に卑猥な言い方はアカンえ」

「えっ？ 普通に動力について調べただけだって。他意はないから刀を向けるな刹那」

「夫婦漫才は止せお前ら。それで私の方はどうすればいい？」

「闇の福音の固有技法『闇の魔法』^{マギア・エレベア}の理論の詳細を教えてくれ。魂と魔法を繋げるその技法について、俺は新たな可能性を探りたい」

第21話 悪い魔法使いたち（後書き）

次回は超展開です。

第22話 最期の魔法使い（前書き）

脱テンプレを突き進みたかったんで超展開です。

第22話 最期の魔法使い

第22話 最期の魔法使い

彼女には状況が理解できなかった。

午前1時すぎ。エヴァンジェリンは自由の対価である研究支援のため、居間で闇の魔法のスクロールの制作にかかっていた。一息つくこうとしたときに訪問者は来た。

茶々丸を玄関によこし、応対しようとしたそのとき。一気に螺旋状魔力の爆発が起こり、床を抉りながら玄関から反対側の壁までをその拳は貫いた。

そして地面に倒れ伏すのは、奇襲によって上半身と下半身のが二つに引き裂かれた従者。仰向けに倒れたその体からは電気が迸り、壊れた部分から水銀が流れ出していた。

招かれざる訪問者の姿を確認するよりも先に、エヴァンジェリンはその倒れた従者の上半身に駆け寄る。

「な、何だ！ 茶々丸！ おい！！ しっかりしろ！！」

茶々丸は必死に壊れた回路を駆動させる。

「わ、私のことはもう……二、げて、くだ……い。マ……ス」

主の名を呼び終えることもなく、瞳の色は失われ、完全にその軀は停止した。

「ちゃ、茶々丸——！！！」

彼女の亡骸を抱き抱える様子をすがすがしいまでの笑顔で見ている訪問者。

「おや、お気に入りの人形が壊われたぐらいで、レディーはそんな顔をするものでないですよ。可愛いお嬢さん」

その挑発的な言葉を聞いてエヴァンジェリンは敵の姿を視認する。

シルクハットを被り、黒のコートを羽織った長身の老紳士。細く引き締まった体からは隠しきれない威圧感が放たれていた。

「貴様あああああああ！ お前は絶対に殺す！！」

エヴァンジェリンは懷からポーションの入ったビーカーを投げつける。

老紳士は即座に左ストレートで迎撃すると、その手は凍りつく。

こうして力を封じられた真祖の絶望的な戦いがはじまった。

ログハウスの周り森で二人は殺しあつた。しかし見習い魔法使い以下の魔力しか扱えないエヴァンジェリンは、茶々丸を一撃で退けることができる腕前でありながらも、存分に力を奮える相手には全く敵うはずもなかった。

可憐なドレスはあちこち破れ、下着や肌が所々覗いている。とくに右腕や両肩は肉が抉り取られており、鉄扇や鋼糸を扱うこともままならない状態であつた。

「あの闇の福音が私ごときにここまでいいように弄ばれるとはね。逆にいえばその体で良く持った方だ。流石だと誉め称えたいところだが、やはり正直残念だ。拍子抜けと言つても良い」

「くそつ……。やはり無理にでも結界を解除させておくべきだった。それでこのザマか」

「ではそろそろ終わりにしよう闇の福音。その不死の身にこの私が永き眠りを与えよう」

そう言つて彼は右拳に全ての力を収束する。

「まだ表舞台に出るつもりはなかったが、あの人だけは見捨てるわけにはいかないネ。——彼らに計画は任せるヨ」

そう独り事を言うと、彼女は右肩に固定したサブマシンガンを構え、敵を打ち砕くために引き金を絞る。

——ダ、ダダダダダダダ！！！！

無数の銃声が森に響き渡り、力を溜めていた彼は背後から迫り来る弾丸祖全て拳で撃ち落とす。

「おっとそこまでヨ！」

エヴァンジェリンと老紳士の間に降り立つのは、背中に機械を背負い、近未来的な戦闘スーツを纏った少女。

「君は一体誰かね？ 今夜は彼女と私だけの蜜月だというのに邪魔をされては気分が悪いのだが」

両手のグローブを誇りを払う動作をしながら淡々とした声で問いかける老紳士。殺気どころか何の感情のない眼。ただ突如現れた介入者のことを探るのに必死であった。

「なぜ貴様がここにいる。超！」

「茶々丸から緊急アラームが出ていたから見に来たネ。そうしたら、まさか貴方がここで出てくるとはネ。お目にかかれて光栄ヨ。ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン 伯爵」

「本当に君は何者かね。なぜその名を知っている」

「只の復讐者^{リベンジャー}ネ。なぜ知っているかと言えば貴方のことをずっと調べていたからヨ」

「復讐者？ 私は君のような素敵なレディーに対して恨みを買うつよなことをした覚えはないのだが」

「……少し黙るネ。貴方は知らなくていいことヨ」

鋭い目線を放ちながらも超は、声だけを背後のエヴァンジェリンを向ける。

「エヴァンジェリン。正直私では荷が重い。貴方だけでも逃げるネ。私が今から時間を稼ぐ。この結界から抜けて近衛和葉に助けを求めるヨ。彼は術式の変更権はあるが、行使権は学園長にあるネ。学園側の人間はまず助けに来ないが、貴方を利用したい彼なら助けてくれるはずヨ」

「何を言っている！ 貴様のような小娘をおいて私が、闇の福音と恐れられたこの私が、茶々丸の仇を前に逃げるなど、絶対にプライドが許さん！ それにお前に何のメリットがある！？」

「近衛和葉とネギ・スプリングフィールドの力になって欲しい。ただそれだけネ」

振り返り笑顔を向ける超。その顔にはいつもの胡散臭い雰囲気などどこにもない。ただ瞳の奥から切実な想いが溢れていることだけはエヴァンジェリンにも想像できた。

「答えになってない！ 超、お前の科学兵器が如何に優れているとアイツには敵わん！ 無駄に命を捨てる気か！！」

「彼らなら“未来を変えられる”。私はその未来を見てみたい。だ

から私は命をかけてでも彼らの翼となる貴方を守る。私の望みを叶える為なら、この命は安過ぎるくらいヨ」

「超？ 本気なのか」

「それに私の武器はこんな玩具じゃないヨ」

マシンガンを宙に投げ捨てた超の体から僅かな光が溢れ出る。

「おい！ 何だその光は！？」

「それは秘密ネ。私は“この身、この魂に賭けて”、未来を切り開いて見せるヨ！！！」

敵を、前だけを見据えて拳を構える超。もう振り返らない。

その覚悟に押されたエヴァンジェリンは背を向ける。満身創痍かつ血まみれの裸足のまま、冬の森を走り抜けた。

「持ちこたえろ超！ 力を取り戻して必ず助けに来る！！」

なかった。しかしここで認識を改める。この魔力の大きさは自らを倒すに足る十分な脅威であると。

「これは大したものだ復讐者。私も仕事なのでね。全力で行くぞ！」

魂を糧とする悪魔であるヘルマンは超が魂を食い潰しながら魔力をかき集めていることを察知する。持つて30分。20分も戦えば、それは“人”としての機能を失うであろう。文字通り、命がけの超に最大限の敬意を示し、本来の姿である悪魔の形に戻る。

その憎むべき仇の姿を睨みつけた超は最期の魔法を紡ぐ。

「ラストテイル・マイ・マジックスキル・マギステル———」

誰にも気づかれない結界の中、森も、空も紅に染まり、一帯が灼熱の地獄と化す死闘が始まった。

「ハハハハッ……フハハハハハハハハハ！！！！」

和葉と刹那が目にしたのは、氷原。本来森だったはずの土地には幾つもの氷柱と氷塊が突き刺さり転がっていた。

そしてそこに独り佇む黒衣の少女。慟哭の混じった笑い声だけが場に響き渡る。幾つもの死線を越えてきた和葉や刹那にも、文字通り背筋を凍るほどの想いを味わう。

吸血鬼の真祖として畏れた彼女のその瞳から流れ落ちるのは涙ではなく、紅い血と、どこまでも純粹な殺気。

彼女の正面にあるのは一体の石像——かつて“超鈴音”だったモノ。

「おい小僧。お前に力を貸してやる。どんな脅威も私が薙ぎ払おう」

「だから一つだけ答える——私たちの“敵”はどこだ？」

第22話 最期の魔法使い（後書き）

超りんと茶々丸ファンの方ごめんなさい。

超の扱いに悩んでいたのですが、和葉の最強の味方になる可能性が高いからこそ協力されすぎても困るので一度退場してもらいました。でも石化だから。いつかはきっと戻ってきます。

超が再び戻ってくる時がネギとエヴァ、和葉のターニングポイントになるでしょう。

これによってエヴァちゃん覚醒しました。前回の話の流れで無理やりやらされるのではなく、復讐のために動きだします。和葉の言っていたた自らの立場についての再認識もできたようです。

茶々丸は機械だし直ります。時間はかかりますが。

第23話 麻帆良襲撃の夜（前書き）

思ったより長かったです。

前回の和葉サイドの話とその続きです。

第23話 麻帆良襲撃の夜

第23話 麻帆良襲撃の夜

ヘルマンによるエヴァンジェリンの襲撃とほぼ同時刻。

和葉の住んでいる第31教職員宿舎の上空や周囲を囲うように突然現れたのは異形たち。グレムリンや粘土でできたゴーレムなど、ほとんどは低級悪魔であったがその数はゆうに300を超えている。

和葉、刹那、ネギ、明石、瀬流彦、式集院は5階建ての屋上で固まり、戦闘態勢で構えている。今は向こうも様子を伺っているように襲いかかって来ない。が、その膠着もそろそろ破られるであろう。

「これだけの数、きつと外部からの侵入ではありませんね。今夜は龍宮がシフトのはず。逃すとは思えません」

「ああ。僕も同感だ。一定レベル以上の侵入者は闇の福音が学園長を通して、僕たち魔法先生に知らせることになっている。学園長不在の今日なら刀子さんに連絡がいくはずだ。その刀子さんから連絡が来ないのはおかしい」

刹那と式集院の言う通りならこれは外部からの侵入ではない、とすると考えられるのは

「まさかの、内部からの召喚かよ」

「そうだろうね。既に学園に紛れ込んでいた可能性は高いだろう」

「学園長も高畑先生もいないときに限ってか。これは計画されていたのかな？」

明石は齒噛みしながら和葉に同意し、式集院は推測を口にする。

「くそつたれ！ 予想より早すぎる！ このタイミングはいくらなんでもあり得ない。電波のジャミングもかけてたのに畜生！」

眼鏡を足元に叩きつけながらレイジングハートをセットアップする。様々な要因から確実に麻帆良内部にスパイが潜り込んでいると予想は出来ていたが、直接武力行使するとは考えていなかった。この数や悪魔のレベルからして敵の召喚者はかなりの手錬、またはそれなりの数の術者。タイミング的に考えて、この襲撃は闇の福音との契約によって崩れるパワーバランスの変化に乗じたものである。認識障害や盗聴対策は魔法的な完璧を自負していた。それが破られたわけではないとすればその前後の出来事からの推察によって、接触がバレたのであろう。呼び出しの内容のメールに敵の電子精霊が忍び込んでいたのか、エヴァンジェリンが和葉への伝言を刹那に話しかけるのを聞かれたか、何にせよエヴァンジェリンとの接触がバレたための襲撃の線が最も高い。

学園長が東北への出張で午後から不在の時を狙って、エヴァンジェリンが会合を持ちかけたのが幸いした。他の魔法先生たちはエヴァンジェリンや和葉が原因だとは思わないであろうからだ。しかし逆に問題なのは、学園長に高畑も同行しており戦力および指揮系統

が不十分な状態であったことだ。学園長の魔法事務における秘書として刀子が学園を一時預かっているが荷が重いだろっ。

和葉は覚悟を決める。自分で播いた災いの種は自分で回収する、と。立場的に厄介な学園長さえ不在なら、この襲撃を凌げば後でどうにか帳尻合わせはできる。そんなことを考えている中、気になることをネギが漏らす。

「……僕、あの中の何種類かは見たことがあります。6年前に僕の村を襲った奴等と一緒にだ。あいつら何でここに」

ネギは眼下や上空の敵を見渡すと、知っている悪魔が数体居ることを明かす。村の仇を前にして気が高ぶり、その体から魔力が溢れ、それが風の精霊を引きつけて奔流が起こる。しかし最近ゆきから魔力は自身の中に落ち着かせるよう、指導を受けたばかりだったのでそれを思い出し一呼吸して、精神の高ぶりと魔力を落ち着ける。その様子を心配そうに見ていた瀬流彦は声をかける。

「……村？ 落ち着いてネギ君。ここには世界最高クラスの实力者の和葉君がいるんだ。そんなに震えてなくていいよ」

「いえ、怖いわけではないんです。ただ黒幕のことが気になって。震えは日本語で言っと“武者震い”ってやつですよ。今の僕がみんなを守るんだ！ って、やる気になっているだけです——僕のお父さんみたいに」

「うん。ネギ君がやる気なのはわかったよ。こんな実践機会は滅多にないしね。偉大な魔法使いを目指すならこのくらいの試練は乗り越えないといけないのかもね」

目つきが精悍になったネギと瀬流彦とのやり取りを聞きながら和葉は考える。6年前ネギの村を襲った事件、そのことについてネギが来日するずっと前から既に調査をしてある。しかし、この事件そのものが公になっておらず詳細不明。ネギを襲う理由があるのは単にサウザンドマスターに恨みがあるものか、ネギの存在を怖れるものの2通り。フェイトからの情報を信じる限りでは、これは完全なる世界の仕業ではない。で、あるならメガロセンブリア元老院か、私怨で組織されたグループの線が浮かんでくる。おそらくは前者、ネギの言葉通りなら今回も本国絡みの線が濃厚だろう。完全に和葉とエヴァンジェリンのどちらか、または両方を消しに来たのだろう。最悪なら一般人へ被害を出して何か厄介事を擦り付けるか、だ。

ただし敵も詰めは甘い。麻帆良は本国の下部機関。被害を抑え込みさえすれば、学園長は不在のため多少を責任は問われても、本国の飼い犬に学園がとってかわられる可能性は少ない。むしろ元老院の体質からすると事件そのものがなかったことにされるだろう。しかし仮に自身が生き延びても周囲に被害が出てしまえば査察やら、研究撤退の可能性などが生じるのもあり得なくはない。

だからまずは絶対に事態を收拾させると覚悟を決める。そして学園長不在のこの場において最も指揮に慣れているのは和葉である。しかし、所詮外部からやってきた研究員でしかない身であり、この地での権限は研究に携わる世界樹関連以外は全くのゼロ。この場にいないメンバーに加えて、親交のある刀子と女子寮に待機しているゆきに念話と肉声によって同時に指示を出す。

「皆さん、力を貸して下さい！ 学園長と高畑さんがいない今、最高戦力は俺とゆき姉、そして『闇の福音』だ。でも俺には指揮権がない。けど、この中で一番收拾をつけられるとしたら俺だけです。」

お願いします。俺の指示に従って下さい。責任は取ります」

（若様！ あちこちから魔の気配が現れたのですが一体何事ですか）

刀子からの念話が届く。

（学園長不在を狙って多数の悪魔が学園内部で召喚されました。現在観測数最低でも300です）

（なんですって！）

（和葉！ 何となくだけでも多分今和葉たちの居る所に敵は集中してるみたい。まだ増えるかもしれないけれど。10体くらい小さいのが世界樹目指しているよ！ とりあえず式神を飛ばして追いかける）

ゆきからも念話が入る。

「ゆき姉わかった。そのままトレースを頼む。それではまず明石教授！ 式集院先生は至急管制ルームへ向かって学園結界の『闇の福音』に掛けている拘束を外して下さい！ 緊急時マニュアル4-1、多分ここにいるのより高位の悪魔が来ているはずだ。あくまで勘だけど彼女並みの力がないとこれは切り抜けられません。責任は全て俺がとります！ それから一般人対策に人払いと認識阻害レベルを最大まで上げて下さい。俺一人では学園全体に張っているけどこの馬鹿デカイ範囲の維持はかなり厳しいです。最低限の戦闘能力を残して20分。できれば10分以内でお願いします。俺の式神に乗れば筈より速いからそれに乗って下さい」

「彼女を解放するのか？　だが爵位級が紛れていたら我々では対処できないか。緊急事態だ仕方ない。個人的には反対だが、祐奈や生徒たちの命には代えられない。了解した！」

「わかったよ。任せてくれ！」

「ネギ君！　君は二人に付いていってくれ。二人が部屋で頑張っている間、外からの敵の侵入を抑えてくれ。基本は倒そうと思わなくていい。囷で注意をひきつけたり、拘束して時間を稼げ。瀬流彦先生から他の魔法先生も援軍に回してもらおう。それまで持ちこたえてくれ」

この襲撃がネギを狙っている可能性も全くのゼロとは言えないため、和葉はネギを前線に出すのを躊躇いもした。しかしここは援軍を回すことで妥協する。この位の試練は耐えきれないのであれば、今後の障害を乗り越えられるとは思えない。

「わかったよ、お兄ちゃん！　僕に任せて」

苦渋の決断で送り出す和葉に対して、ネギは杖を構えて応える。

「これをポケットに入れとけ。お守りだ」

ポン、とネギの頭を紙束で叩く。それは10枚のダメージ軽減の護符。気を先に込めておき、いつでも効力を発揮できるようにしてあった。そして召還用の札を懐から取り出すとそれを宙へ放つ。

『来い嵐華！！！！』

巨大な黒鷲の式神が屋上に現れた。

「嵐華、この3人を乗せて指示通りの場所へ向かってくれ。大至急だ。敵は全て振り切れ。送りついたら学園の外を回って怪しい奴等を探し出せ！ 侵入しようとしている奴ら、脱出しようとしている奴らも全部だ」

「御意。お三方、早く我の背に！」

「うわっ。でつか……って驚いている場合じゃないか。式神さん。よろしく願います」

「僕も少し重いけどよろしく頼むよ」

「ネギ君！これを」

手のひら大の小さな刹那、和葉曰く、“ちびせつな”がポンとネギの右肩に現れた。

「ちびせつなと申します。私が中継および補助を行います。どうぞよろしく願います」

「お姉ちゃん。ありがとう。僕が絶対みんなを守るから！」

子供らしからぬ真剣な表情で背に飛び乗る

「全速力で行け。嵐華！」

「承知した主。それではいざ行かん！」

巨軀にも関わらず、上空を取り囲む80体ほどの悪魔たちの横をすり抜けながら嵐華は飛び去って行った。交戦さえ避けられるのであれば、3分もかからないだろう。あとはネギの頑張り次第。

それを合図にして一斉に他の悪魔が動き出す。

「ゆき姉は動かずに寮に結界を。これが陽動で木乃香を狙っている可能性もゼロじゃない。外に式神をできるだけ出して策敵と一般人の避難誘導を最優先。寮内に魔法生徒とかいるだろうから彼女らに協力要請を頼んだ!」

「オツケー。和葉も管制処理がキツくなったら交代するから頼ってね!」

「だったらゆき姉は念話の中継を頼む。それから刀子さんは遊撃に回って下さい! 悪魔にとって神鳴流は天敵です。夜中とはいえ一般人も外にいるでしょうから保護をお願いします」

(了解しました若様!)

「刹那も遊撃を任せた。お前の機動力が頼りだ。被害が出ないように手が薄そうなところに向かってくれ。ゆき姉の策敵次第場所は適宜指示する。必要な時は指輪で呼ぶ! すぐに行ってくれ」

「はい。それではご武運を」

和葉は同調して刹那を見送った。シンクロ

刹那は急上昇して流れるような純粋な剣技のみで進行方向の敵を

両断していく。ゆきとの同調、憑依による訓練で自身の体さばきの感覚を磨くことができ、刹那はここ1カ月も満たない間にかかりのレベルアップをしていた。空中の悪魔の群れを抜けるのに30体ほど送り返し、最後に立ち塞がるのは体調6mほどの大型の悪魔。上空に残っている中では一番の怪物。

「カズ君には指一本触れさせない。小狐丸、力を私に！」

気を込めると小狐丸に炎が纏わり付く。この刀から繰り出されるのは神鳴流の技ではない。小狐丸がただの破魔の力や雷が増幅される剣としてではなく、その特性である狐火を生かきするために、ゆきとが開発した刹那のオリジナル技。和葉が好きだというあのアニメの“烈火の将”を参考にして編み出したのは一撃。

『紫電一閃！！！』

炎の剣で悪魔は縦に両断され、左右に体が別れながら霧散していった。そのまま刹那は振り向かず空域を離脱する。残りの悪魔などいつも侵入していた鬼たちよりはずっと強く数もまだ200以上残っているとはいえ和葉の敵ではないと信頼して、他の悪魔を抑えるために全速力で飛び去った。

これで場に残ったのは瀬流彦と和葉のみ。

「瀬流彦先生は各建物の防御結界をお願いします。そして他の魔法先生たちに応援要請を。防御を基本で余力があれば遊撃も出しても

らうようお願いします。彼らに俺からは指示が出せませんので」

「それなら任せて。けど和葉君は？」

「この一帯の敵を蹴散らしてエヴァンジェリンのところへ向かいます。全体の管制と指示は俺とゆき姉の両方出すので従ってください。明石教授たちに頼みましたが現在、力が封じられている以上、本来ならば最強であるが今は衰えて狙いやすい彼女が一番危ない。他の先生方には厳しいかもしれないし、いざとなったら刹那たちを召喚できる俺が向かいます」

「わかったけど、この数は大丈夫なのかい？」

「大丈夫、刹那が一番やばいのを倒したから後は一瞬で終わらせます。そのために結界の術式を書き変えたんですから」

もう無様な様は見せない。自分の存在が世界にかき消されないようにさえ気をつければ問題ない。

『解放 魔法の射手 光の1001矢 』

上空に向けられたレイジングハートから放たれるのは無数の光の矢。それが一度上空50mほどで光球のまま待機すると3秒後には地上の悪魔を目掛けて射出され、いくつかは地面に突き刺さり、いくつかは空中で別の場所へと移動すると、それぞれが基点となり大地と空中に魔法陣を描く。さらに詠唱の必要のない狐火を壁や檻の

ように展開して足止めを行いながら大呪文の詠唱を行う。魔法陣の補助があればかなり魔力コストを下げて放つことができるからである。

『ヴァイブ・ド・ライブ・ダイブ・ア・ライブ——契約に従い我に従え 光の御子 来たれ創世の光 洗礼の雨——空と大地 迷える魂に 安らぎと眠りを それは祝福也 “清めの光”』

天と地、両方から放たれた白光の極大の柱が陣内の全てを包む。西洋魔法において各属性の戦闘用の最高呪文は広範囲殲滅呪文であるが、光属性だけは仕様が異なる。広範囲封印呪文である。広範囲の敵を一気に亜空間へ封印処置できる本来最高位の聖職者が扱う呪文であった。

10秒ほど輝いて光が消えると建物などにはどこも異常が見られないまま、ただ悪魔たちの姿だけが消滅していた。瀬流彦が眼を開ける頃には和葉は「次へ向かいます」と残して去っており、一瞬茫然としていたが次の瞬間にはハッとして、ガンドルフィーニへ念話をかけた。

和葉は時折飛来する悪魔を撃退しながら全速力でエヴァンジェリ

ンの元へ向かう。ネギをはじめ他の面々も善戦しており、現在被害報告はゼロであった。というよりも悪魔たちの配置が最初の教職員宿舎にいたのがほとんどであり、和葉に集中的に襲いかかってくるか、ネギのいる管制室に向かうか、刀子たち魔法先生が抑えている世界樹へ向かうのかのほぼ3択だったのが幸いしたようだった。

だが一層和葉に不安がよぎる。先ほどから感じる不穏な魔力の波動は明らかにエヴァンジェリンの家の方角から放たれている。一般人への被害を最小限に抑えるのを優先し、もしものときはエヴァンジェリンを切り捨てることをどこかで考えていたため、最速の嵐華を結界担当の明石たちに与えていたのが裏目に出たかもしれない、と。

そして不穏な魔力の波動が消えたことを感知する。戦闘が終わった。誰か他の魔法先生がやられたのか、敵の方が倒されたのかのどちらかだ。どちらにせよ確認を急ぎたいのだが、一人で常に30体以上を相手しているのは厳しかった。刹那を呼び戻そうとしたところで、ゆきからの連絡、重傷のエヴァンジェリンを式神が森の外で確保したとのことだった。そして告げられたのは「超鈴音」という少女が爵位級の悪魔と戦っているということ。彼女の名を和葉は知っていたが、なぜその名が出てくるのか理解できないまま、さらに明石から報告が入る。闇の福音への魔力封印を1時間限定で外したとのことだ。その報告を受けた次の瞬間には再び巨大な魔力反応が入る。間違いなくエヴァンジェリンだ。ゆきの式神の元を無理やり離れ、元の場所へ向かったとゆきから連絡が入る。刹那を呼び戻し二人でスピードを上げて突き進んだ。

そして二人は目的地へたどり着く。

かつて森であった場所の周りには氷の大地が広がっており、さらに衝撃的な光景を二人は目にする。

左膝をついた状態で石像と化してしまった超鈴音に向かって、血の涙を流しているエヴァンジェリンの姿を。

彼女は1つだけ訊ねた。―― “敵”はどこだ、と。

和葉はその純粋な殺意を受け止めると諦めたように呟く。

「ああ。教えてやるよ。敵はたくさんいるよ。サウンドマスターでさえ倒せなかった敵がな」

「もったいぶらず教える。貴様からまず殺すぞ！」

「先に言うておくエヴァンジェリン。俺たちの敵は“力だけ”では

絶対に倒せない。最盛期の紅き翼でも手も足も出なかった相手だ。要するに“政治”の問題になってくる。その少女もその犠牲者つて奴だな。率直に言えば貴方がいなければこの少女はこんなことに巻き込まれずに済んだのだろう。実際には俺と貴方の半々の責任だけだ」

「疎んじられている私では倒すどころか足手まといっでことか！お前はそう言いたいのか！」

「そうだな。だが俺の研究が完成すれば敵を一網打尽にできる。だからとにかく俺に従って……」

「二人ともその話はあとで構いません！ 超さんが、なぜ一般人の彼女が石になっっているのですか」

遮るように刹那が叫ぶ。瞳からは涙が溢れている。全くの生気も感じられない変わり果てた学友の姿を見て耐えられなかったようだ。それを見てエヴァンジェリンも殺気を抑え込み冷静に話をする。

「桜咲刹那、それは私にもわからない。いきなり玄関に悪魔が現れて茶々丸がやられて、私とそいつが戦闘になって、満身創痍だったところを超鈴音に助けられた。体中に妙な術式を施していたよ。それから巨大な魔力反応を感じたが、力が戻って駆けつけてみれば超鈴音はご覧の通りだ。私が仇打ちに魂ごと消滅させてやったところで、お前たちが来た。状況説明は以上だ」

「どうして超さんがここに来たのかわかりますか？」

「茶々丸がやられた時の緊急アラームを察知して様子を見に来たらしい。あいつは茶々丸の開発者だからな」

「なるほど、とりあえず駆けつけてきた意味はわかった。だが彼女は何者なんだ？ おれも個人的に調べてみたが過去の経歴が全くないし、謎が多すぎる。何か伝言とかはなかったのか？」

「そういえば最期に『お前とサウザンドマスターの息子の力になって欲しい、お前たちの作る未来を見てみたいから命をかける』などと奴は言っていたよ。全く持って意味がわからなかったが、お前たちも無関係ではなさそうだな」

「俺に協力させるため？ どういうことなんだ」

「わからないと言った顔だな。私も同じ想いだよ。」

「あの、エヴァンジェリンさんカズ君、それよりもこの石化は治さないのですか？ 何も超さんを死んだように扱わなくてもいいのでは」

「死んだも同じだ、桜咲刹那。これは爵位級の悪魔の石化だ。永久石化と呼ばれる位のもので世界中の術師を探しても解ける見込みはほとんどない。治癒の苦手な私ならなおさらだ」

「刹那、彼女の言うとおりだ。これは俺でも解呪できない。下手をしたら中途半端に石化が溶けて殺す羽目になる」

「ゆき姉様でもですか？ 憑依して中から解呪という方法なら？」

「無理だな。俺もゆき姉も大抵のことは言霊でまがいなりにも実現できるが、これは手に負えない。高位の治癒師たちが束になってで

も無理だな。肉体だけでなく、精神と魂も固定化されているから術式も表面的にしか解析できないし、憑依自体もできない」

「そうですか。でももしかしたらこのちゃんなら……」

「それは言っない！」

「いえ。私も巻き込みたくはないのですが。その……可能性があるとすれば」

「巻き込みたくないとかいう問題じゃない。むしろ、いつ巻き込まかだ。既に今、ネギとエヴァンジェリンを抱え込んでいる状況を打開しないと、これ以上不確定要素に対処できる自身はない。木乃香まで面倒は見切れない、守るので精いっぱいだ。またこの子みたいに巻き込まれる人間を増やすというのか？」

「考えもなく発言をしてしまい、申し訳ありません」

「いい。ただ方法は探すよ。正攻法でいくか、魂を分離したり召喚したりとかいう裏ワザも可能性はゼロじゃない」

和葉は方法を、頼りになる人脈を片っ端から探す。クルト、セラ、できれば政治的な関わりのない人物がいい。すると一つ思い当たった。

「いや待てよ。一人心当たりがある。石化の使い手、それも永久石化を操れる奴がいる」

「何だと！」

「ああ。それもサウザンドマスタークラスの術者で、今回の黒幕と敵対関係にある組織の幹部だ」

「噂のフェイトさんですか？」

「そうだ。これの解呪方法を知っているとは限らないが、何らかのヒントにはなるはずだ。元の術式さえ解明できれば、あとは同調で多分どうにかなるはずだ」

「そうか、よかった。近衛和葉。では改めて依頼を受けてもらおうぞ。契約更新だ。超鈴音のことを頼む。今回の件で身に染みて自分の立場が理解できた。歯痒いかな。そのかわり、研究補助だけとは言わず今後お前の目的全てを達するまで力になろう。敵がいれば全て薙ぎ払うし、そのときではないなら復讐心を押し殺して、お前の足を引っ張らないように身の振り方を考えよう。それがアイツの望みならお前たちの剣となり盾となろう」

「こちらこそ改めてよろしく。闇の福音、必ずこの子は治して見せる。それに黒幕も絶対に潰す」

二人は堅い握手を交わす。昼とは違う心からの誓い。超鈴音が何を想い、何を望んでいたのかをいまだ知ることはないが、彼女の願いが叶うための一歩がここに成った。

しかし3人の表情が少しだけ明るくなったところへ、またもう一人、物語の主役が到着する。

全速力で駆けつけ杖から降りてきたのはネギ・スプリングフィールド。服はボロボロだが、かすり傷や打撲以外の致命的な外傷は見当たらない。和葉と刹那は無事に安心するが、ネギは目の前の光景を見て叫ぶ。

「お兄ちゃん！ 悪魔はみんないなくなっただけ、これは一体どういうこと！ それに石像の人は僕のクラスの生徒の……超さんじゃないの？」

彼にとって2度目の悪魔襲撃、そして守れなかった人への想い。

「教えてよ！ 何でもみんな何も教えてくれないの！ 僕はまた守れなかった。強くなったのに」

「どうして……どうしてこんなヒドイことができるのか、誰か教えてよ！」

少年はその場に座り込み泣き崩れた。

それは少年の人生を変えるのに十分すぎる転機。

超鈴音の願いを超えて未来は大きく変わっていく。

第23話 麻帆良襲撃の夜（後書き）

今回文字数最長記録を達成しました。しんどい……と言っても1万文字も行きませんが。

せっちゃんは和葉に影響されて一緒に見たシグナムの剣技を真似たようです。

ネギ君の戦闘風景は今回省きましたが、これから先で見せ場は持てきます。

和葉の魔法は作者オリジナル。封印魔法です。強い魔法は破壊ばかりつてのも嫌だったので、光属性は聖なる光で封印でいいやつで捏造しました。

次の日曜に更新できたらいいのかな？と思います。

第24話 最強の主従（前書き）

お待たせしました。今回和葉一行は空気。ネギのターンです。展開は遅いのに突発的なイベントが再びです。

第24話 最強の主従

第24話 最強の主従

「お父さんみたいに、僕がみんなを守るんだ」

その一言を自分に誓い、はじめての実戦とはいえネギは奮闘した。10体近くの低級悪魔の襲撃から結界を制御している明石たちを神多羅木が援軍に来るまでの間、たった一人で守り抜いたのだ。

指示通り箒で逃げつつ風精召喚で敵を陽動し、戒めの風矢で確固に捉える作業を根気よくひたすらに続けた。近距離戦の心得がないために懷に潜られると何度か攻撃を受けたが、和葉から渡されたお守りのおかげでほとんどダメージはなかった。

最も基本的な魔法である『風よ（ウエンテ）』を自身を中心にして暴発させ、再び箒で距離をとりつつ中距離から魔法の矢で迎撃する繰り返して耐え抜いた。神多羅木の援軍が来るころには敵は減るところか逆に3倍ほどに増えていたが、神多羅木が無詠唱呪文で時間を稼いでいるところで『雷の暴風』で11体を沈めるといふ快拳を成し遂げた。神多羅木がその倍、和葉はさらに10倍以上を沈めているというのは内緒である。

守れなかった村の人々。それを悔やみ、ひたすらに父親の影を追いかけた日々は無駄ではなかった。ほとんど足止めに徹しているとはいえ、悪魔を退けている実感、背中には守るべきものがあるという実感をネギは確かに感じていた。

敵の前に一矢報いるどころかネカネやスタンに庇われ、足手まとい以外の何物でもなかった過去。

あの日よりも強くなった。

そして新たに家族と呼ぶべき人たちもできた。「サウザンドマスターの息子」だからではなく、純粹に「ネギ」として接してくれる人たち。その信頼できる、尊敬できる人たちが自分に期待して任せてくれたこと。

今ならなんでもできる気がする。

もう、何も怖くない。

そう意気揚々と次の戦場に向かったネギ。

しかし彼が再び目にしたのはあの日と同じ光景。

それも自分の見知った顔。昨日のクラス会で自分を祝福してくれた少女。

なぜこの光景を再び見なければならぬのか。

自分の周りではなぜこんな悲劇が起きるのか。

なんで……

なんで……

僕の周りの人たちばかりが。

僕の大事な人ばかりが。

「お兄ちゃん！ 悪魔はみんないなくなったけど、これは一体どういうこと！ それに石像の人は僕のクラスの生徒の……超さんじゃないの？」

「教えてよ！ 何でもみんな教えてくれないの！ 僕はまた守れなかった。強くなったのに」

「どうして……どうしてこんなヒドイことができるのか、誰か教えてよ！」

少年は想いを全て吐き出して、その場に泣き崩れた。

「……どうしてだろうな」

いつも傲慢に振る舞っている態度からは想像できない、擦れるような、力のない声をエヴァンジェリンは発した。彼女もまだ何も知らない。

和葉は地面に両膝をつき座り込んでいるネギとその隣で背中をさすっている刹那の姿を睨んでいた。

和葉にとってこれはネギに見せたくなかった。

ネギの処遇が決まるまでは超のことは隠し通すつもりだった。

「ここが分水嶺か」

隠すことは自身への信頼を損なうばかりか、彼の精神衛生にも良くないだろう。表面上は他人を頼っておきながらも、心のどこかで疑ってばかりの自分自身を省みて、そうなって欲しくないと和葉は願う。

ここからは博打だ。普段なら不確定要素には極力手を出さないのが和葉の主義だが、これは本人の意思で決めて欲しいという想いの方が強かった。クルトなら絶対に丸めこむ方に持って行くだろうが和葉は違う。

説明と説得はするが強制はしないスタイルでいく。

なぜなら博打といっても見込みは悪くないからだ。少なくとも元老院の言いなりになることはないだろう。

ネギの行く末は和葉の元に付くか、独りで修羅の道を歩むか、人間不信に陥るか。他にもパターンは考えられるが、最悪のパターンである事件の影響で本国での修行へ変更は確実に本人が拒否するだろう。

「ネギ。自分のせいで村の人たちや、クラスの生徒が襲われたとか思っているだろう?」

「お兄ちゃん。なんで僕の考えていることが分かるの? ううん。なんでその事を知ってるの?」

「ネギが知らないだけさ。それとその疑問だが」

「答えは半分Yesだ。ネギ。自分のせいだと言われて、それを俺に否定して欲しかったか?」

ネギは啞然として眼を見開くが、数秒後首を横に振る。そして涙を煤にまみれてボロボロの袖でぬぐい、はつきりと応える

「僕にも責任があるなら、知らなくちゃいけないと思う。じゃないとまたこんな事が起きるかもしれないんだよ。この石化は絶対助からないってことぐらい僕も知ってる。だから次は、もう次はもう絶対にこんな事は起こしたらダメなんだ」

「だから教えて。みんな何を隠してるの?」

「……僕知らない何を知ってるの?」

結果から言えば、「完全なる世界」やクルトとの個人的な繋がりが、今後の計画の概要は伏せつつも、8割ぐらいの真実を明かした。クルト、ラカンから伝え聞いたサウザンドマスターが英雄になった経緯、災厄の魔女と呼ばれた母の存在。そして和葉が独自に研究で掴み、フエイトからの情報で補足された魔法世界の真実。

ネギは知った。父と母が何を成して、何を成せなかったのか。

自らが如何に稀な存在であるのか。

和葉がこれから何を成そうとしているのか。

隣にいるエヴァンジェリンと父の関係。

新たに交わされたエヴァンジェリンと和葉の契約。

和葉の今回の襲撃事件に対するいくつかの推察。

それら全てを鑑みてネギは一つの答えを出した。

明け方になる前に学園長と高畑は学園に急遽戻り、世界樹広場前にて学園周囲の警備以外の全ての魔法先生と魔法生徒、そしてエヴァンジェリンとネギを加えた和葉一行が集結した。まだ本国には連絡を行っていない。何が起こったのかの整理と、これからどう対処していくかについての会議が開かれる。

「うむ。非常に大変な事態になったの。むしろ良く被害を最小限に納めてくれた。しかし、石化した一般人の彼女のことは本当に悔やんでも悔やみきれぬのう」

「学園長、なぜこの吸血鬼の言を信用するのです。巻き込まれた彼女は血の力で身代わりにでもされたのかもしれないですよ。もしかしたら吸血鬼の自作自演で悪魔を召喚して我々を……」

「憶測で物を言うでない。偏見は時に真実を曇らせる」

「敵さんが聞いたら腹を抱えて笑うセリフだぜそれ。爺さんの言う

とおりだ。もつと全体を、利害関係、人間関係を抑えてから判断しないと大きなミスを生むってことぐらい学校で教えてないのか？
相手が何をしたくて、何を考えているのか、何をしたら相手の思惑を妨害できるのか、こういうときほど冷静にだ。その憶測も可能性はゼロと言えなくても軽々しい言動は控えるべきだろ」

「そうですよ。ガンドルフィーニ先生」

ガンドルフィーニは糾弾するが、学園長はそれを遮り、和葉や高畑も同意する。人の上に立つことを多少なりとも知っている人間だからこそだ。

その様子をエヴァンジェリンは左手で弄んでいた髪を数本ちぎりながら苛立ちを見せ、一方ネギは彼を蔑んだ目で見ている。

空気を読んで明石は問いを変える。

「それで学園長、今回の事件の犯人探しも重要ですが、そのためにも知っておきたいのが相手側の目的はなんだったのでしょうか？」

「そう言うお主は何か考えがあるのかの？」

「それでは怖れながら述べさせて頂きます。今夜は学園長と高畑さんが不在という戦力不足の日です。わざわざその日を狙ったことから明らかに麻帆良に対して害意のある者の犯行だと思われます。そして悪魔は大量に召喚されているながらも、まず一般人を対象とすることはなく、ほとんどが教職員宿舍、そこから漏れたのが世界樹と学園結界の管制室、そして爵位級が闇の福音へと充てられています。あまりにも計画的な配置であり不自然すぎます。これは内部の事情に精通している者の犯行かと思われます」

「私も明石教授に同意します。さらに配置を見る限り、最も強い爵位持ちを闇の福音に、数をネギ先生や近衛君のいるところに充てていることから、あの時点で学園の最高戦力になりうる闇の福音を確実に消すために爵位級をあて、実力の高い近衛君を足止めまたは制圧するべく数を大量に配置したと推測されます。世界樹へ向かったものは魔力を求めたものでしょうが、管制室へ悪魔が送られたことと、その数が宿舎の近衛君より少なかったことからネギ先生への優先順位は低かったものと思われます」

「葛葉と同意見です」

ネギの援軍に向かった神多羅木も手ごたえからして、そこまでの敵でなかったことを認識しているのであろうボソリと一言呟く。

刀子の意見は和葉とほぼ同じ考えだが、さらに和葉はエヴァンジェリンの密会という要素を推論に加えている。

一方、その周りではでこそコソコソと会話が広がっている。

「麻帆良の警備体制を突いて本国から査察でも送るつもりでしょうか」

「いや、本国にも責任の一部はあるし、最近は鎖国気味だから関西の線が怪しいんじゃないだろうか」

「それより石化した彼女どうするんでしょうか。永久石化と伺ったのですが」

「うーん。何がしたかったんだろう。ただ闇の福音を討伐したいだけの魔法使いなら悪魔は呼ばないしな……」

「あれ、爵位級って魂とられなかった？ 命をかけてまで晴らしたい怨みか、最悪洗脳させて呼ばせたか。うわっ、自分で言ってる気持ち悪い」

「実際は噂の彼がほとんどの数を封印してくれたから助かったらしいですね」

「あれはすごかったよ。すごい光だったけどな。あれで認識阻害まできっちりやってるんだからレベルの違いを感じたよ」

「ウチの娘もすごかったって言ってたね。僕も見なかったのに残念だ」

「麻帆良の戦力と思われていなかったのが幸いでしたのでしょ

か」

「いや、これだけ情報が漏れていて、それはないのでは」

推論が飛び交い收拾がつかない中、大きな声があがった。ネギだ。

「学園長、こんなときですが大事なお話があります」

「ネギ君、お主も大変だったのう。悪魔を退けたとは聞いたが生徒が石化とは不幸じゃったのう」

「……僕はこれまでの不幸を不幸で終わらせたくありません」

「どうしたんだい？ ネギ君」

力強い言葉に事情を知っている高畑は反応する。

「お父さんは、サウザンドマスターが実際にどんな活躍をしていたのかを恥ずかしい話ですが、つい最近知りました。戦争で戦った人たちもいっぱいいるってことも知りました。でもそれでもサウザンドマスターは、『偉大なる魔法使い』として、不幸で終わってしまわずの人々の人生を変えていったと」

「隣にいるエヴァンジェリンさんだってそうです」

「ジジイ。ナギと交わした約束の3年はとうに過ぎた。さらに10

年以上もこの地に縛られていたのは私の意志でも、奴の意志でもない。賞金額が取り下げられたのも直接的には奴が私を無害だと認めたからで、そもそもこれ以上この学園に手を貸す理由などない。だが」

「サウザンドマスターの頼みなら聞いてやらんことはない。私が認めた数少ない人間だからな」

「なんじゃと？」

「——だから今この瞬間から僕は父の意志を継ぎ、2代目サウザンドマスターを名乗ります！」

「ナギ・スプリングフィールドの領域までたどり着いてないけど、1代目がやり残したことを僕がやり遂げて見せます」

「そしてこれがその証拠だ。『闇の福音』はこれからナギ・スプリングフィールドが再び現れるまで、この2代目サウザンドマスターに従うことを誓おう」

エヴァンジェリンが取りだしたのは仮契約カードと強制契約書に書かれた宣誓文。

*この文章はナギ・スプリングフィールド、ネギ・スプリングフィールド、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、3名の承認がない限り破棄できない。

*エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルはネギ・スプリングフィールド以外からの吸血行為を行わない

*エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルはネギ・スプリングフィールドに対して背信行為を行わない

要約するとこの3条になる。

「お前らには手を貸す義理は全くないが、安心しろ。世界最強の主従、サウザンドマスターと闇の福音がこの学園を守ってやる」

「これで麻帆良の警備力も上がります。これで怪しい疑いのある外部の組織からの戦力補充は必要ないです。今回のような事件は起こさせません。サウザンドマスターの名を持って、これからエヴァンジェリンさんの封印を解かせてもらいます。僕たちが抑止力になります。そして超さんも助けるし、犯人だって見つけてやります」

唐突過ぎる展開に一同が声を失う。

ネギが半分涙目ながらの宣誓する様に和葉は感心していた。全てネギ自身のアイディア。

二人とも機密事項の存在にもかかわらず、隠すどころか全世界に向けてのアピール。ここまで堂々とすればおいそれと手は出せない。ちまちまとパワーバランスの釣り合いを考えていた和葉の計画は一気に破綻したが、やるならこれくらい思いっきりのいい方が面白い。なるはずだ。

ようやく動き出したもう一組の主従。どう世界が動くのか、彼らの計画は綻びるのか否か。

歪んだ世界の物語の行方はまだ誰にもわからない。

第24話 最強の主従（後書き）

ネギ覚醒。思いつきの良さは原作を意識してみたり。和葉とはその辺真逆です。吉と出るか凶と出るかはわかりません。

第25話 白き翼（前書き）

今回短め。というか時間がなかったけど週1更新と書いていたの
で嘘予告にならないようにあげました。またもんでも展開あります。

第25話 白き翼

第25話 白き翼

「待つんじゃないネギ君。お主は自分の言っておることの意味がわかっておるのかの？」

「そうだネギ君。それはナギに与えられた称号だ。いくら息子だとはいえ軽々しく名乗っていい名前じゃない」

突然の2代目サウザンドマスター襲名とエヴァの解放の宣言をしたネギに対して諫めるように学園長が問いかけ、高畑は納得がない様子を見せる。

「わかつてるよタカミチ。これは僕の決意だから。『お父さん』と『お母さん』と『僕自身』への誓いなんだ。だからこれは絶対に軽い気持ちじゃない」

「お母さん……まさかアリ、和葉君！ 君は何をネギ君に一体吹き込んだんだ！」

高畑も珍しく眉がつり上がり、僅かに激昂した表情をみせるが、対する和葉は淡々と語る。

「ネギには『真実』を知る資格があるし、知るべきだと思います。だから知りたいと言われてそれに答えた。それだけです高畑さん。俺はあなたに彼の覚悟を聞いてほしい」

「吠えるなタカミチ。ぼーやの話を聞いてやれ。」

「和葉君、エヴァ……」

「タカミチ。僕は聞いたよ。お父さんがどれだけすごい人だったのか、どれだけ苦労して今の世界を作ったのか。でも……それでも。お父さんがいくら『立派な魔法使い』だったとしても」

「救えなかった人たちもたくさんいたんだね。だからネカネお姉ちゃんも僕は運よく助けられたけど、僕の村の人たちは今でも超さんみたいに石のままなんだよ」

「僕は今でもお父さんを尊敬しているし、“立派な魔法使い”になりたいと思う」

ネギは高畑に向かって純粹な気持ちを吐露する。そして周りの一同への前でもう一度宣誓を行う。

「だからこそ。サウザンドマスター、僕のお父さんが、そしてお母さんがやり残したことを、救えなかった人たちを救う。それが息子として、『立派な魔法使い』を目指す一人の魔法使いとしての僕の目標です」

その真つ直ぐな言葉に打たれ、高畑の眼に光の粒が微かに浮かぶ。ナギの、そしてアリカの事情を知っている彼には、嬉しさなのか、また20年間の日々で感じる自らの力の及ばなさに対しての後悔の念なのかは本人にもわからなかった。高畑だけでなく周りの人間も感銘を受けている中、学園長が水を注す。

「じゃがネギ君。それだけでは“サウザンドマスター”を名乗ることやエヴァを解放するという話には繋がらんぞ」

「しつこいぞ、じじい。大体今回の件は私が万全の状態であれば、あの程度の悪魔ごとき何の問題もなかった。それ以外にもこの学園の警備体制自体が十分であれば、近衛和葉もフォローで手が回らないということはなかった。ぼーやがもつと強ければ生徒を石にされずに済んだはずだし、学園に手を出そうとも思わなかったはずだ」

「それは結果論じゃ」

「だったらじじいやタカミチが不在な程度でこの様だ。もつと外からの傭兵でも雇うのか？ スパイが紛れてるかもしれないのに」

「実際紛れてたからこうなったんだろうけどな」

反論を和葉とエヴァの二人掛かりで潰す。さらにネギも賛同して追い打ちをかける。

「そうです。僕らが弱いからこそこのような事態を招いたのだとも言えます。だから『サウザンドマスター』の名を“今”は借ります。僕には過ぎた名ですが、自身への戒めです。サウザンドマスターとしてやるべきことをこれから僕は一つずつやっていきます」

「それで最初に手をつけたのがエヴァの解放じゃと？」

左目を見開き、殺気ではないが威圧感を一層強めるがネギは怯まない。

「そうです。とっても無理やりな方法だったとはいえ、お父さんはエヴァンジェリンさんに助けの手を差し伸べたと聞きました。3年の間ここで学校生活を送る約束の代わりにここの警備をする契約をさせた。でもお父さんは今はどこかに行ってしまったって、約束から10年以上たつた今でもエヴァンジェリンさんをこの学園から解放出来ていません。だから息子である僕がエヴァンジェリンさんを解放します。エヴァンジェリンさんにはその権利があるし、お父さんもそれを望んでいたはずですよ。」

「それではーやは私を解放することと、ナギを共に探すことを条件にして従者になれと持ちかけてきた。正当な交換条件だ。私はそれを呑んだ。だからこうしてこの契約書がある。鵬法璽で交わした内容だ。私はそれを裏切らん」

「うむ……」

あと一押しで学園長は落ちる。だが自称正義の魔法使いたちは決して闇の福音を認めない。

「ただ厄介者扱いするよりもネギの方が効率的で、かつ筋も通っていると思わないか？　なあ自称正義の魔法使いさんたち？　それに2代目サウザンドマスターに“あの”『闇の福音』が従ったとなれば、それだけで十分な牽制と実績になる。みんなに望まれるような立派な魔法使いに向かって邁進しているんだ。それを止める理由は何ですか？　殺人をたくさん過去に犯したから？　それならここにい

るじじいに高畑さんや俺は幾つもの戦場を回ってきた。正当防衛で身の程知らずを返り討ちにしてきた彼女よりも、戦争だから、敵だから殺してきた。そんな英雄たちのほうが業は深いかもしれないと俺は自分でそう思ってる。多分、爺さんや高畑さんも」

「僕のお父さん、サウザンドマスターもたくさんの人を殺して、その分たくさんの人を救ったから英雄と呼ばれました。だから……これからエヴァンジェリンさんにもたくさんの人を救ってもらって初代サウザンドマスターが望んだ光の道を、2代目の僕と一緒に歩んでもらいます」

「だから認めて下さい。お願いします」

「ネギ君。言いたいことは分かったぞい。しかしエヴァよ。今は表沙汰にせんでおったからこそお主を警備員として雇っておったが、わし一人ではお主を庇いきれぬぞ」

「そこは俺の出番かな。報告が遅れたけど爺さん、昨日付けでエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルには魔力基礎理論開発研究所、魂魄理論研究チーム主任として雇うことになった。身元の保証は俺がする。本国が何か言ってきたら任せとけ」

「ほつ。そうか、それは助かるわい。エヴァに関しての責任は全てなげるからの。そちらの対応は任せたわい。わしはこれから犯人探しやらで忙しいからの」

自分の責任を引き受けてくれると聞いて嬉々とする学園長。報告などで追われ、責任追及などされたくない身にしてみればありがたい話だが、リーダーとしては正常な判断能力を少し欠いているのかもしれない。

「ああ頼んだぜ爺さん。スパイがかなりのところまで情報を掌握していることは確実だからな。きつちり頼んだ。それから関西呪術協会改革派のリーダーとしても今回の件は協力させてもらう。西の内
部調査と西への牽制は任せといてくれ」

「ふむ。関東魔法協会としてもそれはありがたい話じゃの。」

「麻帆良が面倒なことになると俺の研究も進まないからな。協力するのは当然だ。一時指揮権を預かった人間としても責任あるし、この事件については他の面でも協力は惜しまない。それからネギの宣誓と後ろ盾について何だが――」

「後ろ盾って、お兄ちゃんじゃなかったの？」

ネギの疑問は当然だったが、衝撃の事実が明かされる。

「実はナギファンクラブにはさつきリークしていたからな。『サウザンドマスターに隠し子発覚、しかも瓜二つの美少年！ 闇の福音を手なづけ2代目襲名！！』ってサイトの一面にそろそろ載るだるな」

「えっ？ ファンクラブって？」

「なんじゃと！」

「おい！ 何勝手なことをやっているんだ近衛和葉！」

「ハハッ、そう来たか」

「心配すんなって。これでファンクラブのメンバーはネギの味方になるから、下手な組織や国は手が出せない。世界中の女性が味方だから」

「そういう問題じゃない！ それは世界中の女から狙われると同義だろうが！ ネギは私がナギのように育てて……ハッ！！？ 何を言わせるんだ」

自爆したエヴァンジェリンは腹いせに和葉を糸で絡め取ろうとするが、風で緩ませて脱出した。和葉はニヤニヤと笑い、ネギの頭を撫でながら

「ネギは責任もって俺が育てるから。拘束プレイ好きなエターナルロリからも守ってやんないとな」

「ええと、どういうこと？」

「ええい黙れ！　ぼーやは何も知らんでいい！」

急に騒がしくなった一同を見ながら、高畑は呆れたように呟く。

「……あの学園長、僕たちはもう帰ってもいいんですかね？」

「そうじゃの。彼らは放っておくぞい。わしらにはわしらのやることがある。報告書はもちろん、警備体制の見直しに、呪いの分の電力と魔力を結界強化につぎ込んだり、やることは多そうじゃの」

「正直、何日徹夜すれば済みますかね？」

「一週間は覚悟しておいとくれ。高畑君」

情けない背中を見せる二人であったが、本来この程度の事件で収拾がついていること自体がおかしいのだ。しかもこの二人は事件当時現場から離れていた。負担を考えても原因究明に向けて頑張らなければならぬのは彼らであろう。

いつの間にか自然解散となり、場に残された面々も思うところが

色々あったようで、自宅に帰って考え込んだり、その場で熱い議論を展開したりしていた。

和葉、刹那、ゆき、エヴァンジェリン、ネギの5人は和葉のリビングに集まっていた。その部屋はエヴァンジェリンの家から式神が持ち出した家財道具などで溢れていた。ゴシックロリータの洋服やら、ダイオラマ魔法球、そしてウサギからヒト型までの様々な人形たち。

上半身と下半身が分断され、機能を停止した茶々丸がソファの上に横たわっており、和葉がそれに様々なコードをノートPCへ接続し、電子精霊で状態を解析している。

「近衛和葉。それで結局どうだ？」

眉を八の字にしながら黒のネグリジエ姿のエヴァンジェリンは問いかける。

「多分シロだと思う。動力部以外は魔法とは縁のない純粋な科学の産物だ。オーバーテクノロジーと言ってもいいレベルの技術がつぎ込まれているみたいってことしかわからねえ。科学嫌いの本国の奴らがこの子を使って何かをやっていたとかの線は薄いと思いたいな」

「そうか」

和葉は茶々丸を通して情報が漏れていた可能性を考え、修復する前に全体の解析を行ったのだ。謎が多く、茶々丸の開発者の超の自作自演の線もゼロではないと踏んで、葉加瀬も遠ざけた。しかし先ほどの解析で外部との通信記録などを調べた限り違うであろうことがわかった。

「にしても超鈴音ってのはとんでもない天才だったんだな。電子精霊は俺の専門じゃないけどプロテクトのレベルがおかし過ぎる。全力出しても表層の一部にしかアクセスできないとかなんなんだよ。彼女のことも調べる必要性がさらに出てきたってことしかわからないな。彼女の目的や敵対組織やら洗えば何か出てくるかもな」

「詳しいことはわからんが超鈴音のことは私も調べようと思っただところだ。だが今は先に」

「茶々丸さんの修復をしましょう。このままの姿ではあんまりです」

「エヴァちゃん、カードの効果は確かなの？」

「せかすな天狐。これは私がずっと欲しかったものだ。黙って見ていろ」

「御主人、妹ヲ頼ムゼ」

晴れてエヴァンジェリンが自由の身となり魔力が復活したため、チャチャゼロもネギの頭の上で稼働していた。人形とはいえ、事件当時何もできず、見ているだけしかできなかった彼女も何か思うところがあつたのかもしれない。トーンは機械的なものでも、悲しげな感情のようなものをどこか感じられる声であつた。

任せておけ、というように眼をネギと、その頭上のチャチャゼロに向けると『アデアット』と呟く。すると彼女の仮契約カードは光り輝き形を変える。右手に浮かぶのは少し大きめの1本の黄金の針。

それは召喚術者や人形使いでは誰も知らないものがないほどのアーティファクト。

「これがあの悪名高い『人形師の針』^{ドール・メイカー}か。試してみてくださいよ」

「エヴァンジェリンさん、僕の生徒を、茶々丸さんを、お願いします」

「そんな泣きそうな顔をするな、ぼーや。私は『人形使い（ドール・マスター）』だ。自分の人形は治してみせる。戻ってこい！ 茶々丸！」

針を茶々丸の心臓に当たる位置に3cmほど差し込むと即座に幾重もの魔法陣が展開され、数秒後にはかつてと変わらない姿の茶々丸が戻っていた。

「——ここは知らない天井ですね」

茶々丸の瞳に光が灯り、まず発した言葉がそれだった。

茶々丸は胸元近くで顔を赤くしているエヴァンジェリンから順に

場にいる人物を認識する。

「マスター。御無事で何よりです。近衛さんに、桜咲さん、ネギ先生、管理人さんにもお世話になりました」

「私のことがわかるか、茶々丸。ひとまず安心したぞ」

3秒ほど自身の体の状態を解析して何の故障箇所もないことを確認すると、スツと上半身を起き上がらせる。解析時は邪魔になるのでボロボロに裂かれた衣服は剥ぎとってあったが、襲撃される前の会談で着ていたメイド服も復元されていた。

「——しかしマスター。一体あれから何が起きたのでしょうか？ 研究所以外の場所で再起動するとは思っておりませんでした。超さんやハカセが治したのではないのですか？」

機能が止まっていた間のことを茶々丸は何も知らない。

「その質問には俺が応えるよ。状況を説明すると要点は4つだ。1つ目は超鈴音がエヴァンジェリンを庇って石化したこと。2つ目はネギがエヴァンジェリンのマスターになって封印から解放したこと。3つ目はネギとエヴァンジェリンの存在を『紅き翼』の後継となる組織、『白き翼』を立ち上げたことだ。4つ目は俺が率いる『サンライトハート』及び『関西呪術協会改革派』は『白き翼』と協力体制を築いたこと」

「マスター、ネギ先生。正直なところいまいち要領を得ませんが、今の話は本当なのですか？」

「ああ」

「はい。茶々丸さん。僕とエヴァンジェリンさんとチャチャゼロさん、そして茶々丸さんの4人でここに『白き翼』を立ち上げます。活動方針はサウザンドマスターの意志を継ぎ、世界を僕らの力で平和に導くこと。そして第一目標は超さんの石化の解除と原因究明です。今はまだ小さな組織ですが、みなさん僕に力を貸して下さい」

「はい。マスターのマスターですから、誠心誠意お仕えさせていただきます」

「ケケ、面白ソウニナッテキタジャネエ力」

「ふつ、これまでは悪の道だったが……いいだろう。これからはせいぜい偽善の道を歩んで、自称正義の魔法使いどもを困らせてやる」

「いいな、その考え。ネギ、一発やってやろうぜ!」

「ネギ君、頑張ろうね」

「この刀と主に誓います」

その後、今後の計画のことを部屋で詰めたり、和葉の部屋を整理したりしながらするうちに朝が来た。和葉は刹那、ゆきと共にベラ

ンダで白ずんだ空に赤い太陽が昇るのをホットコーヒーを飲みながら眺めていた。和葉はふと思ったことを呟く。

「——『白き翼』。血に濡れていない真っ白な翼。最初は何の色でも良かったと思ったけどそういうことか。正直エヴァンジェリンのネーミングは疑ってたけど、案外考えてんだな」

第25話 白き翼（後書き）

エヴァのアーティファクトについては後日説明を。大体予想される通りですが、いくつか他の能力もあります。

サンライトハートにネギたちを入れる手もありましたが、のちの展開を考えてこっちの主従には新しく組織を立ち上げてもらいました。最期の和葉のセリフな私が何となく思ったことです。刹那の翼ではなく、こっちの意味が込められて居たらなあという想いです。

学園長とのやり取りはちょっと適当だったような気がして反省します。でもそろそろ襲撃編から育成編に戻りたかったのです。

あと和葉の力は小さな力の民衆に支持されているところですが、あえてネギ君には女性陣に味方になってもらいます。個人的には彼女らが本気を出せば元老院なんて眠じゃないと思うのです。

それではそろそろネギ魔改造再スタートです。

第26話 ネギ君に萌え死ぬスレ（前書き）

自重しないタイトル。感想欄でヒントを頂きました。
下ネタなど多めですので苦手な方は適当に読み飛ばして下さい。

第26話 ネギ君に萌え死ぬスレ

第26話 ネギ君に萌え死ぬスレ

襲撃事件の日から数日。

事件の真相究明に向けて学園側と協力して和葉たちも捜査を行ったが、学園内部での召喚が行われた事実確認と召喚場所が判明したのみで、他の情報を得ることはできなかった。どこかのスパイがまだ潜伏しているのか逃亡しているのかさえもわからないというのが現状である。

またこの事件は麻帆良内部では極秘扱いとされ、メガロメセンブリアや関西呪術協会を含む外部勢力からの介入はなかった。事件を本国が起こしたと仮定すれば何かしらの査察が行われる可能性を和葉は心配していたが、あらかじめクルトに依頼していたことや、学園長の情報統制の恐るべき手腕により、一応対外的には事件は「なかった」ものとされていた。

ネギについての状況も一変した。ナギファンクラブにリークしたネギとエヴァンジェリンの情報は新世界、旧世界ともに半日もたない間に広まった。はじめはナギに隠し子がいたということで世界中の女性たちが涙したが、ネギの画像が流出した時とほぼ同時にネギファンクラブが立ち上がった。以下はナギファンクラブ内の掲示板でも特に盛り上がっているスレッド――

【シヨタネギ君を】 5年後を想像してネギ君に萌え死ぬスレ7【育てよう】の内容の一部である。

144 :ネギかわいいよネギ:2003/02/12(水) 1
8:46:37 ID:FI/Rr24IO

サンライトハートがネギきゅんの1/12スケールのフィギュアを製造しているらしい。

キタ (。() !!!!!!!
これで勝つる。

>イメージ図

ttp://sunlight.com/datamanager/
top/modeldataid/1085436/

145 :ネギかわいいよネギ:2003/02/12 (水) 1

8:56:40 ID:c57jirkM0

>145

サンクス。これは買いだな。本人収録のサンプルボイスに萌え死んだ。

「お姉ちゃん」と呼んでくれるとかマジSHはネ申。

リトルワイズGJとしか言いようがない。

146 :ネギかわいいよネギ:2003/02/12 (水)

19:40:52 ID:I+dl6Lczap

これだけのものを直ぐに開発するSHの謎の技術力と情報力は正直不気味だな。

でもそれよりネギまんうめえ。

1 4 7 : ネギかわいいよネギ : 2 0 0 3 / 0 2 / 1 2 (水)
2 1 : 5 6 : 4 8 . 5 2 ID : 6 T 0 U n I f O O
ネギまんか。畜生。旧世界に出張中だから食えないorz

1 4 8 : ネギかわいいよネギ : 2 0 0 3 / 0 2 / 1 2 (水)
2 2 : 1 4 : 5 8 . 4 2 ID : U X 6 o S Q s E 0
ドンマイ。でもそつちなら生ネギ君に会えるじゃないか。

1 4 9 : ネギかわいいよネギ : 2 0 0 3 / 0 2 / 1 2 (水)
2 2 : 5 7 : 2 8 . 3 4 ID : y d 2 X E X w f P

日本で女子中学校の臨時教師やるらしいな。

留学届を出したけど総長に跳ね返された。だれか麻帆良の内部情報
よろ。

1 5 0 : ネギかわいいよネギ : 2 0 0 3 / 0 2 / 1 2 (水)

2 3 : 0 0 : 3 7 . 0 2 ID : w l U J t J a Q 0

麻帆良の生徒の私は勝ち組。

2代目サウザンドマスターとディープダイバーの絡みを毎日拝んで
ます。

上目づかいで「おにいちちゃん」と呼んでるネギ君マジ天使。

ちなみにこの二人現在は同棲中。

1 5 1 : ネギかわいいよネギ : 2 0 0 3 / 0 2 / 1 2 (水)

2 3 : 2 0 : 3 7 . 6 4 ID : 4 E U R V F 1 8 0

なん……だと!?

和葉×ネギだよな?

1 5 2 : ネギかわいいよネギ : 2 0 0 3 / 0 2 / 1 2 (水)
2 3 : 3 3 : 3 8 . 9 5 ID : w l U J t J a Q 0
今日はスーパで白ネギ2本買った。きつと今頃……

1 5 3 : ネギかわいいよネギ : 2 0 0 3 / 0 2 / 1 2 (水) 2
3 : 4 4 : 4 2 . 7 5 ID : / U b 2 6 n e E 0
> 1 5 1 1 5 2

そろそろ板違い。801板へ逝け。

だがしかしディープダイバーには既に嫁がいる。

ツルペタのロリだがあれは将来化けるな。

とりあえずネギ君の貞操は大丈夫。

最後にネギ君は俺の嫁。異論は認めない。

1 5 4 : ネギかわいいよネギ : 2 0 0 3 / 0 2 / 1 2 (水) 2
3 : 5 4 : 4 2 . 7 5 ID : / U b 2 5 n D 2 e

マジでか。シヨタの頃はファンだったから少しシヨック。

彼も大人になったんだな。

それにしてもYukiちゃんじゃなかったのか。

最後にネギ君はエヴァ様の婿。異論は認める。

1 5 5 : ネギかわいいよネギ : 2 0 0 3 / 0 2 / 1 2 (水) 2
3 : 5 8 : 4 9 . 1 5 ID : / w F c v 2 L i o

日本にはバレンタインという女性が意中の男性に贈り物をする習慣があるらしい。

年齢詐称薬を一瓶丸ごと送った。誰か撮影よろ。

きつと将来はナギ様の神々しい御顔にそっくりなんだろうな。

1 5 6 : ネギかわいいよネギ : 2 0 0 3 / 0 2 / 1 3 (木) 0

0 : 0 8 : 2 4 . 1 1 I D : / w l U J t J a Q 0

その手があつたか。激しくGJ。
よろしい任せされた。

などなど、スレは盛り上がっていた。要するに「ネギ君可愛い！」
「やがてはナギ様のようになるから見守ろう」との声が多数であった。和葉の見込みを超え、ナギファンクラブの8割がネギを支持し、ネギファンクラブへと入会した。

政治家、研究者でもあるが、同時に商売人でもある和葉がこのチャンス逃すはずもなく、サンライトハートではネギの生写真、顔写真が印刷されたクリアファイルなどのネギグッズを大量生産・販売を開始し、莫大な利益を得た。中でも“ナギまん”ならぬ“ネギまん”は大ヒットとなり、新世界の新たな名物候補へとなった。

またエヴァンジェリンは嫉妬の対象になっていたものの、ネギの従者になったということに対しては肯定的に受け止めるのが多数派であった。サウザンドマスターの名も釣り合うだけの実力と知名度を彼女は十二分に持っていることや、闇に堕ちた彼女をネギが光の道へと救ったという情報から、エヴァンジェリンに対して抱く民衆の感情は恐怖や畏怖から、尊敬や憧憬へと変化していった。

それと同時に、細々と活動していた『エヴァ様を崇める会』の入会者が100人ほどから5000人ほどに膨れ上がるという現象も起きた。世界中の女性の希望がネギであるならば、エヴァンジェリンは世界中のロリコン魔法使いたちの欲望の受け皿となっていた。

紳士と言う名の変態による決して揺るがぬ新たな勢力を築きあげていたことを、まだエヴァンジェリンは知らない。

一方、当のネギ本人の状況として、学園の魔法先生は事件の後始末に追われ、ネギの事前研修どころではなくなった。そこで空きコマや放課後の一般人教師たちに依頼して、麻帆良学園女子中等部にネギは研修を受けていた。頻繁に学校に出入りしていたため、子供先生の噂は学校中に流れ、勤勉な研修生として注目を集めていた。また魔法使いとしてのトレーニングも一般人教師による授業が挟まったために時間帯が変更になったり、エヴァ主従も加わったために少しずつ変更がなされた。

早朝は和葉や刹那たちとの基礎体力作りというのは当初の計画通りであったが、一般人教師ではダイオラ魔法球が使えないため、どうしても日中に“普通の時間”を勉強に割くことになってしまった。

そこで和葉の気は進まないもののエヴァンジェリンの24倍速のダイオラ魔法球を用いて昼休みの1時間を別荘で過ごさせた。別荘内での午前は、ゆきによる魔力制御の練習、午後はチャチャゼロと組ませて、ゆきとの実戦訓練。夜はゆきとともに自習に充てさせた。

ネギの得意な基礎魔法を伸ばすための詳しい専門書を用意するとともに、ネギの苦手な回復呪文を「知識として」補わせた。例えば本人が回復系の術式の行使が苦手でも、解決策の糸口さえ見つければ

和葉がさらに改良できる可能性があるためだった。

現実の時間の午後も空きコマの一般教師による授業を行い、帰宅後は再びエヴァンジェリンの別荘にて食事を和葉、刹那、エヴァンジェリン、茶々丸もさらに加えて、魔力制御と実戦訓練、和葉とエヴァンジェリンによる魔法の座学全般の講義、合間に和葉と刹那、茶々丸を相手にした模擬授業を挟むなど、徹底した英才教育が施された。

世界が認める天才である和葉、最強の魔法使いエヴァンジェリン、彼女よりも経験豊かなゆき、体術指導担当として刹那、茶々丸、チャチャゼロ。これだけのメンバーから眼をかけられていて強く、賢くなれないはずはない。しかもネギも天才少年。疲れの色を見せることは時折あったものの、やる気に満ち溢れた彼はどんどん知識や技を吸収していった。

別荘での訓練が終わるのは現実の時間で20時半ごろのこと。子供は良く寝るべきだとのことで、別荘を使用した分、早めに解散している。ちなみに現在家が壊れた状態であるエヴァと茶々丸は寮の管理人室でゆきと同居中である。刹那も寮に帰るため、この時間からは男二人+α（チャチャゼロ）の時間である。

TVの前にて和葉はノートPCで仕事をこなしながら、隣でネギはチャチャゼロを頭に載せ、フェイトの抱き枕を抱きしめながら「リリカルなのはStrikerS」のDVD最終巻を観賞していた。ネギにとっては4週目、和葉にとっては20週超えである。最終話の感動を噛みしめながら、ネギは和葉に話しかける。

「それでお兄ちゃん」

「どうしたネギ？」

「エヴァにも言われたことなんだけど、僕の戦闘スタイルについて相談があるんだ」

契約上ではネギが主であるが、師弟関係的にはエヴァンジェリンが師匠であるため、エヴァンジェリンはネギに師匠と呼ばせようとした。

しかし、「サウザンドマスターに呼んで欲しいようにネギに呼ばせればいいじゃないか。今はアレでも5年後を想像してみよう」という和葉の囁きにより“エヴァ”と呼び捨てるようになった。周りから見ると主従関係がひっくり返っているように見えたら、操られているかもしれないという危惧を持たれて、ネギの立場が危ういからという言葉は口に出さなかった。

「ん？ ゼロを前衛にして、ネギは後衛に徹するという話になったよな。何か不安とかあるのか？」

エヴァンジェリンは既に魔力を復活させているためほぼ敵なし状態、しかし一方ネギはまだ未熟であり、特に近接戦闘が苦手なため、彼女が最も信頼するチャチャゼロを傍に置かせていた。さらに利点として、チャチャゼロ小さいサイズの人形であり、且つネギの年齢なら人形を持っていてもそこまで不自然と言うわけでもない。茶々丸や他の人形より傍に置いておきやすいという利点もあった。そのため現在チャチャゼロは和葉宅で生活をしている。

「うん。不安とかじゃないけれど、僕はフェイトちゃんみたいになりたい」

普通なら「はあ？」と返すところを和葉は真摯に受け止める。

「俺がなのはさんの真似しているからって無理なくていいんだぞ？」

「無理してないよ。3次元ではお父さん、2次元ではフェイトちゃんが僕の最も憧れる人だから」

「1期から3期まで通しても？」

「うん。技も好きだけど、生い立ちとかそれからの歩みとか尊敬してるよ。あと、『本当の自分を始めるんだ』って1期のセリフは今まで何も知らなくて、何もできなかった僕にぴったりののかなって思っんだ」

「そうだな。最近のネギは頑張ってるのがわかるよ」

ネギの想いに同意する。しかし、この歳にして既にセリフまで覚えてる重傷ぶりに、和葉は若干引くと同時に悟った。もうネギは戻れない、と。ならばどこまでも導いてやろうと決意する。

「ありがとう。お兄ちゃん。僕もっと頑張るよ。それでね光や雷は僕得意だから『フォートランサー』とかできるかな？って思ったんだけどできるかな？」

「ネギは俺やゆき姉と違って適当な言霊を操れないから少し難しい

けど、魔力は豊富だから似たようなものは出来ないことはないよ。
ただ実戦レベルまでに引き上げるなら開発も大変だけど要特訓だな」

「それからソニックムーブとか覚えて、バルディッシュみたいな武器を作ったらチャチャゼロさんと隣で戦えるかなって思うんだ」

「サッキノ瞬動ミタイナヤツカ。ガキモ俺ノ隣デ戦ウノカ」

「ソニックムーブか。風魔法の応用すれば瞬動より覚えるのが早いかもな。それからバルディッシュも一応作れるけど、杖は形見のがあるだろ？」

「あっ!？」

「それともその杖を媒体にして作ったら結構いい性能のができるけどそこまでして欲しいか？」

「やっぱりやめとくよ。バルディッシュはまだ要らないけれど、でも新しい魔法は教えて欲しいんだ。ダメ？」

「教えて欲しいっていうけど俺だって、そんなに暇じゃないぜ？
他の作業をしている式神と同期しているから今ゆっくり出来ているけどな。ネギが開発するんだよ。それならアドバースぐらいしてやる。今までみたいに本に書いてあることを真似するだけじゃなくて、魔法を一から作ることに今のうちに慣れておいた方がいい。その経験は必ず役に立つ」

「超鈴音を救うのにも、世界を救うのにも」

「うん。僕自分でやってみるよ!」

「ケケケ、面白クナッテキヤガツタナ」

第26話 ネギ君に萌え死ぬスレ（後書き）

ネギの修行風景はごめんなさい割愛しました。

現在彼の相棒はチャチャゼロです。

覚醒したネギでもオタク化は進んでいました。多分救えません。

今回でフェイトちゃんを目指すという成長方針は決まったようです。

本当はバレンタイン編も入れたかったのですが作者の体力的に無理だったので切りのいいここで投稿させていただきました。

第27話 バレンタインの陰謀（前書き）

本当は名前だけ出てきたあの娘たちを出すつもりでしたがまた今度基本無駄話ですが、ちよいちよい今後の計画にかかわる話や、原作とは違う状況を少しだけ載せてます。

第27話 バレンタインの陰謀

第27話 バレンタインの陰謀

2月14日、金曜日。

早朝訓練を行った後、いつも通りシートを広げて朝食を取っている一行。

しかし今日はバレンタインデー。乙女の決戦の日である。

刹那からのプレゼントをまだかまだかと横目で見る和葉に気づいているのか、刹那は眼を合わせようとしない。エヴァンジェリンも拳動不審にネギの横顔を眺めつつ、背中の方でこそそそとしている。朝食を一通り食べ終わり、茶々丸と刹那が弁当箱をしまいはじめる。も気まずい沈黙が流れる。

「もーみんな何黙っちゃってるの？ 私が一番もらうよ」

ゆきが沈黙を破り、ネギと和葉の鼻元に小さな、小さな包を渡す。ちようどチ・ルチヨコが入るくらいのサイズのものだ。

「はい。バレンタインデーだよ？ これからもよろしくね」

満面の笑みで渡し、エヴァンジェリンと刹那に意味深げな視線を送る。

「サンキユ。ゆき姉」

「ゆきお姉ちゃん。ありがとう。そうか今日はバレンタインデーだった。お花用意し忘れたや」

ネギはシヨボンと落ち込む。イギリスでは日本とは違い男性から女性へ花束を贈ることが多いのだ。

「ははっ。イギリスじゃなくてここは日本だって。日本では女性から男性へチョコを贈る日だ。3月14日にお返しをすればいいから気にすんなネギ」

と言いながら再び刹那を見る和葉。しかし刹那は眼を合わせない。次に動いたのは茶々丸。

「和葉さん。ネギ先生。これは私からです。夜にでも開けて下さい。今日はお二人とも大変でしょうが、その、頑張ってください」

茶々丸が渡したのは手のひらに収まる程度大きさのラッピングされた箱。サラサラ、という音がすることからおそらく中身はお茶だろう。2人が迎えるであろう過酷な夜を見越してのプレゼントをするあたり、茶々丸はかなり気が利く娘だと和葉は評価する。

「茶々丸。気の利いたものをありがとう。ありがたく頂くよ」

「ありがとうございます」

そして次に耳まで赤く染めたエヴァンジェリンがネギに声をかける。

「ぼーや。渡すものがある。ありがたく受け取れ」

眼を合わせることもなく、乱雑に放り投げたのはプラチナ製の指輪。一級品の魔導触媒だ。

「この指輪はもしかして……えっ!? でもまだ僕は10歳だし、エヴァンジェリンさんとは歳が。アワワワッ」

ませた天才少年の思考回路は知恵熱かも知んすべきオーバーヒートを起こし、完全に固まってしまった。

「勘違いするなよ。ぼーや。魔法戦士を目指すという話を聞いたぞ。杖がなくてもそれなりの魔法が使えるようにという私の配慮だ。貴様には『闇の福音』のパートナーにふさわしくなってもらわねば困るのだからな。別に他意はないぞ。って茶々丸、勝手に記録するな!」

「前々カラ準備シテタンダロ。素直ニナレヨ御主人」

ネギの頭上でアホ毛を引っ張りながら、再起動を試みているチャチャゼロ。

「ほらエヴァちゃん。照れない照れない」

言い訳がましいエヴァンジェリンに後ろから両手を回して抱きつくゆき。むぎゅうつという擬音語がエヴァの背中に伝わる。

「ゆきさんグッジョブです。そのままお願いします(●REC)。それからマスター。女物のお揃いを左手につけていることなど、ネギ先生以外気付いているのですから、必死に隠しても無意味かと」

「な、黙れボケロボ。ええい巻いてやる。巻いてやる」

ゆきの手を振り払い、強引にネジを回す。当の茶々丸は恍惚とした表情を浮かべながら、必死に両手で漏れ出す嗚咽を抑える。

「ああ、いけません。マスター。そんなに巻いては。くぁwse dr
ftgyふじこ」

「幼女に玩具にされながらも感じてしまうロボ娘か。あれ絶対イッてるよな」

「茶々丸ちゃんはログアウトしました」

詳しく描写すると18禁になりそうな表情を見せたロボ娘に和葉は興奮し、主従のやり取りをウサギリングをシャクシャクと齧りながら眺めるゆき。

「黙れオタク姉弟！ 茶々丸も反省しておけ」

茶々丸を足蹴にした状態で両手から『断罪の剣』を出して、ゆきと和葉の首に突き付ける。すぐさま二人は両手をあげて苦笑いをする。

「ハアハア。マ、マスター。先ほどの激しすぎました。私はもうダメです」

「もう。エヴァちゃんの怒りんぼ」

事後の茶々丸は妙な息遣いをつけ、ゆきは頬を子供のように膨ら

ませる。

「そつそれより、後ろ見るよ。ネギがログインしたぞ」

和葉が指差したのは復帰したネギ。その右手には指輪が握られており、

「あ、あの。そのエヴァありがとう。肌身離さず身につけておくから」

そつ笑顔で指輪をはめたのは左手の薬指。

「わかっててやってるのかな？」

「どちらでしょうか。カズ君だったらわざとでしょうか、ネギ先生なら」

「多分コノガキ八何モ考エテネエゼ」

ネギは首を左に傾げる。

「こいつ、とんでもない女泣かせになるぞ。こついうところも忌々しい父親似だな。ちつ」

そつ言いながら背中の手を回して、中指から薬指へと指輪をはめ換える。もちろんネギ以外の面々はそれに気付くが突っ込まない。

「本当は嬉しい癖に。そこはパートナーのエヴァンジェリンが手綱を握ればいいんだろ？ そついやネギ。チョコじゃねえけど俺からもプレゼントがあるぜ」

懐から取り出したのは悪趣味なほどの黄金色、もとい金ピカと呼ぶにふさわしい輝きを放つカードをネギのおデコに当てる。

「何これ。ネギ・スプリングフィールドって……僕名義のカード？」

「裏の世界だったらどこでも使えるカードだ。俺が作つといた。それを自分の研究費に当ててくれ。サンライトハートだけじゃ入手できない魔法薬や材料を買うなり、傭兵や情報屋を雇うなり好きに使用え。全部お前の金だ」

超の石化の研究に関しては和葉とゆきも協力するものの、本来の研究があるためネギとエヴァンジェリンが主になって行うことになっている。前例のない永久石化の研究だ。材料費や書籍の費用は馬鹿にならない額がかかる。会社の金を勝手に使うわけにも行かないのでポケットマネーから補助していたが、今回からネギ自身で稼がせることにしたのだ。

「で、いくら入ってるんだ近衛和葉？」

「現時点で日本円に換算したら3億ぐらい？ このペースなら近いうち2、30億はいくんじゃね？」

「ええええええ!!?」

「お、億！ カズ君そのお金は一体どこから！？」

「ぶぶっ！」

「エヴァにゃん汚ないよ」

「ああマスターの肌に濡れた服が張り付いてます。いけません、あ、いけません。ゆきさん。その拭い方ではマスターの胸元が……

(●REC)」

驚きの額にお茶を噴いてしまうエヴァンジェリンとそれをハンカチで拭きとるゆき。そしてその光景をHDで録画する茶々丸。

数日とはいえこの3人は同じ管理人室で過ごすようになってから意外と仲良くなっているらしい。推定1000歳以上の美少女と600歳以上の幼女の絡み合いに発情しだす2歳児の欠陥ロボットを微笑ましく眺める和葉。エヴァンジェリン曰く、復活後の茶々丸は感情や自我というものが芽生えて来ているらしいとの報告を受けている。復活後のメンテナンスを依頼した葉加瀬には否定されたが、アーティファクトの副作用なのかもしれないと和葉とエヴァンジェリンは考えている。

「ん？ サンライトハートで売り上げたネギグッズの利益の8割を渡してるだけだぜ。俺だって肖像権勝手に使ってるわけじゃねえよ。サンライトハートとしては新たな顧客層増やせただけで儲けもんだしな。そうそう入会費と年会費はファンクラブの運営費に全部充ててるから」

「この前のフィギュアとか、生写真とかの売り上げなの？」

「おう。だからこれはネギの正当な報酬だ。研究のために使え。言っておくがDVDとかは教職の給料で買えよ」

「アハハ、お兄ちゃんソンナコト考エテイルワケガナイヨ」

「絶対考工テタナ」

「心拍数20上昇を感知。発汗量も急上昇中です」

「どこで間違ったんだ。このボーやは」

素直故に、あまりにも周囲にわかり易過ぎる反応はネギの悪い癖だ。

「それと明日までにこれ全部サイン書いておけよ」

渡されたのは段ボール一杯に詰められたカード。表にはネギファンクラブ会員証と印刷されている。

「ネギファンクラブの正式な会員証だ。仮のカードを配布していたが、正式にはネギのサイン付きのものを配布する。てことでサインの練習だ」

「ちょ、ちよつとこれは多すぎるよ！！無理だつて」

「グダグダ言わずに手を動かせ。思いつく限りの身体強化を使ってもいいから明日までだぞ。これも修行だ」

諦めたのか、修行だからと割り切ったのかネギもサインを始めた。さつそく和葉がネギから受け取ったカードの表には『ネギファンクラブ会員証No.1』と印字されている。そしてネギのサインの下に自分のサインを書き加えた。

「これはカズ君が会長つてことですか？」

「流石おれの刹那、御名答。こんなタイミング良くファンクラブを立ち上げられる人間は俺しかないっしょ」

「ちょっと待てええ！ 私のぼーやなのだから私が1番だ。お前のを渡せ近衛和葉」

エヴァンジェリンがネギからカードを取り上げようとしたが、エヴァンジェリンの頭上でチラつかせる。

「ほれっ、エヴァンジェリンは名誉ある3番な。これの裏に自分の名前をサインしてくれ」

「くう。なぜ私が2番ですらなく3番なのだ。って、おい貴様。この会員証に込められた魔力は……まさか」

「ええマスター。このカード自体が契約書のようにです」

「契約内容はカード裏の規約にある『私はネギ・スプリングフィールドを全力で支援します』という頂か。貴様は全く小賢しいことを」

「ですが有効な手ですね。カズ君のサンライトハートも裏側から支援しますから、それとは異なる人脈を得ることができたのは大きいと思います」

「元々ぼーやに好意的な人間しか入らせない上に、契約で支援を仰ぎ、裏切りを防ぐ。確かに、ぼーやにとって最高の後ろ盾になるだろうよ」

ネギがエヴァンジェリンを連れ出したのは光の道。しかしそのネギを導いているのは悪と呼ぶべき手段を持って、偽善を貫く和葉だ。

悪の魔法使いを自負していたエヴァンジェリンにとって、これ以上に愉快な存在はいない。自然と歪んだ笑みが目元から零れる。

「ネギには“信仰”ともいうべき“愛情”でこのパワーゲームを制してもらう。そして敵か味方かが一番眼に見える日が今日ってわけさ」

「乙女の純情をも利用するとは恐れ入ったよ『深淵の探究者』。だがお前は地獄に堕ちるだろうよ。むしろ今すぐ堕ちろ」

「本望さ。俺の仕事はこの世から地獄を失くすことだからな。あの世のことはどうでもいいさ」

少々カッコいいなと自分に酔いつつ喋るあまり、余計な一言が出る。

「でさ。刹那。俺にチョコはないの？　なんだったら今夜『チョコの代わりにウチを食べて』って感じで夜這いに来ても……」

「うううううう、ぐっ、ぐ『紅蓮拳』！！！」

「へぶらっそげびぶべばあ」

口元にチョコレートの箱ごと拳を叩きつけ、さらに鳩尾に見事な前蹴りを貰う。

黒の下着を目に焼き付けて、和葉の意識はログアウトした。

「桜咲刹那！ 本気だったのか」

「そ、そのっ、このちゃんが」

「で近衛はいくつもらったんだ？ 既にネタは上がっているんだ白状しろ！」

「ん？ “今は”義理チョコ3つってところだけど。彼女からは、アレ？ まだもらってねえや。朝も一緒だったのにずっとなんだか気まずい雰囲気だったしアレ？ 梅原と橘は？」

「っゼロだよ。お前らは木乃香さんとか美也ちゃんから貰ってんだろ。妹とか反則だろ」

「姉もいるけどな」

「美也からは超包子の肉まんだったから一応ゼロなんだけど」

「あとは葛葉先生に頼むか？」

「止めとけ梅原。俺達紳士は毎日あの美しいラインを視姦できるだけで幸せじゃねえか」

「そうだね。よし。今日は一瞬たりとも眼を離さず、先生の太腿を舐めまわすように観賞するぞ」

「流石、わかってるな橘は」

「そっいや近衛。最近観賞会してないな。今日行ってもいいか？」

「悪い。今日は忙しくてまた今度な。すっげえ忙しいんだよ今日は」

力なく和葉はため息をつくが二人には理解できなかった。

「……んでこの量かよ」

「和葉も毎年すごいけど、ネギ君はもつとすごいね」

和葉とゆきが眼にしているのはチョコレートの小包の山。ネギフアンクラブ内に窓口を置いてそこから魔法球内に作った倉庫に転送するようにしていたが、まともに受け取っていたのならそれなりの大型とらつくでも2回は搬送しなければならない量が部屋に溢れかえることになっていた。放課後エヴァや刹那がネギの相手をしている間、本来の研究はストップさせ、2人はこの山に立ち向かう。

「さてゆき姉。仕分けガンバろうか」

「ううう。やる気がしないよ」

「摘み食い許可するから」

「飽きそうだけだな。みんな頑張ろうか」

不満げながらも眷属の白狐を24体呼び出す。

2人がこれから行う作業は和葉とネギ当て送られてきたプレゼン

トの仕分けである。プレゼント1つ1つに解析をかけ、中には法を犯して媚薬を混ぜたものや、殺意を持つて毒薬を仕込んだもの、殺人的な腕前により劇物と化したチヨコなどを弾くのだ。これはネギや和葉の安全のためだけではない。

特に今回においては誰が特に好意的な人物かを見極めるという意味があつた。既婚者も会員の中にはもちろんいるため、プレゼントを贈るか贈らないかだけがネギへの好意のバロメータになることもないが、財を投げ打つ者や、手作りの手間を惜しまない者、気の利いた物を送る者など、その人物の嗜好性や、経済力、情報力、技術力の調査を兼ねることができなのだ。

具体的には石化治療に関する巻物を送る人物は情報力に長けていると言えるし、自作の惚れ薬を作る人物であれば危ない面もあるが技術力は確かであると言った判断が行える。しかも曲解するならば法を犯してまでもネギの味方に成りえる人物。逆に毒物を仕込んだ者は大抵の場合は偽名であるが、敵対組織発見の手掛かりになるかもしれないし、本名だとすればその人の周りは既に敵対勢力に抑えられて名前を利用されたのかもしれないという判断もできる。手紙が同封されている場合も多く貴重な情報源となる。

まさにこの日はネギの人気度を逆手に取った、新勢力の調査という大イベントの日であつた。ファンクラブの会員証による契約と、このプレゼント調査によりファンクラブを強固な組織へと作り変えるのだ。

過剰なまでの身体能力と情報処理能力のブーストにより無事に解析が完了した。最後にはやけくそになって咸卦法まで使ったのにも

かわらず2人の疲労が少ないのは、和葉のファンの心優しい娘たちが作ってくれた疲労回復薬入りのチョコを口にできたからだ。精力増強効果もあったはずであるが文字通り心身ともに疲労した2人は気にしない。

仕分けの結果、和葉宛が総数1738個。内、媚薬入りが11個、毒物入りが総数の1割を超える206個という結果だった。去年と比べて総数は10分の1まで低下したにも関わらず、毒物入りが150件ほど増えていることに和葉は若干涙目になる。

そしてネギ宛。総数384637個。現在進行形で肥大しつつあるファンクラブ約100万人にしては少ない方だ。設立して直ぐにこのイベントがあったことに和葉は安堵していた。また主な内訳として媚薬入り231個、毒物入りは8個。和葉と比べるとその差は歴然。またもや涙目であるが、ネギの味方の多さを裏付けることができただけでも収穫は大きかった。その他としてイクシルやエリクサーなどの高級回復薬を送ってくるセレブや、リリカルなのはの画集や同人誌をチョイスする猛者もあった。成人向けの物は没収しておいたが、これだけネギの情報が回っているあたり、遅かれ早かれその域に到達しそうな予感はいつまでも消えることはなかった。

仕事を終えた2人は魔法球を出て和葉の部屋のリビングでくつろぐ。残りの面子はまだエヴァンジェリンの方の別荘で修行中であるう。

「いやゝ疲れたね」

「ゆき姉には本当世話になりっぱなしだな。いつもありがと」

「どういたしまして」

「こういう平和っていいよな」

茶々丸のプレゼントである玉露を口にする和葉。ほっこりとした旨みと香りが、3日分のカロリーをチョコのみで摂取した不摂生な身に染みいる。

「みんなこんな風に過ごせたらいいのにね」

「うん。もっと本業の方を頑張らないとな。そろそろプランに優先度をつけていこうと思うけれど、やっぱり世界樹なんかの霊脈を丸ごと移植してつてのは厳しそうだな」

「だね。調ちゃんのチベットからの報告書でも同じことが書いてあるよ。魔法世界のとは全然質が違うつて。木精も同調し難いみたいだし」

「調と俺らでは結果が違いそうだけど、一番当てになるのは魔法世界人の彼女だしな。調が難しいって言うんじゃないか。こっちの魔力をあっちの魔力に変換する方法があればいいけど足掛かりもなし。新型の魔力炉の生成も方法は見つかったけどでもやり方がなあ。魂とエネルギーの交換は割に合わなさすぎるつて。QBみたいに感情からエネルギーを得る方法があればどんなに楽なことか。あいつ嫌いだけど効率はいいいよな」

「感情ねえ。無からエネルギー出せたらいいけど、そうはいかないよね。実際問題根本的な解決策は？どっから魔法世界にエネルギーを持ってくるか？魔法世界を上書きしてしまうか　なんだよねえ。出来るだけ？で行きたいけど」

「やつぱり？の内の“共鳴計画”を第1に持ってくるか。いろんな技術を合わせる必要があるから一番難易度自体は高そうだけど、ほとんど今は技術が入ってきてるし邪魔が入らないように気をつければきつといけるな。それと並行するか同時決行で“幻影計画”が無難だな。」

「今回は発光周期が乱れていて今年の6月22日って予想らしいけど、初期段階実行までに他も間に合いそうなの？」

「間に合わせるさ。それよりフェイトたちの方が怪しいぞ。黄昏の姫御子だって全く手掛かりなしな訳だし。麻帆良にいるんじゃないのかって思ったんだけどな。他どこ探せって言っただよ」

「ここにいてるって仮定すれば、経歴から見たら私は明日菜ちゃんかなって思ったんだけどね。お風呂場でちよっかいを出してみたけど、無効化どころか抵抗もしてなかったよ。ごく普通の女の子なのに過去の経歴は不明なところが多いし、後見人が学園長だし、なんか秘密はありそうなんだけど。木乃香ちゃんとわざわざ同室にするんだから、実はどこかのVIPって線だよな」

「亡命中の皇族の娘とかかもしれないな。どっちにしろサウザンドマスターの足取り追わないと姫御子にはたどり着けないってか。フェイトたちのほうが情報も道具も少なすぎて無理ゲーじゃないだろうか」

「和葉がしつかりすればいいんでしょ。『リライト』使わなくて済むもん」

「そうだな。ネギの世話はエヴァンジェリン達にある程度任せられるようになったしな。俺は研究頑張るよ」

そう言っ て和葉は無造作に手元のチョコレートのパクつく。

「あつ、和葉それは」

「どーせダメ何だ俺は。ネギより全然モテないし、いやモテなくていいけど刹那からも貰えないし、あれ俺要らない子なのかな。鬱だ死のう」

「ダメえ！ 戻ってきて和葉！」

口にしたのは超ダウン―系の薬の入ったチョコレート。直接的な毒物ではないが、効果はてきめんだったようだ。

「何をしてるんだ。貴様ら」

目にしたのは早朝よりも悲惨の顔色で泡を吹きながら倒れている和葉。そしてマウントポジションを取るようにその上に座っている、妙に服がはだけて右肩が露出したゆきの姿。

「くんずほぐれつ甘いひとときを？」

自分で『ポツ』っと擬音語を口にしながら、着衣の乱れを直す。

「アホ狐は黙ってろ」

「ゆき姉様？　ってカズ君しっかりしてええええ！！」

「せ、刹那さん！　人工呼吸をしないと」

「虫ノ息ハシテルダロ。バカガキ」

和葉はこの後2度ほど生死の境をさまよったが、無事復帰を果たす。

翌日に普通の手作りチョコを刹那は記憶喪失の和葉に手渡して、
とりあえずは1件落着となった。

そしていよいよ、ネギの教師としての生活が始まる。

第27話 バレンタインの陰謀（後書き）

反省点：せつちゃん分が足りない。

本来いちゃいちゃルートでしたが、大人の意味でやばい方向にいったので和葉哀れな方向に。でもそれでもアイドル並みには貰っている彼です。

他のファンも出て来て修羅√も考えていましたが今後に取りっておきます。

茶々丸もキャラ崩壊気味です。

一度ボデイが壊れて復活しているので何かがバグったかもしれない。

愛情方面においてはネギ無双。

もちろんクラスのみんなからも回収しているようです。

エヴァ√か、それとも？

次から授業始めます。

吸血鬼VSを含め、原作イベントはかなりスキップすると思います。ある程度生徒との絡みを持たせつつ、修学旅行編に突入したいと思います。

イラスト&現在勢力まとめ（前書き）

ネギ君についてはネタばれというか予告です。
いつもよりはまともに色をつけてみました。

200文字以上でないと投降できないので、めんどくさいことにな
っている各勢力を自分用にまとめてみました。

イラスト&現在勢力まとめ

本SSにおける現時点で判明している勢力まとめ。
備考欄に原作との相違点など。

■白き翼

紅き翼に倣って作った新興組織。現時点ではエヴァ主従とネギのみ。

後ろ盾はナギファンクラブの大半及びネギファンクラブ、エヴァ様を崇める会。

実質的には和葉率いるサンライトハートがサポートしている。

・ネギ：2代目サウザンドマスターを名乗る。両親のこと、魔法世界の真実を知った。

和葉、チャチャゼロと同居中。和葉、ゆき、刹那に対しては弟ポジション。

和葉の影響で徐々にオタク化。フェイト萌えのあまり……

> i 2 3 4 1 1 — 2 5 2 5 <

・エヴァンジェリン：ネギの従者。学園結界から解放済。光源氏計画実行中？

ネギにエヴァと呼ばせている。

・チャチャゼロ：戦闘におけるネギの相棒。日常生活も共にする。

・茶々丸：一度大破するがエヴァンジェリンのアーティファクトにより復活。

エロ方面に目覚めつつある？

■ネギファンクラブ

白き翼を支持するナギファンクラブから派生した組織。会員証の契約によりネギの全力支援を約束されている。裏世界の女性陣から組織されており、規模は現在進行形で増殖中。政界、財界の実力者も多数おり、狂信者も多いため他組織から最も危険視されている。

・NO.1 会長：近衛和葉

・NO.2 副会長：??? 某組織の実力者

・NO.3：エヴァンジェリン

■エヴァ様を崇める会

元々細々と活動していたがネギによるエヴァンジェリンの解放により活動が活発化。

主な構成メンバーはロリコンと言う名の変態紳士たち。白き翼を支持。今はまだ闇の中で動いているらしい。

■MM元老院

和葉、ネギ、フェイトたちが敵対視する組織。様々な陰謀の黒幕。世界の他の組織を束ね始めている主人公たちでも、まだ底は見えない。

・クルト：和葉の研究を支援。政治面における和葉の先輩的存在。サンライトハートを陰ながら支持するも真意は不明。

■アリアドネー

・セラス：和葉の留学手続きから、研究支援まで協力する。サン

ライトハートの重要な協力者。

■ヘラス帝国

- ・テオドラ：和葉の研究を支援。

■サンライトハート

魔法世界における和葉の支持者および関西呪術協会改革派で構成される魔法具販売会社。

略称S H。裏、特に魔法世界では誰もが知る超一流企業。慈善事業も盛んに行う。

- ・和葉：社長。道具の開発も自ら行う。

「小さな知恵者^{リトルワイズ}」として知られる財界の重鎮。

- ・ゆき：副社長。

- ・鶴子：引退後、表における社長に就任。和葉の姉的存在その2。

- ・暦、環：売り子としても、研究員としても活動中らしい。

- ・調：和葉の研究を別働隊で補助。研究のキーパーソンとなるらしい。

■関東魔法協会

MMの下部組織ながらも情報制圧力は高いらしい。学園長に対する不信も広がりつつある。

・学園長：和葉の祖父。熟女好きで、私生活では仲がいいが、組織的には敵対気味。

保身に走る傾向がある所から小物臭もあるが、情報隠ぺい能力

はおそらく高い。

・高畑：和葉・刹那・ゆきの3対1によってフルボッコにされる。
和葉に対する感情は微妙である。

・明石、式集院、瀬流彦：和葉の研究補助員であり、和葉に好意的。
的。

・刀子：元穏健派。和葉のクラスの担任。毎日生徒に視姦されている。

・ガンドルフィーニ、高音：和葉一行およびエヴァンジェリンを問題視。

■その他麻帆良学園

・超：エヴァンジェリンを庇って石化中。和葉の存在を知らなかった。和葉を支持？

・明日菜：まだ魔法バレなし。黄昏の姫御子としてS H、M M、完全なる世界が搜索中。

・木乃香：和葉の双子の妹。刹那と仲が良い。まだ魔法バレなし。

■関西呪術協会

現在穏健派と中立派、改革派が三つ巴状態であり、強硬派は影を潜めている。

穏健派

過去の対立は水に流し、東と仲良くしようという方針。

木乃香に対しては非魔法バレを貫く。

・詠春：親として、英雄としては尊敬されても、組織の長としては尊敬されないようなお人好し。

中立派

保守派とも。東や西洋には非干渉を訴える。神鳴流などが主。

改革派

東への責任追及を行うためにも、武力によらない勢力の拡大による発言力の向上を訴える。

・和葉：6歳にしてリーダーとなり、次期当主を名乗る。

留学期間中に力は得たものの西を離れていたため未だ完全掌握できていない。

木乃香については掌握後に魔法バレする予定。

・刹那：公の立場的には和葉の式神。和葉の求婚に応えるも道のりは遠し。

・ゆき：天狐という立場から崇められ、発言力も高い。元々この組織と何か深い縁があるらしい。

・鶴子：引退後も発言権は高く、和葉を指示。

・小太郎：改革派に拾われた孤児の1人。恩義を感じている。

強硬派

東に対して武力による報復を考える一派。

怨みの深い者、暴れただけのはぐれ者などが主なメンバー。

・天ヶ崎千草

■完全なる世界

MMによる残党狩りによって縮小。

・フェイト：和葉とは親友とも呼ぶべき仲。出会いは戦場らしい。平和主義者同士であり、世界の真実を知っている、お互いにとって貴重な人間。

陰ながら和葉と互いに情報提供を行っている。

和葉の研究に理解を示し、リライトは次善策ということを理解した上でも、

人形としての本来の役割である世界の救済を目指す。

また栞、焰、暦、環、調を和葉と共に戦場で救った。

・焰：どこかで工作活動中。

・栞：どこかで工作活動中。

・デュナミス：和葉とは私怨で敵対。和葉にとっての天敵らしい。

■紅き翼

・ナギ：行方不明。

・高畑：完全なる世界撲滅中。

・アル：????

・ラカン：和葉の研究スポンサー。

イラスト&現在勢力まとめ（後書き）

ようするにネギ君ソニックフォームを先にUPしたかっただけです。
次の話も執筆中ですよ。

第28話 ネギ先生の実力（前書き）

体力的な問題で今回短め。切りのいいところで終わっています。
研修効果の魔改造ネギをお楽しみください。

第28話 ネギ先生の實力

第28話 ネギ先生の實力

ネギが日本に来てから約1週間。様々なことがあった。

新たな家族と呼べる人との繋がりを得た。

一般社会と今まで過ごしてきた環境との違いを知り、魔力の制御や基礎体術も少し上達した。

事件に巻き込まれ、自分の置かれた状況と實力を痛感した。

事件による被害を目撃し、両親の過去を知った上で、父の名を継ぐことを決意した。

師匠でもある最強の従者もできた。

そして始まる教師生活の初日。麻帆良学園女子中等部2 - A教室の前の廊下。

魔法学校で与えられた課題だからではない。立派な魔法使いとなる前に、まずは立派な先生になるのだと自分に誓ったからだ。あの日、自分のために歓迎会を開いてくれた生徒たちの顔を思い浮かべ、

今一度首元を確かめる。

「うん……ネクタイは曲がってない。よし」

指先まで伝わってきそうなほどに高まる胸の鼓動。ネギは緊張して扉に手をかけようとする。が、しかし、手をかけようとしたその扉は僅かに開いている。

教室の様子が気になり、隙間からのぞきこもうとするが、ふと上を確認すると黒板消しが扉に挟まっているのを発見する。明らかに罠だ。

「これは……。教師として試されているんだな。ここは立派な先生らしく行くぞ」

格好よく罠をくぐ抜ける姿を、扉の向こうの彼女たちは想像しているに違いないと思い込み障壁を完全にオフにして扉に手をかける。普通の教師は魔法なんて使わずに対処するに違いないとネギは思い込んだからだ。

できるだけクールに何事もなかったかのように振る舞うことをイメージしてみる。

そして大きく息を吸い込み扉を開いた。

「みなさん。おはようございます!」

左手は落下してくる黒板消しをみごとに掴みながら、元気のよい挨拶から始める。

一度立ち止まりクラスを見渡すと、見知った生徒たちの顔。好奇心を見せる者や、残念そうな顔を浮かべる者と反応は様々であったが、エヴァンジェリンや刹那は目を細めて意味深げに微笑む。

何気なく進むが足元に張られている毛糸の紐の存在にすっかり気づいて跨いでいく。チツ、と舌打ちする音が聞こえたが、さらに一歩進むと三方から矢が飛び出してきた。

左手の黒板消しと右脇に抱えた授業道具を教卓にとっさに置いて、全ての矢を掴み取る。

教卓に無事にたどり着くと様々な歓声が上がった。

「おおおおっ！」

「スツゲエネギ君」

「なかなかできるアルね」

「流石ネギ先生ですわ」

「キャアアア。ネギ君すごい」

しかしその中でネギが聞きとった中に聞き逃せないことを呟いた者がいた。

「ええーっと。最初のHRに言うことではないのかもしれませんが。

『つまらない』とは鳴滝さん、どういことですか？」

目の前の双子に視線を向ける。

「どっちの鳴滝？」

意地悪く質問をしてきたのは朝倉和美。しかしネギは直ぐに答える。

「史伽さんと風香さんの両方です」

「ネギ、下の名前もちゃんと覚えてるんだ。何気にすごいというかエライわね」

「せやね。ちゃんと先生になろって感じるわぁ」

神楽坂明日菜は感心し、木乃香も同意する。しかし当然のことだった。ネギは昨晚も今朝も、何度も繰り返し生徒の顔写真入りの名簿を見たのだ。しかも歓迎会で既に全員と対面している。そんな彼女たちの顔と名前を覚えていないわけがなかった。

「それでどういことなんですか？」

ネギは目の前の双子を問い詰める。ちゃんと叱れない先生はダメな先生だということを、事前研修中に何度も現役の教師たちに習ったからだ。

「えええつと。それは」

「鳴滝さんたちを怒らないでください。ネギ先生。言い出したのは鳴滝さんたちと春日さんですが、私を含めてクラスのみんなでやったことなんです」

雪広あやかが立ち上がって弁明するが、ネギはその言葉に衝撃を受け、半分目に涙を浮べそうになる。

「クラスのみんなってそんな。僕はそんなに嫌われていたんですか？」

ネギの動揺ぶりに逆に驚いた雪広は教卓まで来ると、ネギの左手をやりわりと両手で掴む。

「いえつ。そんな思いつめた顔をしなくても。それは誤解ですわ」

「その左手を開いてみてよ」

最前列の椎名桜子が笑顔で言う。ネギは何のことかわからず左手を開くとそこには。

赤のチョークで描かれた大きなハートマーク。

教卓上の黒板消しを見ても同じマークが印されている。そして隣

に置いてある先ほど掴み取った吸盤式の矢をよく見ると羽の部分には『ようこそネギ先生』『よろしく』『海より深く愛しています』などのメッセージ。

「これは一体？」

「これはみんなの気持ちだよ。それからこっちに来て」

廊下側で最前列に座る佐々木まき絵が手招きする。先ほどスル―した紐が貼られていた場所だ。ネギがその場所に来ると、彼女はしやがんで「えいつ」とその紐を引いた。

「『ネギ先生。2・Aへようこそ！！』」

クラスに響き渡るの歓迎の声と同時に、鮮やかな輝きを放つ紙吹雪が彼の周りを舞う。頭上を見れば紐の先にバケツが設置され、それが傾いて中身が落ちてきたようであった。

「みなさん。ありがとうございます。僕これから皆さんにとって立派な先生に慣れるように頑張ります！」

先ほど眼に浮かべたモノは、うれし涙へと変わって頬を伝った。

朝のHRの後は直ぐに担当の英語の授業であった。内容は教科書は使わず、それぞれの自己紹介を英語で行うというもの。日本語では既に歓迎会で行っているため、再びやるなら英語で勉強しつつ親交を深めようという意図によるものだ。

指図されたわけでもないが、真剣に生徒たちのことを1週間考えぬいた末に、ようやく決めた初授業の内容だ。そしてこれには生徒個人のことに、英語の実力を正確に把握するという狙いもあった。

内容は最低限、？挨拶　？名前　？好きなものを話し、また？ネギからの質問に1つ答え　？ネギへの質問を1つする　という内容だ。余力のある生徒は1分程度ならどんな内容でも喋って良いことにしてあった。

これは相手が好きなことが分かるし、普段から使える英語の力を測れる。また相手のレベルに合わせてネギが質問をできるという利点もある。バカレンジャーと呼ばれるメンツなどレベルが低いと分かった者にはイエス、ノー形式のごく簡単な質問をするなど様々な配慮をし、流暢な英語を話せるエヴァンジェリンや雪広などとは会話形式で模範的なやりとりを披露するなど対応をして見せた。

ネギの好きな情報を聞けるために耳を傾けてたり、英語ができない自覚がある者ほど次の質問どうしようかと迷って、前の人のを例として真剣に聞いていたため、クラス全員が参加したと呼べる授業であった。学級崩壊のような状況を起こすこともしばしばだった高畑と比べても、初日の授業としては成功であったといえる。

その授業後の休み時間、盛り上がったのはもちろんネギの話題。
佐々木まき絵、明石祐奈、和泉亜子、大河内アキラの仲良し運動部の4人。

「ゆ？なは、ネギ君の授業どうだった？」

「まあまあじゃないかな。アキラはどう思う？」

「うん。内容的には簡単なはずだったけど、本物のイギリス人だと思うと緊張したよ」

「ウチもめっちゃ緊張してパニックなっけしもうたけど、ゆっくり誘導してくれたし、良かったと思うで」

「ぶっちゃけ、高畑先生より教え方は優しかったよね。まき絵でもできたもん」

「ゆーな。それは高畑先生とまき絵が可哀相な気がする」

「私はネギ君の方が好きだよ。えへへ」

「今は授業の話やる？」

概ね好評だったようで、他のグループでも似たような評判であった。

ネギの教師生活。

初日は最高の形でスタートを切れた。

放課後までは、そのはずだった。

第28話 ネギ先生の實力（後書き）

ようやくもう一人の主人公ネギの活躍の始まりです。

ネギの初授業をもっときちんと描きたかったですが、内容がオール英語となると、中学生レベルでもしんどいのは確実なので割愛させていただきました。

いたずらについては、既に知っているネギに対して仕掛けるのを容認するはずがないと思ったので、いい話？にさせていただきました。

第29話 囑託魔導師の秘密（前書き）

ネギ君が第二段階まで覚醒します。

さらにキャラ崩壊ですが、原作における彼の大問題点を改善してあげました。和葉本人は空気ですが、彼の影響を感じていただけたらと思います。

第29話 囑託魔導師の秘密

第29話 囑託魔導師の秘密

「それでは行きます。はい、チーズ」

“キラッ”というフラッシュに照らされる2人の乙女。純白のゴスロリ衣装を纏った“Yuki”こと、近衛ゆき。そして漆黒のゴスロリ衣装を纏うのは“ちう”こと、長谷川千雨。ネットアイドルのランキングにおいて常にトップ1、2を争う2人だ。そして彼女たちを写真に納めるのは深紅のゴスロリ衣装に身を包んだ絡繰茶々丸である。彼女たちは放課後、管理人室で撮影会を行っていた。

「とれた？ とれた？」

「おお。きれいに撮れてるじゃねえか」

「ええ。バッチリです」

ゆきは茶々丸の元へウキウキと駆け寄り、千雨も腕組みをしながらデジカメのモニターを覗き込んで口元が僅かに緩む。

「“ちうたん”すごく可愛く撮れてるよ」

「管理に、いえ“Yuki”さんこそ綺麗で羨ましいです」

ネットアイドルとして、肌のきめ細かさの違いや白さの違い、大人としての魅力に関して劣っていることを自覚してしまった。「特に胸とか」という言葉を飲み込む千雨。彼女も美乳の持ち主である

が、まだゆきには敵わない。

自分の方がランク1位のことが多いが、差を知ってしまい多少気落ちする。しかし収穫もあった。リアルな生活が充実していない彼女にとつてネットの世界が全て。そこにリアルでも関わりのあるオタク友達、コスプレ仲間が新たにでき、しかもランク2位の美少女ブログに載せれば相乗効果は間違いない。秘密を共有できるのもなんだか嬉しく、色々な面でゆきと仲良くしようと千雨は思う。そこに撮影していた茶々丸が口を開く。

「個人的な意見を述べさせていざと、特に先ほどの指を絡ませ合っているモノは、耽美な表情で、非常によいと思われます。それから、できればもつと肩を密着させ合うくらいの方が、より好ましいかと」

「この間の休みでネジが逝ったか？ この色ボケロボは」

「いえ、最近『萌え』という概念を理解しただけです。新しいプログラムは良好に作動しています」

毒舌にも淡々と答える茶々丸。鋭くなる目つきを一眼レフで受け止めながら最良のアングルを探している。左下から腕組みによって僅かに持ち上がった胸元と、見下す冷たい視線が同時に収まる位置でシャッターを切る。

「プログラムってやっぱりお前ロボットなのか？ 『萌え』ってんなもんリア充はわざわざ理解しなくていいんだよアホかお前」

「ええ。私は正確に言えばガイノイド。超とハカセとマスターによって作られました。最近のおススメは、“ほむら×まどか”です」
「難しい選択だけど私は杏子ちゃんだよ」

「マジモンかよ。冗談半分で言ってみたんだが、麻帆良は本当にな

んでもありだな」

あえて、最後の2人の発言はスルーした千雨。彼女も勿論まどかマジ力を知っているが、先ほどと撮影時の発言で色ボケロボの思考回路、もとい嗜好回路を確信した。言及すると話が違う方向に伸びそうなので口にはしない。オタクの習性を理解している彼女だからこそ選択である。

「しかし、私のAIに関してはMITの日本人兄弟のものでし、正確には純麻帆良産ではありません」

「どーでもいいよ。ただお前みたいなのが普通にうろついてんのが不思議だと思っただけ。本物のガイノイドってことは何だ、この前の休みはとか、超が外国に行ったと関係しているのか？」

「ああ。あいつは新しい研究のためだとか言って飛び出していったよ。天才の考えることなど理解する方が無駄だ。それからここは『麻帆良だから』と割り切って生きた方が楽でいいぞ長谷川千雨」

茶々丸の代わりに応えたのはエヴァンジェリン。彼女はゆきの部屋に居候の身のためソファの上でドレスの裁縫をしながら撮影の様子を見ていた。今回の衣装は全てエヴァンジェリンの手製のものである。

「珍しく饒舌だなマクダウエル。忠告ありがとな。それにしてもこんな高価なもの、本当にタダでもらっていいのか？」

「そんなに珍しいか？ 確かに少々テンションが上がっているかもな。着てくれる奴がいるのが作る側としては一番嬉しいんだよ。それにお前たちは中々着せ甲斐がある」

そう言っただけで彼女は獲物を見つけた猫のように目を鋭く光らせる。千雨は背筋を凍らせ本能的に危険を察知するがもう遅い。

新たな玩具^{ちう}を手に入れた金髪幼女は、チクチクと針を動かし始めた。

そんなエヴァンジェリンが右手に持っているのは金色の針、ネギとのアーティファクト『人形師の針』である。今作っているのはネギへのプレゼント。今現在、千雨着ている普通の品と異なり、本格的な魔法衣を作成している。

『人形師の針』、その主たる効果は、材料となるものがあれば瞬時に人形を形成し支配下に置くことができること。岩石をゴーレム化したりすることが主な用い方だ。しかし茶々丸のときのように、人形であったものを人形にするということは即ち、人形の即時完全修復と同義である。彼女がかつて怖れられた不死の人形の軍勢が、不滅の軍勢へと変貌するのだから、ただの召喚アイテムや回復アイテムとは比較にならないほどの最も凶悪なアーティファクトへと化する。

そして能力はもう1つ。魔力、魔法を糸状に変換する力を持っている。戦闘にも勿論使えるが、魔力や、結界魔法を込めた糸で縫製することで、最高の防具を創り出すことができるのだ。

簡単に言いかえるならリカちゃん人形をたくさん作れる力と、すぐに修復できる力、最高の着せ替えセットを用意できる力を持ったアーティファクトと言っわけだ。使い手をかなり選ぶ物であるが、人形使いにとっては伝説のマスターピースである。

その針を用い、最高の障壁呪文や身体強化呪文を込めた糸を用い、彼女は“ある防具”を作成していた——その左手の薬指に見惚れながら。

一方放課後、ネギは頭の上にチャチャゼロを乗せて階段を昇っていた。階段を見上げるとよろよろしながら10冊以上の厚い本を抱えている宮崎のどかの姿。明らかに前やあしもとが見えておらず、傍から見ても非常に危険な体勢だ。

「危なそうだなあ。よし、立派な先生として手伝おう！」

そう思っ て声をっ かけようとした矢先、彼女は足を滑らせ体が後方に傾いた。このままでは後頭部が階段に激突し重傷を負うかもしれない。

ネギは飛び出すが、階段の踊り場付近にいるのどかと、下の踊り場近くのネギでは30段ほど離れている。ネギ本来の身体能力ではまず間に合わない。全くの未完成である肉体強化呪文『戦いの歌』も詠唱する時間などない。

そんなネギがとっさにとっ てしまった手段は——魔力の意図

的な暴走。風の魔力を自身の周りに爆発させ身体能力を無詠唱で全開まで強化した。

そして一気に階段を駆け上がり、お姫様抱っこで彼女を受け止める。

「大丈夫ですか宮崎さん！」

「ふええっ！ ネギせんせーが助けてくれたんですか。そ、その、えと、あつ、ありがとうございます」

「気にしないでください。先生として当然のことをしたまでです。それにしても無事でよかったです」

「いえ、本当にありがとうございます。私、その、とろくて。…

…ツツ！！？ ネギせんせーその格好は一体？」

「あつ！？」

のどかが両手で顔を覆う様子を見て、ネギは気付いてしまった。

彼はパンツ1丁というあられもない姿を晒しているのである。チャチャゼ口は振り落とされずに頭にしがみついているので、頭に人形を乗せたパンツ1丁の子供が女学生を御姫様抱っこしているという、何ともシュールな絵になっていた。

「ハハハッ。宮崎さんを助けようと思って全力で走ってみたら風の摩擦で服が破けちゃいました。ハハハッ」

笑って誤魔化すが、非常に苦しい言い訳である。口元がびくびくと引きつる。しかし半分は事実であった。原因を解析するには事前研修まで話が遡る。

主にゆきが担当したネギの魔力の制御訓練の一環として、最も苦手としている出力のコントロールを充填して覚えた。メルディアナ

での報告にあった、ネギの魔力が暴発した場合におきる『武装解除』の効果を薄め、幼馴染のアーニヤ嬢のパンツをめくってしまうなどの被害を減らすことを和葉とゆきは決めた。和葉はすでに同期の少女たちから陰でエロガキ扱いされている彼の噂を拡げなくなかったということ。ゆきとしては女性の立場での視点と、精神面の教育において和葉で痛い失敗を犯しているためネギには真っ直ぐに育ってほしいからということがあったからだ。

そしてその結果、周囲の努力にもかかわらず、ネギは選択を間違えた。周りも間違えていることに気づいていなかった。彼は「『緊急時に出力を下げる』のではなく、『日常的に効果範囲を絞り込む』」ことで、万が一の事が起こっても対応できるようにと、自己流の改善策を立てた。要するに、自身を半径にしてごく狭い範囲に暴走した魔力を絞り込んでしまった結果……『周りの人間に対して』ではなく、結果的に『自らに対して』発動するような状態になってしまったのだ。

それが不味かった点はただ1点、暴走した魔力に含まれているのは勿論のこと、風属性の『武装解除』であったことだ。そして今の状況に至る。子供とはいえ、完全に変態紳士だ。

「風の摩擦で破れるんですか？ よくわからないですけどさっきのはまるで風を使った魔法みたいで……」

「宮崎さん！」

『魔法』という言葉の口にしたのどこかをネギは制止する。そして和葉に教えられたように対応を行う。

「これからいうことはぜひ内密にお願いします。実は僕……時空管理局から第97管理外世界『地球』に派遣されてきた嘱託魔導師なんです」

「へ？」

彼女は目を丸くするがネギは続ける。

「僕は危険なロストログアを回収するための任務の最中なんです。詳しくはここでは話せないの、リリカルなのはの1期と2期のDVDを見て下さいね」

そう、和葉の教えとは、万が一のときはアニメに影響されている年相応の子供の戯言として受け取ってもらえるよう“リリカルなのは”について語りつくせというものであった。知っている人間は途中でアニメと現実をごっちゃにしているのだと理解するし、知らない人間に対してはアニメであることをさり気なく伝えるように、という指示をネギは忠実に実行したのだ。

「そ、そーなんですか。ネギせんせーは、なのはさんが好きなんです」

のどかはパルの影響で前者、知っている方の人間であつたためリリカルな方へ話題を振る。この和葉流の誤魔化し方は、何しろ『痛い』し、子供の間しか通用しないという大きな欠点を抱えているが、自然と話題を転換しやすいという利点があつた。

「僕が好きなのはフェイトちゃんです。それにしても宮崎さんも“リリカルなのは”を知っているんですね。ぜひ今度語り合いましよ」

「はい。私は小説とかパルの描いた漫画とかでしか知らないんです

けど、今度アニメも見ようと思います」

「それなら僕が3期まで全巻貸すのでいつでも言って下さいね」

「ありがとうございます。それからせんせーが魔導師さんてことは秘密にしておきますね。クロノ君に怒られるんでしょう？」

「ええ。お兄ちゃんが怒るので内緒にしてくださいね」

笑顔でやり取りをする2人。先ほどの気まずい雰囲気も吹き飛ばしていた。しかし、そのやり取りを階下で発見した者がいた。

「ネ、ネギ！？ な、なにをやってるのよアンタは！！！」

神楽坂明日菜は階段を駆け上がるとネギの顔面目掛けて容赦のない飛び蹴りを放った。が、ネギの障壁『風盾』の不可視の壁に阻まれ、右足は残り5cmぐらいのところで弾かれ、彼女は着地する。

「えっ？ 何で届かないの」

しかし驚いたのはネギも同様。今の彼にとって障壁が発動する事態はおかしいのだ。

「な、何ですか」

「何ですかじゃないわよ！ その格好で本屋ちゃんに何してんのかって聞いてんのよ。このエロガキ」

「アスナさん誤解なんですう。ネギせんせーは私が階段から落ちる

のを助けてくれたんです」

殺してでもどこかを奪い返そうとしそうなほどの明日菜の剣幕にネギは押される。そんなネギを庇おうと、のどかは必死で訴えた。

「そ、そうなの。本屋ちゃんに怪我がなさそうで良かったわ。ありがとねネギ。でもだったらなんでアンタはこんな格好してるのよ？」

「そつ、それは、ですね」

「ネギせんせーが私を庇って階段から落ちてしまったんですけど、勢いが凄かったので服が全部破れてしまったんです」

「そ、そうだったのね。よくわかんないけどわかったわ。それで服はどうするのよ？」

「このまま階段を上がって屋上に行きます。それから着替えを取ってきてもらうので大丈夫です」

「うーん。私たちのジャージを着せたらそれこそ変態扱いされそうよね。それで服は誰から借りてくるのよ。もしかして高畑先生？」

「いえ、家から服を持ってきてもらうように携帯で呼びますから大丈夫です」

「ネギせんせー。速く、その、上に行かないとまた他の人に見られるかもしれないです」

「そうですね。2人とも今のことは内密をお願いします。それではまた明日」

そう言うとなぎはのどかを降ろして、颯爽と階段を駆け上って行き2人の視界から消えた。

「本屋ちゃん。ぼうつとしてるけど大丈夫。どっか頭とかぶつけない？」

「ネギせんせー。カッコいいなあ」

「――本屋、ちゃん？」

明日菜が見た彼女の前髪に隠されたの奥から覗く瞳の輝きは、まさしく恋する乙女の表情であった。5歳も年下の少年に恋する少女、宮崎のどか。自他共に認めるシヨタコンである雪広あやかに続いて間違った道を歩み始める彼女の人生を明日菜は「このかに相談した方がいいのかしら」と真剣に心配しながら、足元に散らばった本を回収するのであった。

風のごとく屋上に避難したネギは2月の冷たい風に晒されている。足の裏から、指の先から背中を伝う冷たい感覚に彼は襲われる。

「なんていけないことをしているんだろう僕。誰か来ないかな……じゃなくて来ないよね」

パンツ1丁で屋上に1人佇んでいるのである。その言動は間違はなく露出狂のソレだ。

「何ヤッテンダガキ。ナンデアイツヲ見逃シタ？」

ようやくチャチャゼロが口を開き、フェンスの上に飛び移ると背中からナイフを2本取り出して双竜のように振りまわす。

「“アイツ”、って神楽坂さんのことだね。確かにあの人は何か怪しいよね。障壁がオンになるなんて滅多にないはずなのに」

彼の障壁は今は和葉にオンオフの切り替え術式を組み込まれている。敵意や殺意が大きい攻撃や、危険が大きい物体のみ、自動的にオンになって障壁が発生するようになってはいるはずだ。ゆえにネギ

は疑問に感じた。叱られるときに拳骨を和葉やゆきの喰らうなどのこと程度では障壁は展開しない設定なのだ。ましてや一般人であるはずの生徒の繰り出すノリツツコミとも呼べるレベルの飛び蹴りに発動するはずはない。

「うーん。ただの飛び蹴りなのに……まさか、明日菜さんは敵？

もしかしたらメガロメセンブリアのスパイ！？ いやそんなはずは」

「サアナ。デモ、サッキノアイツ微力二殺気が籠ッテイタゼ。ソレト血ノ臭イモナ。ケケケ」

「ダメですよチャチャゼロさん。お兄ちゃんたちに相談しないと敵かどうかはわからないから、下手に手を出したらダメだって」

「考エル前二殺シタ方ガ楽ダゼ？ 狐ドモ八面倒ダナ。マア御主人モ少シ変ワツタガナ。ソレカラガキ、早く服ヲ着口。御主人ノ品格ガ下ガル」

チャチャゼロの忠告を受け、その後、エヴァンジェリンを念話で呼び出した。瞬時にアーティファクトで服を仕立ててもらいパンツ1丁のまま帰るといふ、更なる変態行為を重ねずに済んだ。

彼女が従者で良かったと本気で痛感した出来事であった。エヴァンジェリンや和葉たちがである。彼女たちは口を揃える。

「……どうしてこうなった」「……」

ネギ本人は、というと

「あの暴走の感じ、良かったなあ。あの脱ぎ捨てる快感が……。じやなくて、あの一気に風を解放する感じ。あれをもっとうまく使えば『ソニックフォーム』を再現できるかもしれない」

今日の初授業の感想よりも、露出する快感やフェイトのことで頭がいっぱいだった。耳に息を吹きかけられるような、首筋を指先でなぞられるような、こそばゆい感覚を再び思い返してブルブルと見悶える。

もうネギは戻れない。自慰行為よりも先に露出に目覚めかけてしまった彼は、エロ神として君臨する和葉よりも重傷だ。

『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』を目指しつつも、こうして『変態な魔法使い（ヌギステル・マギ）』への道を邁進するのであった。

第29話 囑託魔導師の秘密（後書き）

ネギの大改編。脱がせるのではなく、『脱ぐ』のです。露出に目覚めました。エヴァ様のアーティファクトがないと（社会的に）生きていけなくなります。アーティファクトの使い方については色々後話で。

千雨も日常サイドでエヴァ様とゆきに捕まりました。

茶々丸はバグっていたのではなく、新たに『萌え』に目覚めただけのです。それもおそらく百合。勝手に彼女が妄想するだけで生々しい描写は全く入れる予定はありません。

今回魔法バレはありませんでしたが、のどこからのオタク認定を受けました。それでも何故か惚れられるネギは愛情運チート過ぎます。

早めに修学旅行編へ行きたいですね。

第30話 エヴァの“答え”（前書き）

ずっとエヴァのターン。

原作では期末テスト前ぐらい。図書館島はどうするか未定ですが、テスト話はしっかりやります。

いつもの半分とかの短さです。描写が適当でごめんなさい。でも今後の話や今回の解説はだいぶん考えていますので……

第30話 エヴァの“答え”

第30話 エヴァの“答え”

ネギが研修を初めて3週間。3月の初頭。

春が訪れたとはいえ、まだまだ寒い真夜中0時。

世界樹前広場に学園中の魔法生徒と魔法先生が集まっていた。

広場の中心にいるのはサンライトハートの和葉、刹那、ゆき。そして白き翼のネギ、エヴァンジェリン、チャチャゼロ、茶々丸——
そしてその目の前には超鈴音の石像。

「して、ネギ君。今宵わしらを呼び出したのは、“彼女に掛けられた永久石化を解く”ため。それで相違ないかの？」

関東魔法協会を代表して、学園長が声をかける。

「はい。その通りです」

「そうか。あれだけの授業をやりながら、前人未到の永久石化の解呪の研究も完成するとはの。期待しておるぞ。ふおっふおっ」

悪魔襲撃時直後には魔法関係で色々揉めたが、教育実習生として

は授業だけではなく、生徒どうしのイザコザの対処などネギは優秀であった。ネ一般の生徒や教師陣だけでなく、学園長も含めた麻帆良の魔法関係者たちのネギに対する心象は良好と呼べるものであった。関東やメガロメセンブリアに引き込むことは出来なかったものの、学園長のネギ個人への期待は言葉通りの素直な意味だ。

そして学園長の隣の高畑が、ネギの左脇にいるエヴァンジェリンに対して疑問を投げかける。

「で、その気合いの入った格好はなんだい？ エヴァ、まさか回復呪文の苦手な君が解くと言うのかい」

彼女が纏っているのは白の法衣。明らかに聖なる加護が込められている一品だ。それ着ている彼女は身を焦がされる痛みに耐えているが、あまりの苦痛に時折、眉間に皺を寄せていたのを高畑は見逃さなかった。中傷ではなく、かつての同級生として心配した一言であったが逆にそれが彼女の気に障った。

「この服のことか？ 気にするな、これは私の覚悟だ。それにタカミチ。私は確かに回復呪文は苦手だし、ほとんど使えない。だが、その方法はできないと言って私は諦めはしない。既存の手段が使えないなら別の手段を編み出すまでだ」

彼女の弱音も努力もは決して口は出てこない。和葉から身代わりの式神を作り出す型紙を受け取り、既に登校地獄から逃れている彼女はネギ以外の授業をほぼボイコット。寿命からも解放された身を生かしてネギ以外の授業中のほとんど、修行や制作以外のほぼ全ての時間を別荘で研究に充てていた。

そしてたどり着いた一つの解法。一人ではない今だからこそ取る
ことのできる手段を彼女は遂に編み出した。

「時間が惜しい。では始めるぞ。じじい」

高らかに、誇り高く彼女は叫ぶ。

「関東魔法協会、よく目に焼き付けておけ。これが『2代目サウザ
ンドマスター』が従者『闇の福音』を！」

彼女と共に実行するのは3人。和葉、ネギ、ゆき。

「準備はいいかネギ？」

「うん。エヴァ。僕も全力で頑張るよ」

「よっしゃ。やってやろうぜ」

「頑張ろー」

それを見守るのは刹那、茶々丸、チャチャゼロ。

「皆さん頑張ってください」

「マスターの勇士、このメモリーにしっかりと納めます」

「マア何ダ。セイゼイ死ヌナヨ御主人」

「じゃあ行こうかエヴァちゃん」

ぴょん、と飛び跳ねてエヴァンジェリンと向き合う。いつもの尊大な態度とは裏腹に、ゆきを仰ぐ。

「頼むぞ、狐——いや、■ ■ ■」

「ありがとキティ——」
「憑依」

ゆきが屈んでおデコを合わせると、その姿がエヴァに吸い込まれるようにして消えた。そして右手に持った仮契約カードを天にかざし、『アデアット』と唱えると『人形師の針』が闇夜に金色の光が灯った。

「シンクロ
同調！！」

「シス・メア・バルス
契約執行180秒間！！
ネギの従者 エヴァンジェリーナ！！」

ネギはエヴァンジェリンに全力の魔力供給を行い、和葉はネギ、ゆき、エヴァンジェリンに同調し、全体の意識の疎通と魔力のパスを円滑にする。ネギの性能を引き出しながらも、一滴の魔力の無駄なくエヴァへ供給を行った。魔力の暴走とは逆の完全なコントロールを保っている。

『リク・ラク ラ・ラック ライラック』

狐特有のスキルである憑依によって、魂まで繋がったゆきと、エヴァンジェリンは詠唱を始める。

『「来たれ地の精 花の精 我が仰ぐは蒼穹の父 友が眠るは豊穰の母 涼やかなる風と暖かなる光の下 閉じた理を再び開け “萌え出る生命”」』

石化呪文とは「肉体」を「石」に変えるだけではなく、「精神」と「魂」の「時」を固定化する呪文である。永久石化と普通の石化の違いは「精神」と「魂」の固定化、つまり一種の封印状態の浸食度の差異なのだ。その事実をエヴァンジェリン達も半信半疑ながらも掴みかけていたが、和葉の伝手で永久石化の使い手フエイト・アーウェルックスからもその見解がおそらく正しいという証言を得た。

要するに今まで誰も気づかなかった事実として、『体の状態を癒すこと』よりも『魂と精神が閉じ込められた結界状態を破壊する』ことが重要だったのだ。今までの通例として、地の呪文に対して、癒しの呪文だけで対応していたから高度な石化治療が難しい場合が多かったのだ。

そこでエヴァンジェリンは目には目をで、より強力な地属性の呪文。そして地に対して有効な花属性の“結界破壊呪文”により石化した身体と魂の封印を破壊し、表面の石化を解くための綻びを生じさせることを狙うのだ。超の石像に紫の魔力光の筋のようなものが刻まれ、それは網目状に全身へ広がる。

そして次の段階へ移行する。

『リク・ラク ラ・ラック ライラック —— 契約に従い我に従え 光の御子 来たれ創世の光 洗礼の雨 —— 空と大地 迷える魂に 安らぎと眠りを それは祝福也 “清めの光”』

周りの誰もが驚いた。エヴァンジェリンが唱えたのは和葉が悪魔に用いた光属性の封印呪文。“悪しき精霊そのもの”だけを封印して原因だけを断つために取る手段。そのために苦手というよりも、闇の眷属であるため相性が最悪だ。光の祝福を受けやすい天狐のゆきが憑依しているので、多少緩和を行っているとはいえダメージは少ない。

「「掌握 術式兵装 『極光聖天』」」

それを彼女は『闇の魔法』で自身に取りこんだ。白き閃光のベールに彼女は身を包まれる。

「「ぐわああああああ」」

今まで以上の痛み、体中に高圧電流が流れるような衝撃が走る。唱えるだけでも奇跡的な最高クラスの破邪呪文を身に纏ったのだ。吸血鬼の自身にもその影響が出ていた。ゆきが痛覚を遮断しても襲ってくる魂へも響くダメージ。しかし彼女は力強く目を見開き持ち耐える。

そして仕上げの段階へ移行する。

「『解放固定』『断罪の剣』『聖母の涙』」

両腕から解放するのは通常の石化解呪呪文と十八番の断罪の剣。
そして全てを彼女は重ね合わせる。

「『術式統合』——『救済の剣』!!』」

超の石像は左膝をついた状態であり、エヴァンジェリンは背中からその心臓部分を貫き、身に纏った光を解放する。

「『術式解放』——『聖光結界』」

白く輝く、汚れなき聖なる光が彼女だけでなく、場にいる全員を温かく包みこんだ。

第30話 エヴァの“答え”（後書き）

彼女の復活が予定よりだいぶ早まったのには訳があります。
ハカセなど超サイドと白き翼サイド、関東サイドを修学旅行までに
一気に動かしておきたかったのです。関西サイドはやたら出番ある
ので。

<どうでもいい予告>

描きながら気になっているエヴァとネギのちぐはぐな呼び合いは、
そろそろ修正されます。無印のあのセリフになぞらえて。

修学旅行を速く描きたいがため、授業関係はすっ飛ばしていますが、
次話が次々話に今まで以上の超展開が待っており、新しく話に絡ん
でくるクラスメイトが増えます。彼女 + α でとんでもないことをや
らかします。もちろん和葉、ネギとは一応独立状態で、です。

石化には独自解釈を入れました。

対処法は要するに結界破壊 + 癒し + 封印（斬魔剣式の太刀やルーン
セイブ状態）です。ここまでしなくても多分解呪できますが、万全
を期して4人がかり、多重魔法によって解決してみました。

第31話 漂流者 始動（前書き）

先週は仕事で更新できず申し訳ないです。

今回頑張つて大目にしましたのでよろしく願いします。

それからお気に入り1000ユーザーを超えました。いつもご愛読ありがとうございます。

どこまでも原作ブレイク&テンプレブレイクで行きますよ。
彼女が手を組むのは和葉やネギではなく…

第31話 漂流者 始動

第31話 漂流者 始動

「ヤッタ……力？」

「やった……のでしょうか？」

「ゼロちゃん、茶丸ちゃん、それはフラグ！」

ゆきは憑依を解除して、皆の注目から少し外れたところにいる和葉の隣へいつの間にか移動していた。

満ちた潮が引くように、破邪結界による封印と癒しの光——
——白い帯状の波が薄れていく。

そして再び視界を取り戻したとき、場の者たちが見たのはエヴァンジェリンが満身創痍の少女を抱きしめている姿だった。石化はおそらく解けていると判断していいのである。

他の一同は、神々しいとも呼べる献身的なエヴァンジェリンに見惚れており、口を開くことができない。シスター・シャークティは献身的な姿に何かを感じたのか「聖母様」と呟きながら両手を組んで祈りを捧げ続けているのはじめ、あれほど和葉やエヴァンジェリンを糾弾していた高音も瞳に滴を浮かべていた。もちろん隣の夏

目や佐倉はハンカチを握りしめながらの号泣である。

そして強く彼女の排斥を訴えていたガンドルフィーニといえ、ぐつと下唇を噛みしめ、拳を血が流れ出るほど強く握りしめていた。眉間に皺をよせながらも全身を震わせているのは、エヴァンジェリンに対する感情ではない。己の了見の狭さ、今までの自分の言動が立派な魔法使いを目指すものとしても、いち教師としても恥じるべき態度であつたことを後悔していたからだ。

昔の彼女の行いに対しては未だ納得ができないものの、自らの苦痛を厭わず、不得手である物を克服し、誰もが無理だと諦めていた犠牲者の少女をなりふり構わず救ってみせ現在の彼女の姿は、まさに自らが幼いころ憧れた英雄像ではないのかと自問自答する。

もう一度彼女の背中を見つめる。どう見ても10歳程度にしか見えない小さな、小さな背中だ。600歳を超えているのだという事実は全く感じられず、むしろ自らの子に近い位の幼く華奢な背中。しかしその背中——20年前見た彼の背中にそっくりだと気付き、少年時代の笑みを取り戻す。彼にはまだ“答え”は得られなかったが、“願い”はこの手に再び帰ってきたようだった。

「……本当にこの世界は驚きばかりネ。まさか貴方だとは予想もしなかつたヨ『闇の福音』」

疲労感を灯した半眼開きの彼女が、開口一番に呟いたのは皮肉の込められた一言。だがその声の裏側には安堵と憂いの色が浮かんでいたのを和葉を含む数人は感じ取る。

「気が付いたか！」

エヴァは顔を上げた超を見て嬉々として声を張り上げる。成功の可否、即ち魂と精神の無事を取りあえず確認できたからだ。肉体が石から元に戻った点に関しては誰の目にも明らかであったが、誰よりも“超鈴音”という存在について最も心配してたのは当の本人に決まっている。

「うむ。とりあえず石化は解けたと思うヨ。感謝するネ」

左手と右手を交互にをグーパー繰り返した。多少きこちないのは疲労やスーツに付属の手袋の破損のせいなのだろう。

「てつきり木乃香さんか『深淵の探究者』だとばかり思ってたヨ。嬉しい誤算ネ。それにし……痛う！！」

彼女はいきなり、黒く濁ったものを吐血する。骨の髄から皮膚の端々まで体中に刺激。彼女の体中は痣や傷だらけでおそらく内臓や骨の何本かもやられているだろうことが伺えた。それに衣服も煤けて所々焦げておりボロボロだ。

「おい！　しつかりしろ」

超を抱擁していたため、エヴァンジェリンは顔面と白い法衣に紅いシミが付着した。そしてその様子を見ていたネギは、両手で口を押さえる超の下へと颯爽と駆け寄り、杖を彼女の額に当てる。

「超さん！　今、治しますからじっとしてて下さい『治癒』^{クイラ}」

本来彼は回復呪文を不得手としていたが、石化治療の研究の際に人体の構造や生理現象などの正しい知識を習得できたため、魔力の高さと相まって、一通りの出血を止めるぐらいのことは出来た。和葉との同調は解いていないため、その粗さも随分と取れ、完全回復とは言わずとも後遺症を残すような下手な治し方はしていない。

「『『『おおおっ！！』』』」

一同は見事にネギが重傷の彼女を一瞬で治療して見せたことに驚きを隠せなかった。ネギの事前研修のプログラム作成の際の調査から、天才の彼が回復呪文が苦手なことは周知の事実であったからだ。よって事件後にネギが2代目として、教師として治癒の分野にも全力で取り組んだ結果であることを誰もが好ましく思った。しかし学園長や高畑をはじめとする和葉の能力を知る者たちは――ネギと和葉――彼ら2人の相性の良さを認めるとともに脅威を覚えていた。

――“同調”と“憑依”

和葉とゆきが得意とする妖術や神仙術の類のスキルであるソレは、力の運用の効率化、感覚の共有、複数思考による補助、通信、言霊の強化などの様々な恩恵を他者にもたらす。

先ほどの和葉がネギと同調し、本来まだ扱いきれないほどの魔力を正しく運用させたこと。闇の眷属であるはずのエヴァンジェリンがゆきの憑依時において、相性が最悪なはずの光属性の呪文を行使するどころか自身に取り込んだこと。

それらが示唆するのは、近いうちに世界“最強”の主従となるであろうネギとエヴァを“無敵”にまで高めてしまう可能性をもっているということだ。そもそも模擬戦で刹那に無理やりとはいえ咸卦法まで使わしてしまう規格外なのだ。天狐と天才研究者の存在は戦闘が本分ではないとはいえ、今までの認識以上に危険な存在であることを理解させるにはこの晩の出来事だけで十分であった。

「感謝するヨ、ネギ坊主。少し痛いところもあるが、おかげで大体のケガは大丈夫ネ。いつの間に回復呪文をマトモに使えるようになった？」

超はスツと立ち上がり、右手でガッツポーズをとりながら元気をアピールする。エヴァとネギもそれに合わせて立ち上がった。

「生徒を助けるのは先生の義務です。っていうか超さん、やっぱり

魔法について知っているんですね!？」

確信とは言えなかったが、エヴァによる“光”についての証言、茶々丸の存在から予想はできていたことであつた。和葉の受け売りが混ざっていたとしても。

「それは、おいおい話すネ。それより、ネギ坊主。目の前の乙女が寒そうにしていることぐらい気付かないと英国紳士失格ヨ? さっきの戦闘で保温機能も壊れてしまったからネ。」

「その点については心配するな。少しジツとしていろ、超鈴音。『アデアット 変換“治療の糸”』」

エヴァンジェリンは治癒の呪文を糸に変化させた。人形遣いとしての衣服の制作スキルを生かし、服をイメージして繊維の1つ1つを複数の糸で同時に編みこむ。そして一息つく間もなく、超鈴音は破損したボディースーツではなく女子中等部の冬服を纏っていた。

「おおつ、これは素晴らしいネ。こんなスキルを持てたとは知らなかったヨ。それにそのアーティファクトは」

彼女は知らない。エヴァンジェリンが誰かの従者であつた記録などどこにもない。しかしここは間違いなく並行世界。彼女が“知らないこと”など山のように存在している。

良い兆しとしては、近衛和葉を中心にして魔法世界崩壊を防ごうとする人々が存在しており、その開発力や影響力はかなりの規模を誇っている点。しかし様々な事態や思惑が複雑化しているようにも取れ、予断は許せない。おそらく自分の身の振り方で彼らに与えてしまう負の影響も大きいことぐらいは容易に想像がついた。

彼女が石化してからの世界の変化を彼女自身はこの時点で知っている訳がない。だが、目の前の光景から読み取れる情報、それは――

――なんで2人は薬指にお揃いの指輪をはめてるネ？

そう言おうとしたが彼女は口をつぐむ。アイスピックのように鋭く背筋に突き刺さる多くの視線を感じたからだ。その判断は正解だったが、とにかく2人には“本来の”師弟以上の関係にあることが予想された。まさかその場合あの家系図はどうなるのだろうかと不安になる彼女であつたが、あきらかにこの世界は彼女がやってきた世界の軸とは違ふのだから要らぬ心配であつたことに気付く。

ネギに今日の日付を訪ねて予想以上に早かったことに超は驚くと同時に、解呪の手段に興味を持った。それについてどう質問しようかと彼女が考えていると、ジッと黙ったままの人物が声をかけてきた。

「超鈴音さん。色々混乱しているところ済まないけど、俺たちは君に感謝している」

くたびれた白衣をなびかせて、さっきまでネギの後ろで黙っていた和葉がようやく口を開き、エヴァもそれに続く。

「ああ。超鈴音、貴様にどんな思惑があったのかは知らんが、それでも私は助けられた。感謝してもしきれないほど感謝している。だが、さっきので借りは一応はしっかり返したからな。これで貸し借りはゼロだぞ。か……貸すのは別に構わんが」

「こうして私も無事元に戻れたからOKネ。私は私の目的のために戦ったのだから気にしなくていいヨ」

手を振りながら笑顔で返す彼女に対して、さらに高畑と学園長が階段を下りて近寄る。

「それで超君。君には色々聞きたいことがあるんだが、構わないかな」

「ここで話せる範囲なら構わないヨ。後はメンツと交渉内容次第ネ」
元々の担任であつた高畑が質問をする。隣の学園長がゴホンと咳払いをする。

「まず、超君。君は何者じゃ？」

「少なくともこの場では答えられないネ。まあ魔法の存在は元々知っているヨ」

「この場では、か。では次じゃ。お主はなぜあの悪魔との戦闘に参加した」

「茶々丸からの緊急アラームを受け取ったからネ。様子を見に来たら『闇の福音』が悪魔に襲われていたヨ。龍宮さんにも前もって連絡したが結界外からの鬼の対処で手一杯だみたいヨ」

「そうか。それは報告通りじゃな。それでは直接あの爵位級と対戦したお主には、奴らの心当たりはあるかの？」

「心当たりはあるよ。ただ私の知識で合っていると仮定するならだけどネ」

「偉くもつたいぶるのう」

「確実な範囲でなら話すヨ。あの悪魔の名前はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン伯爵、過去にネギ・スプリングフィールドの村を襲撃した悪魔のうちの首領格で、永久石化を村人に掛けた本人ネ。それは間違いないヨ」

「超さん！ それは一体どういう」

「落착けネギ」

「私は彼の口から直接聞いただけネ。それ以上は知らないヨ。誰が召喚したのか、などはネ」

「だから、私はこれ以上は知らない。それからいきなりで悪いとは思っているが、麻帆良学園、学園長 近衛近右衛門、私はあなたに在籍中の保護を求めるヨ。学園の生徒、当然の権利ネ。実を言うと私は魔法世界の“とある国”からの亡命者ネ。だから“今は”これいじょう何も言えないヨ」

「「亡命者だと！！？」」」

亡命者と名乗った超は吹っ切れていた。彼女は自らが眠っていたときからの状況変化を知らない。ゆえに本来なら学園祭までは身を潜めるつもりであったが、今回の事件ですでに世界中の注目の的。今までの計画は破棄して新しく動き始めなければならない。そのた

めにもまずは身の安全と身分の保障をしてもらわねばならない。

彼女が1番期待しているのは、もちろん近衛和葉。しかしながら彼女の“知識”では和葉という存在はいなかったため、彼のことは個人的には信頼したいが、歴史の裏付けがないのは痛い。とくに彼の生死に関してだ。いくら技量が高くても、いつ暗殺されてもおかしくないほどの、危ない勢力の綱渡りを続けている。彼女は自らが彼の重荷になる可能性も考えられ邪魔はしたくないと思う。そのため間接的な協力体制を築くことを目的とした。

伝え聞いたよりも、ネギはよい方向に成長しており、エヴァンジェリンも呪いから解放されている上、知識以上に協力的である。誰もが行く末を見守っているであろうネギやエヴァと共に動くのは下策であると判断できる。知識通りならネギによって世界は大きく変わるの間違いはない。

間接的に英雄の息子たちを支援できること、自らの安全を確保でき、情報にも強い組織や人物の後ろ盾が早急に必要であった。しかし、彼女はその条件を満たす組織、満たす人物を1人だけ“知っている”ことに気付いた。それが学園長だ。様々な黒幕の一部であるメガロメセンブリアと繋がっているながらも独立を保っており、人物の情報なども知識として持っている。学園長を貶す、いや手駒にすることが環境面でも、情報面でも役に立てることに繋がるのだ。

「今まであなたたちに様々な技術を提供してきたし、先ほども情報を教えた。等価交換は交渉の基本ネ。でも心配しなくても見返りはたくさんあるヨ。たとえば“安定した”権力とかネ。またこの後でサシで話がしたいヨ」

「そうじゃの。学園長足る者、生徒の1人守れんでどうするという

話じゃな。うむ。後で学園長室で検討しようかの」

「安定か。安定という響きは良いのう」などと、学園長が小声で独り言を言っているのは超の計算済みだった。“知っている”学園長よりも些か小物であり、権力にも弱そうという前情報。そしていざとなれば和葉などで抑えが利くというのは利点だ。メガロメセンブリアの下部組織でありながらも、それに裏切るような行為を重ねているため、新たな反逆の芽となる可能性を超は考慮していた。

「超さん。また個人的に色々話そうか。特に超包子の方にいい商談があるんだ」

「『深淵の探究者』にも『小さな知恵者』にも興味が深いネ。ぜひ刹那サンにデートの許しをもらってきて欲しいヨ。それから貴方はこれからどうするの力ナ？ この1件で色々大変になるのだろうか
らネ」

「それは超、私から説明させて頂きます。本日、私が撮影したの永久石化の解呪法についての映像を世界中に流します。そうしたらマスターもより多くの方から認められるようになるはずです」

茶々丸が答える。

「認められる？」

「ああそうか知らないのか。今ネギは『2代目サウザンドマスター』を名乗って、エヴァンジェリンがその従者つてのを全世界に公開したんだよ」

「本当なの力！！？」

和葉の答えに驚愕する超鈴音。言い伝え以上にネギは大胆不敵になっていることは自明だった。和葉は続ける。

「ネギについてはいい感じだが、エヴァのほうはまだまだ怖れられているからな。イメージ転換になるだろうってことだ」

「チツ、狐の策にのせられた感はあるがな」

「それでこれから俺とエヴァンジェリンでネギの村人の解呪に行こうってわけだ。残念ながらネギは先生の方が優先だし、俺の方が人を扱うのは得意だからな。魔力の問題もあるけど、ネギを連れて行って箔をつけておきたかっただけど仕方ない」

「僕は村のみんなの解呪に付いていけないけど、従者のエヴァや僕らを応援してくれる人たちがいますからきつと大丈夫です。信じています」

「でも、和葉。おぬしやエヴァだけでは先ほどの解呪を連続はキツイのではないか？」

学園長が突っ込みを入れる。

しかし、和葉とネギは大丈夫だと胸を張って自信たっぷりに答える。

「“ネギファンクラブ”と“エヴァ様を崇める会”の有志の皆さんにお声掛けするので、結界破壊、治療、封印それぞれ専門家で担当すれば随分と楽にできるはずです」

「おまけでサンライトハートの人間もサポートで貸して俺が3組織全体の指揮をとる。万が一の襲撃にはエヴァンジェリンがいるし、監査が来ても俺が口八丁で切り抜ける自身があるから大丈夫だぜ」

「ネギファンクラブはともかく——エヴァ様を崇める会って
一体何なのネ!!?」

それから超鈴音は予想の1次元下を突き進む和葉と、それに影響
されるネギに頭を悩ませる日々が来るのであった。

そんな不安を抱えながらも、解散後に状況を把握した彼女は学園
長と話を付け、ある人物のスカウトを試みる。さまざまなイレギュ
ラーがこの世界では起こっており、崩壊を防ぐ手段は見つかる可
能性が見えている。ならば自分の役目は未来の知識と才能を生かして
サポートすること、万が一の保険を作っておくことに尽きると判
断した。新しく作成した計画にはどうしても新たなメンバーが必要
だ。

ネギがまともな魔法道徳教育を受けており、既にエヴァンジェリ

ンというパートナーが存在する以上、2-Aから多くの人間を仮契約させたところで意味がないどころか足手まといになるだけであろう。そのため、よっぽどの緊急事態かハプニングがない限り、従者が増えるとは思えない。和葉が付いている状態においてそのような事態が起きる確率は、本来のネギよりもずっと低いと予想された。

明日菜については魔法世界のこともあり保留、木乃香は和葉の判断に任せるつもりのためパス、刹那は論外。宮崎のどこについても和葉やゆきがその分野にある程度長けており、そもそも組織としての情報収集能力や、未来の知識で賄える。となると後は長瀬楓あたりが有力候補になってくるが所詮はバカレンジャー。単なる戦闘要員を現在の彼女は必要としていない。

となるとスカウト候補は絞られる。

——長谷川千雨と綾瀬夕映。彼女たちの才能は史実から見ても折り紙付きだ。

さらに情報戦に長けており、頭も回る。常識も持っているが、常識に縛られない発想もできる。そして精神的にも強い。

切実に彼女たちが欲しいと超鈴音は思う。才能ある者たちが集められた2-Aの中でも最も優秀な人材だ。誰も手をつけないのなら、それを生かすのは自分なのだ。彼女は自らに言い聞かせる。

全ては近衛和葉の計画を成功させるため。

成功させて、魔法世界崩壊を防ぐ“ 答え ”を手に入れる。

そして“ 答え ”を何としても“ 元の世界へ持ち帰る ”こと。

それが彼女の望み。歪んだ時間軸の並行世界に飛ばされたからこそやれることがあるのだと、超鈴音と名乗る少女は既に新たな目標を得ていた。

そして彼女は動かない懐中時計を見つめながら、長谷川千雨と綾瀬夕映をどうやってスカウトするかを考えていた。

第31話 漂流者 始動（後書き）

エヴァ様を崇める会の活発化。
綺麗なガンちゃん。

超の新たな計画始動。

動き出す学園。

狙われたゆえっち・ちうたん。とそれなりに内容は詰めました。

第32話 革命への一歩（前書き）

超が復活してどんどん暗躍します。また今回色々キャラを出してみました。

第32話 革命への一步

第32話 革命への一步

超の復活から3日後、和葉の部屋でテーブル越しに相對するのはスーッ姿の超鈴音。和葉もスーッ姿である。つまり旧世界において最大規模の外食企業である超包子と、魔法世界において最大規模の製造小売企業であるサンライトハートという、世界でも最も影響力の強い2社の取引が社長同士の1対1で展開されていた。

「つまり、旧世界ではサンライトハートの“ネギまん”を超包子で提供する。魔法世界では超包子の“にくまん”をサンライトハートで提供する。お互いの取り分はこれに書いてある通り。それで間違いないな？」

和葉はテーブル上の書類の数値を指でなぞりながら確認を取る。その指先の数値を一瞥すると超は和葉の瞳を見つめる。恋する乙女としてではなく、互いに認め合う好敵手としてだ。

実際に話してみると、事前に調べていた以上の経営手腕を和葉は持っていることを超は感じた。おそらく同じ時代に生まれていたら全く敵わなかったであろうと彼女は痛感する。

その彼の持ち出した経営理論やシステムは20年ほど未来において主流であるものに似ているだけでなく、今まで見たこともない概

念を持ち出したことなど驚くべきものが多かった。彼女が手元のノートPCのテキストに、メモを欠かさず取るほどだ。同じく未来の経営システムを展開している超包子にとっても物流管理や資金面などと繋がる点が多く、互いに効率化を図れるものであった。

客や部下の意見を集約したり、彼らのアイディアの実行許可を出すために判を押ししたり、気まぐれな思いつきを暇な部署にやらせただけだ、と彼は謙遜して言う。しかし“他人を使えること”そのものが器の証明なのだ。『小さな知恵者』として魔法世界に知られている社長としての手腕は伊達ではなかった。

瞳を閉じ、大きく一呼吸置いてから彼女は答える。

「確かに、この契約内容で間違いないヨ」

「なら商談成立だな」

和葉も一息ついて肩の力を幾分抜いた。ひと仕事終わった男の顔だ。

「うむ。“ネギまん”と“にくまん”で2つの世界を制するネ。

おいしいものを食べれば皆笑顔。戦争なんてする気がなくなるはずネ」

超は右頬に人差し指をあてながら、偽りのない笑顔を彼に向ける。

超の笑顔に応えるように、和葉は席を立ち、握手を求める。
「では超社長。両社の発展と――」

「「世界平和を願って」」

超は両手で強く、ようやく巡り合えた運命の取引相手^{ひと}の手を握り締めた。

「それから『深淵の探究者』。先ほどは色々と情報提供感謝するヨ。おかげで現状は大体つかめたネ」

超が呼び方を変えたのはもちろん、社長としての和葉ではなく、魔法使いとしての和葉への言葉だからである。

「気にしないでいいさ。メガ口からの亡命者なら、爺さんも俺も匿わない理由はないさ。俺は“アレ”の居場所について情報を貰えたし、爺さんについては——超包子による麻帆良学園の買収。麻帆良学園の経済的独立に伴う関東魔法協会の独立か。最近のメガ口の旗色が悪いと見るや、あの爺さんも遂に本気を出してきたな」

超は右手で前髪を掻きあげるようにして頭を抱える。

「正直トップとしては予想以上だが、期待以下ネ。妙なところで手段を選ばないのは、利用しやすいという力、何という力……」

もつと飄々として大物であるという学園長の言い伝えとは、この世界では若干異なっていたからだ。できる人物であるが、一言で表現すると『小者臭い』。しかし、彼を亡命の後ろ盾として選んだ以上、頼るほかない。

「祖父としては嫌いじゃないけどなあ。まあ組織の長としては“自己保身に走る、抜け目のない大胆な小者”という評価でいいと思うぞ。無駄なハイスペックはその方面にしか活かされないみたいだな」

彼女の表情がとたんに陰ったことから心労を察して、祖父を笑う和葉。しかし、超の心労を占める割合の内、約6割が和葉の行動全般、約3割がネギのオタク化、残りの約1割が学園長の小者ぶり、という事実には全く気付いていない。

「とりあえずタイミングは新年度開始直前ネ。アリアドネーとヘラスにも学園長が働きかけるはずだが、『深淵の探究者』にも『関西呪術協会次期当主』にも働きかけを要請するヨ」

「俺としても歓迎だ。メガロの手から関東が離脱するのは、東西のしがらみを解消しやすいしな。東も頭を下げやすいし、その後は東を気にせず直接メガロに頭を下げさせに行ける」

はじめ、超のともない買収発言に驚いた和葉であったが、今後の力関係を考えるとその方がやりやすいことに気付き、支援する

ことになった。最初に超とサシで話を付けた学園長は嬉々として、超の提案を受け入れたらしい。小者ゆえに今までの関係に見切りをつけたいと考えての行動であろう。

「あと問題は学園長が部下を抑えてくれる力——」
「だな。それからさっきの“工事”の受注だが、見積りが出たみたいだ」

和葉は手元のノートPCを超に向け、部下からのメールを見せる。

「うむ。この額なら問題ないネ。よろしくお願いするヨ。」

「わかった。出来ればコイツが要らないことを願いたいけどな」

「貴方達の研究に期待はしているが、残念ながら私はまだ信頼はしていないヨ。だから私は万全の備えをしておくネ」

「だったら期待を超えて君の信頼を得れるよう努力するよ」

和葉は少し冷めた紅茶を口にする。少し出し過ぎたダージリンの苦味と、溶け残って底に溜まった砂糖の味がやけに舌に残った。

数日後、ウェールズ、メルディアナ学園校庭。

「それにしても壮観だな」

光の呪文を込めた白の法衣ではなく、黒のゴスロリドレスのエヴァンジェリンは、芝生の上に集結した人々を見渡して呟く。目視で約500人以上。小さな学校の校庭に収まりきれないほどの数だ。結局超の身元の問題や麻帆良襲撃の真相もあって、解呪の映像は流出させなかった。しかしそれでも永久石化の解呪法を発見したので協力してほしいという、ネギとエヴァンジェリンの呼びかけに応じたメンバーがこれだけ集まった。

「ネギとエヴァンジェリンがどれだけ支持されているかってことさ。募集よりも選抜の方に時間が取られたぐらいだ」

いつもの白衣ではなく、既にバリアジャケットを装着した和葉は苦笑する。久々の外出にはしゃぐ幼女の世話を1人で行っていたので若干気疲れしていたが、自らの左頬を叩き気合いを入れた。目の前に近づいてくるのは白髪だが体格のいいの老人。

「ようこそ。メルディアナへ。『闇の福音』そして『深淵の探究者』

よ。わが校のネギが大変世話になっておるようだな」

「はじめまして。校長。場所の提供など様々なご協力感謝します」

「お前がぼーやの言う“おじいちゃん”か。話には聞いている。

あいつはここには来れなかったが心配するな。『2代目サウザンド
マスター』の従者『闇の福音』」の名に掛けて、必ずやりとげる」

和葉は例を心がけた対応だが、エヴァンジェリンはいつものように尊大に振る舞う。

「急に解呪の方法が見つかったという話が来ただけでも驚いたというのに、わずか数日でこれだけの準備を整えるとは。おかげでこちららは感動で涙を流す暇もなかったですぞ」

多少目の下にクマを作っている校長であつたが、頬笑みは心からのものであると一目でわかった。

「できるだけこういうのは早い方がいいですから。ネギとエヴァンジェリンの実績を作ってやらないと立場的に色々問題が、ですね」
「そうじゃな。ああ。ネギと言えばあちらに従姉のネカネと、幼馴染のアーニヤという少女がある。時間があればネギの話を聞かせてやってくれんかね。色々と心配しておつたからの」

その言葉に和葉は若干青ざめる。情報によればブラコンの従姉と、ツンデレの幼馴染だ。和葉の予想以上の適正だったとはいえ、ネギをオタクにしまったことなど口が裂けても言えるはずがない。

2人の姿を見つけるも和葉は、ネギファンクラブNo.2のセラ副会長を見つけたから先に打ち合わせをしておくのだと、エヴァ

ンジェリンにその2人の相手を押しつけた。

今回の呼びかけや段取りなどネギのためならと暗躍したシヨタコン代表、セラス総長を見つけると和葉は普段の研究支援の礼や、ファンクラブの会長、副会長としての話などで盛り上がった。ネギが来れないのなら、和葉と茶々丸特製のフォトアルバムを参加特典として配るよう案を出したのは彼女だったりする。ちなみにネギ版とエヴァンジェリン版を選べるようになってる。

セラスと話を終えてエヴァンジェリンの方を見たが、ネカネのエンドレスネギの自慢話の相手をしているようで、彼女を見捨てた。あたりを見渡すと見知った少女が目に入る。頭の横から長い角を生やしており細目で色白な少女。普段は世界の霊地を回って和葉の研究を手伝っている魔法世界人の少女、調だ。

「近衛様。お久しぶりです」

「元気にしてたか？ 調。おっ、やっと身長追いついたかもな」

和葉は自らの頭に手を水平に充てて、調の頭と比べる。ほとんど同じだ。

「あの、色々と積もる話はあるんですが、旧世界人と“婚約”との風のうわさを耳にしたのですが本当でしょうか？」

彼女は随分近い距離にいる和葉に頬を紅潮させながらも、“婚約”の2文字を強調しながら話す。

「ああ。もう知ってたのか。色々と成り行きで、な」

和葉は不穏な空気に、もごもと言葉を濁す。が調は目を見開く。

「——“成り行き”？ 今多分、“成り行き”と聞こえたのですが 仕事が終わりましたら、たつぷりと話を聞かせて貰いますね。絶対に逃がしませんから」

「うおっ。悪い。暦から念話が入った。至急あっちに向かうわ」

たじろいだ和葉は、そう言っただけで去っていくも、

「近衛様。絶対に、逃がしませんよ」

この呪詛を確かに聞いてしまった。

そうこうしている間に優秀なスタッフ陣によって準備は整えられた。

そして参加者全員で今回の段取り確認を行う。

エヴァンジェリンの示した永久石化の解除手順は以下の通り。

？地・花属性の結界破壊呪文により、魂と精神の固定化を解く。

？通常の石化解呪呪文によって、肉体を元に戻す。

？光の封印結界呪文によって、奥に巣食っている石化の呪詛そのものを排除する。

これをタイミングよく、最高の精度で行う必要がある。超のときはタイミングの問題を闇の呪文によって解決し、精度をゆきと和葉の憑依と同調によって解決した。

しかし今回は超のときのように、アピールするためにエヴァンジェリン1人でやらせるわけではない。対象人数も100人近くいるが、実行メンバーも400人近く揃っている。しかも各組織の希望者の中でも選りすぐりの人選だ。人数が多いということは魔力総量は無論、補助術式も十分に使えるため精度も問題がない。あとは役割分担と連携の問題だ。そのために呼びかけた超本人のネギでも、綿密な制御により長けたゆきでもなく、エヴァと共に和葉が来た。

ここに集結した部隊の役割分担はこうだ。多数の指揮に最も慣れており、結界破壊・石化解呪・封印結界も不得手なく長けている和葉が、実働部隊全てのメンバーに同調を行ってタイミングや精度の

統制を行う。

そしてその下に3つの部隊を置く。

第1の結界破壊部隊には地・花属性及び結界関係に長けた調を中心にして魔法陣を展開し、解呪の突破口を切り開く。

第2の石化解呪部隊の中心にはエヴァンジェリンを置く。石化解呪に関して誰よりも造詣が深い点と、今回解呪に専念することで肉体的に負担を強いてしまう光の封印魔法を扱う必要がないからだ。今まで不可能とされてきたことに挑戦するため、最も士気が高い部隊だ。

第3の封印結界部隊はセラスを中心とする。和葉にこの光の封印魔法を教えた師でもあり、精度は申し分ない。シスターであるネカネも補助としてこの部隊への参加を申し出た。

また実働部隊以外にもスタッフ部門と警備部門を和葉は設けさせた。

スタッフ部門では広い分野で活躍しており連携に定評のあるサンライトハートのスタッフたちが主になる。スタッフの中でも和葉からのおつかい、つまり雑用に長けた暦や環を中心に補助用の魔法具の点検を行ったり、参加メンバーの身元確認や人払いの結界の管理などを行っていた。アーニヤもメンバーに魔力増強のドリンクなどを配るために走り回るなど、彼女なりにできることを探していた。他にはエミリイとベアトリスなどもここに位置する。

警備部門ではカゲタロウと名乗るエヴァ様を崇める会メンバーの中でも指折りの実力者を部隊長に置いた。エヴァ様を崇める会やネ

ギファンクラブから、解呪には参加できなくとも腕に覚えのある者たちを起用して万全の態勢で警護している。エヴァンジェリンを、ネギの大切な人たちを、もしも傷つけようとする者がいれば、魂のかけらさえも残すつもりはないと言わんばかりの殺気を彼ら、彼女らは全身から放っており、絶対にそんな屋からは近寄ってこないだろうと他の部隊の全員が思った。

実行の時は来た。最も日が高くなる正午。ネギファンクラブの会長として和葉は号令を発する。

「諸君。『2代目サウザンドマスター』の従者『闇の福音』と共に我々は諦められていた永久石化の解呪を行う。いいか、我々1人1人が『2代目サウザンドマスター』の力となれることを、彼に、そして世界に示す」

「これまで我々は英雄にはなれないと思っていた。英雄を下から羨望するだけの存在であった。だがこれからは違うぞ。我々は英雄の要請に応えてみせる。永久石化の解呪。それは今まで誰も成し遂げてこなかったことだ。不可能を可能に変えるのは英雄の役目であったが、その役目が今回我々のところへ回って来た。彼は我々に期待している」

「だからこそ我々は証明するのだ。我々の信ずる英雄が正しいことを。そして我々も英雄と同じように、不可能を可能に変え、人々を救えるのだと。我々の英雄はまだ幼い。だからこそ我々は共に歩み力になるう。行くぞ、諸君。我々の覚悟を、想いを、世界に伝えようではないか！」

和葉の高らかな宣誓が終わる。

英雄に心酔するのは彼の趣味ではないが、英雄という言葉に惹かれたものが多いからこそ、それをほんの僅かに修正しつつも全員の士気を上げた。

ネギを英雄として認めさせるために、エヴァンジェリンを従者として認めさせるために、自らが彼らを支えている存在なのだと誇示するために、色々な想いが渦巻いていた。しかし様々な想いも結局は1つに集約される。目の前の彼らを全力で救うのだと。

そしてエヴァンジェリンが口を開く。

「『2代目サウザンドマスター』の従者として、貴様らに言葉を預かってきた。――呼びかけに応じてくれた貴方達を信頼しています」と

「いいか総員、死力を尽くせ。失敗は絶対に許されん。全てを救うぞ。これが私たちの戦いだ！！」

第32話 革命への一歩（後書き）

アーニャや ネカネ、ドネット、暦・環は描写する時間と気力が足りませんでした。眠い。

次は同時間軸にネギが先生としてテストに励む話の予定です。

第33話 救われぬ魂 (34話と入れ替え) (前書き)

34話と流れ上、入れ替えました。

第33話 救われぬ魂（34話と入れ替え）

第33話 救われぬ魂

白い閃光が引いていく。

面々の目に映るのは先ほどまでの石像ではなく、多数の魔法使いたちの姿。無傷のままで綺麗な姿の者も多いが、ケガをしているものも多数見られた。おそらく石化前にやられたものであると考えられたが、そうでない可能性も十分にあり得た。

石化は解けていたと思われるが、そうでない可能性もある。またケガも放っておけない。そこでサンライトハートの社長兼ネギファンクラブ会長こと和葉が、初めて口を開く。

「暦、今だ！」

暦は仮契約カードを懐から取り出し、『アデアット』と唱えると、砂時計型のアーティファクトが顕現する。

「はいっ！ 皆さん、今のうちに治癒を任せます！『時の回廊』」
ホーラリア・ホルディクス

暦のアーティファクトによって村人たちの周囲を流れる時間を遅延させる。重傷者の手当てを間に合わせるための措置だ。

「部隊編成をシフトBへ。解析部隊はマニュアル通り、石化の完全解呪の確認、意識確認を行え。その後、ケガのレベルに応じて治療を」

和葉は500人近いメンバー全体への同調を維持しながらも、魔力制御から全体の動きの掌握に集中度をあげた上で指示を飛ばした。

解呪前よりも慌ただしく各部隊が走り回る。アリアドネーからやってきた女学生たちも包帯やポーションを抱えながら救護テントの中を駆け巡る。

「ビー、薬を早く届けますわよ。コレットさんもモタモタしないで」

「はい。お嬢様」

「いいんちょコレ重いつて。瓶ばっかりじゃなか。半分持つてよ」

朝ぐらい肌にタレ耳の眼鏡少女、コレットはゼイゼイと肩で息をしながら救急箱を抱えて走る。

「失礼ですがコレットさん。魔法で宙に浮かせれば随分楽になると思っているが」

「もしかしてこの程度の初級魔法もできないとは言わないでください……ね？」

当然のようにビーこと、ベアトリクスは提案するが、「いいんちよ」と呼ばれるエミリィ嬢は懸念を示す。

「むー。いいんちよ達の意地悪！」

その懸念通り、コレットは頬を膨らませながら金切り声をあげる。残念ながら彼女は“まだ”落ちこぼれの少女であった。

「警備部隊、半分は負傷者のテントへの輸送を手伝え！ 残りは気を引き締めて警戒にあたれ。ここで邪魔をされるわけにはいかない。絶対に侵入者を許すな！！」

エヴァンジェリンが頭から出血している老婆の治療を行いながらも、崇める会を主とした警備部隊に号令をかける。

「コ・イエス、マイ・ロード！！」「」

孤独な人形使いの少女は今や、世界最強の紳士^{ロリコン}たちを束ねるカリスマとしての風格を醸し出していた。

また、直接治療やサポートにあたるメンバーとは別にメルディアナの教師陣を中心とした撮影班も各班の間を多数の記録水晶や使い魔を駆け巡らせていた。

「撮影班、きちんと撮れているわね」

「ドネットさん、ばっちりです。」

「いい？ 私たちがこの歴史を塗り替えた瞬間の証人になるのよ。2代目サウザンドマスターの力になるよう、しっかりと記録しなさい！」

「それにメルディアナの人気が上がれば、給料アップも夢じゃないっすね」

「ええ。これで年々減って行く生徒数に歯止めがかかれば、経営も持ち直せるわね。私たちの明日のためにも頑張ってちょうだい」

彼女は具体的な先月の数字を思い出して、溢れそうになる瞳を擦り、再び手元の電子精霊の制御盤の操作に集中し出した。

「それで、実験の首尾はどうだ？」

全村人の解呪の確認と、重傷者のケガの治療を完了させある程度落ち着いたところ、エヴァンジェリンは司令部の席に座っている和葉に声をかけた。目を会わせずうつむいたまま和葉は答える。

「ああ。第一段階はクリアだ」

サンライトハートにおける和葉の側近である調が報告を行う。

「近衛様。では打ち合わせ通り、私は本部へ戻って実験を進めます。」

既にサンライトハートの方からは披検体——いえ、協力者の選抜は完了しておりますが、ネギファンクラブとエヴァ様を崇める会の方は如何いたしましょう？」

「悪いな。まだ連絡していなかった。セラス副会長に選抜は要請してあるからその辺は心配いらぬ。調はモニタリングに専念してくれ」

魔法世界の崩壊を防ぐために設立した機関、魔力基礎理論開発研究所の所長としての和葉にとって、調は最も信頼している研究員だ。表での研究とは別に、外法とも呼べる手段を彼女には執行させている。

隣のエヴァンジェリンも、肩書き上では白き翼のメンバーであると同時に、この研究所の魂魄理論研究チーム主任でもあるため話を聞かれていても差支えはなかった。

「ではそのように。全ては世界のために」

調は跪いて忠義を誓う。

「あまり気負うなよ？」

「近衛様がそれを言いますか？」

はあと、ため息をつきながら言われる。

「全く小娘の言う通りだな。『深淵の探究者』、貴様今、随分いい顔をしているぞ。自覚はあるか？ これだけの“魔法世界人”の精鋭たちをモルモットにする気持ちはどうだ。その罪悪感と苦悩に満ちながらも、歪んだ笑みが私には見える」

「罪悪感？ まさか。1度目は母さんに、2度目はゆき姉に救われ

た魂だ。俺は2人に貰ったものをみんなに返しているだけだよ」

エヴァンジェリンの皮肉に対し、悪人面を浮かべて言いきる和葉。その表情と、内に抱えているであろう心労のギャップがあまりにも滑稽に写った。

「ふっ、詭弁だな」

「ええ。詭弁ですね。その歪んだところに惹かれているのも事実ですが」

調の余計な一言によって和葉は刹那の顔を思い浮かべて、うすら薄ら寒い想いをした。鶴子のように彼女が反転する日はおそらく近い。どうやって他へ調のフラグを押しつけようかとも思案するが、それは許されないだろう。

そう遠くないうちに、おそらく彼女は全てを受け入れた上で ■ ■
■ のだから。

刹那から離れ、ゆきの真名を知ってしまった後の一時期、2人の距離は近づいたこともあった。しかし、決して支え合うことができ

ぬ関係であると気付いてしまった。あまりにも“在り方”が似ているから。

実の双子である木乃香とも、長年の相棒であるゆきとも、どこまでも依存し合える刹那とも異なった意味における『半身』とも呼べる存在。

それを理解できるからこそ、彼はどこまでも彼女を利用し、理解した上で彼女は自らの願いのために全てを捧げる。和葉は自らの悪と、彼女の願いを受け入れていた。

調と呼ばれる少女が ■ ■ ■ こと。

少なくともそれが魔法世界を救う最低条件に入ってきて来ることは避けようがなかった。

信頼を寄せる部下を犠牲にしつつ、多くの人々をを騙しつつも、彼は実験を進める。

文字通りの意味で己の魂と精神をで削りながら。

第33話 救われぬ魂 (34話と入れ替え) (後書き)

和葉はキャラブレかと思われるかもしれませんが、元々かなり闇を抱えています。次の修学旅行編でほぼ明かす予定です。和葉とゆきの過去が、その特異な能力や実験に繋がって行きます。勘のいい人なら今までの話で気付くかもしれません。

第34話 期末テストへ向けて（33話と入れ替え）（前書き）

流れ上、33話と入れ替えました。頑張るネギ君と、暗躍する人たちのお話です。

第34話 期末テストへ向けて（33話と入れ替え）

第34話 期末テストへ向けて

エヴァンジェリンだけでなく、ネギも永久石化の解呪の新技术の確立に貢献している。

きっかけは、刹那とゆきの会話だ。ネギは何となく、ポジションを調査しながら聞き耳を立てていた。

「石化する前なら、斬魔剣式の太刀で呪いを浄化できるかもしれないのにねえ」

高位の回復呪文の巻き物を指でなぞりながら眺めているゆきはふと呟いた。

「確かに鶴子さんなら平気でやってしまいそうですけど。いえ、そういうゆき姉様こそが我々よりも退魔に長けているではありませんか」

「1000年前の私よりも現在の神鳴流の方がしつかりと型ができ

ていていいと思うよ」

「その斬魔剣式の太刀って普通の斬魔剣とは違うんですか？」

ネギは質問をする。刹那が使わない技などに関して知識を持ち合わせようはないからだ。

「神鳴流本家のみに伝わる奥義の1つです。例を挙げるとですね、人に獲り憑いた悪霊や怨念、呪いの類だけを斬る技で人や物は一切傷つかないという最高の退魔術の一種ですね」

そんな刹那の説明を聞いた後、西洋魔術の概念にはない、魔だけを斬るという発想が気になっていた。

「呪いを斬る、か。便利だなあ。アレ？ それって精霊を斬ることもできるのかな。そもそも地の精霊に働きかけているわけで……。でも完全に石化した状態じゃ通じなさそうだし。きつかけさえあれば……」

そしてその“きつかけ”は、エヴァンジェリンが魂と精神の固定化を解くということで解決できた。そして体を癒したところで、呪詛そのものを封じこめ、再び侵食することを防ぐと言う、今までに全くない方法が考案されたのであった。

この研究は2代目サウザンドマスターと闇の福音の功績で間違いない。

しかし、エヴァンジェリンは和葉がいたからこそ永久石化の使い手からの情報を得ることができ、また様々な書物や薬品を入手することができた。

また神性の高い天狐のゆき、そして神鳴流の刹那という退魔に特化した2人が身近にいたからこそ、“呪いそのものを封印する”、再び呪いが浸食する恐れを失くすという発想にネギは至った。

これで1つ、彼らとの出会い感謝する事柄が増えてしまったようだ。

ネギは石化解呪のためにウェールズへ向かう和葉とエヴァンジェリンを見送った。

自らの原動力とも呼べるあの風景。それを元に戻せるのならと、本当は誰よりも真っ先に故郷に帰りたいかった。本来なら麻帆良での修行を終えてから向かえば良いものであったが、複雑な状況下においてエヴァンジェリン、和葉の3人で判断したところネギは残ることになった。

様々な理由はあるが大きな理由として、それなりに勉強したと

はいえ、ネギ自身は永久石化解呪に必要な魔法をマスターできているわけではなかったことだ。

研究面に置いて彼の発見が役に立ちはしたが、現場においては魔力以外では役立たず。今回のような大掛かりな儀式で、複雑な補助術式を多数用いるような状況下では、ネギの魔力コントロールでは全体の綻びに影響する可能性が僅かながら通常より高い。

そして何より最大の理由は、ネギがいることで実働部隊の過半数であるネギファンクラブの精神状態が不安定になって、魔法の精度に問題が出ることを何より懸念した。彼女らに煩惱を振り払ってもらい、魔法に集中してもらうためには仕方のない選択であったのだ。

研究面で出来ることを尽くした彼に行えることは、自らの修行を全うし立派な魔法使いになるために立派な先生になることであるとを理解している。

義兄も従者も不在の間、見違える姿を見せようと気合いを入れた。

その日の放課後、ネギは学園長に面接がしたいと呼ばれた。

「ネギ君。ここへ呼んだのは理由はわかっておるかの？」

「それは、僕がこれから先生としてどうするかということですか？
それとも魔法使いとしてでしょうか？」

「両方なんじやが、まずは魔法使いの方から話そうかの。」

「そこでじゃ、ネギ君。実はお主を正式な先生としてあと1年雇おうと思っておるんじや」

「えっと、それは……」

「和葉から聞いたがエヴァのことじゃよ。卒業まで待つつもりなのじやろ？ それまでの1年じゃ。エヴァもお主も離れ離れになるつもりはあるまい」

エヴァンジェリンの卒業まであと1年。それがネギの大きな悩みの1つであった。

学園結界は随分前に改変されたが、登校地獄の呪いは未だに解除されていないのだ。現状、ゆき特製の式紙に呪いを肩代わりさせ、学園に縛り付けている。そのためエヴァンジェリンはウェールズに行くことができたのだが、根本的な解決策ではない。

しかし解呪方法は見つかった。ネギの大量の血を媒介にした魔法陣により複雑な儀式を行うことでも可能であるが、もっとシンプルかつ確実な方法がある。それは、卒業証書を授与すること。呪いをかけた犯人であるナギスプリングフィールドは3年たったら解呪すると彼女に誓った。

無茶苦茶な呪文だったとはいえ、これはそもそも不登校児に登校させるための呪文なのだ。誰が使おうとデフォルトで期限は卒業するまでなのだ。ナギも例外ではない。学園長、タカミチ、エヴァンジェリンの記憶から読み取る限り、バグが生じた部分は精霊が卒業させないように全力で阻止しようと、抑止力が働いてしまっていることである。

要するに毎年卒業式が来るたびにエヴァンジェリンは寝過ごしたり、高熱を出したり、と様々なトラブルにより卒業証書を授与することができなかったのだ。

なので、来年こそは3年生として無事に卒業させる必要がある。ネギにとって成行きだったとはいえエヴァンジェリンをパートナーに選ぶことになったのだ。だがこの身は今月で学園から離れる身にも関わらず彼女は3年生としての1年が必要になってくる。白き翼としての活動も彼女たち抜きの自分一人ではままならないことは明白だ。故に彼女の卒業を待つのは必然となってくる。しかし彼には麻帆良に残る理由がない。ならばどうするか。そう迷っていた矢先であつた。

「ええ。どうにかして麻帆良で1年待つつもりでした。しかし『先生』とは一体どっちの」

「うむ。しつかり気付いておるの。アヤツとは違い、いい兆候じゃ。もちろん『魔法先生』としてではなくて『先生』として雇うぞ。こは重要じゃ。どうかの。給料も上がるし、6月からはきちんとボーナスも出る。そのための試験を受けてみる気はないかの？」

ネギは思い浮かべる。和葉から肖像権分のギャラとしてもらった大金はあるものの、それは研究や魔法使いとしての活動のために使うと決めている。もっと自由に使えるお金が増えたらと思い浮かべる。フェイトのフィギュアが惜しげもなく買える。新しい漫画を大人買い出来るかもしれない。

「うつとらしい本国の連中からも、わしや和葉が守ってやれるからの。やることをやってもらえれば、放課後はエヴァとの修行に明け暮れても誰も文句は言わんぞい。それに図書館島で高等魔法に関する蔵書もたくさん手に入る」

これはありがたい話である。

「そして何より、日本にいればリアルタイムでアニメも見放題。アキバの街もそう遠くない。これ以上の条件はないと思うのじゃが。どうじゃろつか？」

「もちろん。その試験お受けします」

何も考えずに即答した。

「うむ。計画通りじゃ。というのは冗談じゃがの、ネギ君、こういうとき、まずは試験の内容をよく聞いたがよいぞ」

「そ、そうですね。つい浮かれていました。それで」

「心の準備はいいかの？ 『次の期末テストで2 - Aを最下位から脱出させる』これが正式採用をかけた試験じゃ」

「……な、なーんだ簡単そうじゃないですかー。なんて言えるわけないですよ。なかなかこれは」

「難しいとはわしも十分にわかっておるぞ。わしも学園長としてのクラスの酷さは目に余っておつての。試験ということで、かこつけておるわけじゃ。修行の報告書として先生としての活動を評価してやりたいんじゃが」

「今のままでは最低評価しか付けられない可能性もあるってことですね」

「修業先として、ネギ君を預かった“わしの立場”的にもこのままじゃと困るわけじゃ」

「“立場”ですか。そうですね。生徒の成績を上げるのは、『先生』という立場の責任として当然ですね。僕、頑張ります！」

ネギは学園長室を出て、公園のベンチに腰掛けていた。

期末テストに課せられた、最下位脱出という正式採用への試験。この試験の意味をもう一度ネギは考える。『本質を捉える』という

教えを和葉から常日頃から聞いていたからだ。

正式に採用されればネギにとってはいいことづくめである。しかし生徒たちにとってはどうか。彼にとってクラスの生徒たちは大事な存在である。自らが教師としてふさわしい人物かと問われれば、現状では自身を持って返答できないだろう。そういう意味でもこれは適切な試験であると理解できた。だが、現実是非情だ。

「超さんはまだ国外を飛び回っていることになっているから最大の得点源がなくなつたし、その上でベテランのタカミチでもダメだったからなあ」

ハアと一息吐き、小さな背中をさらに小さく丸める。

「お兄ちゃんはいないし、タカミチでダメだったんだからもっと頼りになる人は……新田先生かなあ。でもあの人のことだからきつと『自分で考えて行動してみなさい』って言うだろうなあ」

そう独り事を呟いて、にくまんを少しだけ頼張る。

「難しい顔してるネギ坊主。“にくまん”もいいが、この新作の“ネギまん”を食べるといいヨ。それでどうした？ 悩み事があるなら相談に乗るヨ？」

顔を上げるとそこにいたのは、にくまんを右手に持ち、左手に湯気の漂う大きな買い物袋を提げ、認識阻害効果付き猫耳変身セットを装着した超であった。

全教科満点をとれる麻帆良最高頭脳。勉強に関しては誰よりも頼

りになる人物がそこには居た。

ネギは羨望の瞳で見つめる。

ネギは気付いていない。彼女は天才すぎるが故、他のクラスメイトと理解力に大きなギャップが存在することを。

ネギは知らない。彼女が学園長と何らかの取引を結んでいることを。

そして、彼女が未来人であり、介入者として動き出していることを。

第35話 2人の魔法少女（前書き）

前話に引き続き連続投降です。今回もネギには立派な教師らしくさせてみました。

図書館島イベントは大改変です。

第35話 2人の魔法少女

「みなさん来週は期末テストです。今回が今年最後のテストですから、1年間の勉強の集大成として頑張りましょうね」

帰りのHRにネギは拳を握りしめながら熱く語るが、帰ってくる反応は薄い。

「あはは。うちの学校エスカレーター式だから、あんまり関係ないんだ」

「特に2-Aはずーっと最下位だけど大丈夫。大丈夫」

「勉強したって、そんなに役に立たないしね」

「そうでしょうか？ でも僕は勉強をやったと自覚しますよ。日本語を勉強したおかげでこうして皆さんとお話できるんですから。くーふえさんもそうじゃありませんか？」

まさか自分に声をかけられると思っていなかった古は目を丸くするが、瞳を閉じて昔を思い返す。

「ネギ坊主の言うとおりアル。日本に来たばかりのときはみんなと話したくて毎日勉強したアルね。確かにあの頃の勉強は楽しかったアル」

「くーちゃんが『勉強楽しかった』って言ったよ！ 明日は台風だ」

「むー。ゆーなは失礼アルね」

「そうです悪口はいけませんよ。ゆーなさん」

「ごめんごめん。くーちゃん」

「話を戻しましょうか。僕たち教師は勉強は後で役に立つから勉強しろとよく言いますが、理由は案外後で見つかるものなんです。絶対役に立つとは保証できませんけれど、僕たちは『やっていればよ

かった』ではなくて『やっててよかった』って言ってもらいたいですよ」

ネギは恩師の言葉を生徒に伝える。新田に相談して得られたのは教師としての心構え。具体的な今日行く方には言及しなかったものの、その言葉だけでも生徒に熱意を伝えるには十分なツールだった。

「そういえば新田先生も同じことを言ってたよね」

アキラが感心しながらネギをベテランの新田と同じように評価する。反応したのはまき絵。

「うん。やっぱりネギ君は頼りがあるねー。私ネギ君に一杯勉強教えてもらおっかな」

「うそ！ まき絵が勉強したいって言った！」

「だって私バカだもん。だから私はいっぱいネギ君に教えてもらえる権利があるよね？」

「そ、それはズルイですわ！ でしたら私もバカになって……」

「十分いいinchよもバカだと思うわよ」

「なっ！ 明日菜さんにだけは言われたくないですわよ」

「何？ 喧嘩なら買うわよ」

一触即発の2人を見守りながらも、ネギは柿崎の質問に応える。

「そう言えばネギ君は日本語勉強して良かったと言ってるけれど、どうやって日本語を覚えたの？」

「僕も最初はテキストばかりで大変だなあと思っていました、日本のアニメや漫画で覚えましたよ。音楽の好きな柿崎さんなら、洋楽の歌詞を覚えてみてはどうですか？ 一部文法がおかしい物もあります、好きなものなら単語も覚えやすいと思いますよ」

「なるほど。工夫しだいつてことだね」

ネギがそちら側の話に行く可能性を懸念した朝倉が簡潔にまとめる。リリカルな話をした時のネギの長話にはうんざりしていたからだ。

「工夫かあ。あつ、私思いついた！ 英単語野球拳がいいと思いまーす」

「桜子さん。野球拳は却下です」

「残念。あうとー！」

野球拳の提案は却下しろという助言を『彼女』から前もって受けていたため、ネギは断固として拒否した。それが何たるものかは知らないが、わざと彼女は教えていなかった。のどかの前での脱げ事件以来、ネギのオタク化に加えて露出の悦びまで覚えさせるつもりはなかったからだ。

「ネギ先生の言いたいことはわかるけど、でもそれだけじゃ動機が弱いな」

「そういえば言い忘れていましたが、今回ウチのクラスが最下位脱出できたらタカミチが僕と皆さんに焼肉をおごってくれるそうです。しっかり約束させてきましたよ。絶対僕は先生として頑張つて、タカミチにおごらせてみますから、皆さんも一緒に頑張りますよう」

「にやんだつてえー！」

「はい私も委員長として頑張りますわ。ネギ先生。そして私がネギ先生の分を焼いて差し上げますわ」

「それってＪＯＪＯ苑！？ もちろん食べ放題だよね」

「肉のためなら頑張るアル」

「そうでござるな」

「でもそれって高畑先生に悪くないかしら」

バツの悪い顔をしながら素朴な疑問をぶつける明日菜。しかし、ネギはある人物から教わった通りに切り札を切る。

「明日菜さん。タカミチと一緒にのテーブルで焼肉を食べたくないんですか？」

「……ネギ。勉強を覚えてちょうだい。私バカだけど頑張るから」

明日菜の顔がみるみる内に紅潮する。こうかはばつぐんだ。

「では今日の放課後から教室で大・勉強会をはじめたいと思います」
「ネギ先生、素晴らしいご提案ですわ」

「「「さんせー!」「」」

翌日の放課後、図書館島のある区画でハルナ、のどか、夕映の3

人は地図を机の上で広げながら話し合っていた。木乃香がこの場にはいないのは、和葉に任せられたゆきの指導による刹那のテスト勉強に付き合っているからだ。

「これが魔法の本の在り処が載った地図かぁ。ってかこんな道あったんだね」

ハルナは興味深げに地図を覗き込む。

「でもこれ一体どうしたの？ ゆえ」

「学園長からもらったですよ。部屋を掃除していたら図書館島の地図が出てきたので、たまたま会った図書館探検部の私にあげると」「ラッキーじゃなか。高等部の先輩たちもきつとこんなすごい地図持っていないよ」

「それでこの印に書いてある『メルキセデクの書』というのが、きつと噂の頭の良くなる本だと思うです。これがもしも噂の魔法の本なら万々歳。予想通り非常に優れた参考書ならそれはそれでよしとするです」

「うー。でもゆえ。それってズルじゃないのかなー。それにネギせんせーの勉強会は良かったの？」

のどかはもじもじと両手の指先を合わせながら反論する。彼女はネギと友人を秤にかけ、苦渋の選択でこちらに来たのだから。しかし夕映は冷静に筋道を立てて応える。

「私はテストでズルをしようと思っっているわけではないですよ。魔法の本などとは眉つばものですが、その存在事態は非常に興味深いです。火のないところに煙は立たないです。きつと素晴らしい本なことは間違いないですよ。だから、ただ飽くなき探究心でその本の存在を確かめたいのです。それにネギ先生も勉強には工夫が大事

と言っていたではないですか。おそらくは優れた参考書です。教材
選びと思えばとてもまっとうな手段ですよ。のどか」

「そうそう。これは私たちの創意工夫なんだから。気にしないでい
いのよ」

「うーん。そーかなー」

そうして、3人は地図に従って地下へと潜って行った。

「いたたた…のどか？ ハルナ？」

仰向けになっていた彼女は、ゆっくりと状態を起こす。床に体の
あちこちをぶつけたのか、腰やお尻を中心にジンジンと痛みが響
いた。しかし堅いこの石造りの床にぶつけてこの程度の痛みならば
幸いだと彼女は思った。

こうなる前の状況を思い返す。地図通り隠し部屋にたどり着いた
まではよかったが、『ジューズ職人の夜明け』というタイトルの本
を取ろうとした瞬間、突然本棚が回転し、壁の裏側へと吸い込まれ、
長い長い坂道を滑り台のようにして堕ちてきたのだ。

トラップに引つかかってしまっただけからの記憶がない。おそらく自分1人が罠にかかったのだろう。友人の姿が見えないのは心細かったが、逆に助けを呼んでくれると思うと心強くもあった。

携帯電話を取り出して、のどかの携帯に電話をかける。しかし勿論図書館島は圏外であった。

「何をやってるですか」

自身が冷静さを欠いていることを自覚した彼女は、専用のトランシーバーに連絡をする。しかし応答はなかった。

「これは不味いですね」

装備を詰め込んだバックの中身を思い出す。食糧、水、ロープなど基本的な者は揃っている。周りには螺旋階段があり、昇れば自力で帰ることができそうであると安堵する。そんなことを考えていると、ボタツと何か白い液体が彼女の頭に降りかかってきた。

「うっ。何ですか。これは!？」

少し粘つくその液体を袖で顔周りだけでもと拭う。そして頭上を仰ぎ見ると、何か大きな生き物の顔が逆さまに写っていた。

「へっ?」

振り返って改めて状況を確認する。

「何なのですか。このトカゲは?」

それは大きなトカゲだった。彼女の数倍の身長があり、羽まで生えたトカゲだ。グルルル……と低い声で唸っている。

先ほどの液体がヨダレだったことに気付くと彼女は怖れると同時に憤慨した。トカゲのくせに失礼な奴だと思いつつも、本能的に喰われるとも感じていた。

彼女はそこから一步も動けなかったが、逆に巨体の方が一步前へ踏み出し、顔を彼女の目の前に持つてくる。

これから自分はこのトカゲに食べられるのだ。そう感じた夕映はヘタツつと座り込んだ。敬愛する祖父の下へ自分も召されるのだと覚悟した次の瞬間であつた。あり得ない人物の声が館内に反響する。

「フイーネ。彼女は私の友人ネ。食べたら駄目ヨ。このにくまんて我慢するヨ」

「こっちの部屋の中に入るヨ。おいしいお茶とにくまんを食べて休憩するネ。ネギまんもあるヨ」

そう言つて、超はフイーネと呼ばれたトカゲの前に、にくまんとネギまんの入った袋を置く。キュルル……と鳴きながらその袋の中身を一瞬で平らげるとその場に伏せてぬ眠りだした。

そのファンタジーな光景に見とれながらも、彼女は思考を働かせる。なぜ超がここにいるのか。このトカゲは一体なんなのか？

「超さん、助けてくれてありがとうございます。しかし、外国にいるはずの貴方がなんでここに居るのですか？」

「その疑問は最もネ。いやゝ実を言つと、ここで興味深い本を見つけてネ。研究に夢中で地上に戻るのが面倒になたから嘘をついたヨ」
「それから超さん。クラスの皆、特にハカセや四葉さんは寂しがっていましたよ。早く帰ってきてあげて下さい」

「うむ。そう言われては仕方ないネ。まあ積もる話は中ですヨ」

そして入室を促された夕映は絶句した。門の向こうは異世界だったのだ。広大な滝に囲まれたあまりにも非現実的な空間。

「これはこれは。こんなところにお客さんとは珍しい。しかも超さんの友人でしたか」

ローブを羽織った長身の美青年は、一片の歪みもない爽やかな笑みを浮かべた。

その手にスク水猫耳メガネセットを携えて。

「私は綾瀬夕映といいます。それで誰ですかあなたは？」

明らかに変態な人物に警戒心を顕わにして質問をぶつける。

「ここの司書をやっているクウネル・サンダースという者です。図書館のことは誰よりも詳しいですよ」

「司書さんですか。でしたら色々と探している本があるので、一緒に探して欲しいですよ」

お茶をしながら、クウネルは夕映からの蔵書について様々な質問に答えていた。一息つくと、クウネルは本題を切り出す。無数の炎の固まりを滝に向かって放っている超を一瞥してから、夕映に視線を向ける。

「綾瀬夕映さん。私と契約して『魔法少女』になりませんか？ この彼女のように。きっと世界の真理にあなたならたどり着けますよ」

「契約ですか。一体どういうことですか。あなたにメリットは？ さっきのトカゲやこの部屋、超さんの手から出てくる炎を見ると、魔法という単語が出て来ても信じざるを得ません。しかし、仮に本当に魔法があったとしても、その申し出は色々と胡散臭いです」

彼女は眼を細めて目の前の人物の真意を見極めようとする。

「胡散臭くはないですよ。契約の条件は一つだけ。私が魔法を教えている間は、このビブリオンのコスチュームの着用を義務付けさせて頂きます。もしくはこちらのスク水猫耳メガネセットでも可です」

屈託のない満面の笑みを浮かべて紳士は言った。そして彼女は理解した。裏の意図などない。この人物は只の変態だと。

「……ごめんなさいです。流石にその条件は少し考えさせて欲しいですよ。何か大切なものを失う気がするです」

絶賛ドン引き中の彼女は、メリットとデメリットを天秤にかけて高速思考を巡らせていた。そのやり取りを聞いていた超は再び頭を抱える。和葉といい、ネギといい、学園長といい、どうやら彼女は変態に翻弄される運命にあるようだった。

それから数日。期末テストの結果が発表された。焼肉を餌に、最下位脱出を目指した2-Aの点数はみるみる伸び、バカレンジャーを含めて誰1人赤点を取る者はいなかった。ネギは超が用意してくれたいくつかの参考書を元に様々な資料を用意し、それをベースにしつつも、好きな洋楽のCDを使いながら勉強したり、既に高得点のハカセによる睡眠学習セットなる怪しげなものを用いたり、と教材やモチベーション面で創意工夫を凝らしながらの勉強会は間違いないでなかったことが実証された。

帰国したエヴァンジェリンも10年以上学んだ者としての本気を見せつけ、萌えを理解して文学にも目覚めた茶々丸は、文系教科の点数が大きく上がったため、学年上位にこの2人が躍り出たのが貢献した。これをきっかけに表の世界でもこの2人は知名度を上げていく。

そして結果はぶっちぎりの学年1位。あの鬼の新田が感激のあまり涙を流している。当のネギ本人はエヴァンジェリンの冷たい視線を受けながらも、しずなの胸元で窒息死しかけていた。

一方、前任の高畑は今までの教師としての自分と、珍しくネギがねだるものだから安易に焼肉の約束をしてしまったことを心底後悔していた。

「ああ不幸だ」

口癖になってしまった。自分への呪詛を呟く。世界樹広場の件にしろ、襲撃事件の後始末にしろ、割に合わないことばかりが続く青年の背中は、頼れる男のソレではなかった。

刹那も、ゆきと和葉の期待に応えられるだけの点数をとることができて安堵する。が、刹那は今回の最大の貢献者に目を向ける。

全教科満点の天才少女と、元・バカブラックでありながらも今回学年3位に昇り詰めた天才少女が2・Aに戻ってきたのだ。

それだけならまだいい。しかし気の達人である刹那だからこそわかる。彼女たちが纏う雰囲気は一般人が纏うソレではなかった。

こうして魔法少女が2人増えた2 - Aのメンバーはそのままに、ネギが引き続き1年間正式な教師として3 - Aを担任をすることになったのである。

第35話 2人の魔法少女（後書き）

学園長&超に謀られたゆえっち。

変態紳士に騙されて契約を結んでしまいました。彼女の明日は如何に！？

第36話 懸念だらけの旅行計画（前書き）

大変お待たせしました。新章 修学旅行編です。

第36話 懸念だらけの旅行計画

第36話 懸念だらけの旅行計画

春休み。

無事に進級も決まり、それぞれ実家に帰省したりと思い思いに過ごす中、学園地下にある秘密のモニタールーム内にて密談が行われていた。

無数のモニターには和葉と高畑の戦闘風景や、ネギの露出現場、ウェールズの集団呪いの映像や、関西呪術協会やネギファンクラブのメンバーリストやパーソナルデータなどが表示されている。

それを見つめているのは、超鈴音、綾瀬夕映、四葉五月、長谷川千雨、葉加瀬里美の5人だ。

情報を一通り閲覧した後一息ついたところで、ハカセが切り出した。

「それでは少し私たちの課題を整理しましょうか。超さんこの旅行における一番の懸念事項はやはり……」

「神楽坂サンを魔法から遠ざける必要があるネ。前にも説明したとおり、彼女は魔法に関わってはいけないヨ」

クラスメイトの安否よりも真つ先に出たのは姫御子のこと。未来の情報によりその重要性を知っている彼女たちは頭を悩ませる。

「しかしアスナさんは木乃香さんと一緒にいることが多いです。おそらく今回狙われる可能性のある木乃香さんの近くでは漏れる機会は多いですよ」

夕映は難しそうな表情を滲ませて述べたが、千雨は割と楽観的、いや他力本願なことを口にする。

「そうか？ でもそこは多分桜咲や近衛の兄貴が近衛を争いから遠ざけようとガードに徹するだろう。ついでに守ってもらえばそれで十分じゃねえのか？」

「私もそう思います。正直この前の戦いのデータを分析しても近衛さんのお兄さんは間違いなく最強クラスです。スターライトブレイカーでしたっけ？ あれだけ膨れ上がった魔力反応はあのときのセンサーでは観測不能の領域に入っていましたね。加えて桜咲さんも管理人さんと組んだ時の実力は未知数です」

「彼らが強いのはわかってるヨ。戦闘に関しては何の心配もしていない。完全なる世界が出て来ても彼らが本気を出せばどうにかなると思うヨ。だがこのそもそもの対立問題事態は改革派が解決してもらわなければならないネ。おそらくサンライトハートの介入も立場上でできないと思うヨ」

「要は木乃香のお兄さんたちは手一杯になる可能性が高いから、私たちが頑張らなければならぬですね？」

「そういつことヨ」

「それで東の学園側はあくまで修学旅行の引率に専念か。何もしない、ってのが麻帆良が取るべき道だろうしな。証言者あたりにでもなってもらうか」

「その通り。魔法先生には何もさせないネ。学園長の言質を取ってある。それから極力白き翼のメンバーには私たちは無干渉でいくヨ。話がこじれるのは目に見えてるネ。それにネギ坊主の信頼度的に、私たちよりも彼に任せた方が上手いこと動くと思うヨ」

「ですが、ネギ先生に何らかの形で関係解消に一役買ってもらえれば、さらに白き翼の影響力は増すと思うです。やはり積極的に介入させるように誘導するべきでは？」

「私もそこは綾瀬さんに賛成です。『ウェールズの奇跡』以降、ネギファンクラブ会員数はともかく、エヴァ様を崇める会の会員数の伸びは留まる所を知りません。現にこうして春休み中はネギ先生と世界中を飛び回っている訳ですし」

「今の彼女なら力押しだけでということないだろうが、私はこの件に関しては改革派を中心に動いてもらいたい。私のいた世界のネギ坊主の方がそもそもおかしいネ」

「それで結局どうするんだよ？」

「どれが正解かわからないから。白き翼についてはやっぱり無干渉でいくしかないネ。」

「なるようになれってか。後悔すんなよ。ガキっての何やらかすか

わかったもんじゃねえからな」

「仕方ないですね、わかりました。一応、先生の監視はしておくですよ。それから超さん、のどかを巻きこもうとするふざけたイタチはどうするですか？ 見つけたらフィーネの餌にしてやるですよ」

フィーネというのは図書館島奥に住むクウネルのペットのメスドラゴンの名前である。仲良くなった彼女はトカゲという名から昇格していた。

「綾瀬サン、その点は心配無用ネ。言い忘れていたがアレなら牢の中で処分してもらったよ」

「酷え。人間じゃないといっても処分つてなあ。一体いくら渡したんだよ？」

全く穏やかでない会話に退きながらも、魔法世界に干渉できるようになった超の凄さを思い知る。綾瀬は知っているのか知らないが、本物のオコジヨ妖精ならともかく、オコジヨ刑服役中の魔法使いの可能性も考えるとそう簡単に処分できないはず。千雨は背中に冷や汗が伝うのを感じた。

「そんな顔をしないで欲しいヨ。アレは根っからの性犯罪者な上、ネギ坊主をダメな方に引き込むのは間違いないネ。それにお金のためにクラスみんなの命を危険に晒す、生ゴミ以下の存在といっても過言ではないヨ」

憎悪とも呼べる感情を声の表情に表わす超。クラスメイトの柔肌をケダモノの前に晒すことは許されない。それに女子部では刹那ですら知らないが、男子部で崇められている『エロ神』には勿論、露

出以外比較的まともに成長しているネギと生ゴミを接触させるわけにはいかないと彼女は判断する。

戦力という点ではエヴァンジェリンと茶々丸、チャチャゼロが既にいるのだ。宮崎のどかや朝倉和美などのレアなアーティファクトは捨てがたい。しかし今の彼らを支えている組織力を考えると、新たな戦力をクラスメイトから見出すよりも、ファンクラブの実力者たちに声をかける方が効率がいいだろう。深淵の探究者もそれを見越して発足したことは間違いない。ならば、イレギュラーが起きた時に対処、または夕映や千雨のように自分の方へ優秀な人材を引き込めばいいだろうと考えた。

「お前がそこまで言うなら、そいつがどうしようもないクズだってことは理解できた。だが、ちょっと待て超。自分のことを棚に上げてないか！」

「アレは正当な契約ネ。私はただあのパソコンをやるとは言わなかったヨ」

「言わなかったがアレは卑怯だ！」

「キス1つで未来の技術をふんだんに搭載したノートパソコンが手に入ったのだから、とってもいい買い物だと思うが？」

「はじめはトンでもスペックのパソコンをタダで手に入れたと思ったら、私の初めてを……。魔法を知ってしまったからこつち側に来いだと？ こんな契約無効だ！ リコールだ！」

「それなら私も同じですよ。気持ち痛いほどわかります。千雨さん」

「同じじゃねえ！ 綾瀬みたいに私は非日常と危険が溢れるファンタジーの世界に憧れてなんてねえんだ。私には選択肢すらなかった！」

「未だコスプレには抵抗がありますが、自分で選んだことですし、確かに千雨さんとは状況が違います。ごめんなさいです」

夕映は深々と頭を下げる。自分には無茶苦茶とはいえ選択肢があったのだ。決して脅迫されたわけではない。

「すまない。全ては世界のための尊い犠牲ヨ。千雨さんが協力してくれないというのなら、悲しみのあまり、ついっつかりこれを流出させてしまうかもしれないネ」

「おい冗談だ！ やめろ超！ その隠しフォルダ内の写真はシャレにならねえ！！」

「……わかってくれて何よりだよ」

「もうやめてあげましょう。超さん。」

五月からもらった白いレースのハンカチでとめどなく溢れる涙を拭う。超もその光景を見ていて彼女を不憫に思った。

千雨が落ち着くと会議が再開された。

「ですが超さん。それでは木乃香さんが魔法に目覚める必要性がかなり小さくなっているですよ」

「現に桜咲たちは関わらせるつもりはないんだろ？ そっちの世界の連中と違って既に学園長はこっち側だし、改革派はかなりしつかりしているみたいだしな」

「しかし肝心の今の長、穏健派のマネジメントは相変わらず杜撰過ぎるネ。正直過激派が憤るのもわかるから、何も起こさせないってのは無理だと思うヨ」

「では落とし所としては、これを契機に今の冷戦状態を作り出している過激派を処分。実行力のない穏健派を糾弾。外部組織との人脈もあり、有望な若手も多く人材が豊富で統制も利いている改革派に掌握させる——この方針で行くですか？」

「綾瀬さん。やはりアナタをこちら側に引き込んで正解だったヨ」

「方針はわかった。要は改革派に勝手にやらせつつもそれが円滑に行くように、私らはそのバックアップをすればいいんだな？」

「ただし改革派にも白き翼にも悟られないようにネ」

「それではここで一度役割分担を明確にしておきましょうか」

「まず私はアスナさんとこのかさんの行動監視と護衛ですね。争いから2人なるべく遠ざけるようにするですよ」

「うむ任せたネ。特に桜咲さんがいない間は頼んだヨ」

「了解です」

「それから千雨さんは」

「私にできることハッキングぐらいだからな。電子精霊群でメディアなんかに漏れる前にもみ消してしまえばいいんだろ？」

「すまない千雨さん。仕事を増やして申し訳ないが、それに加えて京都での出来事は魔法社会全てに対して徹底的に情報を隠ぺいして欲しい。メガロメセンブリアへ情報が漏らしたくないネ」

「どこから姫さんの情報が漏れるかわからないってか」

「ネギ先生が何か失敗したら問題ですし、予防策ですよ」

「そういうことだネ。ハカセもそのサポートについてもらうヨ」

「任せて下さい。あ、そうだ超さん。茶々丸の武装とシステムも、もつとすごいのを思いついたんですよ。ふふふつ。こうしてはいられません。早速実験しなければ！」

半球型の足場にバイクのハンドルがくっついたような8足歩行の気色悪い白色のロボットはマッドサイエンティストを乗せて、蜘蛛のような足さばきで去って行った。

「……行ってしまったですね」

「ああ。逝ってしまったな」

「五月は差し入れや超包子の宣伝を頼むネ。せつかく京都に行くのだから新しいメニューのアイディアなんかも仕入れてくるといいヨ」

コアラのような瞳を浮かべた少女はコクつと頷く。

「さあ超包子の全力を持って、修学旅行を成功させて見せるヨ！」

京都。

とある山中にある墓石の前で両手を合わせる影があった。胸元が大きく開いた着物を着た20代半ばの黒髪を束ねた女性だ。

「あれからもう14年が経ちました。木乃葉義姉様の計らいのおかげで、うちは変わらず元気です。若様も益々ご立派になられ、お嬢様もお美しくなられております」

その後は言葉が続かなかった。無言の空に線香の煙が立ち昇る。

彼女は思い返す。両親と過ごした日々、失ってからの日々。実の弟のように可愛がった少年が東西の確執をどうにかすると宣言した日。

そして頭の中に響くのは大事な人との約束。

「千草。流石にそろそろ集合の時間だ。行くぞ」

千草の後ろからツインテールの小柄な少女が現れる。千草は振り返らず目を閉じたまま答えた。

「お待たせしましたな。焰はん」

「別にいい……覚悟は決まったか？」

「何を今さら当然のことを。ほな行きますえ」

千草は立ちあがって振り向くと、焰を強く見据えた。改めて焰は依頼者の顔を観察する。その瞳に映るのは濁りのない強い意志の炎。

しかし彼女は眼鏡をかけてその想いを奥に鎮めた。

そして一言だけ静かに続ける。

「強硬派はこの手で必ず――」

第36話 懸念だらけの旅行計画（後書き）

たくさん書いていたんですが、收拾がつかなくなって学園サイドとネギ・和葉サイドを飛ばしました。

荒れに荒れる修学旅行。今回空気な和葉・ネギサイドは勿論、クラスメイトや関西のメンバー、意外な助っ人などいろんな人物を暴れさせる予定です。特に超サイドはこれから中心になる和葉サイドと情報の質が全く異なるので今回出して情報整理させておきました。

千草も原作みたいな噛ませ犬ではないですし、確固たる信念を持って戦ってもらいます。最も改変させたキャラになりそうです。

完全なる世界の意図も現時点では謎ですが、学園サイドなど色々な思惑を交錯させていきます。

超展開がかなり多くなってきてるんで、だいじょうぶなのかな？と思うところです。ツッコミとか感想とかもらえたら嬉しいです。

現時点での各勢力まとめ（前書き）

ごちゃしてきた各勢力の現時点でのまとめです。
良く分からなくなってきた人用に。見なくても問題はありません。

現時点での各勢力まとめ

■サンライトハート

方針：魔法世界崩壊の回避・魔法世界内での影響力増進・
後ろ盾：魔法世界の一般市民から王族までの多数の人々
協力関係：関西呪術協会改革派・魔力基礎理論開発研究所
・ネギファンクラブ・エヴァ様を崇める会

・和葉：社長

・ゆき：副社長

・鶴子：日本における社長

・暦、環：売り子兼お遣い係

・調：研究員

■白き翼

方針：魔法世界崩壊の回避・その他未定
後ろ盾：ネギファンクラブ・エヴァ様を崇める会
協力関係：サンライトハート

・ネギ：2代目サウザンドマスター。エヴァンジェリンのマスター。
！。

・エヴァンジェリン：結界から解放済。永久石化解除を成功させる。

・チャチャゼロ：戦闘におけるネギの相棒。

・茶々丸：一度大破するがエヴァンジェリンのアーティファクトにより復活。

■ネギファンクラブ

方針：ネギの支援

協力関係：サンライトハート・ナギファンクラブ・エヴァ様を崇める会

・会長：近衛和葉

・副会長：セラス

・No.3：エヴァンジェリン

・コレット

・エイミィ

・ベアトリス

■エヴァ様を崇める会

方針：エヴァの支援

協力関係：サンライトハート・ネギファンクラブ

・カゲタロウ

■MM元老院

・クルト：和葉の研究を支援

■アリアドネー

・セラス

・コレット

・エイミィ

・ベアトリス

■ヘラス帝国

・テオドラ：和葉の研究を支援。

■ 関東魔法協会

方針：????

後ろ盾：????

協力関係：????

・ 学園長：超と契約

・ 高畑：苦勞人

・ 明石、式集院、瀬流彦：和葉の研究補助員

・ 刀子：元穩健派

・ ガンドルフィーニ、高音 e t c

■ 超包子

方針：魔法世界崩壊の回避

協力関係：サンライトハート・麻帆良学園（学園長個人）

・ 超：石化より復活。未来の情報をもとに和葉を支援。魔法においてアルの弟子

・ 夕映：アルの弟子。超の従者。天才化の兆し

・ 千雨：騙されて協力。超の従者

・ ハカセ：開発主任

・ 五月：料理長

・ フィーネ：アルのペットのドラゴン

■ その他麻帆良学園

・ 明日菜：まだ魔法バレなし。黄昏の姫御子として S H・M M、完全なる世界が搜索中

・ 木乃香：和葉の双子の妹。刹那と仲が良い。まだ魔法バレなし

■ 関西呪術協会

穏健派

方針：関東との和解

協力関係：関東魔法協会

・詠春：頼りない長

中立派

方針：関東・西洋との非干渉

・神鳴流などが主。

改革派

方針：東への責任追及・関西の統一

協力関係：サンライトハート

・和葉

・刹那

・ゆき

・鶴子

・小太郎

強硬派

方針：関東・西洋への報復

・天ヶ崎千草：何か計画中

・焰：千草と行動中

■完全なる世界

方針：魔法世界崩壊の回避

後ろ盾：なし

協力関係：近衛和葉（個人）

- ・フェイト：永久石化の情報提供を行った影の功労者
- ・焰：千草と共に行動中。関西呪術協会強硬派？
- ・栞：どこかで工作活動中
- ・デユナミス：和葉とは私怨で敵対

■紅き翼

- ・ナギ：行方不明。
- ・高畑：完全なる世界撲滅中。
- ・アル：夕映・超の魔法の師
- ・ラカン：和葉の研究スポンサー

第37話 旅行の準備（前書き）

2週間ぶりですので少し量を詰めました。魔法先生の事情から出発前日まで。

第37話 旅行の準備

「……どういことですか学園長！」「」

一般教師を含めた学年全体での会議の後、魔法先生たち、高畑・瀬流彦・明石・刀子・ガンドルフィーニは女子中等部校長室に押し掛けてきた。さりげなく『MMアラフォー』を閉じて机の下納め、悠々とした態度で座り直す老人。

「騒がしいのう。それにもう僕は学園長ではないぞい。ただの校長じゃて。さて、以前にもこんなことがあったような気がするが。一体何事じゃ？」

「校長！ 西の本拠地である京都に修学旅行など。一体あなたは何を考えておられるのですか！」

「あの3-Aが行くということはネギ君だけでなく、闇の福音も一緒なのですよ」

「それにお嬢様が行くとなれば若も行くに決まっています。政争が起こるのは必至です」

「でもまあ。和葉君が何とかしてくれそうな気がするけどねえ」

「瀬流彦先生、何を他人事のように！ 大体この件は若様だけに頼る訳にはいきません。これはそもそも——」

そう言いかけたところで

「これは既に決定事項。異議は許さないヨ、先生方。今、私が求めているのは教師として生徒をどう引率するか。それ以外の議論は無用ネ」

刀子ら魔法教師陣は、声のする方——学園長室の入口の方へ振り

返る。そこには学生服に身を包んだ超鈴音がいた。

「超理事長!？」

「全て君の謀りごとか？ この学園の理事長になった君が、学園の方針を握るのはまだ許容できる。しかし、関東魔法協会は君の管理下に置かれる理由はない」

「まあガンドルフィー二君。落ち着くがよい」

「そうネ。落ち着いて欲しいヨ。私は魔法使いの事情は知っているが、あくまで学園を統べる者として学園の教師に支持を出しているだけヨ。その指示にさえ教師として従って頂ければ、東に所属する魔法先生として勝手に行動してくれればいい話ネ。活動は基本的に黙認するヨ」

「くつ、魔法先生としては口出ししないということか。それは理解した。だが一体何が目的だ？ 裏がないなんて言わせないぞ」

憤る彼を近衛門と超は諫めるが、余計に疑念を強める。

「超君。君は本国から亡命中と聞いているが、この麻帆良を使って復讐しようなどと考えてはいないだろうね？」

「流石高畑先生。別に私は何もしないヨ。ただ毎年希望の多い京都・奈良・大阪の関西コースを魔法使いの事情で意図的に外すのは可哀相だと思っただけヨ」

「詭弁を。信頼できない。命の危険さえあるかもしれない敵地へ生徒を送るなんて。大体、超君。君は祐奈やクラスメイトが人質に取られても平気なのか!？」

「一般生徒が人質に取られる？ 無関係で何の罪もない少年少女を盾にして本拠地に取り込むと考えれば、リスクは相手の方が大きいヨ。万が一過激派が手を出したら、それこそ穏健派と中立派までもが敵に回る。敵地でならともかく、西でそんな過ちを犯せば完全に彼らの居場所がなくなる。今の長の責任も問われるだろうから、お

そらく改革派が実権を握ることになる。改革派の要求である大戦の謝罪と補償さえしつかりすれば、多分悪いようにはされないヨ」

「それは刺激するだけだ。私の娘をそんな危険な目には合わせられない」

「超君。確かに君の考えは一理あると思うよ。だがそう上手く事が運ぶとは思えない。リスクを冒してまで君は一体何を考えているんだい？」

「いろいろだヨ。こういう事態が起ころうとも必ず近衛和葉がこの機に西を纏め上げるはずネ。それは我々にとって都合がいい。それからネギ先生がこの一件に関われば、本物の兄弟のように仲の良い2人だ。二代目サウザンドマスターの功績が増え、影響力が強くなるネ。それに先生は今後のために学ぶ必要があるヨ。戦争の傷跡と政争の複雑さを」

「深淵の探究者と二代目サウザンドマスター。次世代の英雄のために犠牲を出すのは厭わないというのか！」

「逆ネ。これから起こる悲劇を回避するためにも、こんな下らない面倒ごととは早急に失くしてしまいたい。20年前の報復と言って麻帆良へ侵入する西の強硬派も、それをただ非難し、力で応じるだけの東も、はつきり言って次元が低すぎる。」

「次元が低い、か。言ってくれじゃないか。だが君の言うとおり僕もこんなのは下らない争いだと思うよ。ただ現実はどうだい？ 無理やり徴兵され家族を失った人たちの悲しみの行きどころがないのが現状だし、僕たちは単なる本国の下部組織だからね。20年前の件の責任をとるとするのは難しい」

「高畑先生。貴方は確かに多くの戦場を回っているからその言葉には重みがある。だが政ごとをあなたはよく理解できていない。実際、東の長はそう考えていないみたいだよ」

「高畑君。儂が学園の理事長職を降りたのは、関東魔法協会をもっと良くすることに専念したいからじゃ。別に3割ほど給料が良くなるからでは決していないぞい」

「ほう3割ですか……」

「アレ？ 僕たちって確か1割なような……」

反転しかけた刀子と呆ける瀬流彦。他の面々も氷柱のように鋭利で冷やかな目線を元学園長、現校長に突き刺さす。締めるべきところでバトンを渡したのにこの有様。超も蔑むような眼であまりにも口の軽い彼を睨みつけた。吸い込めば肺どころか心まで凍りつきそうな空気に耐えられず、近衛門はゴホンと咳払いして続ける。

「と、とにかくじゃ。関東魔法協会理事長として、20年前の徴兵の責任として遺族たちへの賠償と、謝罪の場を設ける用意がある。資金源として学園を超包子に売り払ってしまったがの。これは東を治める長としての儂の判断じゃ。そしてその賠償の条件として、現状纏める力のない西の長への辞職を促し、次期当主である改革派の和葉を推す。西の改革派の要求、つまり戦争の謝罪と責任追及に応じれば彼らとの関係は改善される」

「しかしそれは本国を裏切ると？」

ガンドルフィーニは更に眉間に皺を寄せる。彼の両親は本国出身であることから本国への意識はこの場にいる他の魔法教師よりも強かった。事の重大さに気付いた瀬流彦は恐る恐る口を開く。

「ええっと。それは曲解っていうか。それは何か言い過ぎなんじゃないですか。つまさか本当にそんな恐ろしいことを……？」

「裏切るとは言わんし、縁を切るというわけでもない。ただ我々は我々の意志で行動すると言うことを示そうと思っておる」

「独立ですか。相次ぐ不祥事などで確かに本国の力は以前より衰えてはいますが。先月僕が関わった事件だけでも片手じゃ収まらない人数の本国の政財界のトップが関わっていましたしね。まるで20年前の泥船状態を思い出しますよ」

「裏切るのではなく、他の組織と友好的になると考えた方がいいのではないだろうか。若様は魔法世界の一大勢力サンライトハートのトップですし、さらにこの1カ月の白き翼の2人の活躍も華々しいものがあります。そこ太いパイプを持っている我々に近づきたい組織は多いはずですよ」

「2人の言う通りじゃよ。もつとうまくやって行く方法が見つかったということだけじゃ」

「そういうことネ。魔法先生方。私は直接的には東のことには介入しない。あくまで学園の理事長として、超包子の社長として、1人の生徒として動くネ。それから私も少しだけ腹を割って話すヨ。貴方達は比較的信頼できる人間だと信じているからネ。薄々と気付いているとは思うが、この麻帆良は世界樹のそびえ立つ第1級の霊地である以上に、現実世界最高の人材が集まった最高の科学力が結集された学園都市ネ。私には成し遂げたい研究がある。魔法の面倒事は1つでも始末しておきたい。私にはこの件において問題を増やしたという意識は皆無ヨ。むしろ減らす絶好のチャンスを与えているつもりネ」

「やりたい研究の邪魔になるからさっさと勝手に仲直りしてこい。やり方は任せる」と、行かざるを得ない状況を作った上で丸投げしているのだ。彼らはソレを理解し、東の長へ指示を仰いだ。

そして時は流れ、修学旅行前々日の日曜日。

図書館部の3人は秋葉原に出ていた。本屋やゲームショップなどハルナに引きずられながらも夕映とのどかも面白い物を楽しんでいた。そんな中3人は、ある2人組を発見してしまった。

「ねえ。あれって桜咲さんじゃない？」

「ほんとーだ。こんなところで何やってるんだらう？」

3人は電柱の陰に隠れ、刹那たちを見た。

「ていうか、隣にいるあの痛いコスプレをした人は誰？　って気絶しそうなほどのラブ臭を放てる相手は決まっているか」

ハルナは刹那の隣を歩く、黒の甲冑に紅い外套を着た男を見る。白いウィッグは被っていなかったが、もしかしなくても某弓さんだ。そして、よくよく刹那の格好も見ると清楚な白のシャツに青のロングスカートを履いている。サイドテールでもなく、降ろしているのでもなく、珍しく後ろでお団子にして青いリボンで止めている。2人でケバブを分け合って食べており、彼の口に付いたソースをハンカチで拭いてあげるといって、2人にとっては通常運転の砂糖を吐き出しそうなほどのラブラブぶりを見せていた。「リア充氏ね」などという声がボソボソと聞こえていたのは3人の幻聴ではないだろう。

「こ、これって……コスプレデートですね」
「そ、だと思っよ」

クラス公認夫婦の刹那にデートの話を開こうとする度に、とんでもなくテンパリ出す理由の一部を理解した。今日は<運命>の日のものであった。ケバブを食べ終わって、メイド喫茶に入って行くまで3人は生温かい目で2人を見送った。

「いいねえ。あんな風にオタク趣味を理解できる彼氏が欲しいなあ」
「彼氏が欲しいなどと、珍しいですね。ハルナ」

「だって彼氏にポーズとか取ってもらえたらすごい筆が進むじゃん！ 彼女ならアレも見放題あんなポーズもこんなポーズも見放題最高じゃない？」

「それは彼氏の存在意義をはき違えてると思うです。いまさらですが」

「何気に酷いわ夕映。ネギ君もオタクの才能あるみたいだからこっち側に本格的に引きずり込みたいんだけどねえ」

「でもネギせんせーはエヴァンジェリンさんと婚約したって言うてるしー」

「あれはビビったねえ。前々から指輪は気になってたけどまさか婚約者なんて。一体春休み中に何があったのやら」

「幼馴染の女の子とエヴァンジェリンさんとで、凄い戦いがあったって茶々丸さんが言ってたけど、私もそれぐらい真剣にネギせんせーのこと好きだったのかなあ……」

「つらいでしょうが終わった恋です。のどか。元気を出すですよ」

「うん。ありがとーゆえー。ってあれ？ あれってネギせんせー？」

「ありや？ 本当だ。しかも隣にいるのって木乃香じゃん」

姉弟のよう手を繋いでに歩く2人を、フィギュア屋の看板に隠れながら観察する。

「なあなあ？ コレなんかどうやる？ ネギ君」

「あーいいと思います。この白いマスコットのプリントが可愛いですね」

「あんもつ。ネギ君たら、ちゃうつて。女の子の方を褒めなアカンえ」

「そうですね。英国紳士失格でした。とても似合ってますよ。このかさん」

「あん。ネギくん。目が笑ってへん。ていうか何かこわい目つきやで？」

「いえ、この生き物はキュウベえって言うんですけど、実は……」

「これって、もしかして不倫じゃないの！？」

「いや、でも待ってくださいです。ネギ君はまだ10歳です。不倫とかそんなのは成立しないと思うですよ」

夕映は淡々とメロン青汁をすすする。

「でも、でも。ネギせんせーは、ただの10歳じゃないしー」

「きゅぴーん！ これは、キタわよ！」

「何が『キタ』ですか。エヴァンジェリンさんに知られたら、ものすごく不味いです。アホなこと考えている場合じゃないですよ」

「婚約者のエヴァちゃんがいるのに他の女性に手を出すなんてネギ君、クビよクビ！」

「ハルナ。落ち着いて下さいです！ この場合、手を出したのはネギ先生というよりきつと、このかさんだと思うですよ」

「おーっ、なるほど。確かにそれっぽいわね。とにかくエヴァちゃんに連絡しなくちゃ！ 修羅場よ修羅場！」

「止めるですハルナ！ 秋葉原が死の大地になってしまっです。私はまだ死にたくないですよ！」

「ごつめーん。写メ付きでもう送信しちゃった！」

「のどか一刻も早くここを去るです！ ここにいたら命がないですよ！」

「ゆえー？ どうしてそんなに焦ってるのー？」

そんなやり取りの後、エヴァンジェリンが駆けつけ、必死で夕映が2人を逃がそうとしていたが、実は木乃香のアスナへの誕生日プレゼント選びに付いて来ていたということを聞き、一難は去った。同じく刹那もプレゼントを買いに行っており、図書館組・エヴァ主従・関西組が結局合流することになった。1日早い誕生パーティーを和葉がメイド喫茶を貸し切って行ったのは、他のクラスメイトには内緒の事実である。

——そして修学旅行前日。

ネギは改めて班名簿を眺める。雪広の指示の下、4〜6人ぐらいで好きなメンバーで班を組むことになったが、それぞれ個性や友人関係が現れていた。赴任して2カ月経った今だからこそ、それを見ていて面白いと感じた。

1班：柿崎 釘宮 椎名 鳴滝（風） 鳴滝（史）

チア部の3人に椎名と仲の良い双子がくつついた班。好奇心旺盛で活発な班のため、ブレイキ役の釘宮をネギは苦笑いしながら心配する。ネギが4月から正式に担任となったため、副担任となった高畑に名簿を見せたところ、1番注意しておくようにと告げられた。ネギの所感も全く同じであった。

2班：超 葉加瀬 四葉 古 長瀬

超包子とその常連客などがくつついた班。古と長瀬というバカレンジャーが2人いるものの、ストッパーが不在。高畑からも注意しておくように告げられている。

3班：雪広 那波 村上 朝倉

割と大人しく、良識的なメンバーが集まった班。何の心配もなさそうが一番安心していた。「巨乳k t k r」などとは、ネギは考えていない。だが和葉は心の中で、その友人なら間違いなく声に出して叫ぶであろうと安心していった。

4班：明石 和泉 大河内 佐々木

いつも一緒に運動部の仲良し4人。活発ではあるが、常識人の大河内と関西出身の和泉がいるため、問題行動を起こしたり迷子になったりなどはないだろうと安心していった。

5班：神楽坂 近衛 桜咲 早乙女 宮崎 綾瀬。

図書館組の4人に木乃香と仲の良い神楽坂と刹那がくつついた班である。早乙女の暴走や神楽坂のバカっぷりにも突っ込み役が3人

も存在していることから修学旅行そのものは大丈夫だろうと思う。
しかし木乃香と刹那のことを考えると、魔法使い側の事情で最も危険に晒される班であることはネギも十分理解していた。

6班：マクダウェル 絡繰 レイニーディ 長谷川 春日 龍宮

この班の結成にはいくつかのドタバタ劇があった。エヴァ主従とコスプレ仲間として茶々丸に引つ張り込まれた長谷川。「やめるボケロボ。私はいいinchよのところで平和に過ごすんだ。死亡フラグなんぞ真っ平だ！」と叫ぶ長谷川の必至の抵抗も空しく捕まり、「どこかに生存フラグは……」と何故か指名された春日と龍宮。そして何故か付いてきたザジの班。春日は「聖母様と一緒になんて怖れ多いッス」とタジタジだが、京都好きのエヴァのテンションはかなり高く、千雨と茶々丸の情報収集に基づいた全力のプランニングを行っていた。龍宮も「せっかくの京都だ。美味いあんみつ屋を巡ろう」と意外な一面を見せたりと、実は一番ノリノリである班であった。

ネギはその後各班の自由行動のスケジュールを確認した後、特大のリュックにソレを積み込む。そして就寝前の確認作業を行っていた。

「筆箱良し。ノート良し。ワイシャツ良し。」

—— 携帯電話良し。

ゼロさん良し。抱き枕良し！ だってこれはまだ良くないや」

とネギは最後に詰めた最も大きな荷物を取り出す。

「狭イダロ。バカネギ。俺ハ才前ノ頭ノ上ダ」

そう言って飛び出してきたチャチャゼロ。胸元の抱き枕を目掛けて左手の片手剣を一字に薙ぐが、正座状態からそのまま後ろに倒れるように回避したことでアホ毛が5センチほど短くなったに留まった。「チツ」と彼女は舌打ちするが、身体強化なしでも相棒の不意打ちをかるうじて回避できる程度にはネギの体術も向上していた。

そして「ガキ」から「ネギ」へ、「チャチャゼロさん」から「ゼロさん」と呼び合うほどには、共に形を並べ前衛で戦う者同士この2カ月で2人の仲は進展している。

「ゴメン。ちょっと興奮していたみたいで」

「早く寝口バカネギ。明日カラノ戦イ二備エテオケ」

「戦いは多分ないと思いたいけど……うん。そうだね。お休みなさい、ゼロさん。お休みなさいフェイトちゃん」

先ほどまで高ぶっていたのが嘘のように、フェイトを腕の中に抱き締めて安らかに眠りに付いた。

第37話 旅行の準備（後書き）

デート編について、最初はチアの話かと思いましたがこの作品なら原宿より秋葉ということで図書館組。エヴァの実力を知っている夕映は必死。エヴァ様との関係はだんだんと明かします？

6班入りの千雨はいろんなフラグが立ちまくっています。生きてくれ。

今回デートしかしてない和葉たちはこれからが出番です。

それから今後の更新ペースが月3回を目指していると思います。仕事のノルマやばいです。

第38話 混乱する新幹線（前書き）

大変お待たせしました。久々の投稿です。
どこで区切ったらいいいのかわからなくなったり、超展開過ぎて没ネタになったのが多くなり時間がかかってしまいました。やはり今回も原作とはかなり状況が違ってきます。

第38話 混乱する新幹線

修学旅行前日。

和葉は刀子に放課後、生徒指導室に呼び出された。思春期ならぬ発情期真っ盛りのクラスの男子たちが向ける欲望の牙から、女子中等部の生徒たちをどう守ろうかという話になっていた。エロ神の名はまだ刀子にはバレていないものの、クラスのカリスマであり唯一統率できる和葉に覗き防止などの相談をしていたのだ。そちらの話は一通り済んだあと、裏側の事情の方も刀子は和葉に相談していた。既に教師と生徒の体場が逆である。

「何で私が」

見つめるのは一通の封筒。現関東魔法協会の長である近衛近右衛門から関西呪術協会に宛てた物である。それを渡しに行く任を背負ったのが元西の穏健派である刀子であった。既に白き翼という独立組織のリーダーであるネギに渡すわけにはいかず、西の次期当主であり改革派のリーダーであるとはいえ実質ナンバー2か3の立ち位置にいる和葉に直接渡すわけにもいかない。そこで西とパイプを持ちながら東の中でも代表を務められる立ち位置にいる人物として刀子に白羽の矢が立ったのだ。

「仕方ないですよ刀子さん。それでその内容とかは聞かされてないんですか？」

「ええ。しかし、こればかりは若といえどその時までは伝えることはできません。それから私がこれを預かっていることもゆき様と刹那と以外には内密にお願いします」

二日酔いのような虚ろな目でうな垂れていたのも一転、自身に負わされた責任を再認識し元のりんとした雰囲気を取り戻す。

「了解。一応確認しておくけど西を刺激するようなことじゃあ？」

「今回の学園長、ではありませんでした。心配なさらずともきつと事態は良い方向に行くと思います。あとは若の腕次第でしょうか」

「おいおい。俺次第って他人まかせな。まさかあの爺さんが『先の大戦の謝罪と賠償をする用意ができたぞい。じゃが婿殿では話にならない。早く和葉に交代してしまえ。その方がわしも色々楽なんじゃ』とか書いたんじゃないでしょうね？」

「若……なぜそれを！？」

「……え？ 刀子さん。冗談のつもりだったんだけどマジですか？」

わかっていたつもりであつたが木乃香を含む生徒を警護するだけでは話が終わりそうにない。学校行事と裏での西と東の確執、内部分裂それらを一緒にすることは好ましくない。如何に何事も起こさせないか。これに尽きる。強硬派が手を出してしまった場合、上手く処理すれば自身が当主の座を奪う絶好の機会となるが、関東以外の組織の介入されるもあり得なくもない。部下の配置をもう一度思案し直し、携帯を取り出して保険を用意することにした。

修学旅行当日。

「で、何でエヴァンジェリンが俺の部屋に来てる訳？」

和葉は早朝4時半に訪ねてきた幼女を一瞥してため息をつく。しかし、当の本人は呆れられている目線など微塵も感じていないのか、大きなスーツケースの上に腰掛けて足を組み堂々としている。

「今朝は修行がないからな。わざわざ迎えに来てやったぞ。感謝しろ」

「何を修学旅行ごときでそんな小学生みたいに何張り切ってたんだか」「貴様、私は600年生きる真祖だぞ。子供扱いをするな!」

「キティは可愛いなあ。飴ちゃんあげようか?」

2カ月の付き合いもあり、完全にエヴァンジェリンの扱い方をマスターした和葉。人を束ねる彼にとっては真祖でさえもただの幼女ではない。

「いらんわ。その無駄なテクニクを使って撫でるのは止める」

「感じているのですね。感じているのですねマスター。ネギ先生という人がありながらその義兄に堕ちかけるなんて。ああ。なんて禁断の誘惑。いけませんマスター。ハアハア」

「腹黒眼鏡に堕ちるか。そして何だ。お前の手は妙なツボを刺激するんだよ!そしてそこ発情するなボケロボ」

刹那、木乃香、ネギを落としてきた実績を持つ洗練されたナデナデを払い除け、色ボケロボットの襟首を掴む。

「朝から元気だね。おはようエヴァ。茶々丸さん」

「お、おはよう。迎えに来てやったぞ。ネ、ネギ」

エヴァはパートナーに挨拶をする。ぼーやからネギへと呼び方が昇格したのは春休み中の変化だ。どうしてもとネギが「名前を呼んで」と言っただからだ。それは「フェイトじゃなくてなのはだろ!」

と和葉に突っ込まれたのは言うまでもない。

「ネギ先生、おはようございます。」

「御主人らしいぜ」

「春休みに充分ネギとあちこち回ってきたばかりだと言うのに、また旅行で浮かれるのかよ」

「あれは旅行と呼べる代物ではなかったぞ。解呪だけならまだしも、ファンクラブやら崇める会やら何なんだ、あのスケジュールは。鬼か貴様は」

「エヴァを賭けての決闘とかで休む暇もなかったしね。ハハッ」

「文句ならそのマネージャーに言ってくれ。その辺りは管轄外だ」
「ネギ先生にいろんなところを紹介したいと言っていたのはマスターのはずですが。それはもう瞳を輝かせてウキウキと」

「うるさい！ うるさい！ うるさい！ ボケロボ、巻いてやる。」

お前なんか巻いてやるぞ！

「ああ。いけません。マスター。いけません……」

悦びの鳴咽をあげる茶々丸は捨て置く。エヴァンジェリンのアイティファクトにより復活した彼女の副作用とも呼ぶべきバグは治るどころか悪化する一方のようだ。

「で何だ。その朝食は？」

「どうせ5時には来るだろうとわかってたしな。ワクワクして眠れず、朝も食わずに飛び出して来たんだろ？」

テーブルの上には、アツアツのご飯に、油揚げと豆腐のみそ汁、卵焼きが4人分用意されていた。

「なぜわかった？」

「ウチのネギも4時にはゴソゴソしていたしな。あんた等良く似て

るしな……お子様っぽいところとか」

「ぐう。そんなところいい香りじゃないか。ありがたくもらおうか」
「急ぐんだろ？さっさと食べようぜ。ほら茶々丸も。ネギ、お箸4人分な」

「はい。エヴァ」

「そんじゃ食べるか」

「」「頂きます」」

「一時期世話になったが、見事なまでに狐と同じ味だな」

「そりや母親同然だしな。自然とそうなるって」

「小姑2人に加えて料理上手の旦那か。奴も苦労するな」

「刹那も最近それなりにできるようになってきたぞ。ゆき姉はともかく木乃香がやたら張り切って教えてる」

「そういえばゆきお姉ちゃんは京都に行くの？」

「ああ。立場上俺の式神だから勿論。こつそりで行ってもらうことになってる。それにアーティファクトで一発召喚できるからな」

「近衛和葉。改めて確認するが今回私たちは動かんぞ」

「構わない。今回は何も起きない方が確率が少ないぐらいだが、一般人には手を出させねえよ。ウチの身内でどうにかする。魔法を使われると色々ややこしいからな」

「僕は“先生”として頑張ればいいんだね？」

「ああ。“立派な先生”としてしっかりやって来い！ 3人もネギのことを頼んだ」

「それが従者の勤めですので」

「ケケケ」

「お前に言われるまでもない」

「じゃあ教員は早く行かなくちゃいけないから。もう行くね。ごちそうさま！」

「食器洗つといてやるから。行って来い」

「ありがとう。行ってきます！」

3 - Aも遅刻もなく無事にさよ以外全員集合し、京都へと新幹線で向かう。刹那は木乃香、明日菜とお菓子を食べながら談笑しながらも警戒を緩めない。同じく京都へ向かう男子部の和葉は後方の車両にいますが、同調で常に連絡をとれるようにしている。

今回の修学旅行にあたっての警備体制は万全だ。魂レベルでの感知能力を持つ和葉と学園でも特に防御結界に長けた瀬流彦のコンビによる徹底した警戒網。また前日から埼玉に派遣してある改革派のメンバー数人と刀子が巡回と遊撃、刹那は本分の木乃香の警護に回る手はずだ。巡回中のメンバーの中に気になった人物がいたので刹那は式神を場に残し、デッキに呼び出す。

「小太郎君。ご苦勞様です」

「おう！ 刹那姉ちゃん久しぶり。でも一発でバレるなんて流石時期当主の妻やな。これサンライトハートの特注の年齢査証薬やつてんけど」

今の小太郎の姿は15、6歳と思われる姿だ。もちろん狗族特有の尻尾と耳も隠れている。身長は高く、儀——パンに白のシャツを羽織っただけのラフな格好だが、それが逆に爽やかさを醸し出している。男前といって過言ではない。ネギの想像上の5年後といい勝負かもしれないほどだ。

「幻術は見慣れてますから」

「なるほど狐の姉ちゃんか。そんなら納得やわ。あと、この姿はい

つも仕事用やねん。ガキのまんまだと舐められるからな」

「ええ大丈夫です。頼りがいがありそうに見えますよ。ところで小太郎君はこのクラスの担当ですか？」

「せやで。妖魔の目覚めるシーズンで腕の立つ大人たちは狩りに行つとるし、他の技術職は魔法世界の方に出張したり、和葉兄ちゃんの受注も増えたから人手不足やねんな」

「でも子供まで出すのはどうかと思いますが。それに平日ですよ学校は良いのですか？」

「昨日から関東入りしとるから今週は全部休みや。それに子供言うたらそこの2代目も教師やつとるし、和葉兄ちゃんかて俺くらいの年には活躍しとったんやろ？」

「ですが勉強は」

「もつと要らん心配や。仕事に専念できるように孤児院で予習させられとる。この前5年生のテキストは終わらせたわ」

「5年生？ 小太郎君は確か今……」

「小4になったばかりや」

「すごいんですね」

「下の子らの面倒も見なアカンし、たくさん任務に出れるようにしとるだけや」

「私もその孤児院に入っていればもう少しマシだったのでしょうか」

「……」

「何落ち込んでんや？」

「いえ。気にしないでください」

ネギや和葉ほどではなさそうとはいえ、かなりの優等生であることを伺わせる予想外な返答に刹那はグウの音も出なかった。

「何も起こらへんと思うけど、刹那姉ちゃんは本来の護衛に徹しときや。このクラスは情報通り結構できる奴多いみたいやしな。パツと見ても2代目に人形使いとその人形が2体。元“四音階の組み鈴

”、中国人2人、忍者っぽい姉ちゃん。どう考えても過剰戦力やで。俺も刹那姉ちゃんも出しゃばる必要あらへんわ」

「ですね。ネギ先生やエヴァンジェリンさんに手を出したらもつと怖い人たちも来ますし、私がしっかりしていれば3-Aは安全ですね」

「そっちは頼むで。俺は策敵と一般人の避難に専念するよう言われるからな」

「ええ。お嬢様は私が。他の車両は任せました」

「オッケーや。ほな、また後でな」

「「「きゃああああ」」」

平和もつかの間、悲鳴が社内に響き渡る。

「いやああああああ」

「カエル！ カエルが」

「楓姉！ 助けてー」

「すまぬ。カエルだけは無理でござるよ」

「うわああああん。気持ち悪いよー」

無数のカエルが車両に放たれた。

（カズ君、これは！？）

（拙い刹那、結界が破られた。しかも一瞬での解析不能な術だ。かなりの上位レベルだ。気をつける）

刹那と和葉はすぐに念話を繋ぐ。最低でも和葉クラス術者がいるのは間違いない。相手の意図はわからなくとも現在の状況の收拾と次の展開への備えをしなくてはならない。刹那は木乃香の膝に飛び乗って来たカエルをコンビ二袋へ押し込める。この感触は本物のようだった。和葉や他のメンバーも気づいたらしい。

（どうやら全部の車両にカエルが侵入している。式神じゃないから単なる嫌がらせならいいが、これは陽動の可能性もある。早急に全て捕獲しつつ敵を探せ。おそらく相手はかなり強い。見つけてもまだ手を出すな）

（（（了解！！！！）））

指示を受け、各車両に配置された改革派のメンバーは事態の收拾に動く。

その一方で

「ケケケ、殺セロヨ。ネギ」

「ここで動いたらダメですよ。ゼロさん！」

魔法使いとしては関われなくとも、先生として本来生徒を落ち着かせなければいけないネギであつたが、衝動を抑えきれないチャチャゼロを抑えるのに必死だつた。だが結果的にはベストであつた。血と臓物に塗れたバラバラ殺人ならぬバラバラ殺蛙現場。そんなむせ返るような光景を見せられたら、とても修学旅行どころではなかつたからだ。

エヴァンジェリンは一睡もしていなかつた反動か、茶々丸の隣で完全に寝入っている。刹那は木乃香の隣で警戒を強めているため、回収に向かえない。事態は収まる気配がないかと思われたがクラスメイトは奮闘していた。

「ふえーん。カエルが、カエルがあー！」

「こつちに来ないでえー」

「そこはらめええええ」

様々な悲鳴が3-Aのいる車両にも溢れかえる。多くは混乱し泣き叫ぶだけだが、古や明日菜はカエルを祖先して回収し、ハカセと超は何故持つているのはか全く謎だが、カエル取り専用の謎の掃除機を持ちだして次々と吸い込んでいる。10分たった今でも、まだ混乱は収束しないがそんな中冷静に事態に向き合っている人間もいた。

「やっぱ超の言ってたことはマジだったんだな」

「ええ。フィーネには感謝するですよ」

「ああ助かった。あの変態野郎にも少しは感謝しないと」

ノートパソコンを全速力で操作しながら千雨は背中のシート越しに夕映に話しかける。事態を予期していた超によって、カエル除けのペンダントを図書館島のドラゴンの鱗からアルが生成していたため、この2人と五月は無事であった。ちなみに超包子の面子でも超とハカセは掃除機があるので不要だ。夕映は鱗に穴を開けて革ひもを通したものにルーンを施した守りを指先で撫でる。

「にしても強硬派は何考えてんだ？ 幼稚な嫌がらせにしか思えないな」

「いえ。これは結構レベルが高いですよ。木乃香を守るのに結界がこの新幹線には施されているのですから、それを超えて来るとなるとデータほど現実には甘くないかもしれません」

「確かに。超が飛ばしてる監視カメラのデータをチェックしてるんだが、事前に聞いていた奴の顔と一致しねえ」

「違う術者が余程の認識障害がかかっているかのどちらかということでしょうか？」

「かもしれない。にしても仕事増やしやがって。他の車両でカエル

の画像がどんどん上がってきやがる。消してもキリがねえ。麻帆良が改革派の人間もやってるみたいだが遅いんだよ。だから脳味噌フアンタジーな奴等は」

「……お仕事頑張って下さいです」

「カムバツク、私の平和な日常……」

彼女の嘆きはどこにも届かない。

「きやあ、ってカエルがいない。ええつとあなたは誰？」

「おーカッコいい！」

「ありがとうございますわ」

「これで全部や。姉ちゃんたち、もう大丈夫やで」

小太郎はようやく3・Aの分のカエルを処理し終える。気が付くとクラス中から好奇の眼に晒されていた。

「うむ。できるアルね」

「ねえ。そのイケメンさん。何歳ですか？ 名前は？ 彼女いる？」

「ちよつ、何やねん。姉ちゃんたち」

「はい。お礼のお菓子だよ。食べて食べてー」

「うわあ関西の人なんだあ」

「俺仕事で来てるから時間ないんだわ。スマンな。ほな」

「えっ、もう行っちゃうの？ まだ次の駅には時間あるし……」

「あー行っちゃった。名前も聞けなかったな」

「占いによれば近いうちまた会えるで」

木乃香は手元のタロットカードを見せる。

「みなさーん落ち着きましたか？ もうカエルはいないと思うので、少し片づけをしましょう。いいんちゃん、後で点呼もお願いします」

ようやくチャチャゼロを抑えたネギが教師として再起動しだし、クラスの様子は落ち着いてきた。

3 - A 後方のデッキに和葉、刹那、小太郎の3人が集まる。

「よう。そっちは無事か？」

「おう。和葉兄ちゃんやないか」

「どうもさっきの騒ぎを起こしたう奴らはできるな混乱に乗じてこんなものまで仕掛けてきやがった」

ガムの包み紙の中から黒い豆粒のような機械が取りだされる。

「ええ。それなら私も2つほど」

「勝った！ 俺は6つやで」

「やるじゃんか。小太郎」

「へへっ。俺かてプロやしな」

「しかし盗聴器と発信機ですか。下手に術式を使わず足をつけない辺り、相手はかなり頭が回るようですね」

「探査能力なら俺は世界最高クラスだしな。盲点をついたつもりなんだろ。まあこっちは気付いたわけだが」

「まだ手に負える範囲ですが、それでも油断できませんね」

「兄ちゃん。もしかしたらまだ罠とか残ってるかもしれへんな」

「ああ。可能性はあるな」

「刹那」

「術に頼る者ほど機械は盲点だしな」

「多分もう新幹線の中では何も無いと思うけど油断せんといてや」

「小太郎、何も無いと思ってる時点で油断してんだよ。しっかり頼むぜ」

「せやな、兄ちゃん」

「あと5日頑張りましょう」

3人は拳を合わせた。

和葉は席に戻ると、乗務員のお姉さんに浮かれている橘たちを適当にいなし、思案する。

「泳がせていたのが裏目に出たか」

ここまで強引に結界を破ってまでの襲来は本当に予想外であり、思わず言葉を口にしてしまう。ただ身の結界を破った存在を推察出来たが、その行動原理に矛盾がありすぎて整理できていない。

様々な懸念はあるがその中でも懸念事項。刹那とゆき以外には隠しているがウェールズの一件以来和葉の調子は戻っていない。魔法

に関しては問題がないものの、体術のキレや反応が明らかに落ちている。

その原因は——和葉自身の忌まわしき魂。絶大な魔力を有する木乃香を守るための■であり、■。それが近衛和葉の原点。深淵へ潜る術を得ると同時に■■に■■され、■を失っていく彼にとつて呪術都市、京都。ホームであるはずのこの地と和葉の魂との相性は限りなく最悪に近い。

これから和葉は自身の宿命と対峙することになる。

それが世界の選択だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5112q/>

新旧世界革命記 魔砲少年サブカルネギま！～英雄の息子たち～

2011年8月27日17時38分発行